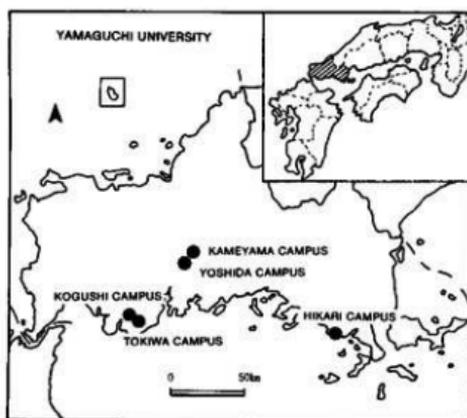


山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ

1987

山口大学埋藏文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ



1987

山口大学埋蔵文化財資料館

発刊にあたって

このたび、本学が昭和61年度に大学構内で実施した発掘調査の記録が、『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』として刊行するはこびとなったことを喜ばしく思う。

本学での埋蔵文化財の調査は統合移転に伴い昭和41年から実施しており、とりわけ、吉田地区では縄文時代から江戸時代におよぶ一大集落であることが明らかとなっている。また、まもなく10年目をむかえる埋蔵文化財資料館の調査・研究によって、各地区におけるそれぞれの時代の集落の生活実態、変遷過程が次第に明らかとなってきており、その成果として、地域の歴史をはじめとする集落遺跡研究に寄与する知見にはゆたかなものがある。

将来の文化創造の基礎をなす文化財を、歴史・文化のなかで体系的に把握するためには、集落跡で得られた成果に加え、埋葬跡を含めた今後の調査・研究が望まれよう。

文化財を後世に末永く保存し、積極的な活用を図ることが国民的課題となっている昨今、教育・研究を通じ社会への貢献を使命とする本学においても、可視的な遺跡の利用とともに、施設・環境整備と共に進む構内遺跡の調査・研究および保護は、周知の遺跡上に立地する課題のひとつといえる。

しかし、両者は本質的には決して競合するものではなく、将来を展望した協調によって円滑に進めることができるものと確信している。

最後に、発掘調査および報告書の刊行にあたり、御理解、御協力をいただいた関係部局、各位に対し感謝の意を表したい。

昭和63年3月

山口大学

学長 粟屋和彦

序 文

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵが発刊のはこびとなりました。この報告は、山口大学埋蔵文化財資料館により昭和61年度に実施された、吉田構内（試掘調査1件、立会調査17件）、小串構内（立会調査2件）、常盤構内（立会調査3件）、亀山構内（試掘調査1件、立会調査1件）、光構内（立会調査1件）及びその他構内（立会調査2件）の、計試掘調査2件、立会調査26件の調査記録に、2・3の研究論文を加えたものであります。

山口大学吉田遺跡は、縄文時代後期・晩期から江戸時代に至る集落跡としての全容が判明しつつあり、中でも遺跡保存地区は、昭和57・59年の再調査により、昭和40年頃学内・外で予想されたとおり樞野川流域の代表遺跡として古代建築学上貴重なものであると、調査を重ねるに従って着々成果があがっています。山口大学の吉田キャンパスは、文字どおり埋蔵文化財、遺構の上に構築されたもので、縄文から現代に至る歴史の中で、文化的創造の諸条件を模索することが行なわれてきた訳であります。この貴重な文化財を将来へ研究を重ねて行くことは、私達に与えられた重大な責務であり、次の世代に継代して行かなければならないと考えています。また亀山構内の『白石遺跡』、光構内の『御手洗遺跡』などの周知の地域、そのほか宇部地区などにおいても調査が進められ、前号の研究年報までに見られたように山口大学は勿論、周辺の山口附属学校などにおいても重要な遺跡に数々の新しい事実の発見が加えられていて、私達の夢は尽きるところがありません。

今年で吉田の地に統合移転して20年余が経ちますし、資料館が開館されて10年が過ぎました。山口大学にとっての一つの節目でございます。移転当時より埋蔵文化財の研究、調査が次々と成果を積み重ね今日に至っていますが、当初より筆舌に尽くしがたい学内・外よりの批判をあげながら、私達は絶えず学内の施設拡充、環境整備を進めて行く中で、この文化財が日本の歴史文化に寄与すべく今後とも大学当局、関係部局の御理解・御協力を頂き、努力を続けて行かねばならないと期しています。

昭和63年3月

山口大学埋蔵文化財資料館

館長 黄 基 雄

例 言

1. 本書は、山口大学埋蔵文化財資料館が埋蔵文化財資料館運営委員会の指示を受けて、昭和61年度に山口大学構内で実施した調査の報告書であり、第4章第1節17は、山口市教育委員会の調査を補助したものである。また付篇Ⅰとして特に、昭和59年度の遺跡保存地区の調査を報告する。
2. 現地における調査・研究は人文学部考古学研究室、文化会考古学部、井上春樹の協力を得て資料館員河村吉行・森田孝一・杉原和恵が担当した。また、出土遺物の整理は同館員奥英子・杉原が中心となり行なったが、第3章については中規博・福田泰一郎（文化会考古学部）が援助した。
3. 調査・研究における事務一般は事務局庶務課庶務係が統括し、実施面においては各関係部局の事務部があたった。
4. 遺構の実測は、人文学部考古学研究室、文化会考古学部の協力のもと、河村・森田が行なった。遺物の実測については、土器は第2章：資料館員木村元浩、第4章：杉原、付篇Ⅰ：河村が行ない、石器・土製品は木村が行なった。第3章の遺物は資料館員の監修のもと福田・中が行なった。製図は、石器を木村が行なったほかは、主に奥が行ない、河村・杉原が補助した。本文の執筆は、河村・杉原が分担して行なった。
5. 現地における写真撮影は河村・森田が行なった。また、本冊子の遺物の写真撮影のうちカラー写真は桜プリント（企）藤本和秀氏が行ない、モノクロ写真については同氏の指導のもと河村・木村があたった。
6. 石器の石質鑑定は山口大学理学部教授 松本信夫氏、植物遺体の鑑定は同農学部講師 宇郡宮宏氏に依頼し、懇切な御教示を得た。記して感謝の意を表したい。
7. 本書の編集は館員が協力して行なった。
8. 調査・研究においてはカラースライドを作成しており、出土遺物とあわせ埋蔵文化財資料館が保管している。広く活用されることを希望したい。
9. 調査組織は次のとおりである（昭和61・62年度）。

調査主体	埋蔵文化財資料館	館長	近藤 喬一〔～昭和62年4月2日〕
		＊	黄 基雄〔昭和62年4月3日～〕
		館員	河村 吉行
		＊	森田 孝一〔～昭和61年8月31日〕
		＊	木村 元浩〔昭和62年4月1日～〕
		＊	杉原 和恵
		＊	奥 英子〔昭和61年9月1日～ 昭和62年3月30日〕

事務局	事務局長	大谷 巖
本部庶務部	部長	内藤 信〔～昭和62年3月30日〕
	◇	田中 武雄〔昭和62年4月1日～〕
庶務課	課長	金谷 英夫〔～昭和62年3月30日〕
	◇	竹下 寛美〔昭和62年4月1日～〕
	課長補佐	大多和泰剛
庶務係	係長	野村 宗成
		本田 正春
		岩佐 厚子
		深町 洋二
		中川イクミ

10. 調査・研究にあたって下記の方々の多大な御協力と援助を受けた（官職は昭和61年度）。

山口大学事務局庶務部	人事課長	村上昭生、同課長補佐	増谷 泰、同係長	西野雅博、同係	松本胤明、池本誠也、給与係長	森田義富、同係	河内和郎、藤井純朗		
経理部	部長	何木 亘、主計課長	伊藤良昭、同課長補佐	本間 健、経理課長	丹澤 満、同課長補佐	廣石輝男、総務係長	田中善人、監査係長		
		石崎啓介、管財係長	小林和生、用度係長	野沢章三	用度主任	谷本信之、管理主任	正司三喜男、同係	浜田千春	
施設部	部長	笠井宏悦、企画課長	比嘉真義、建築課長	竹田忠文、同課長補佐	佐伯 敦、設備課長	中澤喜久雄、総務係長	梅村 馨、総務主任		
		三村文雄、第一工営係長	藤井 幸、同係	小川賀津夫、澤谷弘美、第二工営係長	稲垣實造、同係	河田徹也、電気係長	赤野高志、同係		
		小草建三、松田清司、機械係長	鈴木輝美、同係	鹿嶋正則、岡田吉彦	学生部	部長	新中康弘、次長	中山昭成、学生課長	吉村 學、同課長補佐
		嶋本拓司、学生係長	佐藤正治、学生主任	五嶋幸生、同係	角井隆志、辛嶋克己	附属図書館	館長	西村 久、部長	上島順二郎、整理課長
		加藤宗晴、総務係長	牧原和仁	教育学部	事務長	西澤喜昭、同補佐	柳 等、庶務係長	柳 洋二、会計係長	森本茂雄、附属幼稚園長
		川口政宏、同副園長	志熊淑子、附属山口小学校長	橋尾四郎、同副校長	西村 豊、附属山口中学校長	徳富正義、同副校長	水上義昭、附属光小学校長	三浦 馨、同副校長	藤原京次、

	附屬光中学校長 真田元祐、同副校長 藤澤茂樹、山口附屬学校係長 林 威、光附屬学校係長 長谷知之
経済学部	事務長 原田晃威、庶務係長 河本 進、会計係長 中島岩弘
農学部	事務長 原田政明、附屬農場事務長 宇山隆造、同係長 山本直行、同係 寺山幸夫、尾崎恵雄
教養部	事務長 梅原儀助、庶務係長 野中章彦、会計係長 伊藤敏徳、同係 桜井健二
医学部	事務部長 宮崎敬一、同次長 堀江 正、総務課長 坂井友造、同課長 補佐 竹憲直道、管理課長 井上隆次、同課長補佐 河野繁之、石川俊輔、庶務係長 原 和男、管理係長 末次敏男、経理係長 松永次郎、施設係長 三浦幸一、設備係長 吉永峯生、環境係長 藤井良雄
工学部	事務長 大庭静男、同補佐 片山美德、会計係長 石川恒夫、同主任 高崎明折

人文学部考古研究室

文化会考古学部

山口市教育委員会

山口シルバー人材センター

新栄ビルサービス株式会社

末広産業

調査補助員

古賀信幸、乾風千絵、岡村昌彦、杉本とも子、森下靖士、吉田 寛、米倉智美、小田信子、柏本秋生、高下洋一、定池博之、菅波正人、西本泰子、久野孝一、馬場道則、鎌田ちのい、辛嶋眞治、富樫孝志、中原章子、鱒村礼子、南 時夫、森 恒裕（以上人文学部考古研究室）、中 規博、福田泰一郎、榎本義嗣、河口垂由美、野村正芳、畑島主太郎、平辻暢子（以上文化会考古学部）、井上春樹

作業員

石川妙子、石川好江、井手要輔、糸永 均、岡屋知子、在間淑美、重富悖子、師子角由紀子、中川美佐子、中川裕二、西見利子、花田智都子、藤原啓子、峯重つや子、宮家静代、村田治枝

凡 例

1. 吉田構内における調査地区および層位、遺構の位置は国土座標を基準として北から南へ1～24、西から東へA～Zの番号を付して50m方眼に区画した構内地区割のA～24区南西隅を起点（構内座標 $x=0$, $y=0$ ）とする構内座標値で表示する。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値（ X , Y ）と構内座標値（ x , y ）とは下記の計算式で変換される。

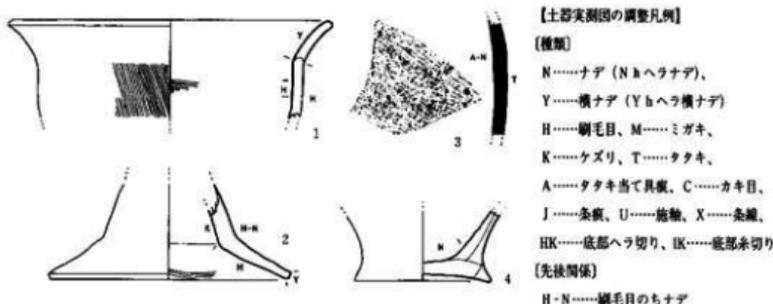
$$x = X + 206,000$$

$$y = Y + 64,750$$

2. 各遺構は下記の記号で表記することがある。

竪穴住居跡……S B, 土壇……S K, 溝……S D, 柱穴……P

3. 本書に使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他構内では磁北を示す。
4. 標高数値は海拔標高を示す。なお、先の年報Ⅲ中で留保していた附風幼稚園・小学校内の仮点標高（BM）は、今年度の調査により32.757mであることを確認したので、ここに報告する。
5. 遺物・土層の色調は農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1976）に準拠した。
6. 土器の実測図は下記のように器種分類した。
断面黒ぬり……須恵器、須恵質土器；断面白ぬり……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、瓦。断面網目……陶磁器
7. 土器の器面調整については、断面周囲に調整の境界を記し、境界間に下記の略記号より明示した。ただし、風化等による不明部分は無記入とした。



- 1：口縁部内外面横ナデ。胴部は外面縦刷毛目、内面は横刷毛目が一部にみられるが調整不明。
- 2：外面刷毛目のちナデ。裾端部は横ナデする。内面は、脚柱部ヘラケズリ、裾部横刷毛目。
- 3：外面平行タタキ、内面はのち当て具痕をナデ消す。
- 4：底部内面のみナデが観察できるが、あとは内外面とも調整不明。

本文目次

第1章 昭和61年度山口大学構内遺跡調査の概要	(河村)	1
第2章 亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査	(河村・杉原)	
第1節 調査の経過	(杉原)	7
第2節 教育学部附属幼稚園・山口小学校部分の調査	(河村・杉原)	
1 層位・遺構		9
2 遺物		15
3 小結		22
第3節 教育学部附属山口中学校部分の調査	(杉原)	
1 層位・遺構		25
2 遺物		29
3 小結		36
第3章 吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査	(河村)	
1 調査の経過		39
2 層位・遺構		40
3 遺物		45
4 小結		47
第4章 昭和61年度山口大学構内の立会調査	(河村)	
第1節 吉田構内の立会調査		
1 山口銀行現金自動支払機設営に伴う立会調査		49
2 農学部附属農場農道整備に伴う立会調査		51
3 農学部附属農場農道交通規制に伴う立会調査		53
4 正門横（水田内）境界杭設置に伴う立会調査		54
5 経済学部環境整備に伴う立会調査		55
6 交通標識設置に伴う立会調査		56

7	教養部自動販売機増設に伴う立会調査	57
8	教養部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査	58
9	経済学部散水栓取設に伴う立会調査	59
10	水泳プール改修等に伴う立会調査	60
11	農学部附属農場水道管理設に伴う立会調査	61
12	汚水排水管等総改修に伴う立会調査	62
13	本部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査	64
14	経済学部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査	65
15	附属図書館荷物運搬用スロープ取設に伴う立会調査	66
16	教養部37番教室改修に伴う立会調査	67
17	市道神郷1号および問田神郷線の送水管埋設に伴う立会調査	68
第2節 小申構内の立会調査		
1	医学部附属病院外来診療棟新営に伴う立会調査	70
2	医学部附属病院外来療棟周辺環境整備等に伴う立会調査	71
第3節 常盤構内の立会調査		
1	工学部尾山宿舍排水管改修に伴う立会調査	72
2	工学部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査	73
3	情報処理センター（常盤センター）空調設備取設に伴う立会調査	74
第4節 亀山構内の立会調査		
	教育学部附属山口小学校電柱移設に伴う立会調査	75
第5節 光構内の立会調査		
	教育学部附属光小学校創立記念事業に伴う立会調査	76
第6節 その他構内の立会調査		
1	湯田宿舍給水管改修に伴う立会調査	79
2	経済学部職員宿舍下水管改修に伴う立会調査	80

付篇

付篇 I

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）	河村吉行	85
-----------------------------	------	----

1 調査の経過	85
2 調査の概要	86
3 遺構・遺物	89
4 小結	126

付篇Ⅱ

古墳時代における堅穴住居の各属性について	河村吉行.....	129
----------------------------	-----------	-----

付篇Ⅲ

先土器時代の山口地方—遺跡の分布と立地—	木村元浩.....	147
----------------------------	-----------	-----

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則	167
山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則	168
山口大学構内の主な調査	170

Summary	175
---------------	-----

図 版 目 次

〈亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査〉 本文対応頁

P L . 1 (1) 幼稚園・小学校第1トレンチ全景 (西から)	9
(2) 幼稚園・小学校第1トレンチ東壁土層断面 (西から)	9
(3) 幼稚園・小学校第3トレンチ全景 (南から)	12
(4) 幼稚園・小学校第4トレンチ全景 (西から)	13
P L . 2 (1) 幼稚園・小学校第5トレンチ全景 (南から)	13
(2) 幼稚園・小学校第6トレンチ全景 (南から)	13
(3) 幼稚園・小学校第7トレンチ全景 (西から)	13
(4) 幼稚園・小学校第9トレンチ南壁土層断面 (北から)	13

P L. 3	(1) 幼稚園・小学校第10トレンチ全景 (北から)	14
	(2) 幼稚園・小学校第11トレンチ全景 (南から)	14
	(3) 幼稚園・小学校第12トレンチ全景 (南から)	14
	(4) 幼稚園・小学校第13トレンチ全景 (北から)	14
P L. 4	(1) 幼稚園・小学校第13トレンチ南壁土層断面 (北から)	14
	(2) 幼稚園・小学校第14トレンチ全景 (北から)	14
	(3) 幼稚園・小学校第15トレンチ全景 (北から)	15
	(4) 幼稚園・小学校第16トレンチ全景 (南から)	15
P L. 5	(1) 中学校第1トレンチ南壁土層断面 (北から)	25
	(2) 中学校第2トレンチ南壁土層断面 (北から)	25
	(3) 中学校第3トレンチ西壁土層断面 (東から)	26
	(4) 中学校第4トレンチ西壁土層断面 (東から)	26
P L. 6	(1) 中学校第5トレンチ第4～6層遺物出土状況 (南から)	26・31～33
	(2) 中学校第5トレンチ第4～6層遺物出土状況 (東から)	26・31～33
	(3) 中学校第5トレンチ第4～6層完掘状況 (南から)	26・31～33
	(4) 中学校第5トレンチ北壁土層断面 (南から)	26
P L. 7	(1) 中学校第5トレンチ完掘状況 (南から)	26
	(2) 中学校第6トレンチ全景 (東から)	27
	(3) 中学校第7トレンチ全景 (北から)	28
	(4) 中学校第8トレンチ全景 (南から)	28
P L. 8	幼稚園・小学校出土遺物(1)	15～17
P L. 9	幼稚園・小学校出土遺物(2)	17～19
P L. 10	中学校出土遺物(1)	28～32
P L. 11	中学校出土遺物(2)	29・32・33
〈吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査〉		
P L. 12	吉田構内全景 (北から)	
P L. 13	(1) Aトレンチ全景 (北から)	40
	(2) Aトレンチ遺物出土状況 (東から)	40・45・46
	(3) Bトレンチ全景 (北から)	40
	(4) Bトレンチ南壁土層断面 (北から)	40

P L. 14	(1) Cトレンチ全景 (北から)	43
	(2) Dトレンチ全景 (北から)	43
	(3) Eトレンチ全景 (東から)	43
	(4) Fトレンチ全景 (北から)	44
P L. 15	(1) Fトレンチ地山落ち込み状況 (西から)	44
	(2) Fトレンチ南壁土層断面 (北から)	44
	(3) 出土遺物	45・46

〈昭和61年度山口大学構内の立会調査〉

P L. 16	出土遺物(1)	50・52・53・63・66
P L. 17	出土遺物(2)	68・69・76—78・82

付篇 I

〈山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査 (昭和59年度)〉

P L. 18	(1) 調査区全景 (北東から)	86~125
	(2) 調査区全景 (南西から)	86~125
P L. 19	(1) 第9号竪穴住居跡 (東から)	90~92
	(2) 第10~13号竪穴住居跡 (南東から)	92~95
P L. 20	(1) 第11・12号竪穴住居跡 (西から)	92・93
	(2) 第13号竪穴住居跡 (北西から)	94・95
P L. 21	(1) 第13号竪穴住居跡西隅の桁・梁材出土状況 (南西から)	95
	(2) 第13号竪穴住居跡東隅の桁・梁材出土状況 (南から)	95
	(3) 第13号竪穴住居跡の桁材縦断面 (南東から)	95
	(4) 第13号竪穴住居跡の桁材横断面 (北東から)	95
P L. 22	(1) 第13号竪穴住居跡炉跡 (北西から)	95
	(2) 第13号竪穴住居跡炉跡 (南東から)	95
	(3) 第17号竪穴住居跡 (北東から)	97・98
	(4) 第18号竪穴住居跡 (南西から)	98
P L. 23	(1) 河川跡 (南東から)	112~116
	(2) 河川跡土層断面 (南東から)	112・113
	(3) 河川跡遺物出土状況 (北東から)	112~116
	(4) 現地説明会風景	

P L. 24	出土遺物(1)	91~107
P L. 25	出土遺物(2)	107~113
P L. 26	出土遺物(3)	113~125
P L. 27	出土遺物(4)	91~126

付篇Ⅲ

〈先土器時代の山口地方〉

P L. 28	(1) 湯無田遺跡採集の石器群(表)	157・158
	(2) 湯無田遺跡採集の石器群(裏)	157・158

挿 図 目 次

〈昭和61年度山口大学構内遺跡調査の概要〉

Fig. 1	山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図	4
Fig. 2	山口大学小串・常盤両キャンパス位置図	5
Fig. 3	山口大学光キャンパス位置図	6

〈亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査〉

調査の経過

Fig. 4	調査区位置図	7
教育学部附属幼稚園・山口小学校部分の調査		
Fig. 5	トレンチ設定図	9
Fig. 6	土層断面図	10・11
Fig. 7	第3トレンチ遺構配置図	12
Fig. 8	第1トレンチ出土遺物実測図	15
Fig. 9	第9トレンチ暗渠出土遺物実測図	16
Fig. 10	第9トレンチ第4層出土遺物実測図	16
Fig. 11	第9トレンチ第5・6・7層出土遺物実測図(1)	18
Fig. 12	第9トレンチ第5・6・7層出土遺物実測図(2)	19
Fig. 13	第10トレンチ出土遺物実測図	19

教育学部附属山口中学校部分の調査

Fig. 14	トレンチ設定図	25
Fig. 15	土層断面図	27
Fig. 16	第3トレンチ出土遺物実測図	29
Fig. 17	第4トレンチ出土遺物実測図	29
Fig. 18	第5トレンチ第4・5・6層出土遺物実測図(1)	30
Fig. 19	第5トレンチ第4・5・6層出土遺物実測図(2)	31
Fig. 20	第5トレンチ第7層出土遺物実測図	33
Fig. 21	第5トレンチ第9・10層出土遺物実測図	33
〈吉田構内国際交流会館新館に伴う試掘調査〉		
Fig. 22	調査区位置図	39
Fig. 23	トレンチ設定図	40
Fig. 24	土層断面図	41・42
Fig. 25	河川跡出土遺物実測図	44
Fig. 26	溝状遺構出土遺物実測図	44
Fig. 27	包含層その他の出土遺物実測図	45
〈昭和61年度山口大学構内の立会調査〉		
吉田構内の立会調査		
Fig. 28	調査区位置図	49
Fig. 29	出土遺物実測図	50
Fig. 30	調査区位置図	51
Fig. 31	出土遺物実測図	52
Fig. 32	調査区位置図	53
Fig. 33	採集遺物実測図	53
Fig. 34	調査区位置図	54
Fig. 35	調査区位置図	55
Fig. 36	調査区位置図	56
Fig. 37	調査区位置図	57
Fig. 38	調査区位置図	58
Fig. 39	調査区位置図	59
Fig. 40	調査区位置図	60

Fig. 41	調査区位置図	61
Fig. 42	調査区位置図	62
Fig. 43	出土遺物および採集遺物実測図	63
Fig. 44	調査区位置図	64
Fig. 45	調査区位置図	65
Fig. 46	調査区位置図	66
Fig. 47	出土遺物実測図	66
Fig. 48	調査区位置図	67
Fig. 49	調査区位置図	68
	小串構内の立会調査	
Fig. 50	調査区位置図	70
Fig. 51	調査区位置図	71
	常盤構内の立会調査	
Fig. 52	調査区位置図	72
Fig. 53	調査区位置図	73
Fig. 54	調査区位置図	74
	亀山構内の立会調査	
Fig. 55	調査区位置図	75
	光構内の立会調査	
Fig. 56	調査区位置図	76
Fig. 57	御手洗湾採集遺物実測図	77
	その他構内の立会調査	
Fig. 58	調査区位置図	79
Fig. 59	調査区位置図(2号宿舍)	80
Fig. 60	2号宿舍出土遺物実測図	81
Fig. 61	調査区位置図(6号宿舍)	81
Fig. 62	6号宿舍出土遺物および周辺畑地採集遺物実測図(土器)	82
Fig. 63	6号宿舍周辺畑地採集遺物実測図(石器)	83

付篇 I

〈山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)〉

Fig. 64	調査区位置図	85
Fig. 65	遺跡保存地区遺構配置図	87・88
Fig. 66	第8号竪穴住居跡実測図	89
Fig. 67	第9号竪穴住居跡実測図	90
Fig. 68	第9号竪穴住居跡出土遺物実測図	91
Fig. 69	第10～12号竪穴住居跡実測図	93
Fig. 70	第13号竪穴住居跡実測図	94
Fig. 71	第14号竪穴住居跡実測図	96
Fig. 72	第17号竪穴住居跡実測図	97
Fig. 73	第18号竪穴住居跡実測図	98
Fig. 74	第11～13・18号竪穴住居跡出土遺物実測図	99
Fig. 75	第30～32・35号土壌実測図	101
Fig. 76	第33・36・37号土壌実測図	102
Fig. 77	第30・31・33・36・39号土壌出土遺物実測図	103
Fig. 78	第38・39・43・44号土壌実測図	105
Fig. 79	第45～48号土壌実測図	106
Fig. 80	第49号土壌実測図	108
Fig. 81	第44～46・49号土壌出土遺物実測図	109
Fig. 82	第4・11・14号溝出土遺物実測図	110
Fig. 83	柱穴出土遺物実測図	112
Fig. 84	第1・2号河川跡土層断面図	113
Fig. 85	第1・2号河川跡出土遺物実測図(1)	114
Fig. 86	第1・2号河川跡出土遺物実測図(2)	115
Fig. 87	攪乱墳出土遺物実測図	117
Fig. 88	トレンチ出土遺物実測図	119
Fig. 89	出土状況不明の遺物実測図	120

付篇Ⅱ

〈古墳時代における竪穴住居の各属性について〉

Fig. 90	県内における主な古墳時代の竪穴住居跡検出遺跡の分布	131
Fig. 91	県内における主な弥生～古墳時代の竪穴住居の時期	132

Fig. 92	竪穴住居の平面形態変化	133
Fig. 93	竪穴住居の床面積	134
Fig. 94	床面積に占める主柱間床面積(1)	136
Fig. 95	床面積に占める主柱間床面積(2)	137

付篇Ⅲ

〈先土器時代の山口地方〉

Fig. 96	山口地方地域別遺跡分布	147
Fig. 97	湯無田遺跡の石器群	156
Fig. 98	先土器時代遺跡分布図(1)	160
Fig. 99	先土器時代遺跡分布図(2)	161
Fig. 100	先土器時代遺跡分布図(3)	162
Fig. 101	山口大学吉田構内地区割および調査区位置図	177・178
Fig. 102	山口大学小串構内調査区位置図	179・180
Fig. 103	山口大学常盤構内調査区位置図	181・182
Fig. 104	山口大学亀山構内(幼稚園・小学校部分)調査区位置図	183・184
Fig. 105	山口大学亀山構内(中学校部分)調査区位置図	185・186
Fig. 106	山口大学光構内調査区位置図	187・188

表 目 次

〈昭和61年度山口大学構内遺跡調査の概要〉

Tab. 1	昭和61年度山口大学構内遺跡調査一覧表	1・2
--------	---------------------	-----

〈亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査〉

Tab. 2	出土遺物観察表	20・21
Tab. 3	出土遺物観察表	34・35

〈吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査〉

Tab. 4	出土遺物観察表	46
--------	---------	----

〈昭和61年度山口大学構内の立会調査〉

Tab. 5	出土遺物および採集遺物観察表	63
Tab. 6	御手洗湾採集遺物観察表	77
Tab. 7	出土遺物および採集遺物観察表	84

付篇Ⅰ

〈山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）〉

Tab. 8	出土土器観察表	121-124
Tab. 9	出土石器観察表	125

付篇Ⅱ

〈古墳時代における竪穴住居の各属性について〉

Tab. 10	竪穴住居の主柱数	135
Tab. 11	県内の主な古墳時代の竪穴住居一覧表	141-146

付篇Ⅲ

〈先土器時代の山口地方〉

Tab. 12	地域別石器内容一覧表	149
Tab. 13	地域別使用石材一覧表	151
Tab. 14	各遺跡における器種別使用石材	151
Tab. 15	山口地方先土器時代遺跡地名表	163-166
Tab. 16	山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員	169
Tab. 17	山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員	169
Tab. 18	山口大学構内の主な調査一覧表	170-174

第1章 昭和61年度山口大学構内遺跡調査の概要

山口大学構内には、縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての集落跡として著名な吉田地区（吉田遺跡）をはじめ、県内各地に分散する附属施設を含む地区に周知の遺跡が埋存している。山口大学埋蔵文化財資料館は学内共同利用施設として、これら各地区において現状変更を伴う諸工事に際し、埋蔵文化財保護の観点から調査・研究を行なっている。すなわち、埋蔵文化財調査を要する場合は、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、周辺における既往の調査結果や工事内容等を勘案しながら、埋蔵文化財に対する影響の度合に応じて立会、試掘および事前に区分した各調査方法によって発掘調査を実施し、保護措置を講じている。

今年度は試掘調査2件、立会調査26件の計28件の調査を実施した（Tab. 1）。

Tab. 1 昭和61年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査地区	構内地区	構内地区割	調査面積 (㎡)	調査期間	挿図番号
試掘調査	教育学部山口附属学校 汚水排水管布設予定地	龜山構内	幼稚園・小学校部分 中学校部分	57 20	9月22-27日 10月1-15日 10月22-31日	Fig.104-4 Fig.105-2
	国際交流会館新築予定地	吉田構内	N-22・23区	70	12月4～25日	Fig.101 -73
立会調査	山口銀行現金自動支払機設置地区 (電線路埋設地区)	吉田構内	I-J-19・20区	11	4月17日	Fig.101 -74
	農学部附属農場農道整備地区	吉田構内	S-20, U-19区	165	4月21日	Fig.101 -75
	農学部附属農場農道交通規制地区 (施設ホール設置地区)	吉田構内	Q-15・16, L-10区	2	5月12日	Fig.101 -76
	正門横(水田内)境界杭設置地区	吉田構内	I-10区	0.25	5月16日	Fig.101 -77
	経済学部環境整備地区 (樹木移植・記念碑建立地区)	吉田構内	M-20区	3	6月19日	Fig.101 -78
	交通標識設置地区	吉田構内	H-23,J-9,P-22, S-20,W-16区	3	6月27日	Fig.101 -79
	市道神郷1号線および 開田神郷線の送水管理設地区	吉田構内		2100	8月11～29日	Fig.101 -80
教養部自動販売機増設地区 (屋根設置および観望席移動地区)	吉田構内	K・L-18区	3.5	8月19日	Fig.101 -81	

昭和61年度山口大学構内道路調査の概要

調査区分	調査地区	構内地区	構内地区制	調査面積 (㎡)	調査期間	押印番号
立	教養部身体障害者用スロープ取設地区	吉田構内	L-15・16区	3	9月2日	Fig.101 -82
	経済学部散水栓取設地区	吉田構内	L・M-20区	4	12月1日	Fig.101 -83
	水泳プール改修地区等	吉田構内	E・F-16, H-15区	26.5	12月8・10日	Fig.101 -84
	農学部附属農場水道管理設地区	吉田構内	S-12区	3	12月9日	Fig.101 -85
	污水排水管等総改修地区	吉田構内	Q-15・16, M-18区	15.5	12月23日 1月12・19日	Fig.101 -86
	本部身体障害者用スロープ取設地区	吉田構内	L-14区	12	2月25日	Fig.101 -87
	経済学部身体障害者用スロープ取設地区	吉田構内	K-20, L-18-20区	88	3月13・17・ 23日	Fig.101 -88
	附属図書館荷物運搬用スロープ取設地区	吉田構内	L-16区	8	3月16日	Fig.101 -89
	教養部37番教室改修地区	吉田構内	K-16区	1	3月24日	Fig.101 -90
	医学部附属病院外来診療棟新築地区	小串構内		5	5月20・26日 6月20・27日 7月24日	Fig.102 -13
医学部附属病院外来診療棟周辺環境整備地区等(雨水排水設地区)	小串構内		18	3月24日	Fig.102 -14	
調	工学部尾山宿舍排水管改修地区	常盤構内		6	7月8日	Fig.52
	工学部身体障害者用スロープ取設地区	常盤構内		29	8月21日	Fig.103 -4
	情報処理センター(常盤センター)空調設備取設地区	常盤構内		30	8月21日	Fig.103 -5
	教育学部附属山口小学校電柱移設地区	亀山構内		0.5	7月9日	Fig.104 -5
	教育学部附属光小学校創立記念事業地区(ブロンズ像建立地区)	光構内		2.5	10月20日	Fig.106 -4
	湯田宿舍給水管改修地区	山口市 湯田温泉		35	11月11・15・ 19・21日	Fig.58
	経済学部宿舍下水管改修地区	山口市旭通り 山口緑の上		1 7	3月14・19日	Fig.61 Fig.59

吉田構内の調査(本専、人文・教育・経済・理・農の各学部、教養部：山口市大字吉田1677-1、教育学部附属養護学校：同古田3003所在)

試掘調査1件、立会調査17件の計18件の調査を実施した。

試掘調査はキャンパスの南端中央部に位置する、国際交流会館新営予定地で実施した。新営予定地北半部では旧耕土、床土が残存しておらず、表土直下が地山である。統合移転時の造成による大規模な削平が行なわれたものと考えられ、わずかに中～近世の溝状遺構を検出したにすぎない。しかし、南半部では弥生時代前期末～古墳時代後期を主体とする遺物を含み、東から西へ走向する幅約19m以上の河川跡を検出した。調査面積、遺物の出土量とも少ないため、機能していた時期は明確ではない。出土遺物には弥生土器、須恵器の壺などのほか、姫島産黒曜石製の加工痕ある剥片がある。なお、今回の調査地域の北西約100mの地点でも同規模の河川跡が検出されており、同一河川の可能性がある。試掘調査の結果を踏まえ、河川の流路部分については、後日、立会調査を実施することとなった。

立会調査では17件のうち9件の調査で遺物あるいは遺物包含層・遺構が認められた。

遺物包含層は2件の立会調査で検出した。キャンパス西端部の水泳プールの改修地域では遺物は出土しなかったが、その西側のテニスコートフェンス改修時に確認された弥生～古墳時代の遺物を含む茶褐色粘質土と同一層が認められ、遺物包含層の東への拡がりの確認された。また、キャンパス南西部、遺跡保存地区の北東に隣接する地域では、現金自動支払機設営を伴い立会調査を実施した。現地表から75cm下位で弥生時代中期の土器を包含する黒褐色粘質土の堆積が見られ、工事路線内では幅5m以上、層厚は少なくとも35cmの規模をもつ。その下位には砂礫が堆積し、出土遺物の磨滅も激しいことなどから河川跡、溝などの埋土の可能性が高い。なお、今回の調査地域の北東約70mの地点では弥生時代中期後半～後期初頭の大溝が検出されており、同一遺構かもしれない。

遺構は2件の立会調査で検出した。キャンパス南東端部に位置する果樹園での農道整備では、崖面の切り土を行った。攪乱部分を除いて工事範囲内の全面に室町時代の柱穴が分布していたため、関係部局と協議の結果、整備に伴う切り土は農道としても機能可能なこの攪乱部分に限定して実施することとなった。隣接して行われた器材庫設置に伴う調査でも、同時期の溝が検出され、現状変更せずに設置する配慮がなされた。また、キャンパス中央部よりやや南の経済学部構内では、身体障害者用スロープ取設に伴い4箇所を掘削した。そのうちの1箇所である第一学生食堂付近では、弥生～古墳時代の柱穴が検出されたため、関係部局と協議の結果、遺構を破壊しない範囲内で工事を実施することとなった。

遺物包含層、遺構は検出されなかったが、以下の4件の立会調査地域およびその周辺で

遺物を採集した。キャンパス中央部に位置する附属図書館西側の荷物運搬用スロープ工事では、弥生時代前期のものと思われる壺の破片、南東部に位置する独自寮東側の交通標識設置工事では時期、器形不明の須恵器片がそれぞれ埋め土中から出土した。各遺物は過去に周辺で同時期の遺物包含層、遺構が検出されており、統合移転時の造成により、これらから遊離したものであろう。キャンパス中央部よりやや東に位置する実験水田北側の農道で



Fig. 1 山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図

は須恵器蓋坏、甕、土師器を採集した。水田の側溝を再掘削した際出土したものである。キャンパス中央部よりやや北東に位置する第二学生食堂の擁壁工事では、表土中から土師質土器の鼎脚部が出土した。また、調査中に東に隣接する農学部害虫学実験畑で、須恵器坏身、甕、土師器瓶の把手等を採集した。大半は8世紀代におさまるもので、第二学生食堂敷地部分で検出されている堅穴住居跡が古墳時代前期の所産であることから、付近に時期の異なる遺構ないしは遺物包含層が埋存している可能性を推測させた。

また、キャンパスの南縁部を巡る市道での送水管理設に伴い、山口市教育委員会が立会調査を実施し、当資料館も調査協力を行なった。その結果、家畜病院付近で墨書のある須恵器、土師器、六連式製塩土器等が出土した奈良～平安時代の河川跡、ハンドボール場前、南門前では溝(状)遺構が新たに検出された。遺物包含層は野球場南東端部から南門にかけての少なくとも幅約160mの範囲に集中分布している。二層に分層され、上層が

小串構内の調査

らは須恵器が出土しているが、量的には極めて少ない。下層は弥生時代前期末～後期終末の遺物を包含しており、なかでも、前期末～中期初頭の土器は出土量が比較的多く、壺、甕などの良好な資料も少なくない。なお、南門からラグビー場付近までは遺物包含層の下層が大学側の断面にのみ部分的に検出され、地山がこの部分で不規則に落ち込んでいることから、前期末～中期初頭の遺構の存在を予想させる。

小串構内の調査 (医学部、医療技術短期大学部、医学部附属病院：宇部市大字小串1144所在)

キャンパスの東部に位置する外来診療棟周辺で、2件の立会調査を実施した。過去の調査で検出されている遺物包含層の堆積は認められたが、遺物は出土していない。

常盤構内の調査 (工学部、工業短期大学部：宇部市常盤台2557、尾山宿舍：同上野中所在)

3件の立会調査を実施した。調査地域は、キャンパスの中央部の東講義棟、北端中央部の学生食堂、南西部の情報処理センター各周辺およびキャンパスの南東約300mに位置する尾山宿舍敷地部分である。各地点とも後世の削平が激しく、遺物包含層、遺構は認められなかった。

亀山構内の調査 (教育学部附属幼稚園：山口市白石三丁目1-2、岡山口小学校：岡三丁目1-1、岡山口中学校：岡一丁目9-1所在)

小学校のグラウンド部分が「白石遺跡」として周知されている。試掘調査1件、立会調査1件の計2件の調査を実施した。

試掘調査は汚水排水管布設に伴い、各校内で実施した。幼稚園部分では弥生土器を含む



Fig. 2 山口大学小串・常盤両キャンパス位置図



Fig. 3 山口大学光キャンパス位置図

遺物包含層、室町時代の遺構を検出した。

小学校部分では12箇所のトレンチのうち5箇所遺物が出土した。とくに南東部のトレンチでは、布留式土器の終末期に位置づけられる遺物包含層を確認した。過去の調査では、広義の布留式併行の竪穴住居跡が検出されており、庄内式の新段階の遺物を含む溝状遺構も認められていることから、当校内に庄内式、布留式各新段階の、少なくとも二時期の遺構、遺物包含層が存在する可能性が提起された。したがって、とくにこの部分の施設、

環境整備については遺物包含層の分布範囲の把握を含めた事前の調査が必要となった。

中学校の敷地部分でも明確な遺構は検出していないが、8箇所のトレンチのうちの2箇所未周知の遺物包含層を確認した。とくに第5トレンチでは少なくとも二層に分層され、下層は植物遺体を含む縄文後・晩期の単純層で、上層からは庄内併行期の土器が多量に出土した。また、隣接する第3トレンチでも大内館跡B式土器を含む中世の上師器を主体とした堆積層を検出した。弥生～江戸時代の遺物が混在しており、周辺からの流入品と考えられる。他にも同時期の遺物が原位置を遊離した遺物包含層から出土した。遺物の集中範囲は本校内の西半部に限定され、この部分での工事に際しては事前の調査が必要である。

光構内の調査 (教育学部附属光小学校、同光中学校：元市大字宝積通1-1所在)

「御手洗遺跡」として周知されている地域である。立会調査1件を実施した。キャンパス中央部付近の中庭での工事で、表土直下の海成砂層上面から須恵器、歴史時代土師器が出土した。また、本構内の北に面する海岸で古墳時代後期～江戸時代の遺物を採集した。

その他構内の立会調査

山口市湯田温泉六丁目8-29に所在する湯田職員宿舎、また山口市旭通り二丁目3-32、水の上町6-9に所在する経済学部の職員宿舎において、それぞれ立会調査を実施した。旭通りに所在する6号宿舎では、埋め土中から室町時代後半頃の瓦質土器播鉢が出土した。また、周辺の畑地では同時期の瓦質土器鍋、播鉢、土師質土器鼎等の遺物が多量に採集され、周辺に未周知の遺跡が存在している可能性が指摘されるにいたった。(河村)

第2章 亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査

第1節 調査の経過

山口市街を臨む亀山の西裾に開けた白石の地には、教育学部附属の幼稚園・山口小学校・山口中学校（山口附属学校と総称）が所在する。去る昭和58年度、小学校・幼稚園部分で初めて調査を行なうこととなったが、その際、小学校グラウンドから、鳥形木製品とそれを取り付ける杆をはじめとして鋤・鍬など多量の木製品、また甕をもつ古墳時代前半期の竪穴住居跡など、貴重な遺物・遺構が発見され、当小学校グラウンド部分は「白石遺跡」として知られるところとなった。¹¹⁾

白石遺跡の北側では、国道9号バイパス建設時に鴻峰山南麓に沿って多くの古墳・石棺群が発見され、また西側でも、鴻峰山から南にのびる丘陵（通称茶臼山）を削った際に古墳・石棺群が見つかり、弥生時代終末～古墳時代の墓地についてはかなり明らかになりつつある。反面、亀山と障子岳にはさまれた、これらの墓地に伴うと思われる地域の同時期の生活跡については、この白石遺跡が実に初めての発見例であり、他は、山口高校敷地で遺物包含層が確認されているにすぎない。白石遺跡の存在は重要なものであるといえる。



Fig. 4 調査区位置図

この幼稚園・小学校部分の敷地は、1.5m前後の大きな段差二段をもって都合三面に造成されている。白石遺跡とされている小学校のグラウンドが最も低い面で、その東に小学校校舎の建ち並ぶ一段高い面がある。そして北がさらにもう一段高く、幼稚園の敷地やプールとなっている。58年度調査がグラウンド部分のみに限られたため、これらの段差は、敷地内の遺構の拡がり・遺跡立地等を推測する上で、大きな障害となっていた。以来、上二段部分で若干の立会調査を行なったが得られる知見に乏しく、上段部分の地下の状況の²⁾ 説明が急がれていた。また幼稚園・小学校部分の南約200mに位置する中学校部分でも、昭和60年度に初めて立会調査を試み、やはり周辺に遺構の存在が推察されていた。³⁾

昭和61年度に至り、山口附属学校全域において、公共下水道使用開始に伴い、汚水排水管を新規埋設する工事が計画された。これを請けて当館運営委員会は、管の埋設予定路線内の埋蔵文化財の有無を確かめ、本格的調査の必要性を判断する資料を得るという目的で、試掘調査を行なうこととした。予定される管路の掘削総面積は、幼稚園・小学校部分で約900㎡、中学校部分で約450㎡である。調査は、配管工事の際特に深い掘削を必要とするマンホールの埋設予定ヵ所でおもに行なうこととし、幼稚園・小学校部分で16ヵ所、中学校部分で8ヵ所を選定し、それぞれに2m×2mを基本規模とするトレンチを設定した。

調査方法は、構内の敷地造成の際の置土は重機を使用して除去し、以下、地山まで手掘りによる分層発掘を行なったのち、トレンチ端部をマンホール基底面まで深掘りして土層の観察を行なうものである。特に幼稚園・小学校部分では、園児・児童の安全確保の観点から、一日一トレンチの掘削・調査を完了し埋め戻すことを基本としたが、重機の搬入手続き上、置土の除去だけは数トレンチまとめて行なうこととなった。

アスファルト・カッター使用の都合上、予め小学校部分9月9日、中学校部分10月15日に調査区を設定した後、幼稚園で9月22日から27日まで、小学校で10月1日から15日まで、中学校は同22日から31日まで、人文学部考古学研究室の援助を得て調査を行なった。(杉原)

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ」,1985年)。以下、「58年度調査」と略称する。周辺の地理・歴史的環境はこちらをご覧いただきたい。
- 2) a) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校放水栓改修に伴う立会調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ」,1986年)。
b) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属幼稚園環境整備に伴う立会調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ」,1986年)。
c) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校電柱移設に伴う立会調査」(本書第4章第4節)。
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口中学校球技コート整備に伴う立会調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ」,1986年)。

第2節 教育学部附属幼稚園・山口小学校部分の調査

1 層位・遺構

幼稚園部分で4ヵ所、小学校部分で12ヵ所の全16ヵ所にトレンチを設定し、調査順に通し番号を付した。調査総面積約57m²。予定される管路掘削総面積の約6.3%にあたる。なお58年度調査時に小学校の体育館倉庫脇に設定した仮点（BM）は、標高32.757mであることを確認したので、今回調査との比較の際には参考とされたい。

<幼稚園部分>

幼稚園部分の敷地面は当構内で最も高くなっており、現地表面は標高ほぼ35.7m前後に造成されている。

第1トレンチ 幼稚園敷地のはは中央、1m×3mのトレンチ。西半分には既設の配管があり、土層の観察不能。東半分では、厚さ約80cmの造成時の置土・攪乱土の下に、弥

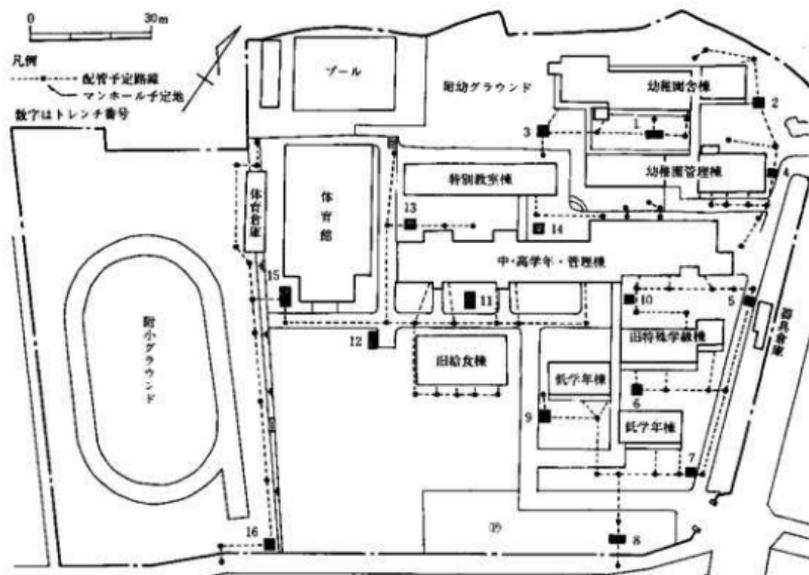


Fig. 5 トレンチ設定図

亀山橋内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査

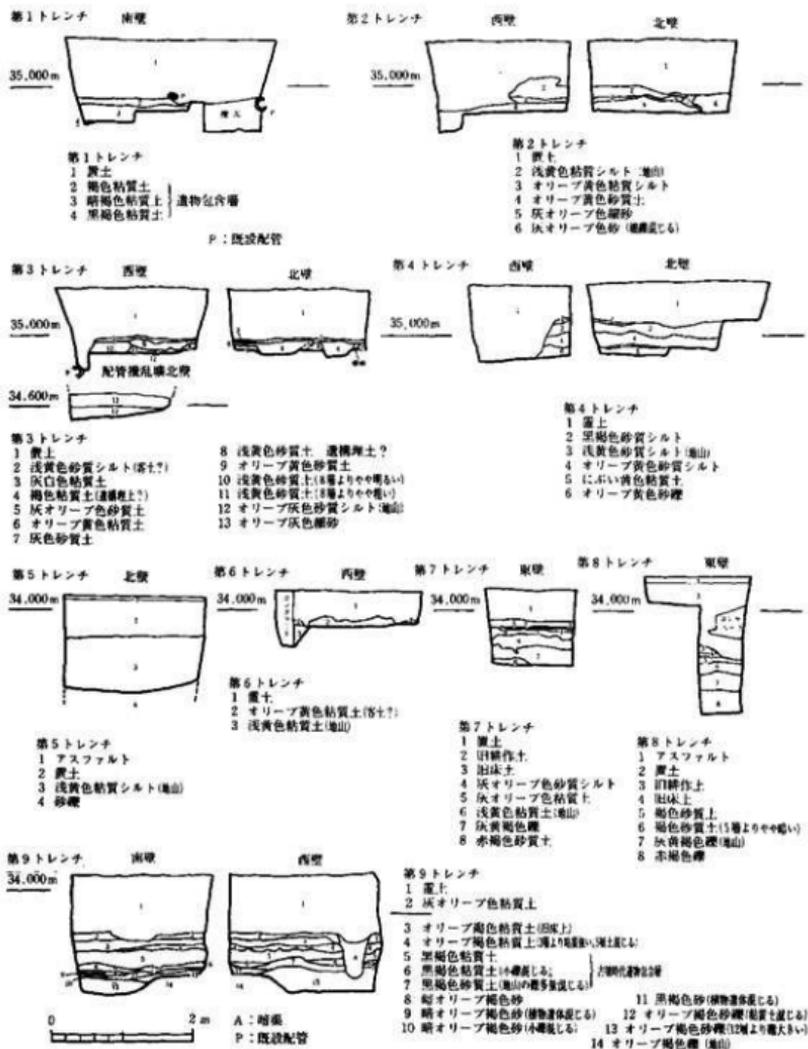
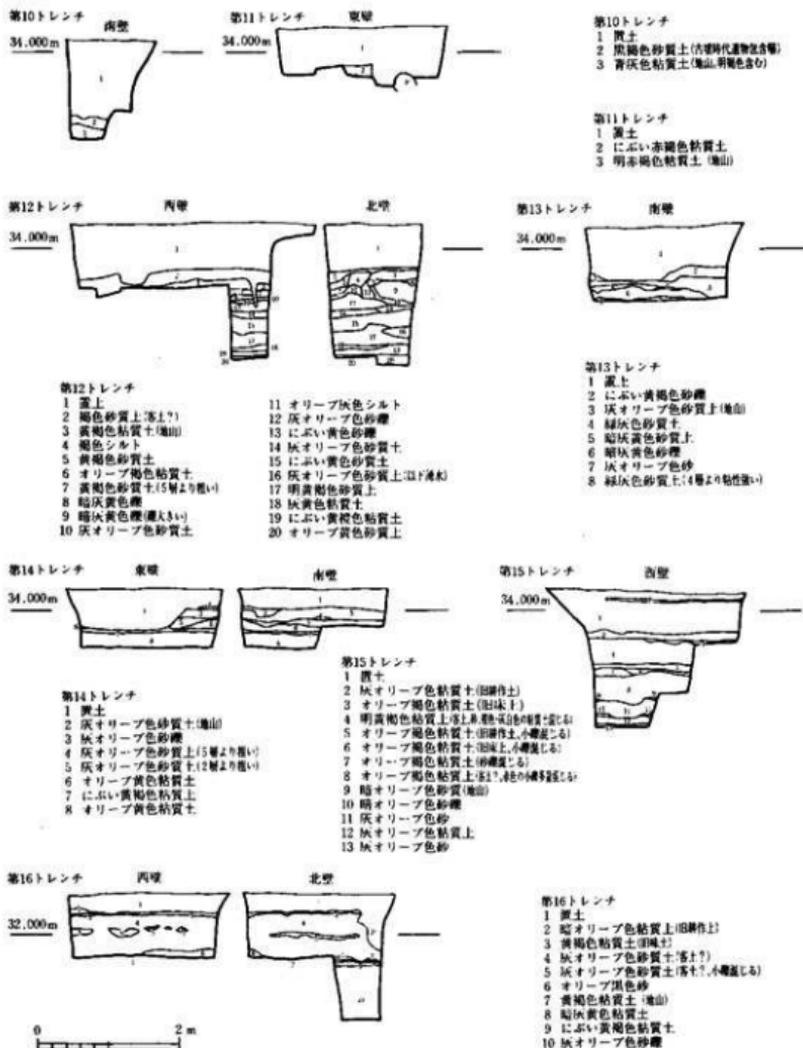


Fig. 6 土

教育学部附属幼稚園・山口小学校部分の調査（層位・遺構）



層断面図

生土器を含む遺物包含層が3層残存していた。うち第4層：黒褐色砂質土は、その下面が東に向かって落ち込んでおり、土自体にもしまりがないことから遺構埋土の可能性があるが、今回の調査では掘り確認できなかった。掘削深度内では地山は検出されない。

遺物は、図化しえないが各包含層から弥生土器小片多数が出土したほか、配管の攪乱層から弥生土器・近代磁器が出土した。いずれもやや摩耗している。

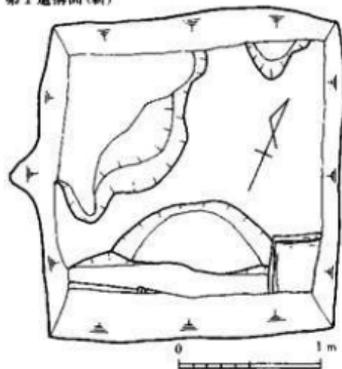
第2トレンチ 幼稚園敷地の北東隅、2m×2mのトレンチ。置土・攪乱土直下に、地山と思われる浅黄色粘質シルト層が部分的に残存するが、置土に混入したブロックかもしれない。第4層以下は激しく湧水する砂礫層となる。遺構・遺物は検出されない。

第3トレンチ 幼稚園グラウンドの南東隅、58年度調査のHトレンチの南東約25mの地点に設定した2m×2mのトレンチ。南端部はすでに配管がとおり、攪乱されていた。

二時期の遺構と思われるものを確認した。検出面は双方とも第2・3層下面であるが、この面で樹根が切れていることから、すでに遺構上部は後世の削平を受けているものと思われる。古い方の遺構は、第8・9層：浅黄色・オリブ黄色の砂質土を埋土とするか、もしくはこのトレンチにみえる第5～11層がすべて遺構埋土の範囲内となる可能性がある。遺物はなく詳細は不明であり、第1トレンチ同様、遺構の掘り込みの把握を含めた周辺の詳細な調査が望まれる。新しい方の遺構は、古い遺構の埋土を掘り込んでおり、第4層：褐色粘質土を埋土とする。この層からは室町時代の土師器坏口縁片が出土している。

なお、第2層から土師器・須恵器の小片、配管攪乱層から弥生土器・土師器・瓦質土器・

第1遺構面(新)



第2遺構面(古)

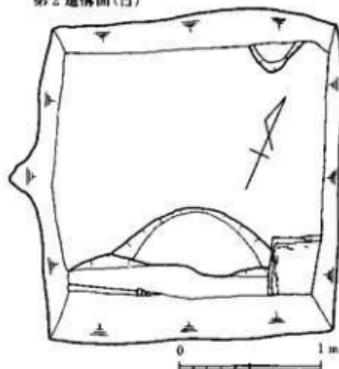


Fig. 7 第3トレンチ遺構配置図

不明鉄製品を検出した。

第4トレンチ 幼稚園管理棟の東、1.3m×2mのトレンチ。南半は構内造成により大きく削られている。北半では現地表下約50cmで薄い黒褐色砂質シルト層をはさんで浅黄色砂質シルトの地山に達し、以下、自然堆積層が続く。遺構・遺物は検出されない。

<小学校部分>

現地表面の標高が、34.1～34.5mに造成される校舎面に11ヵ所、一段低く、32.5～32.8mに造成されるグラウンド面で1ヵ所を選び、それぞれにトレンチを設定した。

第5トレンチ 小学校器具倉庫脇、2m×2mのトレンチ。置土・攪乱土直下、現地表から約60cmで、浅黄色粘質シルトの安定した地山となる。下部は次第に砂質度が強くなり、礫層に達して湧水する。遺構・遺物は検出されない。

第6トレンチ 旧特殊学級棟前、2m×2mのトレンチ。置土は現地表下40～50cmまでと比較的薄く、オリーブ黄色砂質土をはさんで浅黄色粘質土の地山に達するが、トレンチの対角線上に小学校設置以前の建造物の基礎が埋設されており、両層とも大きく攪乱を受ける。顕著な遺構・遺物は検出されない。

第7トレンチ 1.3m×1.5mのトレンチ。厚さ約50cmの置土直下に旧耕作土・床土が残存する。以下、自然堆積層2層をはさんで浅黄色粘質土の地山へと達し、角礫を含む礫層、そして赤褐色砂質土層と続く。第4層：灰オリーブ色砂質シルト層から土師器の小片が出土しているが、遺構は確認できなかった。

第8トレンチ 小学校正門横の駐車場南端、1.5m×3mのトレンチ。トレンチ内は過去の建造物に伴うと思われるコンクリート基礎が厚く堆積し、掘削できたのは南東端部のみである。置土は、多くの貝殻が混入し、厚さ1m～1.2mにおよぶ。その直下は北半部のみ旧耕作土・床土が残存し、以下は自然堆積層が続く。第7層以下は湧水する。第7・8層は、第7トレンチの第7・8層にそれぞれ対応するものと思われるが、第7トレンチでみられた浅黄色粘質土の地山はここでは確認できず、遺構・遺物も検出されない。

第9トレンチ 低学年棟前、2m×2mのトレンチ。厚さ90cmの置土の直下に、一部攪乱を受けるが旧耕作土・床土が残存する。この耕作土上面を掘り込んで東西に走る暗渠が検出された。下面には小枝等を敷き、その上に礫(第14層の礫を含む)を詰めている。

床土下に第4層：オリーブ褐色粘質土をはさんで、黒褐色の遺物包含層が30cmあまりにわたって堆積する。この包含層は3層に分層され、最上層は厚さ15～25cmの粘質土層であるが、下層になるほど砂礫の混入が多くなる。3層の包含層の遺物は、一応各層ごとに分

けて取り上げたが、その段階では第6層を、トレンチ南東隅のみのブロックとして捉えていた。トレンチ西壁にみえる第6層は、後の断面観察により第7層から分離したもので、したがって西半分では第6層の遺物を第7層に含めて取り上げたことになる。

南壁のみ確認される第8・9・10層は、礫と植物遺体の有無によって分層した。第11層は植物遺体を多量に含む。第12層以下は激しく湧水する礫層となる。地山とみられる第14層は、トレンチ南西隅で急に高くなる。

包含層からは古墳時代の土師器が多量に出土し、他に弥生土器・歴史時代土師器・青磁、黒曜石剥片、不明鉄製品の混入がみられる。暗渠埋土からは同様の土師器のほかには弥生土器・須恵器・瓦質土器が出土しており、第4層でも同様の土師器と須恵器片が出土。

第10トレンチ 1.2m×1.5mのトレンチ。約1.1mの厚い置土の直下に第2層：黒褐色砂質土の遺物包含層が堆積する。その下は、明褐色土を含む青灰色粘質土の不安定な地山で、湧水する。第2層からは5世紀代の土師器が出土しているが、量的には少ない。

第11トレンチ 1.5m×3.1mのトレンチ。トレンチ南半は配管の埋設、北端は校舎建築時の掘削により、それぞれすでに大きく攪乱されており、土層の観察不能。わずかにトレンチ中央部で、厚さ50cmの置土直下に、にぶい赤褐色粘質土の堆積が残っており、この層から土師器甕の破片が出土した。その下はすぐに明赤褐色粘質土の地山となる。

第12トレンチ 旧給食棟横、1.5m×3mのトレンチ。コンクリートの基礎やレンガを含む厚さ60～70cmの置土の下に、しまりのない褐色粘質土をはさんで、黄褐色粘質土の地山が検出される。褐色粘質土は、客土の可能性もある。南端部で、地山を掘り込んだ不明瞭なピットを検出したが、遺構かどうかは不明。深掘りの結果、第16層以下湧水。土師器甕の破片と格子タタキをもつ土師質土器片が検出されているが、出土層位は不明。

第13トレンチ 2m×2mのトレンチ。北半部には旧建造物のコンクリート基礎があるため掘削不能。南半部の観察では、厚さ50～60cmの置土以下はすぐに砂礫と砂質土との互層になるが、顕著な湧水は認められず、第14トレンチにみられる黄色系統の粘質土が、さらに下部に堆積するものと思われる。遺構・遺物なし。

第14トレンチ 第13トレンチの東約30m、2m×2mのトレンチ。北半部は大きく削られているが、置土直下は砂質土・砂礫の互層となる第13トレンチ同様の層位である。しかしそれ以下に、黄色系統の比較的安定した粘質土が堆積することから、この砂礫層は、時期は明らかでないが付近の河川等が氾濫した際運ばれてきたものかと思われる。置土の厚さも30cm足らずであり、もとの地形が第13トレンチより高かったことが窺える。遺

構・遺物は認められない。

第15トレンチ 体育館横、グラウンドとの高低差が約1.5mある大きな段差の上端に設定した、0.8m×2mのトレンチ。厚さ約60cmの構内造成時の置土の下には、約35cmの厚い客土をはさんで上下にそれぞれ旧耕作土・床土がある。その下の第7・8層もさら客土の可能性ある。第9層以下が地山で、湧水する。遺構・遺物は認められない。

第16トレンチ 小学校校舎面から・段落ちたグラウンド南東隅に設定した2m×2mのトレンチ。58年度調査で竈を付設した竪穴住居を検出したGトレンチは、この西約25mの地点に位置し、周辺での遺構ないしは遺物包含層の存在を把握する必要があった。

約20cmの薄い置土の下に旧耕作土・床土が残存している。その下に、小礫をブロック状に含み厚さ約60cmにわたって厚く堆積している灰オリーブ色砂質土（客土の可能性あり）をはさんで、黄褐色粘質土の地山となる。地山直上で、有機質の黒褐色粘質土ブロックがごくわずかと、オリーブ黒色砂のブロックが観察されたが、遺構・遺物はない。

西端の深掘りの結果、この地山自体もわずか5cmの厚さしか残っておらず、グラウンド南西隅で行なった「電柱移設に伴う立会調査」の所見ではこの地山が1.5mにもおよぶ厚さをもっていたことから、グラウンドの東寄りの段の真下あたりは大幅に削平され、遺構があったとしてもすでに消失しているものとみられる。以下、薄い粘質土が2層続き、その下には湧水する灰オリーブ色砂礫が少なくとも80cm堆積する。（杉原）

2 遺物

遺物は、第1・3・7・9・10・11・12トレンチでそれぞれ出土しているが、第3・7・11・12トレンチ出土のものは小片のため図化しえない。

第1トレンチ出土遺物（Fig. 8, PL. 8）

各包含層から弥生土器片多数、配管の攪乱層から弥生土器・近代磁器が出土したが、ほとんどが摩耗した小片で、器形を知りうるものは少ない。

図示したのは配管の攪乱層から出土した弥生土器壺の底部で、厚く大きい平底になるものと思われ、弥生時代前期に遡る可能性をもつものである。

第9トレンチ出土遺物（Fig. 9-12, PL. 8・9）

第5～7層（遺物包含層）から多量に出土した。また、第4層および旧耕作土を掘り込んだ暗渠からの出土遺物もある。

暗渠出土遺物（Fig. 9）

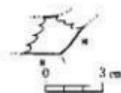


Fig. 8 第1トレンチ出土遺物実測図

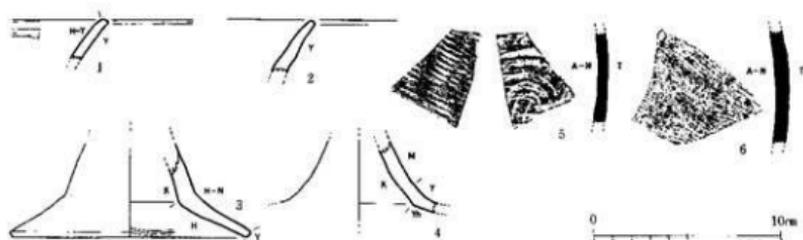


Fig. 9 第9トレンチ暗渠出土遺物実測図

主体は古墳時代の土師器で、他に弥生土器・須恵器・瓦質土器が出土している。

1～4は土師器。1・2は甕口縁部で、1は口縁上面にはほぼ水平な面をもち、端部を外につまみ出すもの。2は端部に小さな面をもち、口縁中位が膨らむもの。甕には他にタタキを施す破片がある。3・4は高坏の脚部。3は裾端部に面をつくるもので内外面とも刷毛目がややナデ残っている。4は裾部を欠損し、外面は脚柱部のみをヘラミガキする。

5・6は須恵器片。ともに外面は平行タタキであるが、内面は同心円の当て具痕の上を5は後にややナデしており、6はほとんど当て具痕が残らないくらいにナデ消している。6はタタキが細かく、外面には自然軸の付着がみられる。

これらの遺物は、本来遺物包含層に含まれていたものが暗渠掘削によって遺物包含層から遊離し、暗渠内部を被覆する際に混入したものと思われる。

第4層出土遺物 (Fig. 10)

土師器・須恵器片が若干出土している。弥生土器かと思われるものもある。

図は、須恵器の破片で、器形はわからない。外面には平行タタキの後、一部にカキ目が見える。内面は丁寧なナデが施され、当て具の痕跡は全く残らない。(杉原)

第5・6・7層出土遺物 (Fig. 11・12)

遺物包含層は3層に分層できるが、層位の項で述べたとおり、遺物取り上げの段階で第6・7層が混合しており、それに加えて第5層と第6・7層との遺物が接合するため、分層はしたものの、ここでは一括して取り扱うことにする。上層には摩耗した小片が多く、下層になるに従って遺存状態がよくなるが、全体の器形が窺えるほどの大きさの破片はない。



Fig. 10 第9トレンチ
第4層出土遺物実測図

古墳時代の土師器が圧倒的に多く、他に弥生土器・歴史時代土師器・青磁片各1点、黒曜石の剥片2点、不明鉄製品1点がある。

1～27は堿で大半は口縁部の資料である。直線的に開くもの（5・7・8・13・16・21）、内彎して開くもの（6・9）、複合口縁になるもの（19・20）などがあるが、外彎しながら開くものが多い。直線的に開くものには、口縁端部に面をもつもの（5・8）、端部が肥厚ぎみに強く屈曲するもの（21）、端部が先尖りのもの（16）、丸くおさめるもの（13）などがある。また、端部内面に面をもつもの（7）もある。外彎して開くものには、短い口縁部をもち端部付近でさらに外反するもの（17）や口縁端部が肥厚し、面をもつもの（2～4）、丸くおわるもの（11）などがある。また、端部が尖りぎみに丸く終わるもの（10・15・18）のなかには15のように口縁端部直下の外面に一条の沈線が巡るものがある。内彎して開くものは、口縁端部に水平もしくは水平に近い面をもつ。口縁端部付近でわずかに外反するもの（6）や端部が肥厚するもの（40）がある。58・59は複合口縁をもつものであるが、口頸部の屈曲は弱く、外面をわずかに膨らませただけのもので屈曲部を表現する。いずれも口縁端部は尖る。22・23のように外面にタタキを残す資料はほとんどなく、大半は刷毛目仕上げである。5・6・8・9・13～15など約半数資料の外面に煤が付着する。24～27は底部で、25は円盤状の突出した底部をもつ。内面は粗いナデ仕上げで、側面には指圧による整形痕が顕著である。24は時期的に遡るものである。内外面はいずれも横ナデで、刷毛目の残るものもある。

28～34は壺。28～32は小型丸底壺と思われ、口縁部が直線的に直立もしくはそれに近く開くもの（28・29・31・32）が多い。口縁端部は尖りぎみもしくは丸くおさめる。30は口縁部の中位で内彎して立ち上がる。内外面とも横ナデであるが、28・29は横刷毛ののち横ナデおよびナデを施す。33・34は時期的に遡るものである。

35～46は高坏。35～39は坏部で、やや深いものが多いものと思われる。反転部の稜は極めて不明瞭で、下半部および上半部とも内彎して開き、口縁端部付近でわずかに外反する。口縁端部は丸いもの（35・37）と尖るもの（36）がある。40～46は脚部。脚柱部は坏部との接合部付近から開く（40～42）。脚裾部は屈曲せずそのまま端部にいたり、丸くおわるもの（43）と脚裾部で屈曲するもの（44・45）などがある。45は水平に近く屈曲する。44～46とも端部は尖る。脚柱部はナデ、他は横ナデ仕上げが多い。

47～52は埴。47～51は内彎して開く体部をもち、47・48は口縁端部が短く外反する。横ナデもしくはナデ仕上げで、50は外面ヘラミガキを施す。

53・54は剥片でいずれも上端部を欠損し、打点、打面は残存していない。54は正面下半部、右半部に自然面を残す縦長剥片で、ヒンジフラクチャーをおこしている。

亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査

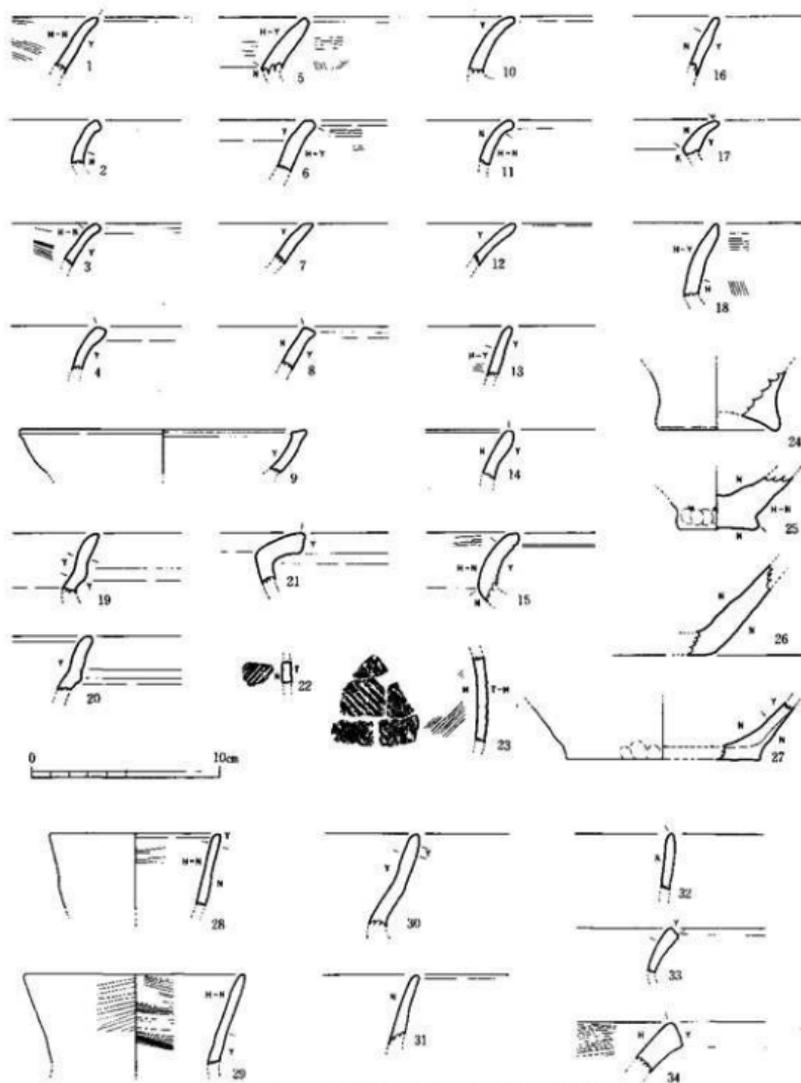


Fig. 11 第5トレンチ第5・6・7層出土遺物実測図(1)

亀山橋内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査

Tab.2 出土土物観察表

法量()は現存値

No	器種	口径 #口径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
第1トレンチ (Fig.8)							
-	休土器	壺	- (2.1)	外面 } にぶい黄褐色(10YR7/3) 内面 }	良好	2mm以下の石英を 多量に含む。	良好
第9トレンチ略集 (Fig.9)							
1	土師器	壺	- (2.1)	外面 } にぶい褐色(7.5YR7/4) 内面 } にぶい褐色(7.5YR6/4)	良好	1mm程度の石英を 含む。	良好
2	土師器	壺	- (2.7)	外面 } にぶい褐色(7.5YR6/4) 内面 } にぶい褐色(10YR7/3)	良好	1mm程度の石英を 含む。	良好
3	土師器	高坏	*12.4 (5.0)	外面 } にぶい褐色(7.5YR7/4) 内面 }	良好	ほとんど不純物を 含まない。	やや 甘い
4	土師器	高坏	- (3.8)	外面 } 浅黄褐色(10YR8/3) 内面 }	精良		ほぼ 良好
5	須恵器	-	(4.8)	外面 } 緑灰色(10G6/1) 内面 } 灰色(N5/0)	良好	1mm以下の石英・ 辰石を含む。	良好
6	須恵器	-	(6.1)	外面 } 明青灰色(5B7/1) 内面 } 灰色(N6/0)	精良	不純物は含まない。	ほぼ 良好
第9トレンチ第4層 (Fig.10)							
-	須恵器	-	(1.5)	外面 } 灰色(N6/0) 内面 }	良好	1mm程度の石英を 含む。	良好
第9トレンチ第5・6・7層 (Fig.11・12)							
1	土師器	壺	- (2.8)	外面 } にぶい黄褐色(10YR7/3) 内面 }	精良		ほぼ 良好
2	土師器	壺	- (2.3)	外面 } にぶい黄褐色(10YR5/3) 内面 } 灰黄褐色(10YR5/2)	精良	1mm以下の石英・ 辰石を含む。	良好
3	土師器	壺	- (2.2)	外面 } にぶい褐色(7.5YR7/3) 内面 } 灰黄褐色(10YR6/2)	普通	2mm程度の石英を 含む。	良好
4	土師器	壺	- (2.3)	外面 } 灰黄褐色(10YR6/2) 内面 } にぶい黄褐色(10YR6/3)	粗い	4mm以下の石英を 含む。	ほぼ 良好
5	土師器	壺	- (3.0)	外面 } 灰黄色(2.5Y6/2) 内面 } にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	1mm以下の石英・ 2mm程度の褐色鉱 物を含む。	良好
6	土師器	壺	- (2.7)	外面 } にぶい褐色(7.5YR6/3) 内面 } にぶい褐色(7.5YR7/3)	普通	2mm以下の石英を 含む。	ほぼ 良好
7	土師器	壺	- (2.1)	外面 } 淡黄色(2.5Y8/3) 内面 }	良好	1.5mm以下の砂粒 を少量含む。	ほぼ 良好
8	土師器	壺	- (2.1)	外面 } にぶい褐色(7.5YR6/3) 内面 } にぶい褐色(7.5YR7/3)	普通	2mm以下の石英を 含む。	良好
9	土師器	壺	15.2 (2.2)	外面 } にぶい褐色(7.5YR6/3) 内面 } にぶい褐色(7.5YR7/4)	良好	1mm程度の石英・ 辰石の砂粒を含む。	良好
10	土師器	壺	- (3.0)	外面 } にぶい黄褐色(10YR7/2) 内面 }	良好	1mm以下の石英を 多く含む。	ほぼ 良好
11	土師器	壺	- (2.4)	外面 } にぶい褐色(5YR6/3) 内面 }	精良	5mm以下の石英を 含む。	良好
12	土師器	壺	- (2.2)	外面 } にぶい褐色(7.5YR7/4) 内面 }	普通	1mm以下の石英を 含む。	良好
13	土師器	壺	- (2.6)	外面 } にぶい褐色(7.5YR7/4) 内面 } 明赤褐色(2.5YR5/6)	普通	2mm程度の石英を 含む。	良好
14	土師器	壺	- (2.5)	外面 } 褐色(7.5YR7/6) 内面 }	普通	2mm以下の石英を 含む。	ほぼ 良好
15	土師器	壺	- (3.6)	外面 } 褐色(10YR1, 7/1) 内面 } 緑灰色(7.5YR5/1)	良好	1mm程度の石英を 含む。	良好
16	土師器	壺	- (3.0)	外面 } にぶい褐色(5YR7/4) 内面 } にぶい褐色(5YR6/4)	良好	2mm以下の石英を 若干含む。	ほぼ 良好
17	土師器	壺	- (1.9)	外面 } にぶい黄褐色(10YR7/3) 内面 }	良好	1mm以下の砂粒 を少量含む。	良好
18	土師器	壺	- (3.9)	外面 } にぶい黄褐色(10YR7/3) 内面 } 浅黄褐色(10YR8/3)	良好	1mm程度の石英・ 1mm程度の赤褐色 鉱物(Fe ₂ O ₃)を含む。	ほぼ 良好
19	土師器	壺	- (3.2)	外面 } 淡黄色(2.5Y8/3) 内面 } にぶい黄褐色(10YR7/2)	粗い	2mm以下の石英を 含む。	普通
20	土師器	壺	- (2.9)	外面 } にぶい褐色(7.5YR6/3) 内面 }	粗い	2mm以下の石英・ 1mm以下の辰石を含む。	ほぼ 良好
21	土師器	壺	- (2.7)	外面 } 浅黄褐色(10YR8/3) 内面 }	良好	1mm程度の石英・ 赤色の鉱物を含む。	良好
22	土師器	壺	- (1.3)	外面 } 灰黄褐色(10YR6/2) 内面 } にぶい黄褐色(10YR7/2)	普通	2mm程度の石英を 含む。	良好
23	土師器	壺	- (4.6)	外面 } にぶい黄褐色(10YR7/3) 内面 }	普通	2mm以下の石英を 含む。	やや 甘い

教育学部附属幼稚園・山口小学校部分の調査（遺物）

24	弥生土器 壺	*5.2	(3.1)	外面-灰白色(10YR8/1) 内面-灰白色(10YR8/2)	良好	2mm程度の砂粒を若干含む	良好	
25	土師器 壺	*3.9	(2.9)	外面-灰白色(10YR8/2) 内面-浅黄褐色(10YR6/3)	良好	1mm程度の石英・灰石の砂粒を含む	良好	
26	土師器 壺	-	(4.9)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/3) 内面-灰色(7.5Y4/1)	普通	2mm以下の石英、赤色の塵を含む	良好	
27	土師器 壺	*10.0	(3.1)	外面-にぶい褐色(7.5YR7/4) 内面-にぶい褐色(7.5YR6/4)	精良	石英・灰石等の砂粒を含む	良好	
28	土師器 壺	8.9	(3.8)	外面-灰黄褐色(10YR5/2) 内面-灰黄褐色(10YR6/2)	精良	1mm以下の石英を若干含む	良好	
29	土師器 壺	11.5	(4.8)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/3) 内面-にぶい褐色(7.5YR7/4)	精良	1mm以下の石英を若干含む	良好	
30	土師器 壺	-	(4.9)	外面-褐色(7.5YR6/6) 内面-明赤褐色(5 YR5/6)	良好	1mm以下の石英を含む	良好	
31	土師器 壺	-	(3.6)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/2) 内面-	良好	2mm以下の石英を含む	良好	
32	土師器 壺	-	(3.0)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/4) 内面-	普通	1mm以下の長石を含む	やや甘い	
33	土師器 壺	-	(2.4)	外面-黄灰色(2.5Y5/1) 内面-にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	1mm以下の石英、塵を含み、高純度の黒色灰石	良好	
34	土師器 壺	-	(2.7)	外面-にぶい黄褐色(10YR6/3) 内面-	やや粗い	3mm以下の石英他かなり含む	良好	
35	土師器 高坏	-	(3.7)	外面-褐色(5 YR7/6) 内面-	普通	1mm程度の石英を若干含む	やや甘い	
36	土師器 高坏	-	(3.9)	外面-褐色(7.5YR7/6) 内面-	良好	1mm程度の石英を含む	良好	
37	土師器 高坏	-	(5.7)	外面-浅黄褐色(10YR8/3) 内面-褐色(7.5YR7/6)	良好	細砂を含む	やや甘い	外面黒灰あり
38	土師器 高坏	-	(1.9)	外面-にぶい褐色(7.5YR7/3) 内面-	良好	2mm以下の石英、1mm以下の灰石を含む	普通	
39	土師器 高坏	-	(3.4)	外面-にぶい褐色(5 YR7/3) 内面-にぶい褐色(5 YR7/4)	良好		やや甘い	
40	土師器 高坏	-	(3.4)	外面-褐色(7.5YR7/6) 内面-	精良		やや甘い	
41	土師器 高坏	-	(4.8)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/4) 内面-にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	2mm程度の石英を含む	良好	
42	土師器 高坏	-	(8.7)	外面-灰黄色(2.5Y6/2) 内面-灰色(7.5Y5/1)	良好	1mm程度の石英・灰石を含む	良好	
43	土師器 高坏	*9.9	(3.0)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/3) 内面-	良好	1mm以下の石英を含む	良好	
44	土師器 高坏	*11.1	(2.3)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/4) 内面-にぶい黄褐色(10YR6/3)	精良		良好	
45	土師器 高坏	*11.5	(1.2)	外面-褐色(5 YR7/6) 内面-	精良	細粒を含む	良好	
46	土師器 高坏	-	(2.1)	外面-にぶい褐色(7.5YR7/4) 内面-	普通	1.5mm以下の砂粒を含む	良好	
47	土師器 鉢	-	(3.3)	外面-にぶい褐色(7.5YR5/4) 内面-にぶい黄褐色(10YR7/3)	精良	不純物はほとんど含まない	良好	外面黒付着
48	土師器 鉢	12.3	(4.0)	外面-褐色(7.5YR5/1) 内面-	精良	石英、長石等の砂粒を含む	良好	
49	土師器 鉢	-	(3.0)	外面-灰色(5 Y4/1) 内面-	良好	1mm以下の長石を含む	良好	
50	土師器 鉢	-	(2.9)	外面-にぶい褐色(5 YR7/3) 内面-にぶい褐色(5 YR7/4)	精良		やや甘い	
51	土師器 鉢	-	(4.2)	外面-灰黄色(2.5Y6/2) 内面-灰黄色(2.5Y7/2)	精良	1mm以下の石英・灰石を若干含む	良好	
52	土師器 鉢	-	(3.3)	外面-黄灰色(2.5Y6/1) 内面-灰色(7.5Y5/1)	普通	2mm以下の石英を含む	良好	

第10トレンチ (Fig.13)

1	土師器 壺	-	(2.6)	外面-褐色(5 YR6/6) 内面-浅黄褐色(10YR8/3)	良好	1mm程度の石英を若干含む	普通	
2	土師器 壺	-	(3.4)	外面-にぶい褐色(7.5YR7/4) 内面-にぶい褐色(7.5YR7/3)	良好	1mm以下の石英を若干含む	良好	
3	土師器 器台	10.7	(3.2)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/3) 内面-にぶい黄褐色(10YR7/2)	普通	2mm以下の石英、1mm以下の長石を含む	良好	外面片塵

No	器種	長さ (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
----	----	---------	----------	----------	--------	----	----

第9トレンチ第5・6・7層 (Fig.12)

53	銅片	(1.6)	1.7	0.6	(1.2)	黒曜石	
54	銅片	(2.8)	3.4	0.9	(7.1)	黒曜石	

3 小 結

(1) 出土遺物と検出遺構について

第1・3・7・9・10～12各トレンチで遺物が出土した。各トレンチとも破片ばかりであるが、特に第9トレンチでは甕、壺、高坏、埴など器形のわかるほぼ同時期の資料が含まれており良好な資料である。なお、出土遺物のなかには磨滅の少ないものが含まれており、比較的近傍から流入したものと考えられる。

甕は、口縁部が外彎して開くものが多いが、内彎して開く口縁部をもち、端部がやや肥厚して水平もしくは水平に近い面をもつもの(9)がある。端部に面をもつものは他に2点ある。(6・7)。また、口頸部の退化現象によって、口頸部の屈曲が極めて弱く、外面を突帯状にわずかに膨らませただけの短い複合口縁をもつもの(19・20)がある。胴部外面にタタキがみられるものは極めて少なく、外面は刷毛ないしナデ仕上げで、内面はヘラケズリを行なうものが多い。前者は外来要素の強い布留型の甕で、下東遺跡KP-11、第IV地区KSP、西遺跡第2号溝等で出土例が知られ、布留式土器の新しい段階に位置づけられよう。後者は在地系の甕で、周防部に特徴的な複合口縁をもつ甕の終末期のものと考えられ、本学の吉田構内遺跡保存地区第12・13号竪穴住居跡に類品がみられる。現在までのところ、県内では両者の良好な共伴資料は得られていないが、下東遺跡KP-11出土例のように両者の折衷形態と考えられるものがあり、本校内の調査によって畿内布留式土器の流入、変化の過程と、それに合呼応する複合口縁をもつ甕の退化、消長の過程が山口盆地内で確認される日は近い。

壺は、口縁部が直線もしくは内彎して長くのびる小型丸底壺と考えられるものが多いが、口縁部と体部の大きさの比率、体部の器面調整は明らかでない。

高坏は、坏部の深さ、上半部と下半部の比率は明らかでないが、明瞭な稜をもち、下半部は内彎して立ち上がる。上半部は緩やかに開くものと思われ、口縁端部はわずかに外反する。脚柱部は坏部との接合部付近から開き、やや膨らみぞみのものと直線的に下方に開くものがある。脚裾部はそのまま開くものと屈曲するものがある。

埴は、体部が内彎して開くもので、口縁端部がわずかに外反するものもある。48は西遺跡第2号溝出土例のように脚台をもつものかもしれない。

なお、第10トレンチからは小型の丸底壺、鉢、器台の小型三種土器のうち直線的に伸びる浅い皿状の受部をもつ器台が出土している。

以上のように、第9トレンチ第5～7層出土遺物は一部にやや遅るものもあるが、全般

的に畿内布留式土器の新段階に位置づけられ、5世紀前半頃の時期を与えることができよう。なお、この段階には畿内の一部を除いて初期須恵器が出現する時期にあたるが、今回の調査では出土していない。

明確な遺構は今回の調査では検出していない。しかし、幼稚園敷地部分の第3トレンチでは、遺構と思われる新旧二時期の掘り越みを確認した。切り合い関係にあり、新しい掘り込みから室町時代の土師器が出土している。また、同第1トレンチでは遺物包含層が不規則に落ち込み、土自体にもしまりがなくことから遺構の存在を予想させるが、調査面積が狭いため詳細は不明で、今後の調査を待って結論を出したい。

(2) 埋蔵文化財遺存状況と今後の方針

昭和58年度の調査では、溝状遺構、竪穴住居跡および遺物包含層を検出した。上述したように、校舎敷地部分に比べ一段低くなっている小学校のグラウンドを中心に実施したもので、その造成状況から校舎敷地部分では遺構、遺物包含層が過去に存在していたとしてもすでに削平されているものと考えられていた。今回の調査範囲は部分的ではあったが、その予想を大きく覆す結果となった。

土層観察が断片的であるため、はっきりした旧地形等の全体像はつかみかねるが、幼稚園敷地部分の第2トレンチでは砂礫、小学校敷地部分第12・13・14トレンチでは砂礫と砂質土の互層となる堆積が認められた。昭和58年度に調査した幼稚園敷地部分の第3トレンチ北西約25mに位置するHトレンチでも砂礫の堆積が確認されており、幼稚園・小学校敷地部分の東端および中央部には北から南に貫流すると思われる河川が存在する可能性がある。今回の調査では遺物が出土しておらず、時期は定かでないが、今後、その規模、時期、流路方向を把握する必要がある。

また、小学校の校舎敷地部分はほぼ平坦に造成されているが、第8・9・15トレンチでは周辺の各トレンチに比較して地山がかなり下位に存在し、埋め土も特に厚く堆積している。小学校の南東端部およびグラウンドとの段差付近の地域は、丘陵の尾根がそれぞれ南に下降していくあたりに位置しているものと考えられ、布留式土器の終末期の遺物が出土した第9トレンチの遺物包含層、昭和58年度の調査で認められた溝状遺構はこうした谷あいでも検出されたものと推察される。

遺物は、前回実施したグラウンド部分の調査で、溝状遺構から庄内式土器の新段階の遺物が多量に出土しているが、今回の調査ではその段階まで遡る資料はない。また、布留式

併行の竪穴住居跡1棟も検出されているが、広義の布留式土器の範疇で取り扱っている。第9トレンチの一括土器群中には、竪穴住居跡出土遺物と同形態のものが含まれていることから、小学校敷地部分には庄内式新段階および布留式新段階の、少なくとも新旧二時期の遺物包含層もしくは遺構が存在する可能性が提起された。

今回の調査は幼稚園・小学校敷地内全面について実施したものではないが、本構内における今後の施設、環境整備に関する有意義な資料を提供した。とくに、遺物包含層ないしは遺構と考えられる掘り込みが検出されている第1・3トレンチ周辺の幼稚園中央部付近、第9・10トレンチ周辺の小学校南東部では遺物包含層の分布範囲の把握を含めた工事に先立つ事前の調査が必要である。また、小学校グラウンドで認められた竪穴住居跡の検出面と同様な、安定した地山も数箇所のトレンチで確認されていることから、遺構が存在する可能性は十分考えられ、立会調査等によってその存否を確認する必要がある。(河村)

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報目」, 1985年)。この報告当時は、標高を、このBMを基準とした相対値であらわしていた。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校電柱移設に伴う立会調査」(本書第4章第4節, 1987年)。
- 3) 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「下東遺跡」(「下東遺跡・萩時遺跡」, 山口県埋蔵文化財調査報告第30集, 1975年)。
- 4) 山口市教育委員会「西遺跡」(山口市埋蔵文化財調査報告第21集, 1986年)。

第3節 教育学部附属山口中学校部分の調査

1 層位・遺構

全8ヵ所にトレンチを設定。調査順にトレンチ番号をふった。調査総面積は約20㎡で、予定される管路掘削総面積の約5.7%にあたる。附属山口中学校の敷地は、標高はほぼ28.2～28.4mに造成されている。北端のプール部分と東端のテニスコート部分がやや高くなり、西の敷地外は、脇の市道が一段低く、白石小学校がさらにもう一段低くなっている。

第1トレンチ 0.8m×2.5mのトレンチ。厚さ40cmの置土直下がオリブ灰色シルトの地山で、以下、同色系統の砂・粘質土の互層となる。ただし、トレンチ東半の深掘り部分で地山を削り込んだような落ち込みがみられ、そこに黄系統の粘質土が3層堆積し、上に灰オリブの砂礫がかぶさっている。断言はできないが、河川跡の埋土の可能性はある。遺物は検出されない。湧水するが、どの層からかは確認していない。

第2トレンチ 第1トレンチの西約15m、1m×2.5mのトレンチ。厚さ約40cmの置土直下の地山：灰オリブ色シルトは、第1トレンチ第7層に対応すると思われるが、以下は黄褐色砂礫の単一層となり、第1トレンチと異なる。遺構・遺物は検出されない。

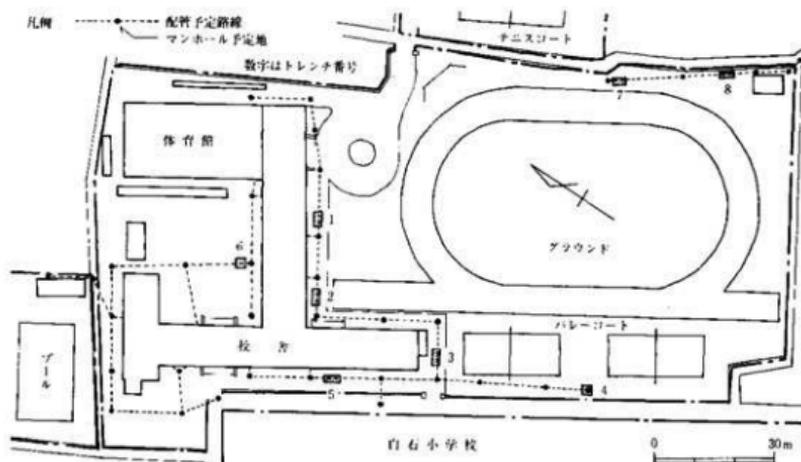


Fig. 14 トレンチ設定図

第3トレンチ 1m×2.5mを設定したが、調査は東半部にとどめた。北端部は既設の配管埋設時に攪乱を受けている。厚さ70cmの置土の下に旧耕作土が残存、その直下に3層の遺物包含層が厚さ70～80cmにわたって堆積し、湧水する砂礫層の地山にいたる。

遺物包含層は、自然木を含む湿気の高い粘質土で、河川の氾濫等に起因する二次堆積層と思われるため遺物は一括して取り上げた。石織2本のほか、弥生土器・土師器（中世中心）・須恵器・瓦質土器・陶器・磁器がある。遺構は検出されなかった。

第4トレンチ グラウンドの西端、1m×2.5mのトレンチ。30cm前後の薄い置土の下に2層の客土があり、第4層：暗緑灰色粘土の地山にいたる。第4層以下は湧水し、遺構は検出されない。2層の客土のうち下層の方は70～80cmもの厚さがあり、第5トレンチ第4層と同一のものと思われる遺物包含層をブロック状に含んでいた。このブロックから弥生土器・土師器・磁器のほか、黒曜石剥片が出土している。

昭和60年度、隣接するバレーボールコート¹⁾の支柱埋設に伴う調査の際にも、安定した地山土と思われる黄褐色粘質土、そして湿地¹⁾の地山上である青灰色粘質土を、ともにブロック状に含む攪乱土が観察されていることから、グラウンド西寄りの部分は造成時に周辺地域の遺物包含層・地山を削って運びこみ、盛って平地にしたものと思われる。

第5トレンチ 校舎の西端、1m×2.5mのトレンチ。置土は厚さ30cmと薄く、その直下に、削平著しいが客土と思われる第3層：黄褐色粘質土がトレンチ南半部にのみ残っている。この層の上面で枕例が検出されたが、いつの時期のものか明らかでない。第3層の下には黒褐色系統の庄内式併行期の遺物包含層が3層、厚さ30cmにわたって堆積していた。分層した3層の中では、最上層の第4層：黒褐色粘質土が最も遺物包含層が多い。第5層：暗褐色シルトは南半部だけの堆積で、掘削時には第4層に含めていた。第6層は黒色の砂礫となり遺物も少なくなる。

トレンチ南西端部では、これらの3層の遺物包含層の下に、さらに縄文土器のみを包含する第7層：灰黄褐色粗砂を確認した。以下、第13層：暗灰黄色砂礫の地山まで基本的には砂礫が続く。トレンチ北端部で地山上面に、植物遺体を含む第9・10層：黒褐色粗砂と有機土の堆積がみられ、縄文土器を検出したが、どちらの層からの出土か明らかでない。

遺物は、第3層から弥生土器・土師器・須恵器、第4～6層から弥生土器・古式土師器、第7層から縄文土器が出土した。第9・10層でも植物遺体に加えて縄文土器が出土している。第7層以下は堆積状況が不安定であり、谷状の窪地への流れ込みである可能性が高いが、縄文土器のみを出土することから、周辺に遺存のよい縄文時代の遺物包含層がある

第7トレンチ グラウンド東端中央部、1.2m×2.5mのトレンチ。トレンチ東壁に沿って、礫を敷きつめた幅30～40cmの暗渠が走る。置土はやや薄く厚さ30～40cm、その下の第2層は山土らしいものが混じり、客土の可能性はある。以下、堆積層はすべて黄色系統で、第6層までシルト層、第7層は礫を含む砂質土層となる。顕著な遺構・遺物なし。

第8トレンチ 第7トレンチの南約25m、1.2m×2.5mのトレンチ。トレンチ中央を南北に、第7トレンチのものにつながると思われる暗渠が走っている。厚さ50～60cmの置土直下がシルトの地山で、地山の上面は削平・攪乱が著しく、深掘りはトレンチ中央部で行なうこととなった。以下、基本層位は第7トレンチと同じで、第7層下に褐色礫層の第8層が認められた。土層の堆積は緩やかに南へ向かって下がっている。遺物は、暗渠埋土から近世の磁器片が出土したのみで、顕著な遺構は検出されない。

2 遺物

第3トレンチ出土遺物 (Fig. 16, PL. 10)

遺物は第4・5・6層から出土するが、層位の項で述べたとおり一括して取り上げた。弥生土器・古式土師器と思われる小片、須恵器、中世土師器、瓦質土器、陶器、磁器がある。炭化木材も検出された。主体となるのは中世土師器である。

1～3は土師器。1は坏口縁部で、同様の破片が他にもある。口縁は底部付近よりも厚くなり、緩く外反して尖り気味に終わる。外面の口縁下を強く横ナデするが、調整にロクロを使わない。加えて、厚手で胎土に砂粒をほとんど含まず、色調に赤みを帯びるなど、大内氏館跡B式土師器とされているものの特徴を備える。このB式土師器は大内氏の館継²⁾統期のなかでは後半期に出現し、県下では大内氏関連の遺跡でしか出土の報告をみない³⁾。他に土師器の坏、皿の口縁部はかなり出土した。それらは、口縁端部に面をもつものが若干あり、端部が丸く終わるものが残りのほとんどを占めるが、すべてロクロによる整形痕を残し、明るく焼き上げた薄手のものである。

2・3は坏または皿の底部。底部片は図示した以外にもかなりあるが、2のように体部が一旦上方に立ち上がってから外に開くようなタイプはこの資料のみで、3のように底部からすぐに外に開く器形がほとんどである。底部と体部の境の稜がやや甘くなったものも若干みられる。3は、内外面に赤色顔料の痕跡が認められる。

4・5は須恵器。4は坏口縁部で、端部はやや尖り気味に終わる。5は長頸壺の底部と思われ、内面の同心円の当て具痕はナデによりほぼ消えている。

第7トレンチ グラウンド東端中央部、1.2m×2.5mのトレンチ。トレンチ東壁に沿って、礫を敷きつめた幅30～40cmの暗渠が走る。置土はやや薄く厚さ30～40cm、その下の第2層は山土らしいものが混じり、客土の可能性はある。以下、堆積層はすべて黄色系統で、第6層までシルト層、第7層は礫を含む砂質土層となる。顕著な遺構・遺物なし。

第8トレンチ 第7トレンチの南約25m、1.2m×2.5mのトレンチ。トレンチ中央を南北に、第7トレンチのものにつながると思われる暗渠が走っている。厚さ50～60cmの置土直下がシルトの地山で、地山の上面は削平・攪乱が著しく、深掘りはトレンチ中央部で行なうこととなった。以下、基本層位は第7トレンチと同じで、第7層下に褐色礫層の第8層が認められた。土層の堆積は緩やかに南へ向かって下がっている。遺物は、暗渠埋土から近世の磁器片が出土したのみで、顕著な遺構は検出されない。

2 遺物

第3トレンチ出土遺物 (Fig. 16, PL. 10)

遺物は第4・5・6層から出土するが、層位の項で述べたとおり一括して取り上げた。弥生土器・古式土師器と思われる小片、須恵器、中世土師器、瓦質土器、陶器、磁器がある。炭化木材も検出された。主体となるのは中世土師器である。

1～3は土師器。1は坏口縁部で、同様の破片が他にもある。口縁は底部付近よりも厚くなり、緩く外反して尖り気味に終わる。外面の口縁下を強く横ナデするが、調整にロクロを使わない。加えて、厚手で胎土に砂粒をほとんど含まず、色調に赤みを帯びるなど、大内氏館跡B式土師器とされているものの特徴を備える。このB式土師器は大内氏の館継²⁾統期のなかでは後半期に出現し、県下では大内氏関連の遺跡でしか出土の報告をみない³⁾。他に土師器の坏、皿の口縁部はかなり出土した。それらは、口縁端部に面をもつものが若干あり、端部が丸く終わるものが残りのほとんどを占めるが、すべてロクロによる整形痕を残し、明るく焼き上げた薄手のものである。

2・3は坏または皿の底部。底部片は図示した以外にもかなりあるが、2のように体部が一旦上方に立ち上がってから外に開くようなタイプはこの資料のみで、3のように底部からすぐに外に開く器形がほとんどである。底部と体部の境の稜がやや甘くなったものも若干みられる。3は、内外面に赤色顔料の痕跡が認められる。

4・5は須恵器。4は坏口縁部で、端部はやや尖り気味に終わる。5は長頸壺の底部と思われ、内面の同心円の当て具痕はナデによりほぼ消えている。

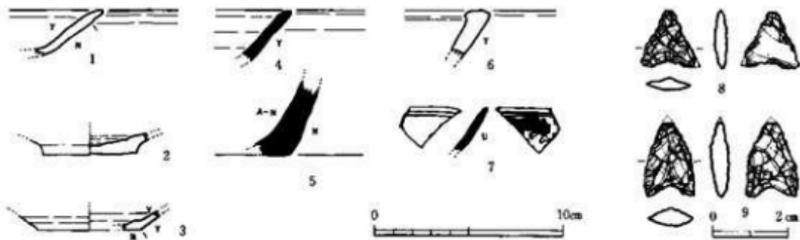


Fig. 16 第3トレンチ出土遺物実測図

6は瓦質土器の鍋口縁部。端部は肥厚して内側にやや突出し、上面は水平となる。瓦質土器には、他に格子タタキが外面に施される破片が数点ある。

7は近世の染付磁器碗の口縁部で、内外両面に2条の圏線、外面には濃淡を使い分けて唐草文を描く。陶器片もあるが図化できない。

8・9は黒曜石製の石鏃。8は挟りが浅く、若干基部が広がるもので、素材の腹面を大きく残す剥片鏃である。片脚部先端欠損。先端部は磨滅によるものであろうか、丸みを帯びる。9は姫島産の石材を用い、比較的厚みをもつもので、先端部を欠損する。挟りは、深いとはいえないがしっかりしている。

第4トレンチ出土遺物 (Fig. 17, PL. 10)

遺物はすべて第3層内に混じる黒褐色粘質土ブロックから出土。主体は弥生時代終末～古墳時代初頭と思われる土器片であるが、やや遡る時期の土器底部や剥片が認められた。また降るものとして、端面に面をもつ歴史時代の土師器口縁部や染付磁器片が出土しているが、図化できない。

1は弥生土器甕の底部。大きな平底と思われ、内面にはコゲが厚く付着。弥生時代前期に遡る可能性がある。2は土師器かと思われる破片。外面には、先端の平たい楕円を使って一単位4条の波状文を施す。内面のヘラケズリには二方向がある。内面ヘラケズリの土器肩部に波状文を施す例は、庄内・布留式併行期に各地でしばしばみられる。

3は黒曜石の剥片で、腹面には打面・打点・打瘤が残り、背面は一部礫面を残すが上下両方向からの剥離を認める。

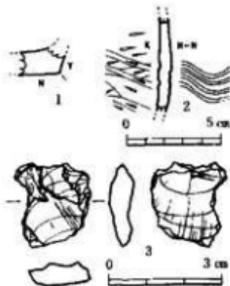


Fig. 17 第4トレンチ出土遺物実測図

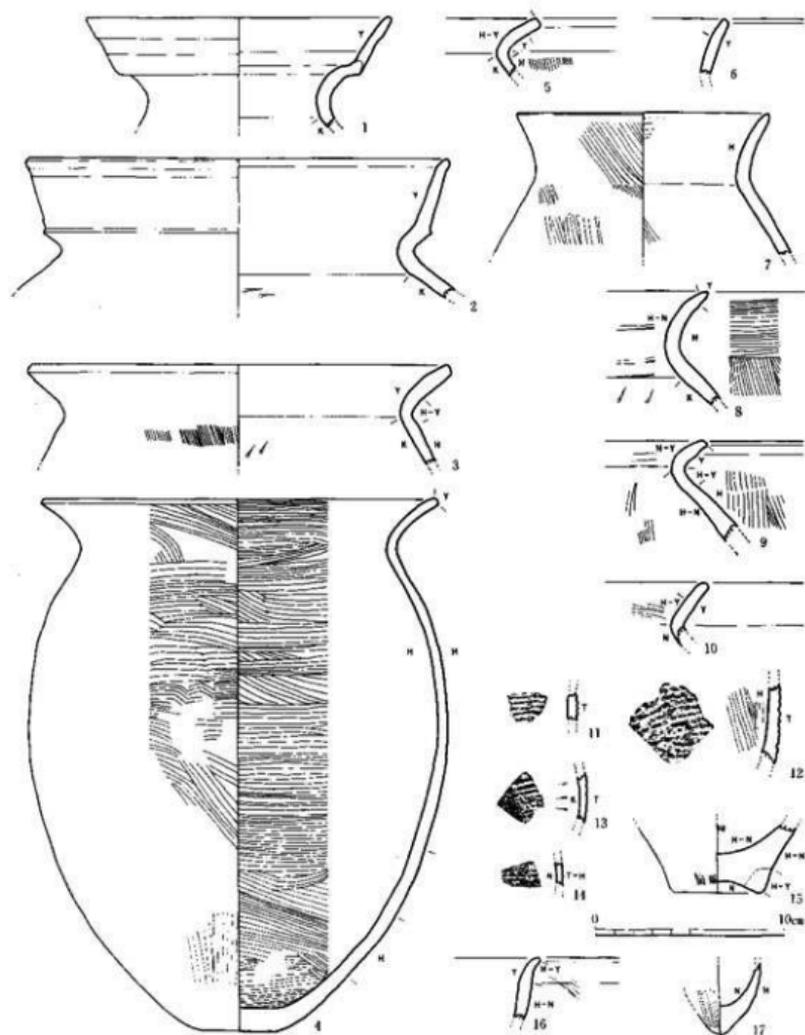


Fig. 18 第5トレンチ第4・5・6層出土遺物実測図(1)

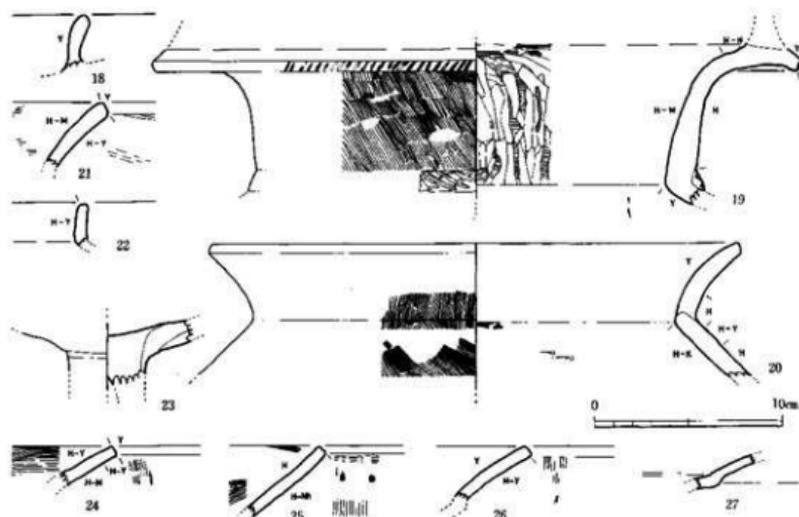


Fig. 19 第5トレンチ第4・5・6層出土遺物実測図（2）

第5トレンチ出土遺物（Fig. 18～21, PL. 10・11）

遺物は、第3・4・5・6・7・9・10層からそれぞれ出土した。

各土と思われる第3層からは、下の第4～6に対応すると思われる土器小片若干（壺・甕・高坏など。顕著に刷毛目が残るが外面に赤色顔料を塗布する小片あり）のほか、糸切り底の土師器底部、古代と思われる須恵器片が出土しているが、岡化しえない。

第4・5・6層出土遺物（Fig. 18・19）

第4・5層の遺物は、取り上げの段階で混合していると思われ、また第4・6層間の遺物が接合することから、第4～6層はここでは一括して取り扱うこととする。ほとんどが庄内式併行期と思われる土器で、壺・鉢・壺・高坏・有翼支脚がある。他の時期のものとしては、弥生時代中期初頭の甕が1点ある程度である。植物遺体も検出されている。

1～14は甕。1・2は明らかに山陰の影響を受けたと思われるものである。1は比較的頭が窄まり、口縁端部が尖るもので、風化しているが、外面はほぼ全面に煤の付着がみられる。2は大型。口縁端部はやや尖り気味ながら丸くおさめ、立ち上がりの段は上向きで、1より若干後出するかもと思われる。1に比べて焼成がよく、つくりが精巧で、搬入品の

可能性がある。煤の付着がなく、壺かもしれない。双方とも肩部内面は横方向のヘラケズリ、他はナデ仕上げで文様は認められない。花谷めくむ氏編年の鍵尾A区5号墓式⁴⁾。

甕には、赤・黄色系統の軟質焼成のものと、黄灰色の硬質焼成のものとがある。

「く」の字に曲がる甕の口縁部（3～10）は、端部が面をもつもの（3～6）と、尖り気味になるもの（7～10）とに分けられる。4は反転して完形復原できたもので、器壁は薄く、内外面とも刷毛目仕上げ。底部付近は二次加熱による赤変が著しい。風化の著しい3・7を除いては、外面に多量の煤の付着が観察できる。

甕の胴部外面には、ほとんどの個体が刷毛目を顕著に残す。内面は刷毛目または刷毛目後ナデ仕上げのものほか、ヘラケズリのものが多くみられる。3・8のヘラケズリは縦、5は横方向。外面にタタキの認められる破片がある（11～14）が、小片のため方向は不明。13・14は薄手で非常に硬質。搬入品であろう。14はタタキの後刷毛目を施す。

甕の底部は、完形になる4で確認できた小さな平底のほかは、弥生時代中期初頭のものと思われる上げ底のもの（15）が確認できたにすぎない。おそらく不安定な平底または丸底になると考えられるものがあるが、破片のため底部と断定できない。

鉢と思われるものには16・17がある。16は短く外反する口縁片で、ほぼ直立する。17は尖底の底部片で、小型の鉢になるものであろう。

18～22は壺。複合口縁をもつもの（18・19）と、「く」の字に外反する口縁をもつもの（20・21）とがある。18は口縁の立ち上がり部分で、精巧なつくり。19は立ち上がり部分と肩部以下を欠く。頸部はほぼ直立し、肩部との境の突帯に斜格子の刻みを入れ、立ち上りの段の端部には刷毛目原体の小口を使って刻みを施す。内面は、ミガキの及ばなかった箇所に残る刷毛目が目立つ。20は外面に非常に繊細な刷毛目が残し、肩部内面は横方向のヘラケズリ。胎土が脆い。21は内面に横方向のミガキが施され、刷毛目がほぼ消える。硬質焼成。22は直口する短頸壺と思われる。端部は丸みを帯びながらもやや面をもつ。

壺には他に、内面粗く、外面丁寧にミガキをかけているが、外面には全体に煤の付着する底部近くの破片などがある。

23～27は高坏。23は坏底部から脚柱部にかけての破片で、脚柱は差し込み式。不器用なつくりで、器壁の厚みが場所によって全く違う。凶化できる口縁（24～26）はすべて端部に平坦面をもつ。25は2種類の原体で内外面に刷毛目を施した後、外面に縦方向のヘラナデを行なう。27の坏の屈曲はしっかりしているが、胎土・焼成が悪い。

凶化しなかったが、他に有翼支脚の翼部の破片が出土している（P.L. 11-28）。

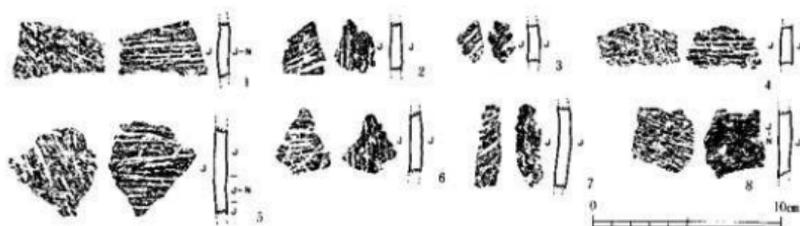


Fig. 20 第5トレンチ第7層出土遺物実測図

述べてきたとおり、第4～6層出土の遺物は、山陰系の複合口縁甕の型式、また山本一朗氏編年の弥生時代終末期にあたる防長10式に特徴的な複合口縁壺・有翼支脚の存在⁵⁾、そしてタタキのある甕の存在などから、ほぼ庄内式併行期のものとみてよいと思われる。

第7層出土遺物（Fig. 20）

縄文土器のみが出土した。時期の断定はできかねるが、おそらく後・晩期であろう。

1～7は胎土・色調・焼成・調整ともにたいへん似通っており、同一個体かと思われるが接合しない。固化しなかったが同様の小片がもう1片ある。器形などが窺える破片はない。条痕の方向は、破片ばかりのため断定しかねるが、おそらく外面は縦および斜方向、内面は横方向で、外面は条痕の後ナデている箇所もある。内外面で条痕の工具が違う。3は内面にコゲらしいものが付着している。

8は、外面は条痕文を施すが、内面は条痕の後丁寧なナデで条痕を消していることが1～7との大きな違いである。また条痕自体が1～7のものより細かく、方向が内外面とも同じであることも差のひとつとなろう。

第9・10層出土遺物（Fig. 21）

縄文土器と植物遺体が出土した。

1は胎土に滑石を含む疑いがある。内面条痕後粗いナデ、外面はナデしか観察できない。2は第7層出土の1～7と色調・外面の調整がよく似ているが、内面は丁寧なナデである。1の胎土からみれば、縄文時代前期・中期のものである可能性があり、やや不安が残るが、一応、第7層と大差ない時期のものとして捉えておきたい。

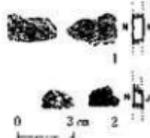


Fig. 21 第5トレンチ第9・10層出土遺物実測図

なお植物遺体は、第4・5層が樹木の樹皮及び木質片の細片、第9層は樹木の樹皮片、木質片、葉の基部片及び種子の果皮の細片及び微

片であった。種類と個体数について、以下農学部講師の宇都宮宏氏の鑑定結果を報告する。

これらの植物遺体を丁寧に水洗して、ろ紙上に置き、樹皮、葉及び果皮はそのまま自然乾燥させて、解剖顕微鏡で表面構造を観察した。また木質については、木口、征目、板目の試料切片を作製して、生物顕微鏡で鏡検し、植物の種類を特定した。

第9層からはアラカシ (*Quercus glauca* Thunb) 173片 (樹皮・木質172片、葉片1)、コナラ (*Quercus serrate* Thunb) 11片 (樹皮・木質)、クヌギ (*Quercus acutissima* Carr) 15片 (樹皮・木質13片、堅果の果皮2)、イヌブナ (*Fagus japonica* Maxim) 17片 (樹皮・木質)、スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don) 3片 (木質)、また第4・5層からはイヌブナ7片 (木質) であった。ブナ科の樹木が優先しており、アラカシは樹皮の観察からみて、比較的大きい木と考えられた。また気候の変動による樹種の変化はないものと考えられる。

Tab. 3 出土遺物観察表

注量 () は現存値

№	器種	口径 *口径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
第3トレンチ (Fig.16)							
1	土師器 坏	-	(2.5)	外面 内面 ぶい黄褐色 (10YR7/2)	精良	砂粒はほとんど含まない。	良好
2	土師器 坏小皿	*5.0	(1.1)	外面 内面 灰白色 (2.5YR/2)	良好	1mm程度の砂粒を若干含む。	やや甘い
3	土師器 坏小皿	*5.5	(1.0)	外面 内面 淡黄色 (2.5Y8/3)	精良	1mm以下の砂粒を若干含む。	360℃ 良 質 内外面丹塗
4	須恵器 坏	-	(2.6)	外面 内面 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1)	良好	1mm以下の石英・長石を含む。	普通
5	須恵器 長頸壺	-	(4.0)	外面 内面 灰黄色 (2.5Y7/2) 灰白色 (2.5Y7/1)	やや悪い	1mm程度の石英・長石を多く含む。	良好
6	瓦質土器 鍋か	-	(2.3)	外面 内面 灰色 (5 Y5/1) 淡黄色 (2.5Y8/3) 素地 灰白色 (5GY8/1)	良好	1mm以下の砂粒を若干含む。	普通
7	磁器 碗	-	(2.4)	釉 やや青味を帯びた透明	精良		良好
第4トレンチ (Fig.17)							
1	甕	-	(1.4)	外面 内面 ぶい褐色 (2.5YR6/4) コゲの付着のため不明	良好	1mm程度の石英・1mm以下の長石を含む。	360℃ 良 質 二次加熱により赤褐色 しい内面コゲ付着
2	甕	-	(5.0)	外面 内面 灰黄褐色 (10YR6/2) 灰黄色 (2.5Y6/2)	良好	2mm以下の石英・1mm以下の長石・鉄屑等を含む。	360℃ 良 質
第5トレンチ第4・5・6層 (Fig.18・19, PL.11)							
1	甕	16.0	(5.8)	外面 内面 淡黄褐色 (7.5YR8/3) 浅黄褐色 (7.5YR8/4)	良好	1mm程度の石英・長石を含む。	やや甘い 360℃ 良 質 外面煤付着
1	甕	22.0	(7.3)	外面 内面 灰黄色 (2.5Y7/2) 灰黄色 (2.5Y6/2)	精良		360℃ 良 質
3	甕	21.9	(5.2)	外面 内面 褐色 (7.5YR7/6) ぶい褐色 (7.5YR7/4)	良好	1mm程度の石英・長石を含む。	普通
4	甕	20.7 *4.0	28.2	外面 内面 ぶい黄褐色 (10YR5/3) 灰黄褐色 (10YR5/2)	普通	2mm以下の石英・1mm以下の長石を含む。	360℃ 良 質 外面煤付着
5	甕	-	(3.1)	外面 内面 灰褐色 (5 YK5/2) 灰色 (5 Y4/1)	普通	1-3mmの石英・長石を含む。	良好
6	甕	-	(3.0)	外面 内面 灰黄褐色 (10YR6/2)	良好	石英を若干含む。	甘い 外面煤付着
7	甕	13.2	(7.5)	外面 内面 褐色 (7.5YR7/6) ぶい褐色 (7.5YR7/4)	良好	1mm程度の石英・長石を含む。	甘い
8	甕	-	(6.0)	外面 内面 ぶい黄褐色 (10YR6/3) ぶい黄褐色 (10YR7/3)	良好	2mm以下の石英を若干含む。	360℃ 良 質 外面煤付着
9	甕	-	(5.4)	外面 内面 灰黄褐色 (10YR6/2) 灰黄色 (2.5Y7/2)	良好	2mm以下の石英・1mm程度の長石を含む。	360℃ 良 質

教育学部附属山口中学校部分の調査 (遺物)

10	壺	—	(3.4)	外面 内面	灰白色(10YR7/1)	良好	2mm程度の石英・1mm程度の長石を1含む	3mm程度	外面煤付着
11	壺	—	(1.5)	外面 内面	にぶい黄褐色(10YR7/3)	やや粗い	2mm以下の石英・長石をかなり含む	3mm程度	外面煤付着
12	壺	—	(4.3)	外面 内面	にぶい黄褐色(10YR7/3) 灰黄褐色(10YR6/2)	やや粗い	2mm以下の石英・長石をかなり含む	3mm程度	外面煤付着
13	壺	—	(2.6)	外面 内面	にぶい黄褐色(10YR7/3)	精良	1mm以下の石英・長石を含む	3mm程度	
14	壺	—	(1.1)	外面 内面	にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	1mm以下の石英・長石を含む	3mm程度	外面煤付着
15	弥生土器 壺	*4.4	(3.5)	外面 内面	黄灰色(2.5Y6/1) 黄灰色(2.5Y5/1)	やや粗い	1-2mmの石英・長石・黒炭を多く含む	3mm程度	
16	鉢	—	(3.3)	外面 内面	灰白色(2.5Y8/2) 灰色(7.5Y5/1)	精良	1mm程度の石英・長石を含む	3mm程度	
17	鉢	—	(3.3)	外面 内面	にぶい黄褐色(10YR7/2)	精良	1mm程度の石英を若干含む	3mm程度	
18	壺	—	(3.0)	外面 内面	灰白色(10YR7/1) にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	2mm程度の石英・1mm程度の長石を若干含む	3mm程度	
19	壺	—	(8.5)	外面 内面	にぶい黄褐色(10YR7/2) 灰褐色(7.5YR4/2)	精良	1mm程度の石英・長石を含む	3mm程度	
20	壺	27.8	(7.1)	外面 内面	にぶい黄褐色(10YR7/4)	良好	1mm程度の石英・長石を含む	3mm程度	
21	壺	—	(3.3)	外面 内面	にぶい黄褐色(10YR7/3) にぶい黄褐色(10YR7/2)	精良	0.5mm程度の石英・長石・黒炭を含む	3mm程度	
22	壺	—	(2.3)	外面 内面	黄褐色(10YR6/3) 灰白色(10YR8/2)	良好	1mm程度の石英・長石を若干含む	3mm程度	
23	高坏	—	(3.5)	外面 内面	にぶい黄褐色(10YR7/2)	粗い	4mm以下の石英・長石・片岩等をかなり含む	3mm程度	良好
24	高坏	—	(2.0)	外面 内面	にぶい黄褐色(10YR6/3)	精良	1mm程度の石英・1mm以下の長石を若干含む	3mm程度	良好
25	高坏	—	(3.6)	外面 内面	黒色(7.5Y2/1) 灰黄色(2.5Y7/2)	良好	2mm以下の石英・長石を含む	3mm程度	
26	高坏	—	(2.8)	外面 内面	灰黄色(2.5Y7/2) 灰白色(2.5Y6/2)	やや粗い	1-2mmの石英・1mm程度の長石を多量に含む	3mm程度	良好
27	高坏	—	(1.8)	外面 内面	にぶい黄褐色(7.5YR7/3)	粗い	1-2mm程度の石英・1mm程度の長石をかなり含む	3mm程度	粗い
28	有翼支脚	—	—		灰黄色(2.5Y6/2)	普通	2mm以下の石英・1mm以下の長石を含む	3mm程度	良好

第5トレンチ 第7層 (Fig.20)

1	縄文土器	—	(3.1)	外面 内面	灰黄色(2.5Y6/2) 黒色(5Y2/1)	精良	1mm以下の石英を含む	3mm程度	良好
2	縄文土器	—	(2.6)	外面 内面	黒褐色(10YR3/1) 黒色(10YR2/1)	精良	1mm以下の石英・長石を含む	3mm程度	良好
3	縄文土器	—	(2.2)	外面 内面	灰黄褐色(10YR6/2) 灰白色(10YR4/1)	精良	1mm以下の石英・長石を含む	3mm程度	良好
4	縄文土器	—	(2.2)	外面 内面	灰黄褐色(10YR6/2) 黒色(10YR4/1)	精良	1mm以下の石英・長石を含む	3mm程度	良好
5	縄文土器	—	(4.9)	外面 内面	灰黄褐色(10YR6/2) 黒褐色(10YR3/1)	精良	1mm以下の石英を含む	3mm程度	良好
6	縄文土器	—	(3.5)	外面 内面	灰黄褐色(10YR5/2) 黒色(10YR2/1)	精良	1mm以下の石英を含む	3mm程度	良好
7	縄文土器	—	(4.5)	外面 内面	灰黄褐色(10YR5/2) 黒褐色(10YR3/1)	精良	1mm以下の石英・長石を含む	3mm程度	良好
8	縄文土器	—	(3.7)	外面 内面	灰黄色(2.5Y6/2) 灰黄褐色(10YR5/2)	良好	2mm以下の石英を含む	3mm程度	良好

第3トレンチ 第9・10層 (Fig.21)

1	縄文土器	—	(1.6)	外面 内面	黒色(N 2/0) 暗灰色(N 3/0)	良好	2mm以下の砂粒を含み滑石混入あり	3mm程度	
2	縄文土器	—	(1.2)	外面 内面	にぶい褐色(7.5YR6/3) 暗黄灰色(S 7.5P5/1)	良好	3mm以下の砂粒を含む	3mm程度	

No.	器 種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	備 考
第3トレンチ (Fig.16)							
8	石 鏃	1.5	1.4	0.3	0.4	黒曜石	
9	石 鏃	(1.9)	1.3	0.5	(0.9)	黒曜石(船島産)	
第4トレンチ (Fig.17)							
3	銅 片	2.2	2.0	0.7	2.3	黒曜石	

3 小 結

(1) 出土遺物について

第3・4・5トレンチで遺物が出土し、特に第5トレンチでは、器形の全体を示すものがなく器種構成などもわからないが、興味深い資料が多く出土した。

第3トレンチでは、ほぼ中世主体の遺物が検出された。そのなかに、これまで大内氏館跡と瑞光寺跡遺跡でしか確認されていなかった、大内氏館跡B式土師器が確認された。このB式土師器は大内氏内部で自給自足的に製作・消費された土器と推定されるが、館跡⁶⁾でのおびただしい出土量にもかかわらず、その生産跡と覚しきものはまだ発見されない。当附属中学校敷地は、大内氏館跡の南西わずか1kmの場所にあり、この周辺に大内氏関連遺跡またはB式土師器の生産にかかわる施設が存在していた可能性がうかんだ。

第5トレンチでは、2時期の遺物包含層を確認した。

第4～6層からは、周防部に特徴的な複合口縁壺や佐波川・樺野川流域に特徴的な有翼支脚など在地性の強い土器のほかに、山陰系の複合口縁壺、畿内庄内式土器の影響を窺わせるタタキ技法のみられる破片など、外来要素の強い土器が出土し、注目される。

これらの土器群の時期については、タタキのある破片（タタキの上から刷毛目を施すものも含む）があること、庄内式に後続する布留式土器と認定できるものが見当たらないこと、また在地の土器がその形態をまだ保持していることなどから、庄内式併行期すなわち防長10式の範疇におさまるであろうが、小範囲の調査で、器種構成や器形全体を検討しうるだけの資料のない現段階では、時期を限定することは控えたい。

今回出土の山陰系土器は、58年度調査で小学校から出土したものと焼成・色調にかなりの違いがあり、形態的にもやや差があるが、やはり庄内式併行期の所産としておきたい。また従来、山口県内での山陰系土器出土の中心は、やはり「山陰」の長門部にあるとされていたが、近年、佐波川・樺野川流域での発見例が増え、この流域独自の直接流入経路が考えられるに至った。この考えを補強する出土例が、今回またひとつ増えたことになる。

周防部は、外来の勢力を遠ざけて在地の弥生時代の特色を遅くまで固守した地域であるが、周防の端部、いわば辺境の地では、在地の特色を残しながらも周防中心部よりかなり早く他地域の土器を受け入れたことを裏付ける結果となった。⁹⁾

第7・9・10層では縄文土器を検出した。周辺では、亀山をはさんで北東方向約500mにある現県立図書館の地に、縄文時代晩期の土器を多量に出土した後河原（松柄）遺跡¹⁰⁾があるが、これに次いで2遺跡目という希少な例で、周辺への拡がりの確認が待たれる。

(2) 埋蔵文化財遺存状況と今後の方針

グラウンド東側の第7・8トレンチで、比較的安定した地山とみられるシルト層を確認した。しかし、東の亀山が元来もっと裾野をのぼしていたものと考えられ、第4トレンチの所見からみても、おそらくこの層の上面は削平され、往時の状況をとどめてはいまい。

また北側は、附属小学校からなだらかに下る地形で、鴻峰山から南へのびる丘陵の縁辺部か、またはそれにはさまれる谷であったと考えていたが、第6トレンチでは、薄い置土の下に厚い礫層が堆積して湧水し、谷または河川状の遺構の存在を感じさせた。第1トレンチの土層の落ち込みがはたして河川であり、これと関係するものかどうかが目目される。

附属山口中学校敷地内での遺物出土・遺物包含層の堆積は、ほぼ西半部の白石小学校寄りに限られている。部分的な小規模トレンチの調査では、地下の状況の全容をつかむことが難しいのはいうまでもないが、今回調査の各トレンチ間では土層の堆積状況があまりにも違い、各遺物包含層の拡がりがかく捉えられなかった。例えば、第5-3トレンチ間、第5-4トレンチ間はそれぞれ約30m、第5-2トレンチ間はわずか18mの距離しかないが、層位・遺物包含層の土質・含まれる遺物の時期などが、全く違う様相を呈している。この原因や、各包含層の拡がりを把握することは、今後の大きな課題といえる。

また、第5トレンチ第4-6層は、小学校部分の遺物包含層と土質が酷似することから、当初一連のものかと考えていた。しかし小学校の遺物包含層では、布留式末期の遺物を主としており、庄内式におさまるこの中学校部分とは時間的に大きな差を認めたため（前節参照）、中学校部分でも、今後調査を進めてゆく上で、布留式の確認とともに、遺物包含層が、実は分層できるのではないかとの視点が必要となってきた。弥生時代中期土器の混在については、亀山西麓に所在する亀山遺跡が該期の遺跡であり、今後注意が必要となるかもしれない。

2枚の縄文土器包含層は砂層であり、礫層にはさまれている状態であった。湧水もあり、あまり安定した出土状況とはいえない。先述の後河原遺跡の包含層も、一ノ坂川が、山口盆地最大といわれる規模の扇状地を形成する過程での二次堆積層とされる。しかしこの中学校部分は、亀山の陰に隠れ一ノ坂川の堆積作用を受けにくい地理的条件にあるため、周辺の今後の調査で遺構などが検出される可能性を、十分に考慮するべきであろう。

以上のことから、配管が予定される路線について、特に注意が必要と思われる白石小学校に面する地域を事前調査とし、他の地域は工事施工時に立会調査を行なうことが妥当と考える。ただ、今回の試掘調査では土層の平面的な拡がりを捉えるに至らなかったため、

立会調査とした部分に何らかの埋蔵文化財が存在する可能性はある。

(杉原)

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口中学校球技コート整備に伴う立会調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ」, 1986年)。
- 2) 山口市教育委員会「大内氏館跡Ⅰ-大内氏遺跡調査概報Ⅰ-概要-」(山口市埋蔵文化財調査報告第23集, 1987年)。
- 3) 大内氏館跡のほかには、山口市仁保の^{ほろひらぎ}壇崎光寺跡遺跡で中世墓の副葬品として出土した例があるとされる(a)。この遺跡は、報告書発刊に先だって概要が報告され、仁保氏の墓地であるとの考えが提示されている(b)。仁保(平子)氏は鎌倉時代初めに仁保荘の地頭として派遣され、在地の守護大内氏とは当初敵対関係にあったが、南北朝の争乱のころから大内氏につき、室町時代になると次第に重く任用されたという(c)。大内氏がB式土師器をしていたとされる館の後半期と思われる時期には大内氏の重臣として活躍していたことが窺え、個人墓の供献土器として使用を許されたとしても不思議はあるまい。
 - a 柴崎文男「昭和61年度調査」(「大内氏館跡Ⅰ-大内氏遺跡調査概報Ⅰ-概要-」(山口市埋蔵文化財調査報告第23集, 山口市教育委員会, 1987年))
 - b 小田村宏「壇崎光寺跡遺跡の発掘調査」(「仁保の郷土史」, 仁保の郷土史刊行会, 1987年)
 - c 田中倫子「中世」(「仁保の郷土史」, 仁保の郷土史刊行会, 1987年)
- 4) 山陰系土器の編年は、造・型の複合口縁部の基本的な分類序列においてはほぼ固まっている。口縁の立ち上がり外面に帯掻き口縁文がなく、口縁端部が尖り気味であるというこの型の特徴のみを取り上げれば、久しく難尾Ⅱ式とされていたものに相当しよう(a)。しかし、他の器種や他地域との併行関係を目を向けたとき、その捉え方は未だ定まっていない。ここでは一応、庄内式古段階に併行する型式とする花谷氏に従っておく(b)。
 - a 前島巴基・松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器-土器型式にみるその編年の位置について-」(「考古学雑誌」第62巻第3号, 1976年)
 - b 花谷めぐむ「山陰古式土器の型式学的研究-島根県内の資料を中心に-」(「島根考古学会誌」第4集, 1987年)
- 5) a 山本一朗「防長の弥生式土器」(「山口県の弥生式土器-集成と編年-」, 周陽考古学研究所報2, 1979年)。
b 山本一朗「防長の土師器-須恵器-集成と編年-」, 周陽考古学研究所報3, 1981年)。
氏は、文獻aで設定した防長10式木に対する考えを、文獻bで修正し、山口盆地にある湯田輪木町遺跡出土の土器群を防長10式の最終末に置いて庄内式併行期とした。なお湯田輪木町遺跡は期属中学校の南西約1.5kmにある。
- 6) 前掲洋3) a 文獻に同じ。
- 7) 附属山口中学校の南西約3kmの地点にある下東遺跡KD-4出土の資料が庄内式新段階に併行し、この時期には周防系の複合口縁型は消滅しているとする考えがある。これに従えば、下東遺跡の山陰系土器が、今回出土のものより若干降る形態と思われることもあわせ、今回調査の土器群が庄内式新段階を遡る可能性も考えられよう。吉田寛「庄内式併行期前後の西部瀬戸内I-吹越A式に関するノート」(「Relics」創刊号, 山口大学考古学研究室, 1985年)。
- 8) 前掲洋5) b 文獻では、周防と長門との緩衝地帯であるため独自性に乏しかった佐波川・瀬野川の流域に、防長10式期になって突然、佐波型の複合口縁壺と有翼支脚という強い地域性が現れ、続いて畿内との共通性の高い土器を多く出土する遺跡が集中するという事実も、初期の畿内系古墳の出現のしかたに通じており、在地の大勢力を避け、独自の文化をもたない地域からまず組み込んでいくという視点によるものと見解を提示している。
- 9) 防長10式期前後の佐波川・瀬野川流域が、周防と長門との早なる緩衝地帯でなく、すでにある程度の独自性をもった一地域であったということの傍証となる考えである(a)。なおこの論考で、山口県出土の山陰系土器が集成されているが、その後新たに報告されたものとして、山口市仁保の丸山遺跡の表塚資料を追加しておく(b)。
 - a 高下洋「山口県出土のいわゆる山陰系土器について」(「Relics」第3号, 山口大学考古学研究室, 1986年)
 - b 小田村宏「先史-原史」(「仁保の郷土史」, 仁保の郷土史刊行会, 1987年)
- 10) 浜田清吉「山口市後河原の遺物発見地」(山口大学教育学部, 1953年)。
- 11) 小野忠熙「本州の西端地方における古代の型-燧石」(「古代学」第5巻第2号, 古代学協会, 1956年)。

第3章 吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査

1 調査の経過

昭和61年7月15日、施設部より国際交流会館等6件の新営工事が、追加事業計画として埋蔵文化財資料館運営委員会に諮られた。昭和61年度の事業計画は、年度当初すでに同委員会です承されていることから、工事計画の追加は資料館の事業の途中変更を余儀なくし、その年間事業量を大幅に圧迫するものであった。したがって、同委員会は協議の結果、調査日数および資料館の事業計画、関連部局の意向を勘案して、緊急度の高い工事計画について発掘調査を実施することとした。前章で述べた山口附属学校の試掘調査もこうした経緯のもとで実施されたものである。

同年11月にいたり、国際交流会館新営計画の具体化をうけた事務局よりの調査依頼に基づき、同委員会は協議の結果、資料館業務との調和をとりつつ発掘調査を実施することとした。工事は吉田キャンパスの南端中央部、現人文学部校舎南側の独身宿舎とハンドボールコートにはさまれた地域約680㎡が予定される。

当該地域は、東に隣接する女子寮(櫻野寮)および附属農場飼料園のある台地にくらべて階段状に約5m低くなっていること、また、昭和53年度に実施した人文学部校舎新営に伴う発掘調査で顕著な遺構・遺物が認められなかったことなどから、当該地域周辺は大学統合移転時の造成等により学内の他の地域以上に削平を受けていることが予想された。したがって、まず新営予定地内の埋蔵文化財の有無を把握するためにトレンチによる試掘調査を実施し、遺構・遺物包含層が確認された場合には、調査結果をふまえて再度運営委員会においてその取り扱いについて協議することとした。

新営建物は2棟で、既設の職員宿舎4棟を解体、撤去後の跡地に建設が計画さ



Fig. 22 調査区位置図



Fig. 23 トレンチ設定図

れたが、試掘調査の時点ではまだこの職員宿舎およびそれに伴う電気・水道等の地下埋設物、庭園等が機能していることから、できるだけこれらに影響しない地域に5本のトレンチを設定して試掘調査を開始した。なお、付随工事として配管の埋設が予定された地域に設定したトレンチで河川跡が検出されたため、規模確認のためさらに1本のトレンチを追加した。

調査は昭和61年12月4日から25日にかけて行なった。試掘調査面積は約70㎡で、工事総面積の約10.3%にあたる。

2 層位・遺構

A トレンチ

新営予定地の南西端に南北方向に設定した幅1.5m×長さ10mのトレンチである。国際交流会館新営に伴う付随工事として、将来的に排水管の埋設が予定されている地域にあたるため、あらかじめ調査を行なうこととなった。

現地表面の標高は21.90m前後で、約20cmの層厚をもつ表土の下位に統合移転時の造成に伴う削平によって客土された黄褐色粘質土の地山の堆積が厚さ10~15cmにわたってみられる。後世の客土はこの1・2層までで、10~20cmの層厚をもつ第3層：暗オリーブ色土以下が非人為的な堆積層である。第3層の上面標高は約21.60mである。

第4層、オリーブ黒色土以下が河川の埋積土と考えられ、下位には砂層および礫層が厚さ40~50cmにわたって互層となって堆積している。湧水が激しく、地山はトレンチ南端部でのみ確認したにとどまった。地山上面の標高は約21.10mである。

出土物には第3層から歴史時代土師器皿、第4層から弥生土器壺、瓦質土器鍋などがある。

B トレンチ

新営予定地の南東端に南北方向に設定した幅1.5m×長さ5mのトレンチである。現地表面の標高は約22.40~50m。表土の層厚は約20~40cmで、南に向かうにつれて厚くなる。

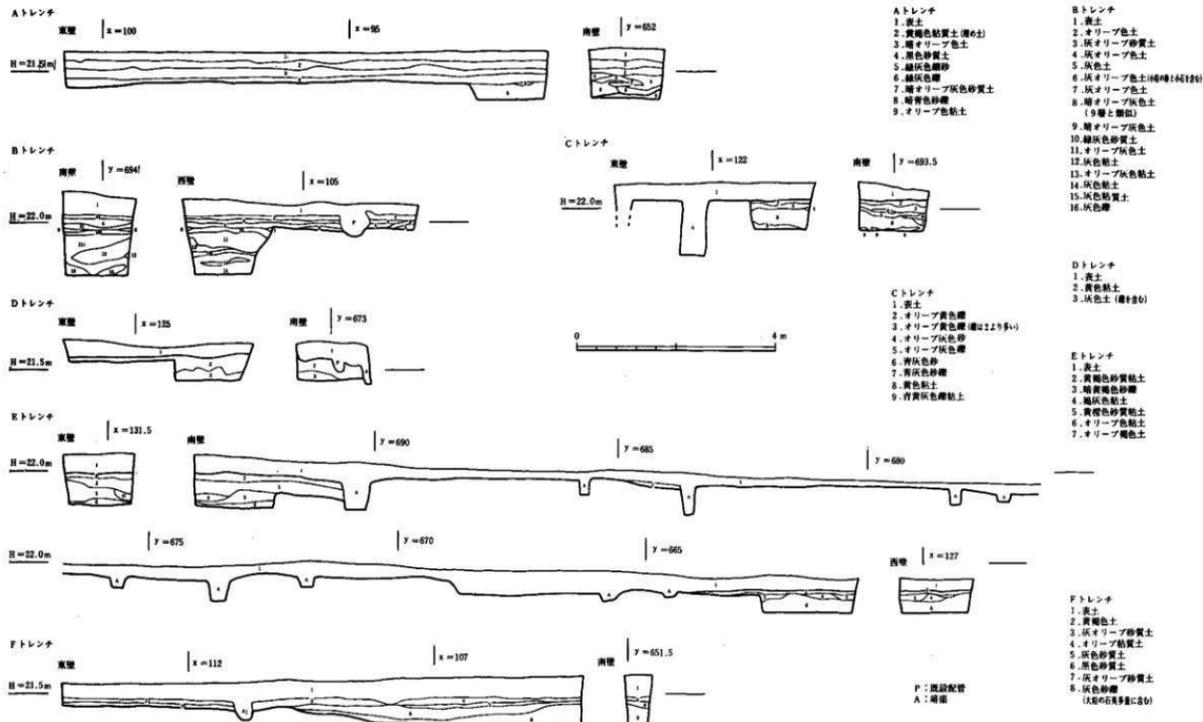


Fig. 24 土層断面図

表土下位には各々約10cmの層厚をもつ第2層：オリブ色土、第3層：灰オリブ色土、第4層：灰色土の堆積がみられ、若干の弥生土器を包含する。

第5層：暗オリブ灰色土以下が河川の埋積土で、灰色もしくはオリブ色の粘土層、砂礫層がブロック状に堆積しており、現地表面から約1.6m掘り下げた段階でも地山は検出されなかった。

Cトレンチ

Bトレンチの北約12mに南北方向に設定した幅1.5m×長さ4mのトレンチである。現地表面の標高は22.50m。トレンチ内では後世の削平が著しく、厚さ約30cmの表土の直下がオリブ黄色礫混じり粘土の地山で、旧耕作土、床土および遺物包含層は認められない。また、顕著な遺構・遺物も認められず、わずかに幅約50cm、検出面からの深さ約1.1mの現代の暗渠1条を検出したにすぎない。地山の検出面の標高は約22.20m。

Dトレンチ

Cトレンチの西方約20mに位置する既設の宿舎間に設定した幅1.5m×長さ4mのトレンチである。現地表面の標高は約22.10m。Cトレンチ同様厚さ約20～40cmの表土直下が黄色粘土の地山であるが、埋設物等の掘削による後世の削平が著しい。地山の検出面の標高は約21.60～80m。トレンチ内での顕著な遺構・出土遺物は皆無であった。

Eトレンチ

新営予定地の最も北側に東西方向に設定した幅1.5m×長さ34mのトレンチである。現地表面の標高は東端部で約22.50m、西端部で約21.70mで、東から西へ緩やかに下降している。表土は、薄いところで約10cm、厚いところで約45cmの層厚をもち、表土直下が黄褐色砂質粘土の地山である。地山は東から西へわずかに下降しており、地山面の標高は約21.70～22.00mである。

この地山を掘り込んで、幅約20～40cmの現代の暗渠が8条にもおよび検出されたほか、 $Y=745.5$ 付近以西の地山がさらに階段状に約35cm低くなっていることから、大学移転前の近年の水田耕作や移転に伴う造成工事等により大規模な削平が行われたものと考えられる。

$Y=759$ 付近で、幅約1m以上のオリブ褐色土の充填した溝状遺構が検出されたが、残存状態は悪く、深さは検出面から約10cmを残すにすぎない。

溝状遺構からの出土遺物には、須恵器坏身、瓦質土器、歴史時代土師器若干のほか、鉄砲玉1個がある。また、表土および攪乱層からは須恵器甕、歴史時代土師器、瓦質土器、

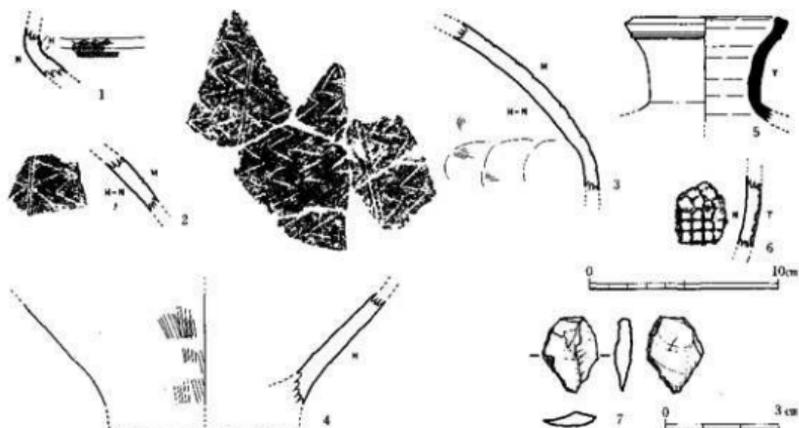


Fig. 25 河川跡出土遺物実測図

須恵質土器、および陶器甕が出土している。

Fトレンチ

Aトレンチで検出した河川跡の規模を把握するためにAトレンチの北方約3mに南北方向に設定した、幅0.6m×長さ11mのトレンチである。

掘削の結果、トレンチのほぼ中央、x=110付近で、地山が南へ下降しており、この落ち込みに、灰色砂質土およびAトレンチで認められた河川の埋積土である黒色砂質土、そしてその下位に礫層が堆積していることが確認された。河川の検出面の標高は約21.30mで、トレンチ南端部付近で検出面から最深63cmの深さをもつ。また、Aトレンチでの調査所見を合わせ考えた結果、この河川は幅19m以上におよぶ大規模なものであることが明らかとなった。

この河川の流れていた時期は、河川からの出土遺物が少ないため決め手を欠くが、Aトレンチでの出土遺物も合わせ、弥生土器、須恵器が比較的多いこと、また河川より上層からの出土遺物も同様のものが多いため、現段階では弥生時代前期～古墳時代後期の年代を与えておきたい。



Fig. 26
溝状遺跡出土遺物実測図

Fトレンチでの出土遺物には、河川跡から須恵器壺、加工痕ある剥片がある。また、表土中からは須恵器、歴史時代土師器、瓦質土器、国産陶磁器がある。

遺物

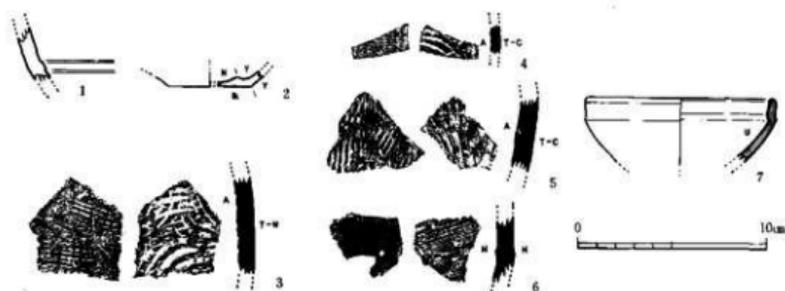


Fig. 27 包含層その他の出土遺物実測図

3 遺物

河川跡出土の遺物 (Fig. 25, PL. 15(3))

1～4は弥生土器で、同一個体の可能性がある。1は頸部で、肩平な低い突帯を貼付し、刷毛原体小口によると思われる刻み目を施す。また、突帯の下位にはタマキ貝による2条の沈線が巡る。外面縦刷毛目、内面ナデ仕上げ。2・3は肩部で、横1本、縦2本の沈線によって分割された区画内にやや乱雑な無軸羽状文を施文する。工具はいずれもタマキ貝を用いている。外面ヘラミガキ、内面刷毛目のち丁寧なナデ仕上げを行なうが、下半部は整形時の指圧痕が明瞭に残る。4は底部付近で、外面縦刷毛目、内面風化のため不明。

5は須恵器壺。緩やかに外反する口縁部をもち、口縁端部は内側へツマミ出されたように内彎気味に肥厚する。外面には口縁端部よりわずかに下位に1条の沈線が巡る。口縁端部外面を除いて内外ほぼ全面に自然釉が付着する。内外面とも横ナデ仕上げ。6は外面に格子目タタキを施す瓦質土器の鍋と思われるもので、内面はナデ仕上げ。

7は左右両側縁に丁寧な二次加工を有する剥片で、小振りの縦長剥片を素材とする。正面上部左半の剥落のため、打点の除去作業が行なわれたかどうかは不明。姫島産黒曜石製。

1～4・6はAトレンチ第4層、5はFトレンチ第7層、7はFトレンチ第6層出土。

溝状遺構出土の遺物 (Fig. 26, PL. 15(3))

径1.0cmのほぼ球形に近い鉛製の鉄砲玉。整形時に転がしたと思われる、帯状の平坦面をもつ。Eトレンチ出土。

包含層その他の出土遺物 (Fig. 27, PL. 15(3))

1は弥生土器壺の肩部。外面には削り出しによる段をもち、その下位にヘラによる1条

の沈線が廻る。内外面とも風化著しく、調整は不明。Bトレンチ第3層出土。2は糸切り底の土師器小皿で内外面とも横ナデ仕上げ。Aトレンチ第3層出土。

3～5は須恵器の壺ないしは甕の胴部で、外面平行タキを施すが、3はナデ消している。6は須恵質土器の甕ないし壺で、内外面とも刷毛目仕上げ。7は天目の塊で、口縁部は体部から屈曲して垂直に近く立ち上げる。口縁端部は丸く終わる。

3・6はEトレンチ表土、4・5はEトレンチ攪乱層、7はFトレンチ表土中よりの出土。

Tab. 4 出土遺物観察表

法量()は現存量

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色	調	胎土	焼成	備考
河川跡 (Fig.25)								
1	弥生土器 壺	-	(2.6)	器表-浅黄色(2.5Y7/3) 器内-黒色		良好 3mm以下の石英・ 長石を含む	良好	Aトレンチ第4層出土
2	弥生土器 壺	-	(2.8)	器表-浅黄色(2.5Y7/3) 器内-黒色		良好 3mm以下の石英・ 長石を含む	良好	Aトレンチ第4層出土
3	弥生土器 壺	-	(8.8)	器表-浅黄色(2.5Y7/3)		良好 3mm以下の石英・長石 等を含む	良好	Aトレンチ第4層出土
4	弥生土器 壺	-	(5.8)	器表-浅黄色(2.5Y7/3) 器内-黒色		良好 3mm以下の石英・長石 等を含む	良好	Aトレンチ第4層出土
5	須恵器 壺	7.8	(5.6)	器表-灰白色(N 7/0) 自然釉-灰オリーブ色(7.5Y4/2)		普通 1mm以下の長石等 含む	良好	Fトレンチ第7層出土
6	瓦質土器 鍋	-	(3.7)	器表-ぶい黄褐色(10Y7/4) 器内-暗灰色(N 3/0)		良好 1mm以下の砂粒 若干含む	良好	Aトレンチ第4層出土
包含層その他 (Fig.27)								
1	弥生土器 壺	-	(2.9)	ぶい黄褐色(10Y7/3)		やや 不良 3mm以下の石英・長石 かなり、産金雲母含む	不良	Bトレンチ第3層出土
2	土師器 皿	*4.2	(0.8)	淡黄色(2.5Y8/3)		良好 1mm以下の砂粒 少量含む	普通	Aトレンチ第3層出土
3	須恵器 甕小壺	-	(5.2)	器表-青灰色(5 B6/1) 器内-暗赤褐色(10R3/2)		良好 2mm以下の長石等 若干含む	良好	Eトレンチ表土中
4	須恵器 甕小壺	-	(1.5)	明青灰色(5 B7/1)		良好 2mm以下の長石 含む	良好	Eトレンチ攪乱層中
5	須恵器 甕小壺	-	(4.0)	緑灰色(10GY6/1)		やや 粗 1mm以下の砂粒 若干含む	良好	Eトレンチ攪乱層中
6	須恵質土器 甕小壺	-	(3.2)	灰白色(N 7/0)		やや 粗 3mm以下の石英・ 長石等若干含む	良好	Eトレンチ表土中
7	陶器 塊	9.8	(3.4)	素焼-淡紫色(5 Y8/3) 釉-暗赤褐色(2.5YR2/2)		良好	良好	Fトレンチ表土中
No. 器種 最大径(cm) 最大幅(cm) 最大厚(cm) 重量(g) 材質 備考								
河川跡 (Fig.25)								
7	加工済みの石製研所	2.0	1.4	0.4	0.9	黒曜石(姫島産)		Fトレンチ第6層出土
溝状遺構 (Fig.26)								
-	鉄釘	1.0	1.0	1.0	6.5	鉛		Eトレンチ

4 小 結

(1) 検出遺構と出土遺物について

A・B・F各トレンチで、弥生時代前期～古墳時代後期を主体とする遺物が出土した幅19m以上の河川跡を検出した。この河川は、Fトレンチ中央部でその川岸の落ち込みが確認されたこと、そしてBトレンチの北約12mに設定したCトレンチでは河川跡が検出されないことなどから、既設の支障埋設物等によって調査ができなかったB～Cトレンチ間に川岸の落ち込みのあることが予想され、他のトレンチで検出した溝底の高低差および周辺の地形から推して、ほぼ東から西に流れていたものと考えられる。

また周辺では、今回の調査地の北西約100mのところでは昭和55年度に実施した経済学部大講義棟新営に伴う試掘調査の際にも、遺物はほとんど出土しなかったが、幅22m以上の河川跡が検出されており、同一河川の可能性がある。

その他の遺構には、Eトレンチで検出した中世～近世の溝状遺構1条があるが、残存状態は極めて悪い。これは、独身寮の東に位置する附属農場飼料園から西に伸びる丘陵が、C～Eトレンチ付近で統合移転時の造成等により大規模に削平されているためで、C～Eトレンチ付近に遺構や遺物包含層が存在していたとしても、すでに消失しているものと考えられる。表土および攪乱層から出土した各時期の遺物も、こうした後世の削平によって、遺構・遺物包含層から遊離した可能性が高い。

出土遺物には、弥生時代から江戸時代にかけてのものがある。量的には多くはないが、なかでも河川跡から出土した弥生土器壺は、いずれも同一個体と考えられるもので、特徴的な文様構成をもっている。すなわち、肩平な低い貼付突帯の下位を、縦2本および少なくとも横1本のタマキ貝による沈線で分割した区画内に、羽状文を施文するもので、下東遺跡YP-28、西遺跡13号土壌に良好な一括資料がみられ、¹¹⁾前期末の綾羅木Ⅲ式併行期と考えられる。学内ではこの期の遺構が少なく、昭和60年度に行なった学生会館前庭部の環境整備に伴う試掘調査で、袋状堅穴が検出されているにすぎない。¹²⁾

なお、キャンパスの南端部を巡る排水溝掘削時に、今回の調査地の南西約110mの地点¹³⁾で、弥生時代前期の堅穴住居跡が検出されたとされていること、第四章で述べる大学敷地の南縁部を弧状に巡る送水管の埋設工事に伴う立会調査で、野球場南東端部から南門にかけての地域に前期末から中期初頭の遺物包含層が検出され、その北側では遺構と思われる落ち込みが確認されていることなどから、当該地域周辺にこの時期の遺構が埋存している可能性が高く、今後の調査が待たれる。

(2) 埋蔵文化財遺存状況と今後の方針

資料館は、調査終了後、上述した国際交流会館新営予定地内での試掘調査結果を同運営委員会に報告事項として語り、埋蔵文化財に関するその後の取扱いについて協議を行なった。

同委員会は、新営予定地の北半部に設定したC～Eトレンチでは、わずかにEトレンチで中～近世の溝状遺構一条が検出されたにすぎず、残存状態も極めて悪いこと、また、附属農場飼料圃から西へ延びる丘陵が、C～Eトレンチ付近で大規模に削平されていることから、新営予定地北半部では過去に遺構、遺物包含層が存在していたとしてもすでに消失している可能性が高いものと判断した。

しかし、新営予定地南半部のA・B・F各トレンチで、弥生時代前期～古墳時代後期を主体とする遺物が出土した幅19m以上の河川跡が検出されたことから、埋蔵文化財に関する適切な善後策を講ずる必要があると指摘し、試掘調査によって十分把握されていない河川跡の規模、機能していた時期、流路などを明確にするための調査方法を検討した。

その結果、トレンチの規模と比較して河川跡からの遺物の出土量が少なく、新営予定地内を走行する河川跡から多くの遺物が出土する期待があまりもてないことから、河川跡の埋存が予想される地域について工事施工事に立会調査を実施することとし、埋蔵文化財に関する資料の蓄積を図ることが至当であると結論づけた。

(河村)

[注]

- 1) a 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「下東遺跡」(『国道9号・山口バイパス 下東遺跡・箕時遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第30集、1975年)。
b 山口市教育委員会「西遺跡」(山口市埋蔵文化財調査報告第21集、1986年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「古田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1986年)。
- 3) a 山口大学古田遺跡調査団「山口大学古田遺跡発掘調査概報」(1976年)。
b 小野忠恵「山口大学構内古田遺跡の性格」(『学歴だより』、山口大学、1970年)。

第4章 昭和61年度山口大学構内の立会調査

第1節 吉田構内の立会調査

1 山口銀行現金自動支払機設置に伴う立会調査

調査地区 本部構内 I・J-19・20区

調査期間 昭和61年4月17日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約11m²

調査結果 工事は第一学生食堂南入り口付近への現金自動支払機設置に伴い、教育学部研究実験棟と食堂との間を幅50cm、長さ約23mにわたって掘削し、電線路を敷設するものである。この周辺は、学内でも特に遺構の分布密度が高く、縄文時代晩期から奈良時代にかけての各時期の遺構が検出されている地域である。

今回の調査地区の南西には弥生時代中期後半から古墳時代前期の竪穴住居跡21棟が現地保存されている「遺跡保存地区」¹⁾が所在し、住居の型式・構造さらには集落の形態・範囲の変遷を知るうえで学術・研究上良好な遺構分布地域として把握されている。

また、昭和56年度には、教育学部研究実験棟西端の増築、および食堂の北東における同美術科・技術科実験実習棟新営に伴って、事前調査を実施している。²⁾前者では調査区北半部は後世の削平により遺構が稀薄であったが、南半部において弥生時代中期後半から後期にかけての竪穴住居跡4棟が検出され、「遺跡保存地区」の住居群が北へ広がっていることが確認された。また後者では南北方向に流れる弥生時代後期から古墳時代の河川跡が検出されたが、住居跡は認められなかった。昭和42年の学生食堂南半部の調査でも、同様に住居跡は見つからなかったとされており、「遺跡保存地区」を中心とする住居群の分布の東限は、食堂南半部および美術科・技術科実験実習棟付近にあたるものと考えられる。

今回の調査地域は上述した各調査地には含まれた部分にあたり、昭和60年度の立会調査でも遺構の埋存が予想されていた。³⁾



Fig. 28 調査区位置図

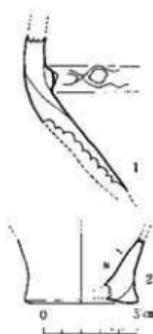


Fig. 29 出土遺物実測図

調査の結果、電線敷設路線内の南北両端部付近は既設の建物新営の際の工事や配管等で攪乱されていたが、中央部付近では削平が少なく、構内造成時の埋め土の下位には旧耕作土・床土が認められた。その直下、現地表から75cm下位に、弥生時代中期の土器を包含する黒褐色粘質土の堆積が認められる。この黒褐色粘質土は、攪乱によって部分的にのみ堆積が観察されたもので、工事路線内では少なくとも幅5m以上の分布範囲をもつ。

工事による掘削は現地表下80cmまでであったが、工事に支障のない深さまでこの層を掘り下げた結果、少なくとも35cmの層厚をもっており、その下位には砂礫の堆積が見られた。また、この深さでも地山が検出できないこと、出土遺物の磨滅が著しいことなどから、

この黒褐色粘質土は遺構、特に河川跡や溝などの埋土である可能性が高い。そして、同じ時期のものと思われる河川跡ないし溝が、今回の調査地区の東約70m⁴⁾で検出されている。昭和58年度のラグビー場防球ネット設置に伴う調査で確認したもので、聚落を区画する溝と考えられ、中期後半～後期初頭の時期を与えている。幅5.5m、深さ1.1mの規模をもち、研究実験棟に沿うように東-西に走行しており、同一のものかもしれない。

出土遺物 (Fig. 29, PL. 16)

1は壺で頸部に指頭による刻み目を施した1条の三角突帯が巡る。内外面とも風化により調整不明。2は窪み底の変の底部。外面は風化のため調整不明、内面ナエ仕上げ。底径6.0cm。1は胎土良好、焼成やや不良、色調浅黄色 (Hue 2.5Y 7/4)。2は胎土・焼成良好で、色調にぶい黄橙色 (Hue 10YR 7/4)。(河村)

[注]

- 1) 河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査 (昭和57年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、山口大学埋蔵文化財資料館、1986年)。
- 2) a 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部構内H-19区発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報I』、1982年)。
b 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部構内H-16区発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報I』、1982年)。
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部環境整備に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1986年)。
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報III』、1985年)。

2 農学部附属農場農道整備に伴う立会調査

調査地区 農学部構内 S-20区 (B地点), U-19区 (A地点)

調査期間 昭和61年4月21日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 A地点約100㎡, B地点約65㎡

調査結果 工事内容は、果樹園・飼料園への農作業用大型機械の搬入に伴い、崖面を削平してその勾配を緩やかにするものである。またA地点ではそれとともに、農道新設に伴う切り上部分の西側約80㎡の地域に仮設の器材庫の設置も計画された。

両調査地点にはさまれた家畜病院敷地部分では昭和41年度に発掘調査が行なわれており、いつの時期のものかは明らかでないが溝・柱穴が検出され、弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器等が出土したとされる。また、昭和60年度には果樹園の西端部で幅2.4m以上の規模をもつ平安時代から鎌倉時代にかけての河川跡が検出されており、この付近一帯には、キャンパス内の他の地域に比べて比較的良好な状態で、古代から中世にかけての集落が埋存していることを示している。

A地点での農道新設のための切り土は、南端部で最も深く、現地表から1mを要するものであった。掘削の結果、現耕作土・客土の直下、現地表から20cm掘り下げた段階で、明褐色 (Hue 10YR 6/8) 粘土の地山が検出された。南東端部から東西8m、南北8.5mの範囲は後世の削平により攪乱されていたが、他の範囲では浅黄色 (Hue 2.5Y 7/4) の埋土をもつ柱穴群が確認され、遺構上面から土師器坏、瓦質土器が出土した。土師器は室町時代のもので、今回の調査地域

周辺では、過去に室町時代の遺構は検出されていないことから、平安時代から室町時代にかけての長期にわたる集落が埋存している可能性が高い。

なお、柱穴は攪乱部分を除いて散発的にはほぼ全面に分布していることから、整

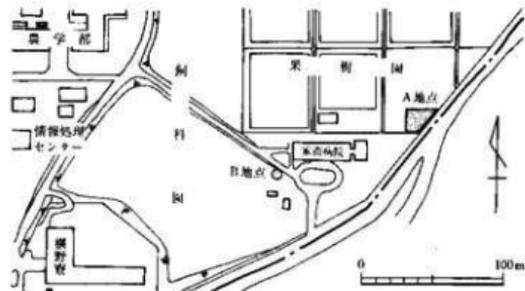


Fig. 30 調査区位置図

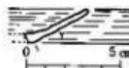


Fig. 31 出土遺物実測図

備に伴う切り土は、農道としても機能可能なこの擾乱部分に限定して実施することとなった。

また仮設の器材庫設置地域では、先に農道新設地域で遺構が検出されたことを考慮して、まず、南北に約9mの長さを幅約50cmの範囲で掘削して遺構の有無を調査することとした。その結果、設置予定地域の北端中央部で北東-南西に走る幅20cmの溝が検出された。この溝は、埋土が前述した柱穴群と同一色であることから、中世のものと考えられる。

この器材庫の設置は、現地表下約60cmまでの掘削を伴う工事となる予定であったが、遺構が検出されたため、地下の現状を変更しない工法で行なわれることとなった。

一方、A地点の西南西約90mに位置するB地点では、北端部で現地表から50cm下位で地山が検出されたが、南端部では約1m掘り下げても遺物包含層・地山は検出されなかった。現地表面がほぼ平坦であることから、地山が北から南へ急激に下降しているものと推察される。

出土遺物 (Fig. 31, PL. 16)

A地点で出土した土師器坏は、体部が直線的に立ち上がるもので、復原器高1.8cm。胎土・焼成良好で、色調灰白色 (Hue 10YR 8/2)。(河村)

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「農学部附属農場剣科園排水清修復整備に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』, 1986年)。

3 農学部附属農場農道交通規制に伴う立会調査

調査地区 農学部構内 L-10区、Q-15・16区

調査期間 昭和61年5月12日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 計約12㎡

調査結果 工事は、農繁期における農作業車両の搬入に伴い、農道の通行を規制するため農道入口に施設用ボールを設置するもので、現地表から40cm掘削して計9本を埋設した。各地点とも掘削深度内は構内造成時の埋め土で、遺構・遺物は認められなかった。

しかし、農業観測実験施設と第2学生食堂間の畑地で須恵器・土師器が採集されており(本節第12項参照)、この畑地に遺構あるいは遺物包含層が埋存している可能性が高い。また、食堂のすぐ東側では現地表下わずか15cmで黄橙色粘土の地山が検出されていることから、遺物包含層や遺構面は現地表からきわめて浅いところにあるものと思われ、採集遺物は耕作によって原位置から遊離したものと考えられる。

なお調査期間中、農業観測実験施設の東側の農道で須恵器坏蓋・甕、土師器を採集した。実験水田側溝を再掘削した際の土を、盛り土として農道へ散布した中に含まれていた。

採集遺物 (Fig. 33, PL. 16)

短いかえりをもつ小型の須恵器蓋坏の坏蓋で、胎土・焼成良好、色調は暗青灰色 (Hue 5 P B 4/1)。復原口径10.8cm。7世紀後半。

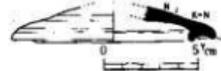


Fig. 33 採集遺物実測図

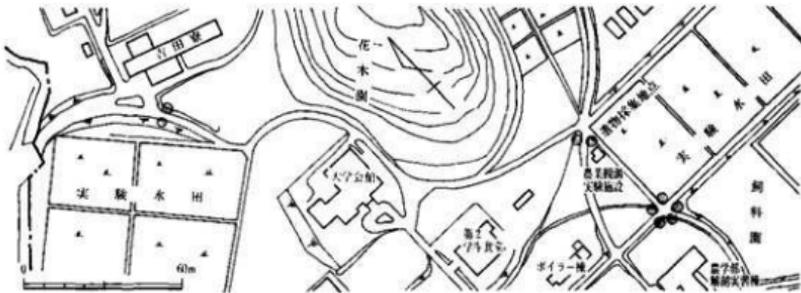


Fig. 32 調査区位置図

4 正門横（水田内）境界杭設置に伴う立会調査

調査地区 農学部構内 1-10区

調査期間 昭和61年5月16日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約0.25㎡

調査結果 工事は、キャンパス北縁を東から西へ流れる九田川の改修に伴い、大学の管理地域および改修工事の範囲を明示するためにコンクリート製の境界杭を設置するもので、調査地点は実験水田の北端中央部付近にあたる。工事自体は50cm四方の狭い範囲にすぎないが、実験水田内の地下の状況が全く不明であるため、立会調査を実施することとした。

工事による掘削は、現在の水田面から約80cmまでであった。現在の耕作土・床土は計約20cmの層厚をもち、その下位には第3層：灰茶褐色粘質土、第4層：礫を含む暗灰茶褐色粘質土、第5層：黒茶褐色粘質土の堆積がみられた。第3・4層とも層厚約30cmで、第5層はその上面の確認のみにとどめたが、各層とも遺物は包含していなかった。

なお昭和58年度に、今回調査地点の南東約100mの大学会館敷地部分で調査を行っており、敷地のほぼ中央を南から北ないしは北西に、周囲の丘陵縁辺部を侵食しながら開析する谷が検出されている。この谷は最深部で検出面から約1.5mの深さをもつもので、実験水田方向への拡がり予想されていた。

今回調査の各堆積層は、この谷の埋積土に類似するが、大学会館部分とは距離的な隔たりが大きすぎることに、また吉田寮付近から延びる丘陵を侵食する別個の谷の存在も考えられることなどから、現段階で同一の谷の埋積土として理解するのは早計で、当地域での今後の調査が待たれる。

(河村)

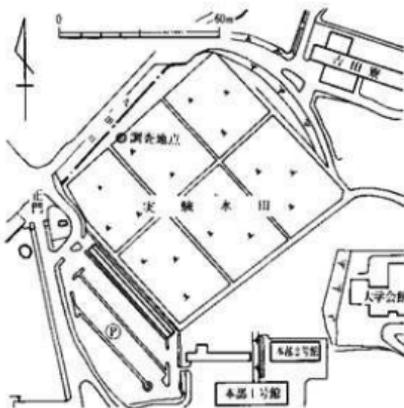


Fig. 34 調査区位置図

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新宮に伴う発掘調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報」、1985年)。

5 経済学部環境整備に伴う立会調査

調査地区 経済学部構内 M-20区
 調査期間 昭和61年6月19日
 調査方法 工事施工時における立会調査
 調査面積 約3㎡

調査結果 工事は植樹および記念碑の建立で、経済学部構内の東端中央部に計画された。

同学部構内の南半部は、近年の立会調査により断片的にはあるが比較的地下の状況を知ることができる資料を得ている。すなわち、大講義棟（E棟）の以北では現地表下約80cmで黒褐色粘質土の堆積が確認され、遺構ないしは遺物包含層の存在が予想されている。また、D棟のすぐ東側では現地表下約70cmで黄褐色粘質土の地山が検出され、双方の検出面の深さおよび両地点の位置関係から、構内造成時の大規模な削平がこの付近にまでは及んでいないことが知られている。しかし、経済学部構内はその西に位置する人文・理学部構内に比べて階段状にかなり低くなっており、両構内での地山検出面の標高差もかなりあることから、同構内東端部付近では地山の削平が著しいものと考えられる。

今回は、同学部構内での地山の削平状況・範囲を知る一助として、立会調査を実施した。

その結果、現地表から約85cm下位で青灰色礫泥じり粘質土の地山が検出された。同構内ではこの層の地山は未確認であったが、今回の調査地点の南西約50mに位置する人文部校舎敷地部分では、弥生時代以降の遺構面である黄褐色粘質土の下位に青灰色粘土層が堆積していることが確かめられている。したがって、今回の調査地点付近では、構内造成により遺構面が削平され、その下位の堆積層が埋め土直下に検出されたものと考えることができ、過去に遺構が存在していたとしても、すでに消失している可能性が極めて高い。

(河村)

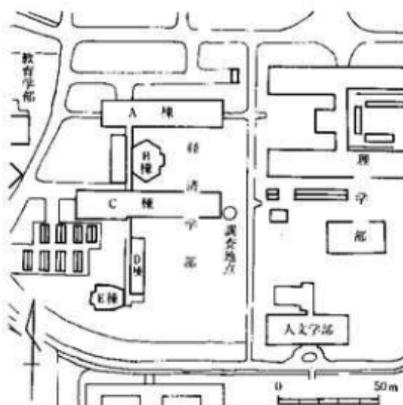


Fig. 35 調査区位置図

6 交通標識設置に伴う立会調査

調査地区 本部構内 H-23区, J-9区, P-22区, 農学部構内 S-20区, W-16区

調査期間 昭和61年6月27日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約3㎡

調査結果 工事は、古田構内の各入り口に交通規制用の標識を設けるため、その支柱の基礎となる部分について、各々1m×0.5mの範囲で現地表から約30cm掘り下げるといものである。5地域6地点を調査した。なお工事で掘削した実際の深さは、H-23・J-9・P-22区で現地表から40cm、S-20・W-16区ではそれぞれ30cm、35cmであった。

掘削の結果は、各地点とも構内造成時の埋め土の堆積が認められたにとどまり、遺構・遺物包含層および地山は検出できなかった。なお、J-9区・S-20区・W-16区の3地点では埋め土の中に地山の土である明黄褐色（Hue 10Y R 6/8）粘土が混在しており、各地区周辺で地山の削平が行なわれていることが予想される。

S-20区の調査地点周辺では、昭和41年度に西側の飼料園で実施した試掘調査で遺構が検出され、その後、大きな現状変更はされていない。したがって、埋め土内の地山土は、家畜病院の敷地を造成によって一段低く下げた際の削平に起因するものと思われる。

また、P-22区の調査地点では埋め土中から須恵器片が出土した。独身寮の西隣で行なった国際交流会館新営に伴う調査（第3章参照）の際、古墳時代後期まで流れていた河川跡が検出されており、その河川がこの付近にまで伸びていたことが予想されるが、大学統合移転時の造成により他の遺構とともに削平され、遺物が遊離した可能性が考えられる。

(河村)

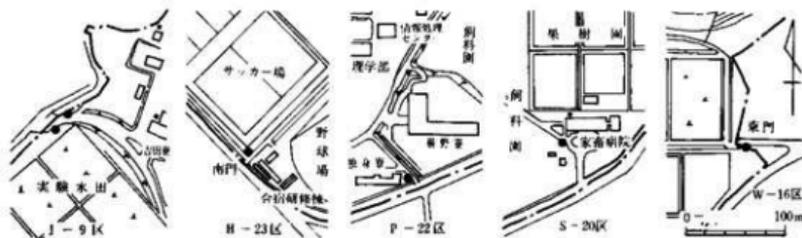


Fig. 36 調査区位置図

7 教養部自動販売機増設に伴う立会調査

調査地区 教養部構内 K・L-18区

調査期間 昭和61年8月19日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約3.5m²

調査結果 工事は、自動販売機を被覆する簡易屋根設置のため、その支柱の基礎となる部分を東西各2ヵ所、計4ヵ所掘削し、周囲にタイル状のロッキングブロックを敷設するものであった。また、この工事の際、支障となるベンチを西へ約3m移動させるため、このベンチの基礎部分についても合わせて立会調査を実施した。

簡易屋根基礎部分の掘削は現地表から30~40cmを要するものであったが、4ヵ所いずれも構内造成時の埋め土の堆積がみられ、顕著な遺構・遺物は皆無であった。しかし、南東隅の基礎部分で、この埋め土の中に、昭和58年度に今回の工事地域の北約40mにある教養部屋外掲示板部分の調査で確認した、茶褐色粘質土（遺物包含層）が混入していた。

この遺物包含層の拡がりは現段階ではまだ確認できないが、教養部講義棟西端部でも弥生土器を含む層が検出されていること、旧地形が東から西へ下降していたと推定されることなどから、合併講義棟以西にもその堆積範囲が及ぶものと考えられる。ただし、前述の調査で旧耕作土・床土が全く検出されていないことから、大学統合移転時の造成によって遺物包含層が広範囲にわたりかなり削平されていることが予想される。

またベンチ移動に伴う4ヵ所の基礎部分の調査では、工事に必要な現地表下30cmまでの掘削を行なったが、各ヵ所とも構内造成時の埋め土の範囲内であった。

(河村)

〔注〕

1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教養部環境整備に伴う立会調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ」, 1985年)。

2) 前掲注1)に同じ。



Fig. 37 調査区位図

8 教養部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査

調査地区	教養部構内 L-15・16区
調査期間	昭和61年9月2日
調査方法	工事施工時における立会調査
調査面積	約3㎡

調査結果 工事は、教養部管理研究棟の東出入口に身障者用の昇降スロープを新設するもので、東西幅約3m、南北長約8mが工事対象範囲であった。しかし、工事地域の南側については掘削を行わず、主に盛り土によってスロープを新設するため、工事に伴う実際の掘削は、管理研究棟と並行して東西に走る循環道路からの入口付近の東西約3m、南北約2.5mの地域であった。立会調査は、この範囲のうち掘削の最も深い、工事地域の東西両端部に沿って南北に設けられるスロープ基礎部分について実施した。

現地表から70cmまでを掘削し土層の堆積状況を観察したが、構内造成時の埋め土以外に顕著な堆積層は検出できなかった。しかし、循環道路を隔てて一段高い大学会館前庭部では、南端中央部付近で最大の厚さが約80cmにおよぶ遺物包含層が検出されている¹⁾。この遺物包含層は少なくとも3層に分層できるが、縄文～江戸の各時代におよぶ遺物を包含し、北から南への地山の下降とともに漸次その層厚を増している。ただし、前庭南西端部では

ほとんど検出されないこと、また前庭部の南に位置する図書館増築部分でも同一の遺物包含層を検出していること²⁾などから、その分布範囲は南および西へ広がるものと考えられる。今回の調査地域付近でも、今後、掘削深度が深い工事の際に遺物包含層が検出される可能性は十分考えられ、注意が必要である。(河村)

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「古田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ」、1986年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ」、1985年)。



Fig. 38 調査区位置図

9 経済学部散水栓取設に伴う立会調査

調査地区 経済学部構内 L・M-20区

調査期間 昭和61年12月1日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 計約4㎡

調査結果 工事は、経済学部C・D棟間および大講義棟（E棟）の周囲に、現地表から30cm掘削して給水管を埋設し、その管路内に前者では3ヵ所、後者では2ヵ所の散水栓を取設するものである。昭和55年度に実施した同学部大講義棟新営に伴う調査結果から、大講義棟周囲の工事地点は、掘削深度が構内造成時の埋め土の範囲内であることが明らかのため調査対象から除外し、C・D棟間の掘削工事について立会調査を実施した。

その結果、給水管管路、散水栓取設地点とも工事による掘削深度内はいずれも構内造成時の埋め土の堆積が認められ、顕著な遺構・遺物は皆無であった。したがって、C・D棟間では少なくとも現地表から30cmまでの掘削では地山が検出されず、先に経済学部環境整備に伴う立会調査（本節第5項参照）で触れたように、同学部構内南東域での地山の検出面は現地表から約70cm～80cm下位付近にあるものと考えられる。

また、経済学部の西に隣接する遺跡保存地区周辺での遺構の分布状況・遺存度から推して、同学部構内では東から西への地山の自然傾斜に伴い、西に向かうにつれて埋蔵文化財が良好な状態で遺存している可能性が強いが、遺構面の削平状況・範囲および遺構の有無を判断するには、現状では未だ資料不十分で、今後の資料の増加が望まれる。

(河村)

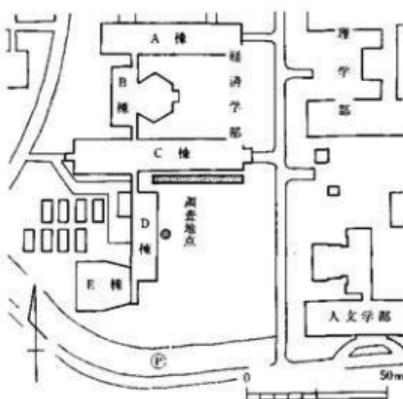


Fig. 39 調査区位置図

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「昭和55年度調査の概要」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』、1982年)。

10 水泳プール改修に伴う立会調査

調査地区 本部構内 E・F-16区, H-15区

調査期間 昭和61年12月8日(A～C地点), 同12月10日(D地点)

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 A地点 約4.5㎡, B地点 約4㎡, C地点 約7㎡, D地点 約11㎡

調査結果 工事は、プール改修に伴う3地点(A～C地点)と、体育館の変電施設新営に伴う1地点(D地点)について実施した。

プール改修工事では、深い掘削を要する循環装置の改修部分のうち、新規に埋設される配管路について調査を行なった。工事に伴い現地表から50cmまで掘削したが、3地点ともすべて構内造成時の埋め土の範囲内であった。しかし、B地点では旧耕作土・床土の直下、現地表から65cm下位で、遺物は含まないものの、茶褐色粘質土の堆積が認められた。西に隣接するテニスコートのフェンス¹⁾改修に伴う調査時に、弥生時代～古墳時代の遺物を包含する同一層が検出されている。この包含層の北への拡がりを調べるために、管路北端部のC地点で工事に支障のない現地表下1.5mまで深掘りを行なったが、旧耕作土の下面が検出されたにすぎず、同層はその下位に堆積しているものと思われる。B・C両地点とも現地表面の標高差はほとんどなく、地山がC地点付近で南から北へ急激に自然傾斜している



Fig. 40 調査区位置図

ものと考えられるが、テニスコート地域ではこの地山の傾斜が認められないことから、プール本体の存在する地域に小規模な谷が埋存している可能性が高い。

なおD地点では、工事掘削深度である現地表下約70cmまで掘り下げたが、すべての構内造成時の埋め土の範囲内、遺構・遺物包含層の確認はできなかった。

(河村)

〔注〕

- 1) a 山口大学埋蔵文化財資料館「学生部テニスコートフェンス改修に伴う立会調査」(山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ, 1985年)。
- b 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内学生部テニスコートフェンス改修に伴う試掘調査」(山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ, 1985年)。

11 農学部附属農場水道管理設に伴う立会調査

調査地区	農学部構内 S-12区
調査期間	昭和61年12月9日
調査方法	工事施工時における立会調査
調査面積	約3㎡

調査結果 工事は、農場本館と牛舎との間にすでに埋設されている水道管を、途中で分岐させるために農道を掘削するものである。なお、農道中央部は既設の配管埋設工事の際に削平されているため、農道の東西両端部について立会調査を実施した。

工事による掘削は現地地表から50cmまでであったが、両端部とも工事範囲内は構内造成時の埋め土で、埋蔵文化財への影響はなかった。しかし、当地域周辺は、今までわずかに牛舎敷地部分で調査がなされているにすぎず、埋蔵文化財の分布状況については不明な点が多いことから、今後の諸開発に先立ち地下の状況を把握するため、深掘りを行なった。

その結果、東端部では現地地表から70cm下位で黄灰褐色礫混じり粘土の地山が検出され、また西端部では現地地表から80cm下位で谷の埋積土を思わせる黒灰色粘土の堆積がみられた。

附属農場の各施設が所在するキャンパスの北東域は、北から南へ舌状に張り出した二つの丘陵にはさまれた、狭い谷あいには立地する。西半部の奥部には用水池が存在し、その前面に開かれる実験水田は、周囲に比べ一段低くなっている。今回調査地点の北東約70mに位置する牛舎の敷地部分の調査では、弥生時代の溝・土壇、古墳時代の堅穴住居跡を検出したとされていることから、本来の谷は、用水池奥部に湧水点をもつもので、当該地域を東西に二分してのびる農道よりも西側の地域に存在するものと思われる。したがって生活関連遺構は、谷を避けたこの農道以東の、丘陵縁辺部であった地域に存在する可能性が高い。

(河村)

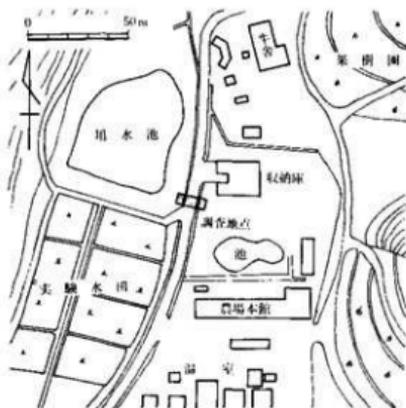


Fig. 41 調査区位図

12 汚水排水管等総改修に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 M-18区, O-15・16区

調査期間 昭和61年12月23日(M-18区), 同62年1月12日(O-16区), 同1月19日(O-15区)

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 M-18区 約5.5㎡, O-16区 約7㎡, O-15区 約3㎡

調査結果 工事内容は、吉田構内に分散する汚水・実験各排水管および雨水管の老朽化に伴う改修工事で、これまでの調査により周辺に顕著な埋蔵文化財が認められている地域と、調査資料の不足している地域を選定して、立会調査を実施したものである。

M-18区では東西1m、南北5.5mの範囲について、工事に必要とされる掘削深度である現地表下50cmまで掘り下げたが、構内造成時の埋め土の堆積がみられたにとどまった。

O-16区では東西1m、南北7mの範囲を調査した。南半部は、後世の擾乱が著しく、現地表下65cmまで構内造成時の埋め土がみられた。北半部では、この埋め土の直下、現地表下40cmで灰黄褐色(Hue 10YR 2/6)土の堆積を確認したが、遺物は包含していなかった。なお、工事による掘削はこの灰黄褐色上面までであるため、地山は確認していない。

O-15区での工事は、一段高い東側からの土砂流入防止を目的として、東西0.4m、南北8mの範囲を掘削し土留め用の擁壁を新設するものである。掘削深度は現地表からわず

か20cmほどであるが、工事地域の西に隣接する第2学生食堂敷地部分で、昭和46年の調査時に弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡6棟をはじめとして同時期の土溝・溝多数が検出されており、今回の工事地域を含めた周辺地域一帯がこの時期の居住域であったと考えられていることから、立会調査を実施することとした。

その結果、15cmの層厚をもつ表土直下に黄橙色(Hue 10YR 7/8)粘土の地山が検出されたが、顕著な遺構は認められなかった。なお、表土中から土師質土器



Fig. 42 調査区位置図

吉田橋内の立会調査

鼎の脚部が出土している。

出土遺物 (Fig. 43-1)

土師質土器鼎の脚部で、脚部を欠損する。指圧による整形痕を明瞭に残し、粗雑なナデを施す。二次加熱による赤変が随所にみられ、煤の付着も著しい。

0-15区調査地点の表土中より出土。

採集遺物 (Fig. 43-2-6)

0-15区調査地点の東に隣接する農学部害虫学実験

畑で採集した須臾器である。2-4は甕。2は大形の甕の胴部で、外面に平行タタキがわずかに残る。3・4は短く外反する口縁部をもち、端部は屈曲して上方へ立ち上がる。内外面とも横ナデ仕上げ。同一個体の可能性がある。5は甕の底部で、内外面とも横ナデ仕上げであるが、外底面はヘラ切り放しのまま放置する。6は甕の底部。底部と体部の境より内側にわずかに外方へ開く高台を貼付する。内外面とも横ナデ仕上げ。実験畑採集資料には他に土師器甕の把手などがあるが、大半は8世紀代の須臾器で、第2学生食堂敷地部分とは時期の異なる遺構ないしは遺物包含層が、付近に存在する可能性がある。

(河村)

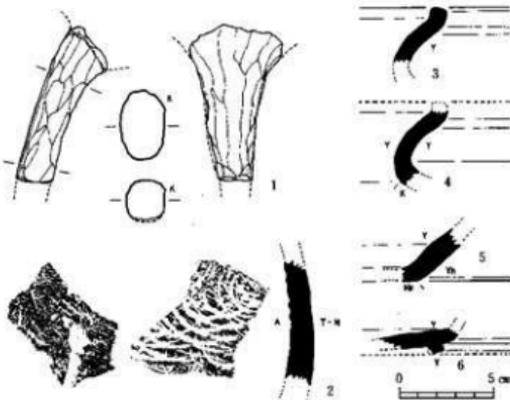


Fig. 43 出土遺物および採集遺物実測図

Tab. 5 出土遺物および採集遺物観察表

№	器種	口径 *径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
0-15区調査地点 表土中							
1	土師質土器 鼎	-	(8.2)	棕色 (5 YR7/6)	良好 径2mm以下の長石・石英含む	良好	*二次加熱による赤変著しい。煤付着
農学部害虫学実験畑 採集							
2	須臾器 甕	-	(6.5)	明オリブ灰色 (2.5GY7/1)	やや粗い 1mm以下の砂粒若干含む	良好	
3	須臾器 甕	-	(3.0)	外面-灰白色 (10Y7/1) 内面-青灰色 (5 B6/1)	精良 1mm以下の砂粒若干含む	良好	4と同一個体か
4	須臾器 甕	-	(3.9)	外面-灰白色 (10Y7/1) 内面-青灰色 (5 B 6/1)	精良 1mm以下の砂粒若干含む	良好	3と同一個体か
5	須臾器 甕	-	(2.8)	青灰色 (10BG5/1)	良好 2mm以下の砂粒若干含む	良好	
6	須臾器 甕	-	(1.3)	明青灰色 (5 PB7/1)	良好 1mm以下の砂粒わずかに含む	良好	

13 本部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査

調査地区 本部構内 L-14区

調査期間 昭和62年2月25日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約12m²

調査結果 工事は、本部管理棟1号館の東側の出入口に身障者用の昇降スロープを新設するものである。当地域周辺は、「遺跡保存地区」周辺同様、埋蔵文化財の分布状況が次第に明らかになってきている。大学会館前庭部では竪穴住居跡・袋状竪穴・土壇・溝・埋甕など弥生時代前期～江戸時代の各時期の遺構が検出されており、しかも西に向かうにつれて分布密度が高く、広範囲に遺存していた¹⁾。また、本部2号館の敷地でも弥生時代後期後半の土壇や、溝で囲んだ区画内に井戸等を備えた室町時代の屋敷跡が検出されており、この付近一帯が弥生時代以降、生活の場として機能していたことを示唆している。

工事による掘削は現地地表下43cmまでと比較的浅い。しかし、上述の前庭部の本部寄りでは現地地表下約90cmで遺構面に達し、当工事地域が前庭部に比べやや低くなっていることから、遺構に影響を及ぼすことが十分に考えられたため、立会調査を実施した。

その結果、工事による掘削は構内造成時の埋め土の範囲内であったが、南端部を深掘り



Fig. 44 調査区位置図

したところ、現地地表下80cmで黄橙色粘質土の地山が検出され、前庭部分の地山面との標高差はほとんどないものと考えられた。したがって、本部管理棟1号館の前庭部寄りの地域では構内造成による大規模な削平は行なわれておらず、遺構が埋存している可能性が高い。(河村)

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報V」、1986年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「昭和54年度調査の概要」(「山口大学構内遺跡調査研究年報I」、1982年)。

14 経済学部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査

- 調査地区 経済学部構内 K-20区, L-18~20区
 調査期間 昭和62年3月13日(C地点), 同3月17日(A・B地点), 同3月23日(D地点)
 調査方法 工事施工時における立会調査
 調査面積 A地点 約30㎡, B地点 約20㎡, C地点 約16㎡, D地点 約12㎡
 調査結果 工事に伴う掘削は現地表からA地点30cm、B・C地点40cm、D地点20cmであったが、今後の諸開発に先立ち、深掘りを行なって地下の状況を観察することとした。

A地点では現地表下50cmで植物遺体を含む黒色粘土の堆積がみられた。層厚は20cmで、調査区内では遺物は出土しなかった。また、その下位に淡青灰色砂礫層の地山が検出され、わずかに湧水が認められたことから、この付近は谷状の低湿地を形成していたものと考えられる。なお、A地点の北東に位置する中央広場は、大学統合移転時の調査で谷状の低湿地であったことが確かめられており、このA地点部分と一連のものと考えられるが、出土遺物がないため、時期比定については今後の調査に期待したい。

B地点は現地表から1.4m掘り下げたが攪乱が著しく、良好な資料は得られていない。

C地点は現地表から1.15mまで構内造成時の埋め上で、その直下に黄褐色粘土の地山が認められたが遺構は検出されず、この地点も攪乱が著しいものと思われる。

D地点ではスロープ取設に併行し、その下位に排水管を南北に埋設する工事が予定された。スロープ取設工事に伴う掘削では顕著な遺構・遺物は確認されなかったが、現地表から40cm掘り下げたところで黒褐色粘質土の埋土をもつ柱穴が検出された。排水管埋設に伴う掘削は現地表から60cmを必要とするものであったが、各関係部局と協議した結果、工事による掘削を、遺構を破壊しない現地表下35cmまでにとどめることで了承が得られ、遺構は現地保存されることとなった。

(河村)



Fig. 45 調査区位置図

15 附属図書館荷物運搬用スロープ取設に伴う立会調査

調査地区 L-16区

調査期間 昭和62年3月16日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約8㎡

調査結果 工事は、附属図書館西入口付近を幅約1.5m、長さ約6mにわたって弧状に掘削し、荷物運搬用の昇降スロープを取設するもので、掘削は現地表から40cmまでである。

今回の調査地点の北東に隣接する図書館増築部分では、弥生時代後期から平安時代にかけての溝7条、古墳時代前期を上限とする河川跡のほか、土壌・柱穴が検出されている。また、灰褐色粘質土・黒褐色粘質土・明褐色砂質土の3層に分層される遺物包含層がほぼ全面に分布しており、弥生時代前期から鎌倉時代前半にかけての多量の遺物が出土している。増築部分の地表面はほぼ平坦で、遺物包含層の最上面は地表面から約1m、遺構面は約1.3~1.4m下位で検出される。しかし地表面は、増築部分の南端部から、南へ向かって急



Fig. 46 調査区位置図

激に下降しており、今回の調査地点は増築部分より約1.1~1.2mも低くなっていることから、工事により遺物包含層に影響を及ぼすことが十分に考えられたため、立会調査を実施した。

その結果、工事範囲の大部分が既設の埋設管によって大きく削平されていたため、遺物包含層の堆積、遺構は認められなかった。しかし、増築部分で検出した黒褐色粘質土が埋め土中に混在しており、内部から弥生土器が出土した。

出土遺物 (Fig. 47, PL. 16)

壺の頸部から肩部にかけての破片で、外面に扁平な1条の突帯を貼り付ける。風化著しく内外面

とも調整不明。胎土には砂粒をやや多く含み、やや不良。焼成は良好で色調は橙色 (Hue 5 Y R 6/6)。(河村)



Fig. 47 出土遺物実測図

〔注〕

1) 山口大学埋蔵文化財資料館「中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ」, 1985年)。

16 教養部37番教室改修に伴う立会調査

調査地区 教養部構内 K-16区

調査期間 昭和62年3月24日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約1㎡

調査結果 工事は、教養部講義棟の改修に付随して污水管および汚水枳を埋設するものである。今回の調査地点の南側約20mの地点では、屋外掲示板設置に伴う立会調査を実施しており、地表面から60～65cm下位で茶褐色粘質土の遺物包含層が検出されている¹⁾。この層の平面的な拡がりには確認していないが、現段階では、大学会館前庭部や図書館増築部分で検出した遺物包含層と同一のものと考えており、今回の調査地点付近にも埋存する可能性が十分に考えられた。なお、污水管の埋設による掘削は現地表から35cmまでで、直接埋蔵文化財に影響のない深度であることが確かめられているため、調査対象から除外した。

汚水枳の埋設に伴い現地表から60cmまで掘削したが、構内造成時の埋め土の範囲内であり、顕著な遺構・遺物は認められなかった。また、工事に支障のない現地表下75cmの深さまで掘り下げたが、堆積層に変化はなかった。しかし、埋め土内に遺物包含層である茶褐色粘質土がブロック状に混在しており、この周辺に堆積する遺物包含層が、造成等により多少なりとも削平を受けていることが考えられる。

教養部構内ではこれまで点的な立会調査によって断片的な資料が得られているにすぎない。したがって、学内でも比較的調査の進んでいる本部・教育学部各構内に比べ、同構内での埋蔵文化財の分存状況は未だ十分には把握しきれておらず、今後の調査が必要であろう。(河村)

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教養部環境整備に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』、1985年)。



Fig. 48 調査区位置図

17 市道神郷1号線および問田神郷線の送水管理設に伴う立会調査

調査地区 市道神郷1号線および問田神郷線の南緑部

調査期間 昭和61年8月11～29日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約2100㎡

調査結果 大学敷地の南緑部を弧状に巡る市道で、幅約1.6m、総延長距離約1270mに及ぶ送水管理設工事が計画された。この市道を隔てた附属養護学校敷地内でも、今までの調査で遺構が検出されており、大学構内吉田遺跡の市道以南への拡がりや推察されていることから、工事によって未周知の遺物包含層・遺構に影響する可能性が十分に考えられた。よって関係機関と協議の結果、工事内容・規模等を勘案し、山口市教育委員会が立会調査を実施することとなった。当資料館も、構内遺跡南緑部付近での土層の堆積状況、遺物包含層・遺構の有無に関する資料が不十分であることから、調査協力を行なうこととした。

なお掲載した資料は、山口市教育委員会の篤志により提供を受けたものであるが、当該機関から報文の発行が予定されているため、本稿では調査結果の概要を記すにとどめる。

主な遺構には家畜病院付近で検出された幅約5mの奈良～平安時代の河川跡がある。墨書のある須恵器坏蓋(PL.17-⑦)・土師器・六連式製塩土器(PL.17-⑥)などが出土し、出土遺物の時期や推定される流路方向から考えて、昭和60年度に果樹園西端部で検出した河川跡と同一のものであろう。他に、ハンドボール場前で古墳時代後期の溝、また南門前



Fig. 49 調査区位置図

でも溝状遺構が検出されており、後者からはヘラ切り底の土師器塚が出土している。

遺物包含層は、野球場南東端部から南門にかけての少なくとも幅約160mの範囲に集中分布し、上層から淡茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土の二層に分層される。前者は10～20cmの層厚をもち、須恵器等を含むが遺物の出土量は極めて少ない、後者は最大約30cmの層厚をもち、主に弥生時代前期末から後期末の遺物を包含する。中でも壺・甕を主体とした前期末から中期初頭の遺物は出土量が比較的多く、良好な資料も少なくない。

他にハンドボール場や樺野寮付近でも、遺物包含層が認められている。また、先に述べた南門前の溝状遺構が淡茶褐色粘質土を掘り込んでいることから、古墳時代後期から下っても平安時代前半頃の遺物を包含する堆積層もまた、この周辺にあるものと思われる。

遺物は南門以北でも出土している。南門からラグビー場付近までは、弥生時代前期末～中期初頭の土器を包含する堆積層が、大学側の断面にのみ部分的に検出され、さらに地山がこの部分で不規則に落ち込んでいることから、当該期の遺構の存在を予想させる。ラグビー場以北では、遺物は砂礫層からの出土で、周辺からの流れ込みである公算が強い。

野球場周りの遺物包含層から出土した遺物（PL. 17-①～⑤）について、簡単に触れておく。

壺は、口縁部が大きく開き肥厚帯を有するもの、短く緩やかに外反するものなどがある。前者には、頸部外面に多条の沈線が巡り、内面に断面三角形の突帯を1条貼付するものや、肥厚帯に貝殻による鋸歯文を施文するものなどがある。肩部から胴部にかけては、無軸羽状文・木葉文が施文されるが、いずれも施文具は貝殻で、ヘラ描きの文様はない。

甕は、短く緩やかに外反する口縁下にヘラによる沈線が4～6条巡るもの、口縁部が内面に稜をもって水平に近く屈曲するものなどがあり、後者では沈線・突帯をもつものはみられない。また、直立する口縁部の下位に1条の突帯を貼付し、ヘラによる刻目を施すものもある。後期の土器は前期末～中期初めのものに次いで多く、複合口縁をもつ壺、「く」の字に外反する口縁部をもつ甕、上位で屈曲し外反する高坏、支脚などがある。

今回の調査は工事施工時における立会調査であることから、調査内容には限界があるが、本学構内南西縁部で連続的に土層の堆積状況、遺構・遺物包含層の分布範囲、旧地形の概略を把握することができた。今後、本構内および周辺地域における比較・検討、または諸開発の策定に寄与する良好な資料として意義深い。

(河村)

[注]

- 1) 山口市歴史文化財資料館「農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査」(「山口市立会調査報告書」(山口市立会調査報告書研究年報V)、1986年)。

第2節 小串構内の立会調査

1 医学部附属病院外来診療棟新営に伴う立会調査

調査地区	医学部附属病院構内
調査期間	昭和61年5月20・26日、6月20・27日、7月24日
調査方法	工事施工時における立会調査
調査面積	約5㎡

調査結果 昭和60年度、この外来診療棟新営に先立って試掘調査を実施しており、遺構は検出されなかったが、土師質土器・瓦質土器・国産陶磁器が出土し、小串構内東半部に遺物を包含する青黄橙色粘質土が堆積することを確かめた。しかし小串構内では、調査時の安全管理上から同層の下面付近までしか掘削しておらず、それ以下の土層の堆積状況は不明であった。幸い今回、当該建物の新営工事が、現地表から約10mにも及ぶ掘削を伴うため、連続的に堆積層を観察する機会が得られ、5地点を選定して立会調査を実施した。

各地点の基本層序はほぼ同一である。現地表から1.9~2.5mまでは構内造成時の埋め立て、その下に旧耕作土が残存する。旧耕作土の下には、遺物を包含する青黄橙色粘質土が厚さ20~30cmにわたって堆積しているが、今回の調査では遺物は出土していない。

それ以下は、青灰色粘土（厚さ約30cm）、粒子径の異なる砂層（厚さ2.1~2.5m）と続く。

砂層は、基幹整備に伴う試掘調査で、幼貝を混じえた貝殻を含み、少なくとも²⁾1mの厚さをもつことがわかっていて、今回の調査でその堆積厚が確かめられた。また、その下には当地が一時期海であった際の基盤であると思われる、厚さ約4mにも及ぶ硬くしまった暗灰色砂質粘土（砂岩風化土）、石炭を含む頁岩の岩盤が認められた。（河村）



Fig. 50 調査区位置図

〔注〕

- 1) 山口大学理蔵文化財資料館「小串構内医学部外来診療棟新営に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』, 1986年)。
- 2) 山口大学理蔵文化財資料館「宇部(小串構内)医学部基幹整備に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報IV』, 1985年)。

2 医学部附属病院外来診療棟周辺環境整備等に伴う立会調査

調査地区 医学部附属病院構内

調査期間 昭和62年3月24日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 計約18㎡

調査結果 工事は、外来診療棟周辺の植栽と、雨水管および雨水井の埋設である。

植栽工事は、外来診療棟竣工後にロータリーとして活用される、短期大学部講義棟と外来診療棟との間で主に実施されるもので、掘削深度は樹種により異なるが、最深部で現地地表から1mまでである。しかし、外来診療棟予定地部分の調査で、遺物を包含する堆積層は現地地表から1.2m下位で検出されていることから、植栽工事は調査対象から除外した。

雨水管の埋設工事は、外来診療棟の南端部から旧カルテ倉庫東端部を経てA地点への管路が予定され、その間に9ヵ所の雨水井を取設するものである。旧カルテ倉庫以南は外来診療棟新営に伴う立会調査（本節前項参照）で地下の状況を十分に把握したため、工事に伴う調査は行なわず、未調査地域として残っている管路北端部の、雨水井を取設する2地点について立会調査を実施した。工事による掘削は現地地表から約2.2mまでである。

A地点では厚さ90cmの構内造成時の埋め土の下位に旧耕作土・床土が残存する。その下に遺物は出土しなかったものの層厚20cmの青黄橙色粘質土が堆積し、以下青灰色粘土、青灰色砂混じり粘土と続く。工事基底面まで掘り下げたが、砂層は検出されなかった。B地点は埋め土の厚さ80cmで、その直下に青黄橙色粘質土が堆積しているが、湧水が激しく掘削を断念した。A・B両地点とも基本層序は外来診療棟予定地部分と大差ないものであった。

〔注〕

- 山口大学歴史文化財資料館「小中構内医学部外来診療棟新営に伴う試験調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1986年）。



Fig. 51 調査区位置図

第3節 常盤構内の立会調査

1 工学部尾山宿舍排水管改修に伴う立会調査

調査地区 工学部尾山宿舍構内

調査期間 昭和61年7月8日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約6㎡

調査結果 工事は、既設の職員宿舍2棟の東・北の各両辺に沿って、主として汚水樹とそれらを連結する排水管を新設するものであった。新設管路のうち職員宿舍に沿った部分の大半は、宿舍建設の際すでに掘削・削平されていることから、両宿舍間を南北に連結する幅約1.3m、長さ約5.5mの路線について、立会調査を実施した。

その結果、現地表下約16～25cmで明黄褐色（Hue 10Y R 6/8）粘土の地山が検出されたが、遺構・遺物は全く認められなかった。地山面がほぼ平坦であり、地山より上位の堆積層も同地域を造成し整備した際の碎石に限られていることなどから、従来の調査結果と合わせ、当構内の東半部では過去に遺構が存在したとしてもすでに消失した可能性が高い。

なお、75～85cmの層厚をもつ黄褐色粘土の下位には青灰色（Hue 10B G 5/1）礫混じり粘土の堆積が認められたが、工事内容等からその存在を確認したにとどまり、堆積厚は明らかでない。 (河村)

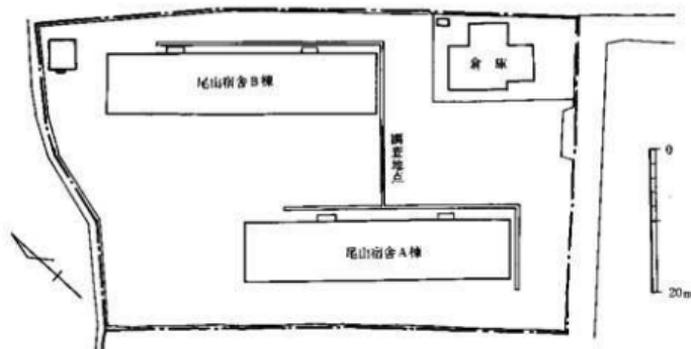


Fig. 52 調査区位置図

2 工学部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査

調査地区 工学部構内

調査期間 昭和61年8月21日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 A地点 約15㎡, B地点 約10㎡, C地点 約4㎡

調査結果 工事は、キャンパスの中央部を中心とした5地点に身障者用の昇降スロープを設けるもので、現地表からA地点50cm、他の4地点は40cmを掘削するものであった。この5地点のうち、既設の建物新嘗の際の掘削および過去の調査結果から、明らかに削平が行なわれている2地点を除き、残り3地点について立会調査を行なった。

A地点はキャンパスの北端近く、学生食堂の東辺部にあたり、近代以降の土器若干が出土した受水槽改修に伴う立会調査地点の東約70mに位置する。40cm掘り下げた段階で黄褐色小礫混じり粘質土の地山が検出され、地山より上位は構内造成時の埋め土であった。

B地点はA地点の南東約140m、東講義棟1号館と化学工学科棟との間に位置する。構内造成時の埋め土直下が黄褐色粘土の地山であるが、埋め土の層厚は14~15cmと薄い。

C地点はB地点の西約60mに位置する。工事範囲内は構内造成時の埋め土が堆積しており、わずかに北端部に工事基底面に赤褐色粘土の地山上面が検出された。

3地点とも造成時の削平が著しいためか、遺構は全く認められない。A地点周辺は調査資料が少なく、未だ埋蔵文化財の有無を即断できないが、体育館以南のB・C地点周辺は造成によって周囲に比べ一段低くなっており、2地点とも埋め土直下が地山であることから、過去に遺構が存在していたとしても、削平され消滅している可能性が高いと考えられる。

(河村)

〔注〕

- 1) 山口市埋蔵文化財資料館「工学部受水槽改修に伴う立会調査」(「山口市構内遺跡調査研究年報V」、1986年)。

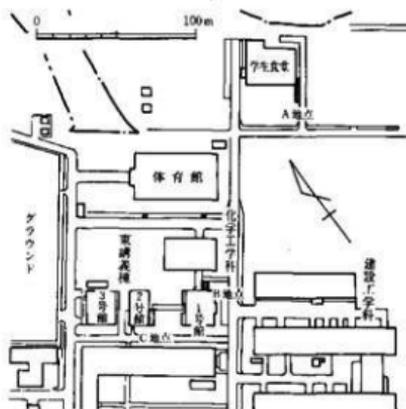


Fig. 53 調査区位置図

3 情報処理センター（常盤センター）空調設備取設に伴う立会調査

調査地区	工学部構内
調査期間	昭和61年8月21日
調査方法	工事施工時における立会調査
調査面積	約30㎡

調査結果 工事は、情報処理センターに付属する電算機用のパッケージを取設し、あわせてその格納庫を新設するもので、工事による掘削は現地表から110cmまでである。その結果、現地表から80cmまでは構内造成時の埋め土で、その下に蛇紋岩からなる岩盤が検出された。顕著な遺構・遺物は皆無であった。

常盤構内では、昭和58年度から構内施設整備工事等に際する調査を実施しているが、これまでに行った調査地点・面積とも、本学の他の構内に比べて極めて少ない。そのため同構内での埋蔵文化財の分布状況はほとんどわかっておらず、遺構・遺物の有無を確認することが今後の課題となっている。しかし今回の調査地点周辺は、校舎新営、また図書館増築に伴う調査がそれぞれ行なわれており、常盤構内のなかでは比較的地下の状況が明らかになっている地域である。両調査とも、土層観察の結果、例外なく構内造成時の埋め土直下が黄橙色粘質土の地山で、その下位には蛇紋岩からなる岩盤が検出されている。した

がって、今回の調査地点では後世の大規模な削平によって黄橙色粘質土が消失し、地山より下位の岩盤が、埋め土直下に検出されたものと考えられる。(河村)



Fig. 54 調査区位置図

〔注〕

- 1) a 山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（常盤構内）工学部校舎新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年）。
- b 山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（常盤構内）工学部図書館増築に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年）。

第4節 亀山構内の立会調査

教育学部附属山口小学校電柱移設に伴う立会調査

調査地区 教育学部附属山口小学校構内

調査期間 昭和61年7月9日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約0.5㎡

調査結果 工事は、小学校の南端を東西に走る市道に存在する電柱を撤去し、同構内へ新規に埋設するもので、埋設箇所は2地点である。

グラウンドの南側の敷地境界線付近は、帯状に一段高くなっており、グラウンド面との比高差は1m近くになる。A地点はその一段高い部分に位置し、現地表から約1.3mまでは構内造成時の埋め土で、その下位には厚さ約20cmの旧耕作土が残存していた。その下には黄褐色粘質土の地山が厚さ約1.5mにわたって堆積しており、青灰色粘土へと続く。

A地点の東約25mに位置するグラウンドの南端中央部では、旧耕作土直下に黄褐色粘質土の遺構面が存在し、¹⁾電を付設した5世紀前半頃の竪穴住居跡が検出されているが、床面までの深さは約20cmと浅く、後世の削平が考えられた。また、検出面はグラウンド上面から約70cm下位であり、A地点の現地表から換算すれば約1.7m下位になる。しかし、A地点では、上述のとおり地表面から約1.5mで地山が検出されたことから、グラウンド南端の一段高い部分では削平がより少ないものと思われ、より良好な状態で遺構が検出される可能性がある。

なお、グラウンドに比べ約2m高くなっているB地点では、現地表から2.3mまで構内造成時の埋め土であったが、湧水が激しく、それ以下の堆積層は観察できなかった。(河村)

(注)

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報」、1985年)。

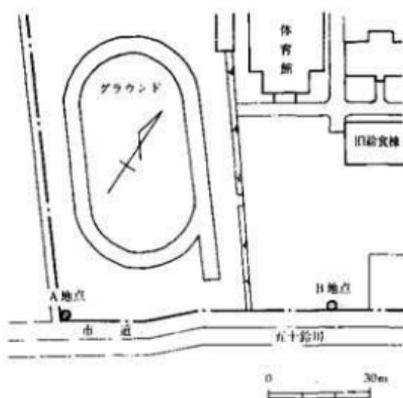


Fig. 55 調査区位置図

第5節 光構内の立会調査

教育学部附属光小学校創立記念事業に伴う立会調査

調査地区 教育学部附属光小学校構内

調査期間 昭和61年10月20日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約2.5m²

調査結果 工事は、ブロンズ像建立に伴う台座設置のため、現地表から50cmまで掘削するものである。その掘削深度内は構内造成時の埋め土で、埋蔵文化財に直接の影響はなかったが、掘削基底面で須恵器・歴史時代土師器を含む黄褐色の海成砂層が検出された。出土遺物は小片のため固化しえないが、従来、本構内で検出された遺物包含層は黒褐色砂礫層¹⁾であるとされており、少なくとも2層の遺物包含層が存在することが明らかとなった。

なお調査期間中に、本構内の北に面する海岸で多量の遺物を採集したので、紹介する。

採集遺物 (Fig. 56, PL. 16・17)

土師器・土師質土器・須恵器・瓦質土器・磁器・陶器・土錘および瓦がある。

1～4は土師器。1・2は甕で、1の口縁部は緩やかに外反し、胴部内面はヘラケズリの可能性。2の口縁部は短く「く」の字に外反し、頸部外面を強く横ナデする。3は糸切り底と思われる高台付きの壺。4は鉢で頸部外面に扁平な1条の突帯を貼付。

5・6は土師質土器。5は盤か。6は小皿で体部下半を強く横ナデする。

7～9は須恵器甕。7は口縁部が外彎気味に「く」の字に屈曲し、端部は肥厚する。外面のタタキは8が平行、9格子。

10は瓦質土器播鉢で、口縁端部が上下両方に肥厚し、断面三角形を呈する。

11・12は磁器。11は小壺で口縁端部は口禿。12は壺で、見込みを除いて軸を掻き取る。13～17は陶器。13・14は播鉢。

13は片口。14の内面の掻き上げは右から



Fig. 56 調査区位置図

光欄内の立会調査

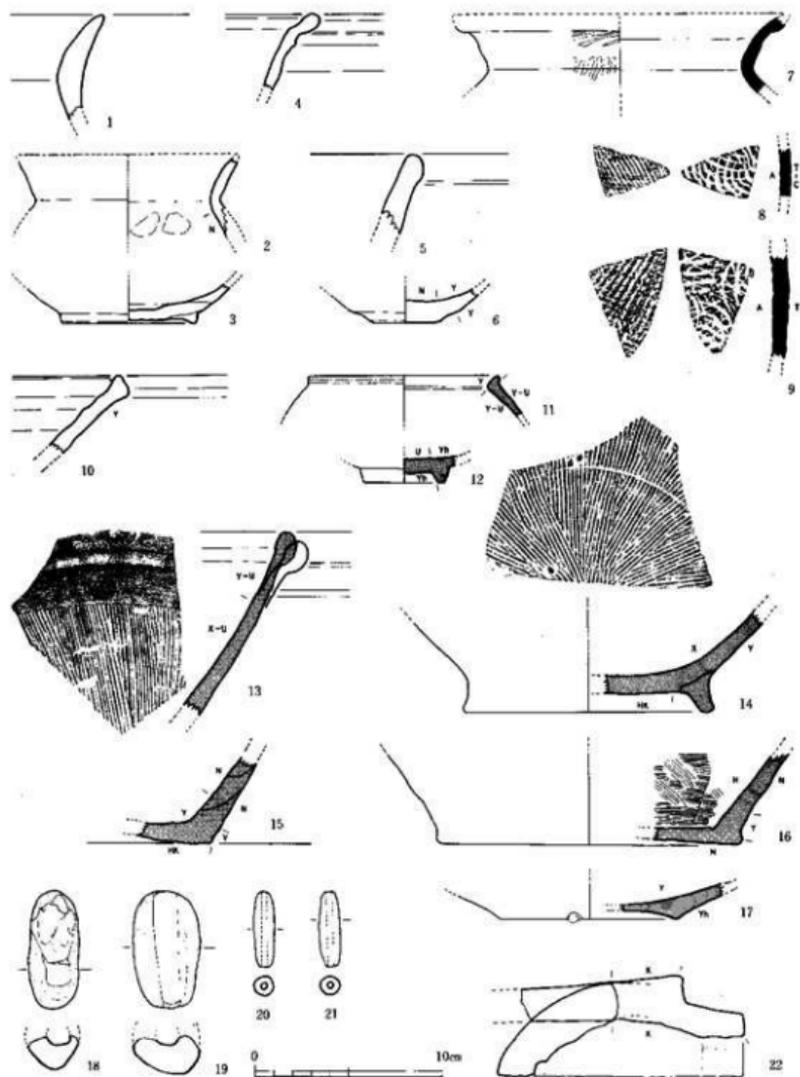


Fig. 57 御手洗湾採集遺物実測図

左へ順次行。15・16は甕の底部。17は鉢で、体部外面下半には円錐とちが付着。

18～21は土鉢。有溝の大型品(18・19)と管状のもの(20・21)とがある。前者は指圧による整形痕が明瞭に残る。22は丸瓦で凸凹面ともヘラケズリを行なう。

上述した遺物は、古墳時代終末～江戸時代のもが混在するが、江戸時代に属するものが主体で、昭和58年度に検出した石垣状遺構の時期に近い。また時期の遡る遺物は、この石垣状遺構構築の際に、遺物包含層から遊離した可能性が高い。(河村)

[注]

- 1) 福本幸夫「御手洗遺跡」(「先原史時代の光市」、1966年)。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属光小学校自転車廣場設置に伴う試掘調査」(「山口大学構内遺跡調査研究年報目」、1985年)。

Tab. 6 御手洗湾採集遺物観察表

法量()は現存値

No	器 種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色 調	胎 土	焼成	備 考		
1	土 師 器 甕	—	(5.6)	外一にぶい赤褐色(5YR6/4) 内一にぶい黄褐色(10YR6/4)	粗い	1.5mm以下の長石、 石英、赤褐色砂、 赤褐色母	良好		
2	土 師 器 甕	11.8	(4.2)	器表一褐色(7.5YR6/6) 器内一黒色	良好	3mm以下の赤褐色砂、 長石、石英等を含む	良好		
3	土 師 器 甕	*6.8	(2.1)	器表一青灰色(10YR7/3) 器内一赤褐色(5YR6/4) 器底一赤褐色(5YR6/4)	良好	2mm以下の長石、 石英等かなり含む	良好		
4	土 師 器 鉢	—	(4.0)	器表一にぶい褐色(7.5YR5/3) 器内一黒色	粗い	4mm以下の長石、 石英かなり含む	良好		
5	土師質土器甕	—	(4.3)	外一にぶい褐色(5YR7/4)	粗い	3mm以下の長石、 石英かなり含む	やや軟		
6	土師質土器小甕	*3.0	(1.8)	赤褐色(10R6/8)	良好	1mm以下の長石、 若干含む	良好		
7	須恵器甕	17.6	(4.1)	灰白色(7.5Y7/1)	良好	3mm以下の長石 やや含む	良好		
8	須恵器甕	—	(2.6)	外面一明すり、灰白色(7.5GY7/1) 内面一灰白色(7.5Y7/1) 器底一にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	1.5cm以下の長石 を含む	やや軟		
9	須恵器甕	—	(5.5)	器表一灰色(N 4/0) 器内一灰黄色(2.5Y7/2) 口縁一周一暗青灰色(5PB3/1) 器底一灰白色(2.5GY8/1)	良好	2mm以下の長石、 石英含む	良好		
10	瓦質土器罐鉢	—	(4.1)	素地一淡黄色(2.5Y8/4) 釉一淡黄褐色(10YR8/4)	良好	2mm以下の砂粒	良好		
11	磁 器 小 壺	10.0	(2.1)	素地一淡黄色(2.5Y8/3) 釉一オリーブ黄色(7.5Y6/3)	粗い	細砂かなり含む	軟質 口先		
12	磁 器 罐	*4.3	(1.4)	素地一淡黄色(2.5Y8/3) 釉一オリーブ黄色(7.5Y6/3)	良好	黒色微砂多く含む	良好		
13	陶 器 罐 鉢	—	(9.8)	素地一棕色(2.5YR6/8) 釉一暗赤褐色(10R3/2)	良好	微細砂粒若干含む	注口部分		
14	陶 器 罐 鉢	*13.0	(5.5)	器表一にぶい赤褐色(2.5YR4/3) 器内一褐色(2.5YR6/6)	良好	3mm以下の石英、 長石若干含む	良好		
15	陶 器 甕	—	(4.7)	赤褐色(17R5/4)	良好	3mm以下の赤色砂 相当量含む	良好		
16	陶 器 甕	*15.6	(4.8)	素地一にぶい赤褐色(2.5YR4/3) 釉一オリーブ褐色(5Y3/1)	粗い	3mm以下の長石他 かなり含む	良好		
17	陶 器 鉢	*9.2	(1.9)	器表一淡黄色(2.5Y7/2) 器内一淡黄色(2.5Y7/2) 器底一淡黄色(2.5Y7/2)	精良	細砂やや含む	良好		
No	器 種	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	色 調	胎 土	焼成	備 考	
18	土 鉢	(2.6)	6.3	(26.9)	にぶい赤褐色 (2.5YR4/3)	粗い	2mm以下の石英、1mm程度の黒雲母・金雲母を多量に含む	良好	カキ付着
19	土 鉢	(3.5)	6.3	(41.2)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	粗い	3mm以下の石英、1mm程度の黒雲母・金雲母を多量に含む	良好	
20	土 鉢	1.1	4.0	3.9	にぶい褐色 (5YR6/4)	良好	1mm程度の石英若干、1mm以下の黒雲母・金雲母を多量に含む	良好	
21	土 鉢	1.1	4.0	4.7	灰褐色 (5YR5/2)	良好	1mm以下の黒雲母・金雲母を多量に含む	良好	
22	丸 瓦	—	(11.9)	—	灰白色 (7.5Y7/1)	良好	2mm以下の石英・長石等若干含む	良好	

第6節 その他構内の立会調査

1 湯田宿舎給水管改修に伴う立会調査

調査地区 山口市湯田温泉六丁目8-29 湯田職員宿舎構内

調査期間 11月11・15・19・21日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約35㎡

調査結果 工事は、宿舎東半部における給水管の布設替えに伴い、A～C棟間を幅50cm、深さ95～180cmにわたって掘削するものである。なお、各宿舎棟建築時に明らかに削平を受けている地域は調査対象から除外し、管路長にして約70mを実際に立会調査した。

各管路内とも現地表から65～95cm下位に旧耕作土が残存し、その下には厚さ20～30cmの灰黄色粘土が堆積する。掘削深度の深いC棟付近でそれ以下の堆積層を観察したところ、現地表から約2mまでの掘削で、上位から黒灰色粘土、青(緑)灰色粘土が堆積していた。黒灰色粘土は厚さ20～30cmで、灰黄色粘土同様、遺物は包含していない。青(緑)灰色粘土は地山で、現地表から1.2～1.5mで上面が検出される。また、径約4.5cm、現存長約20cmの木杭2本が黒灰色粘土から打ち込まれていたが、出土遺物がなため時期は不明である。

なお、吉敷・湯田付近の小字名には「坪」の名が残り、古代の条里制が施行された地域と考えられている。湯田宿舎の敷地付近にも条里地割が存在したことが考えられるが、今回の調査では畦畔・水路等の条里遺構は検出されていない。(河村)

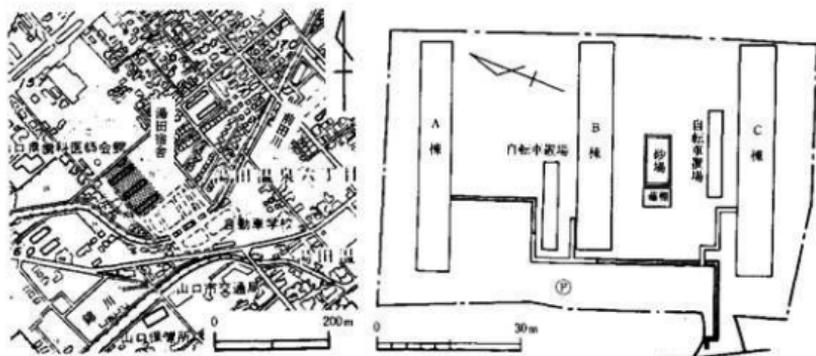


Fig. 58 調査区位図

2 経済学部職員宿舍下水管改修に伴う立会調査

調査地区 山口市水の上町6-9 経済学部2号宿舍構内、
同 旭通り二丁目3-32 同 6号宿舍構内
調査期間 昭和62年3月14日(6号宿舍)、同3月19日(2号宿舍)
調査方法 工事施工時における立会調査
調査面積 2号宿舍 約7㎡、6号宿舍 約1㎡
調査結果 本学の職員宿舍は山口市内各所に分散している。今回は、そのうちの一つである経済学部2号・6号各宿舍において、下水管改修に伴い立会調査を行なった。以下、宿舍ごとに分けて記述する。

(2号宿舍)

2号宿舍は、山口盆地の北西部、独立丘陵状の香山(標高約95m)の西縁部付近に立地する。行政上山口市水の上町に所在し、西には一ノ坂川が盆地に流れ込んできている。

工事による掘削は、第1地点で現地表から80cm、第2～4地点で50cmまでであったが、各地点とも工事掘削深度内は黄褐色の山土を主体とした埋め土であった。しかし、第4地点では埋め土中から丸瓦を検出した。

出土遺物 (Fig. 60, PL. 16)

丸瓦の破片。側面の一部が残存するが、凸凹両面とも風化が著しい。凸面には、側面に平行および直行する刷毛目が施され、胎土は須恵質で砂粒を多く含み軟質である。室町時代を遡る可能性がある。



Fig. 59 調査区位置図(2号宿舍)

その他構内の立会調査

2号宿舎のすぐ北側にある洞春寺とうしゅんじの山門は、室町時代の応永11年(1404年)、大内盛見おほうちりみきによってこの地に創建された国清寺こくしょうじに関連する遺構かと考えられている¹⁾。なお、現在のところ国清寺に関する考古学的資料は全くなく、今回出土した丸瓦が同寺に関係するものかどうか明らかでない。

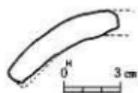


Fig. 60 2号宿舎出土遺物実測図

〈6号宿舎〉

6号宿舎は、行政上、山口市旭通りに所在する。一ノ坂川が壺野川へ合流する付近の一ノ坂川下流の右岸に位置し、一ノ坂川が形成した扇状地の扇端部付近に立地する。

山口盆地の遺跡立地は、その大半が河川流域の丘陵上で、盆地最大の扇状地である一ノ坂川扇状地に立地する遺跡はこれまでほとんど知られていない。わずかに扇中部に、弥生

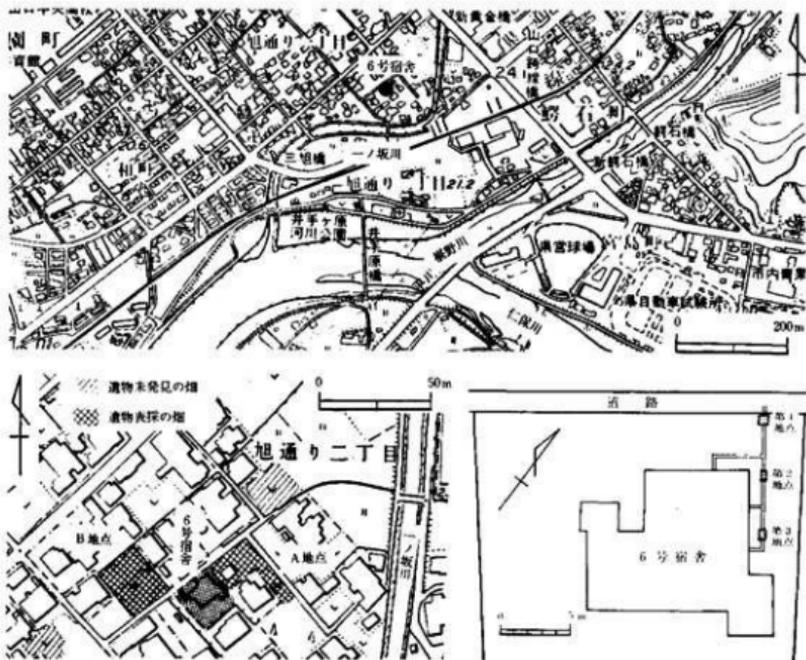


Fig. 61 調査区位置図 (6号宿舎)

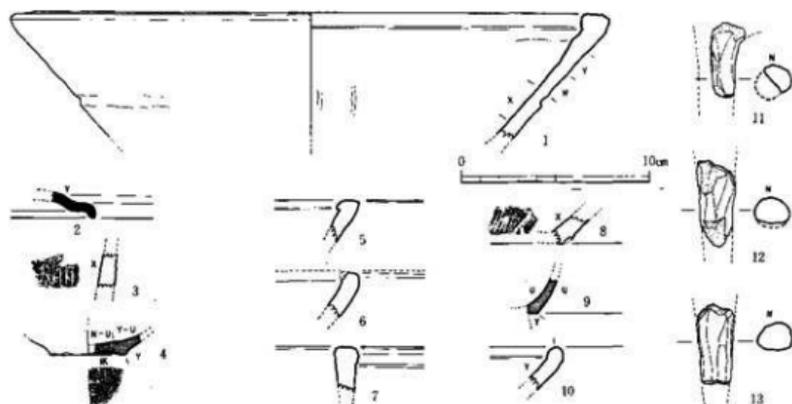


Fig. 62 6号宿舍出土遺物および周辺畑地採集遺物実測図(土器)

土器とともに縄文時代晩期の土器を出土した松柄遺跡が所在するにすぎない。遺物は地表下1mに堆積する砂礫層からの出土であり、二次堆積の可能性が高いとされている。²⁾

今回の調査は、布設管路内で3地点を選定し、土層の堆積状況を観察したものである。各地点とも、工事による掘削深度である現地表から50cmまでは埋め土(攪乱土)であったが、工事地域の北端部にあたる第1地点では、埋め土中から土師質土器が出土した。

なお調査期間中、周辺に存在する5枚の畑地で表面採集を試みた。その結果、今回の調査地域の東および北西に隣接する2枚の畑地で、須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器および刹片の散布が認められた。以下、工事の際出土した遺物とあわせて紹介する。

出土遺物 (Fig. 62-1, PL. 17)

土師質土器の播鉢。口縁端部の内側に断面三角形の突帯を貼り付け、内側へ突出させる。剥落が著しいが、体部内面にわずかに櫛歯状工具による条線が認められる。

採集遺物 (Fig. 62-2-13, Fig. 63, PL. 16・17)

A地点の畑地採集遺物 (Fig. 62-2-4)

2は須恵器蓋杯の坏蓋で、体部はあまり屈曲することなく鳥嘴状の口縁部にいたり、端部は丸くおさめる。内外面とも横ナデ仕上げ。3は瓦質土器播鉢で、内面に少なくとも6条の条線が施される。4は陶器小皿で、底部は回転糸切り放し。なお、小片のため図示しなかった残りの採集資料は、すべての土師質土器と瓦質土器に限定される。

B地点の畑地採集遺物
(Fig. 62-5-13, Fig. 63)

Fig. 62は土器。5-8は瓦質土器で、5・6は鍋ないしは播鉢と思われ、5は口縁端部を内側へ丸く折り曲げる。7は甕で、外面にヘラによる

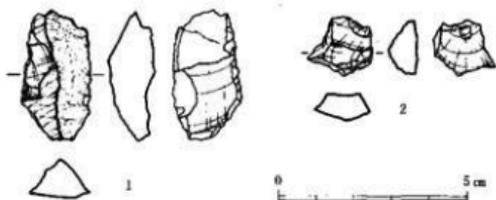


Fig. 63 6号宿舍周辺畑地採集遺物実測図(石器)

削り出しを行ない、口縁端部はわずかに肥厚する。8は播鉢の底部付近で、内面に少なくとも6条の条線を施す。5-8とも風化著しく調整不明。9は磁器塚で、高台付近は露胎である。10-13は土師質土器。10は鍋で、口縁端部をわずかに内側に巻き込む。内面横ナデ仕上げ。11-13は鼎の脚部で、体部付近のもの(11)と脚裾部に近いもの(12・13)とがある。いずれも指圧による整形後、ナデて仕上げを施す。他に、図示しなかったが土師質土器・須恵質土器・瓦質土器・陶器がある。

Fig. 63は石器。1は姫島産黒曜石製の縦長剥片。背面は左側縁上半部付近を除いたほぼ全面に自然面を残す。腹面は剥落が著しく、上端部の剥落によって打点・打瘤とも消失している。2は水晶製の剥片。背面は不定方向からの加撃による剥離面によって形成されており、打面の一定しない石核から剥離されたものと考えられる。腹面は主要剥離面で打瘤を残すが、背面上端部の剥落によって打点が消失している。

以下、小片のため詳細な時期比定は困難であるが、今回の調査で出土・採集した遺物の時期について考えてみる。A地点では、奈良時代の須恵器灰蓋、室町時代の播鉢などが採集された。主体は中世以降のものであるが、B地点に比べ量的には少ない。B地点では、縄文時代に遡る可能性のある剥片などやや古い様相をもつものもあるが、大半は室町時代後半頃に位置づけられるもので、宿舍敷地内で出土した遺物と時期的に大差ない。

また、A・B両地点以外の畑地では遺物が全く認められないことから、遺物の散布は、A・B両地点間の東西約50m、南北約100mの範囲内に集中しているものと考えられる。

今回出土・採集した遺物は、室町時代後半頃を中心とした、時期的にまとまりのあるものであった。また、播鉢・鍋・鼎を主体としており、中世村落通用の器種組成を示している。さらに、調査地点の埋め土には黄褐色粘土が多量に混入し、砂礫層が認められなかったことに留意したい。樺野川と仁保川との合流点付近から下流では、現在の樺野川の河道の両岸一帯約600mの範囲内に旧河道がおさまるところが多いとされ、今回調査地区周辺

でも、樫野川の氾濫原は現在のところ確認されていない。

以上のことから、直接遺構・遺物包含層から遺物を検出してはいないものの、当該調査地域周辺に安定した遺構面が存在し、未周知の中世の遺構・遺物包含層が埋存している可能性が指摘できるにいたった。(河村)

(注)

- 1) 山口市教育委員会「山口の文化財」(1982年)。国清寺は、常楽寺と名を改め、のち山口市宮野の地へ移って現在は当寺屋として有名。この移転後の跡地に明治2年(1869年)、洞春寺が葺から移建されて、現在にいたる。山門は国清寺当時のものとされ、同じく室町時代の建築とされる観音堂とともに、国指定の重要文化財。
- 2) 前田勝次「原始・古代」(『山口市史』、山口市史編集委員会編、1982年)。
- 3) 三浦肇「自然」(『山口市史』、山口市史編集委員会編、1982年)。

Tab. 7 出土遺物および採集遺物観察表

法量()は現存量

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (実存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
2号宿舎 第4地点埋土(Fig.60)							
1	丸瓦	-	(3.9)	器表一暗黄灰色(5PB4/1) 器内一灰白色(7.5YR2)	やや粗 4mm程度の長石かなり含む。角閃石含む	不良	
6号宿舎 第1地点埋土(Fig.62)							
1	土師質土器 罐鉢	31.8	(6.7)	外面一深い褐色(5YR7/3) 内面一灰白色(10YR8/2)	やや不良 3mm以下の石英・長石かなり含む	300℃ 良	
A地点の燧地採集(Fig.62)							
2	須恵器 坏蓋	-	(1.4)	外面一灰白色(N 7/0) 内面一黄灰色(5B6/1)	良好	細砂ごく少量含む	良好
3	瓦質土器 罐鉢	-	(1.8)	器表一暗黄灰色(5B4/1) 器内一灰白色(2.5GY8/1)	良好	1.5mm以下の長石含む	良好
4	陶器 小皿	*3.8	(1.1)	器表一赤褐色(10R4/3) 器内一暗赤褐色(10R2/2)	精良	砂粒ほとんど含まない	良好 回転未切り
B地点の燧地採集(Fig.62)							
5	瓦質土器 罐鉢小皿	-	(2.2)	器表一暗灰色(N 3/0) 器内一深い黄褐色(10YR7/2)	良好	2mm以下の長石かなり含む	良好
6	瓦質土器 罐鉢小皿	-	(2.4)	器表一暗黄灰色(5B3/1) 器内一灰白色(10Y8/1)	良好	3mm以下の石英・長石含む	良好
7	瓦質土器 甕	-	(2.5)	器表一黄灰色(10BG6/1) 器内一灰白色(5Y8/2)	良好	2mm以下の砂粒若干含む	300℃ 良
8	瓦質土器 罐鉢	-	(1.5)	器表一灰色(N 4/0) 器内一灰白色(10Y8/1)	精良	1mm以下の砂粒わずかに含む	300℃ 良
9	磁器 壺	-	(2.0)	器表一灰白色(7.5YR2) 器内一明子リーフ灰色(5GY7/1)	精良	砂粒含まない	良好 細かい貫入あり
10	瓦質土器 鍋	-	(2.3)	外面一淡褐色(5YR8/3) 内面一灰白色(10YR8/2)	やや不良	1mm以下の長石等含む	良好
11	土師質土器 甕	-	(4.0)	褐色(2.5YR7/6)	良好	1mm以下の石英・長石若干含む	良好 二次加熱による赤変著しい
12	土師質土器 甕	-	(4.6)	灰白色(10YR8/2)	やや粗	1.5mm以下の石英・長石若干含む	良好 部分的に二次加熱による赤変
13	土師質土器 甕	-	(4.3)	淡褐色(5YR8/4)	良好	1mm以下の砂粒若干含む	良好 部分的に二次加熱による赤変
No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
B地点の燧地採集(Fig.63)							
1	石器 刺片	3.4	1.8	1.2	6.1	黒曜石(姫島産)	
2	石器 刺片	1.5	1.7	0.7	1.5	石英(水島)	

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)

河村 吉行

1 調査の経過

遺跡保存地区は吉田構内の南西部、サッカー場と第一学生食堂間に位置し、約2000㎡の指定地内に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡21棟が現地保存されている。発掘調査の経緯は先の年報で詳述しており、本稿ではその概要を記すにとどめる。

大学統合移転に伴う諸工事の進行する昭和41年、遺跡保存地区の東に隣接する第一学生食堂敷地内で弥生時代中期の土器が出土した。これを受けて、昭和42年に組織された吉田遺跡調査団は、サッカー場・ラグビー場予定地で遺構・遺物包含層の範囲確認調査を実施した。その結果、当該地域から弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴住居跡が多数検出され、住居および集落の変遷が把握できる、良好な分布状態を示していることから、「遺跡保存地区」として現地保存された。しかしその後、吉田遺跡調査団は統合移転諸工事への対応に忙殺され、遺跡保存地区全域の発掘調査は容易に実施できない状態であった。

昭和56年度以降、遺跡保存地区と一連の集落であったと考えられる同時期の竪穴住居跡が周辺でも検出され、遺跡保存地区の重要性が再確認された。しかし遺跡保存地区内の各竪穴住居跡の個別具体的な資料がほとんどなく、吉田構内はもとより周辺の諸遺跡との比較・検討作業を進める上で大きな障害となっていた。また遺跡保存地区で検出されている竪穴住居群は、吉田構内での弥生時代以降の集落像を明らかにするための不可欠なモデルであり、環境整備を進める上からも発掘調査による具体的な資料収集が必要であるとの判断から、昭和57年度以降、3年にわたって発掘調査を実施することとなった。



Fig. 64 調査区位置図

2 調査の概要

昭和57年度は北端部約900㎡を調査し、竪穴住居跡7棟、土壌33基、溝3条を検出した。

竪穴住居跡は調査区の南・西部を中心に分布しており、弥生時代中期前半～中頃1棟、中期後半2棟、後期後半～古墳時代初頭3棟および弥生時代中期と思われるもの1棟があるが、切り合い関係から少なくとも四時期に細分可能である。平面形態は、中期のものはすべて円形で、宇部市北迫遺跡・防府市大崎遺跡等の中期後半の竪穴住居に見られるような隅丸方形のプランをもつものはなく、円形から方形への平面形態の変化は遺跡保存地区では時期的にやや遅れる傾向にある。中期前半～中頃には規模の大形化した竪穴住居が出現している。大形化のピークに達する中期後半では力学的配慮から主柱数が増加するとともに、主柱が竪穴住居の周壁により近接して配置されるようになり、竪穴住居内の空間分化にひとつの画期が認められる。土壌は弥生時代中期前半～古墳時代前期のもので、中期に属するものが多い。規則的な分布状況ではなく、住居との対応関係は必ずしも明らかではないが、単純計算すると1棟の竪穴住居に3～4基の土壌が伴うものかと推察された。

昭和58年度は前年度調査地域の南隣、つまり遺跡保存地区中央部での調査を予定していたが、施設整備に伴う緊急調査のため先送りとなり、昭和59年度に実施することとなった。

昭和59年度の調査は、昭和59年7月27日から10月16日まで約790㎡について実施した。検出した遺構には竪穴住居跡10棟、土壌19基、溝10条、河川跡、柱穴等がある。

竪穴住居跡は、弥生時代中期後半～古墳時代中期のもので、調査区南半部に集中し、切り合いが著しい。平面形態は円形・方形・長方形の3種があり、円形のもの中期が主体で、後期には方形のものと混在する。壁溝は第10・12号竪穴住居跡を除いた大多数の住居跡に存在し、壁溝の有無による時期差は認められない。最大規模である5世紀後半の第13号竪穴住居跡はベッド状遺構・炉等の屋内施設をもつ火災住居で、床面上には桁および梁と思われる炭化材が方形に組まれたまま焼け落ちた状態で出土した。また桁・梁の周囲に、床面中央に向かって柱木と思われる約20本の炭化材も確認され、竪穴住居の構造形式を知る上で興味深い。土壌は弥生時代中期中葉～終末のもので、平面形態は不整形のものが多し。溝は弥生時代中期後半～古墳時代初頭のもので、残存状態は悪く、遺物の出土量も極めて少ない。河川跡は古墳時代後期～奈良時代に機能していたもので、幅約2.6～4.5m、検出面からの深さ約55～80cmの規模をもち、南東から北西へ走行する。

なお9月14日には現地説明会を開催し、調査の成果を公表した。調査後は、遺構面を厚さ10～15cmの真砂土で被覆した後、埋め戻しを行ない、旧状に復帰させている。

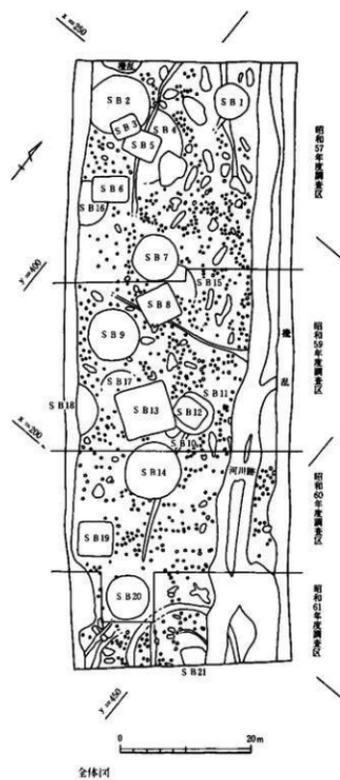
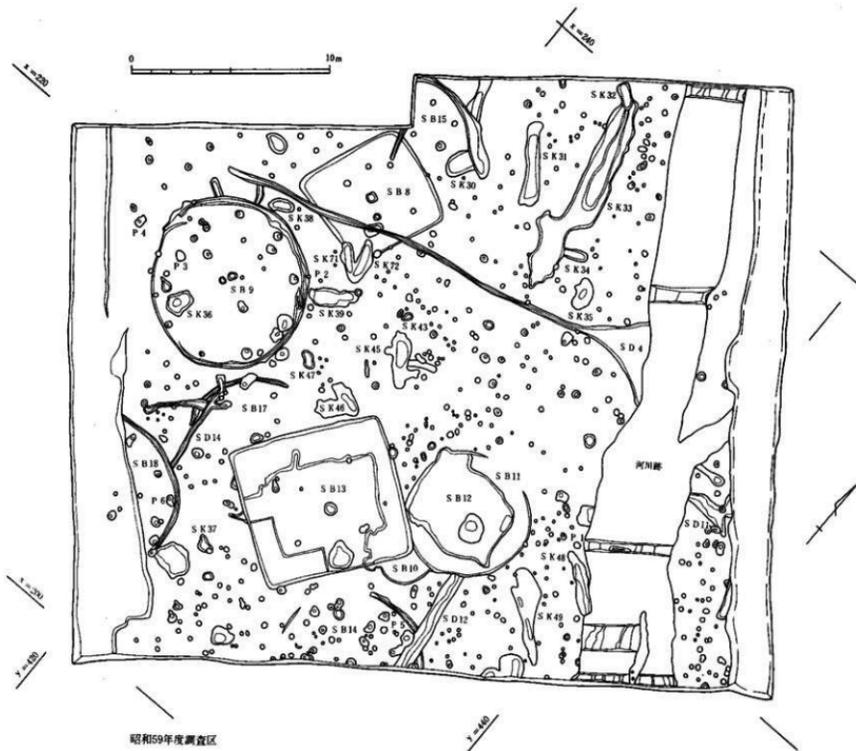


Fig. 65 遺跡保存地区 遺構配置図

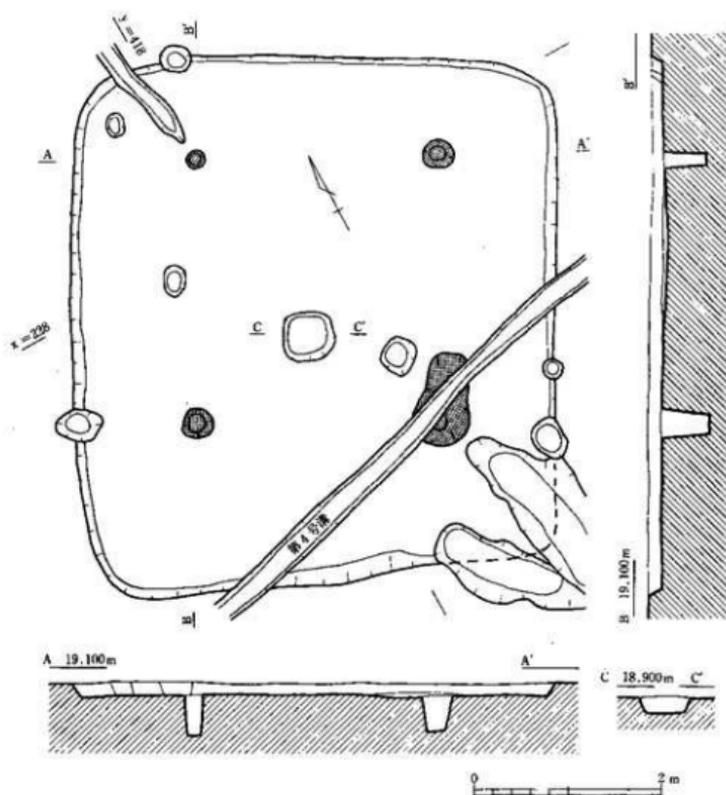


Fig. 66 第8号竪穴住居跡実測図

3 遺構・遺物

竪穴住居跡

第8号竪穴住居跡 (Fig. 66)

調査区の西端中央部で検出した住居跡で、吉田遺跡調査州によってすでに部分的に調査がなされている。第71・72号土壇と重複している住居跡南端部のコーナーは検出できなかった。南端部は第4号溝によって切られているが、土壇との先後関係は明らかでない。平面形態は南辺がやや偏在する隅丸方形で、南北軸574cm、東西軸516cm、床面積25.55㎡

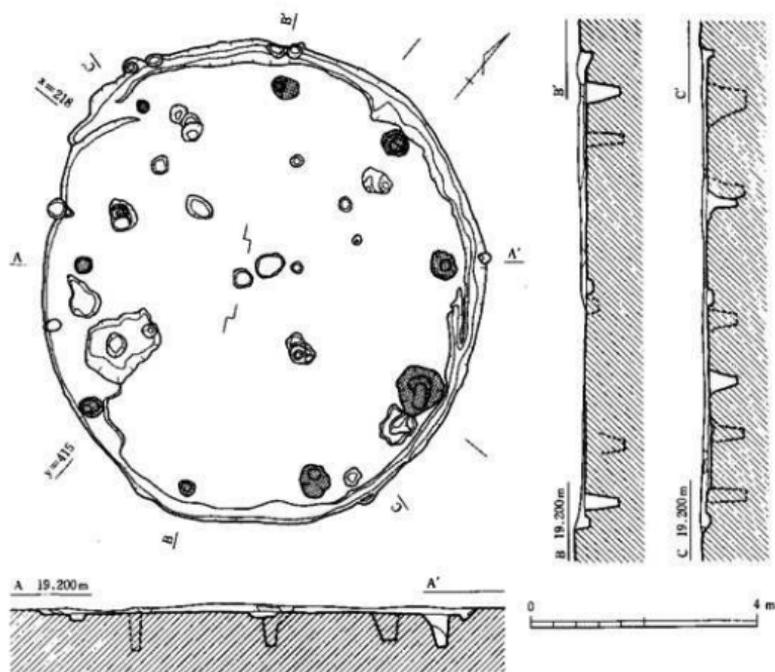


Fig. 67 第9号竪穴住居跡実測図

の規模をもつ。壁高は検出面から10~16cm残存する。主柱は北壁寄りに4本が方形に配置される。炉は中央よりやや南に造出され、平面形態は円形に近く径54~60cm、床面からの深さは18cmである。床面標高は約18.80m。

出土遺物は少なく小片ばかりで図化できないが、丸底に近い甕の底部片があること、第4号溝との切り合い関係、住居の平面形態から、弥生時代後期後半頃に位置づけられよう。

第9号竪穴住居跡 (Fig. 67, PL. 19(1))

調査区の南西端部、第8号竪穴住居跡の南に隣接する弥生時代中期後半の住居跡で、第6号溝を切っている。平面形態はやや楕円形状を呈する円形で、上面径7.8~8.6m、床面積48.39㎡の規模をもつ。残存状態が悪く、床面からの深さは最深部でも10cmを残すにすぎない。主柱は9本で、約2.3~3.0m間隔に周壁に極めて近接して配置されている。また、

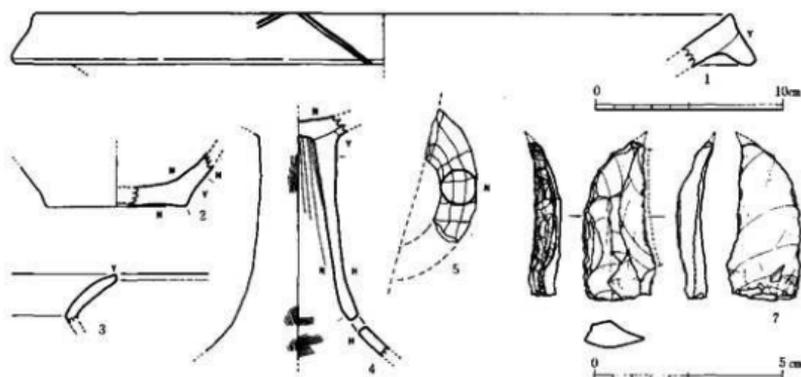


Fig. 68 第9号竪穴住居跡出土遺物実測図

中央穴を挟んで2ヵ所に支柱穴が認められる。なお、壁溝は上面幅20~30cm、床面からの深さ7~16cmで、南西部を除いて全周に巡るが、一部二重となる部分も存在する。西部には住居外への張り出しが認められ、床面へ向かって階段状に低くなっている。玄關的施設かもしれない。床面は北半部がやや高く、床面標高は18.80~18.90mである。

出土遺物は比較的多く、弥生土器壺・甕・高坏・把手・有翼支脚等がある。

出土遺物 (Fig. 68, PL. 24-1~6・PL. 27-5・PL. 巻頭カラー)

1・2は壺。1は口縁部が斜め下方に短く下垂し、拡張部外面にはヘラによる2条単位 of 鋸歯文を施文する。3は甕で外彎ぎみに「く」の字に外反する口縁部をもつ。1・3は内外面横ナデ仕上げ。3は底部側面横ナデ、他はナデ仕上げ。4は坏部に中空の脚部を接合する長脚の高坏で、器壁は薄い。外面は縦刷毛目仕上げで接合部付近は横ナデ。脚部内面は穿孔部より上位はナデ、下位は横刷毛目仕上げ。坏部内面ナデ仕上げ。

5は把手で、指圧による粗雑な整形を施す。なお、図示していないが、有翼支脚の翼部 (PL. 24-6)、鋤先状口縁をもつ壺等も出土している。

7は竪穴住居埋土中から出土したナイフ形石器 (PL. 巻頭カラー)。先端部を欠損するが極めて優品である。遺構検出面である黄褐色粘質土が旧石器時代の遺物包含層で、竪穴住居掘削時に同層から遊離した可能性も考えられる。

対向する打面をもつ石核から剝離された縦長剝片を素材とする一側縁加工のナイフ形石器で、背面左側縁には下縁部を除いてほぼ全縁に腹面側からのプランティングが行なわれ

ている。基部は未調整で打点が残存する。やや彎曲する刃部には使用痕と思われる微細な剥落痕が認められる。メノウ製。

第10号竪穴住居跡（Fig. 69, PL. 19(2)）

調査区の東端中央部に位置し、吉田遺跡調査団によってすでに検出されている小形の住居跡である。第11・13号竪穴住居跡に切られており、周壁の一部が残存しているにすぎない。平面形態は円形と思われ、推定上面径約3.0m、推定床面積約6.7㎡の規模をもつものと思われる。遺存状態は悪く、壁高は検出面から7cmである。残存する床面には柱穴、炉跡、壁溝等は認められない。

出土遺物は今回はほとんどないが、吉田遺跡調査団の調査では短く緩やかに「く」の字に外反する口縁部をもつ弥生土器甕が出土し、弥生時代中期前半の住居と考えられる。

第11号竪穴住居跡（Fig. 69, PL. 20(1)）

第10号竪穴住居跡の北東部を切って営まれた弥生時代中期後半の住居跡で、第12・13号竪穴住居跡によって切られている。平面形態は円形で、北部は後世の削平によって消失しているが、上面径684cm、床面積約31㎡の規模をもつ。北東部には住居外へ張り出した弧状の造り出しが認められる。なお、南・北2ヵ所に設定したトレンチの所見では、重複する第12号竪穴住居跡の床面が本住居跡の埋土中に位置しており、本住居跡は完掘されていない。そのため柱穴・炉跡等は検出されていない。また壁高は検出面から約16cm残存しており、北部では壁溝が確認された。遺物は主にトレンチ内から出土したが、小片が多い。

出土遺物（Fig. 74-8-11, PL. 24-8-11）

8-11は甕。8は口縁部の破片で、端部は強い横ナデにより窪む。9は頸部下位に断面方形の突帯を貼付し、ヘラによる刻目を施す。内外面とも風化が著しい。なお、図化していないが、跳ね上げ口縁をもつ甕や、短く緩やかに外反する口縁部をもつ壺などがある。

第12号竪穴住居跡（Fig. 69, PL. 20(1)）

第11号竪穴住居跡の内部で検出した5世紀後半の住居跡である。平面形態はいびつな隅丸長方形で、東西軸515cm、南北軸410cm、床面積18.22㎡の規模をもつ。南東隅のコーナーには住居外へ張り出す造り出しの部分がある。また北東隅のコーナー付近の床面には、東辺に接して床面より一段高い長さ約80cm、幅約40cmのテラス状の平坦面が存在する。柱穴は検出されなかったが、中央よりやや東寄りには長軸140cm、短軸116cm、床面からの深さ13cmの規模をもつ不整形円形の炉跡が認められる。床面標高は約19.90m。

出土遺物には土師器甕・高坏がある。

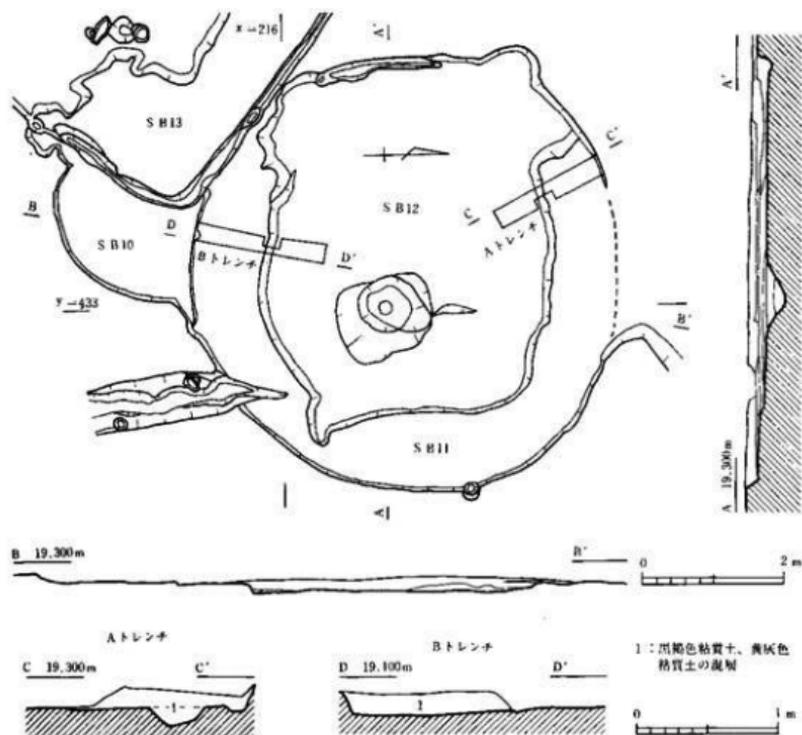


Fig. 69 第10～第12号竪穴住居跡実測図

出土遺物 (Fig. 74-12-14, PL. 24-12-14)

12・13は甕。12は底部付近で、長胴の胴部になるものと思われ裾広りの底部をもつ。胴部外面縦刷毛目、底部側面横ナデ、外底部・内面はナデ仕上げ。13は複合口縁をもつもので、口縁部は斜上方に立ち上がる。内外面とも横ナデ仕上げ。14は高坏で、わずかに屈曲して外彎さみに開く坏部をもつ。口縁部内外面横ナデ、坏部内面ナデ仕上げ。

他に住居跡内部からは、直立あるいは外上方へ立ち上がる複合口縁をもつ壺、外彎しながら短く「く」の字に開く甕、中位で反転して外彎しながら開くかなり大きな坏部をもつ高坏が出土したとされる。

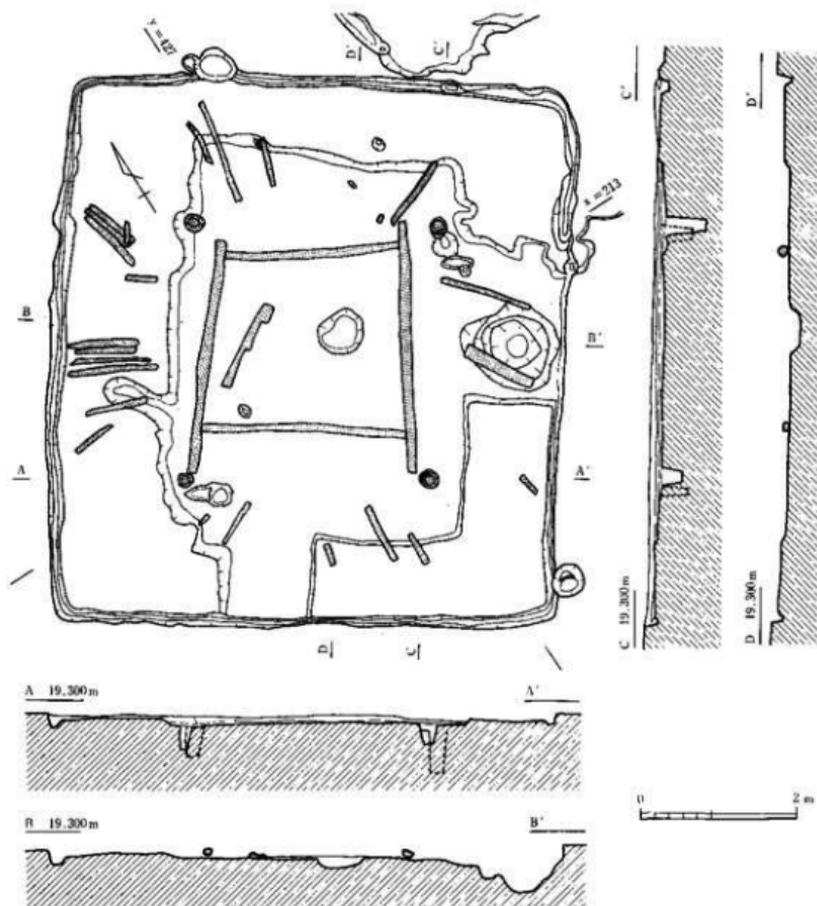


Fig. 70 第13号竪穴住居跡実測図

第13号竪穴住居跡 (Fig. 70, PL. 20(2)・21・22(1)(2))

調査区の南東部に位置する大形の竪穴住居跡で、第10・11号竪穴住居跡を切っている。平面形態は方形で、東辺760cm、西辺764cm、北辺720cm、南辺708cm、床面積53.63㎡の規模をもつ。主柱は4本で、竪穴住居の平面形態と相似形をなして方形に配置される。

屋内施設として、周壁に沿って幅0.8～1.5m、床面からの高さ4～7cmのベッド状遺構が巡るが、南・東両辺の中央付近で途切れている。南辺部の空間は幅約120cmで、出入口と想定される。壁溝は上面幅10～20cm、ベッド状遺構上面からの深さ4～10cmであるが、東辺部では壁溝が確認できず、幅約170～210cmの空間があり、床面に炭化物の充填した長軸137cm、短軸120cmのほぼ円形の掘り込みが認められた。深さは床面から47cmで、底面・壁面は焼けている。前調査者である小野忠熙氏はこれを炊事用の炉と考え、この部分の空間が炊事場として使用されたものと推定している。設置場所、性格および堅穴住居の時期から、カマドが出現する前段階の施設と思われる興味深い。またこれとは別に、床面中央よりやや東には径65cm、深さ16cmの円形の炉跡が存在する。

さらにこの住居は火災に遭って廃絶したと思われる、床面上には桁・梁と思われる径12～15cmの4本の炭化材が方形に組まれたまま焼け落ちた状態で検出されている。南・北の炭化材は桁と考えられ、その上位に東・西の炭化材が認められる。また、桁・梁の周囲には榎木と推定される約20本の炭化材が床面中央に向かって放射状に確認されているが、前回の調査ですでに大半が取り上げられたのか、今回の調査では数本しか検出できなかった。なお方形に組まれた桁・梁の内部の床面上には榎木に比べひとまわり大きな炭化材が認められ、規模・検出位置・桁との重複関係から、床面南西部に立てられた主柱の一部と推察される。榎木に対応する炭化材が認められないこと、桁・梁・榎木等の炭化材の検出状況、堅穴住居の平面形態、主柱の配置状況などから、寄棟造屋根が想定される。床面標高は約18.90m。

出土遺物には土師器壺・甕がある。

出土遺物 (Fig. 74-15-18, PL. 24-15-18)

今回の出土遺物は小片が多く図化しうるものが少ない。18は、東壁中央部の炊事用の炉跡と思われる掘り込みから出土した複合口縁の甕。小さく屈曲する頸部から反転して、外彎しながら斜上方へ立ち上がる口縁部をもつ。内外面とも横ナデ仕上げ。

また、住居内からは土師器壺・壺・鉢・高坏等が出土したとされる。壺は口縁部外面に突帯を貼り付け複合口縁状になるもの、ほぼ直立する短い口縁部をもつものなどがある。鉢は丸底で、内彎して開く体部をもつ小形品3個体が図化されている。高坏はやや反り気味に大きく開く脚部に、内彎して立ち上がる坏部をもつものである。

切り合い関係からみると第12号堅穴住居跡より新しいが、総じて5世紀後半頃のものと考えられる。

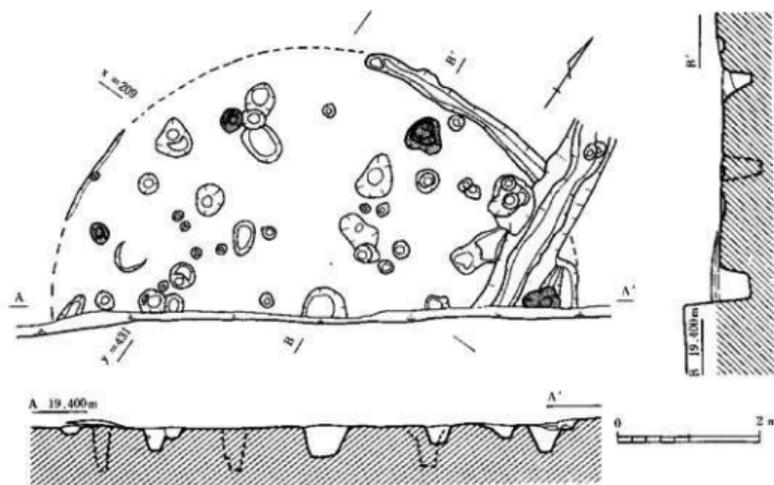


Fig. 71 第14号竪穴住居跡実測図

第14号竪穴住居跡 (Fig. 71)

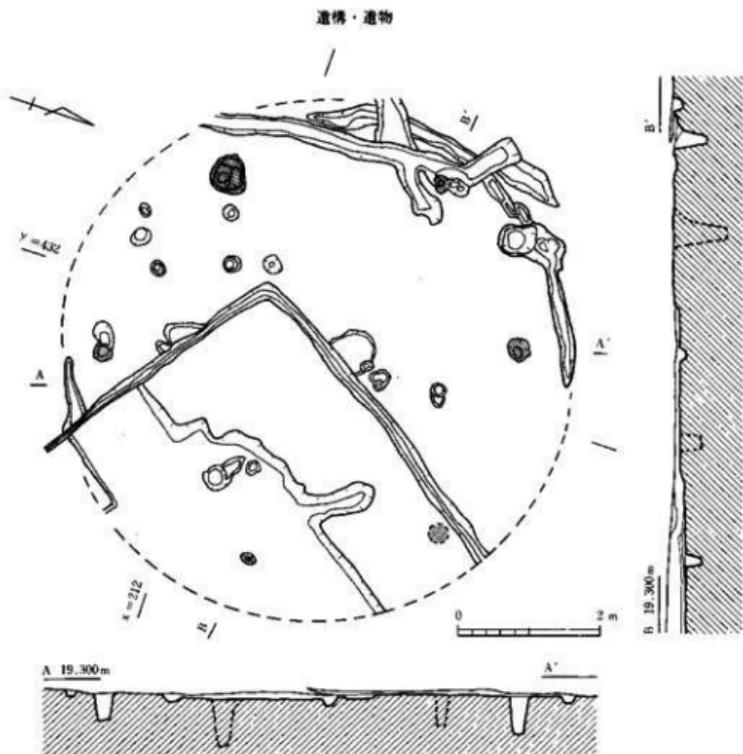
調査区の南東部、第13号竪穴住居跡の東に隣接する大形の住居跡で、吉田遺跡調査団によってすでに部分的に検出されている。昭和59年度の調査では住居の南半部が調査区外にあたるため完掘しなかったが、翌60年度の調査で延長部分を調査していることから、詳細は昭和60年度の調査報告に譲り、本稿ではその概要を記すにとどめる。

平面形態は円形と思われるが、削平が著しく周壁はほとんど消失している。径約7.4m、床面積約40㎡前後の規模をもつものと推定され、一部に壁溝が巡っている。主柱は8本で中央穴が認められる。

遺物は全く出土しておらず、第12号溝との切り合い関係も判然としないため時期は明らかでないが、樫野川・佐波川各流域での竪穴住居の平面形態・規模・主柱数等から推して、弥生時代中期のものと考えられる。

第15号竪穴住居跡

調査区の西端中央部に位置する平面形態が円形と思われる住居跡である。後世の削平によって周壁が消失しているが、弧状に巡る壁溝の存在によって住居跡として取り扱った。上面径約870cm、床面積約50㎡前後の規模をもつものと推定されるが、主柱数、屋内施設



等は明らかではない。

出土遺物はないが、弥生時代中期と考えられる第7号竪穴住居跡に切られており、遺跡保存地区での円形の平面形態をもつ竪穴住居跡の時期、分布状況などから弥生時代中期のものと思われる。

第17号竪穴住居跡 (Fig. 72, PL. 22(3))

調査区の南部で検出した住居跡であるが、後世の削平によって周壁が消失しており、壁溝のみが残存する。第13号竪穴住居跡によって東半部が半分近く切られている。壁溝の検出状況から、平面形態は円形と思われ、径約3.6m、床面積約35m²前後の規模をもつものと推察される。主柱は1本未検出であるが6本が配置されたものと考えられ、床面中央に

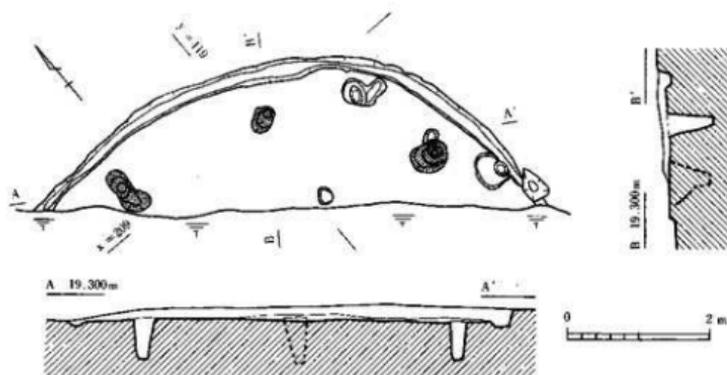


Fig. 73 第18号竪穴住居跡実測図

は中央穴が存在する。

壁溝・柱穴からの出土遺物はなく時期は明らかでないが、第14号竪穴住居跡同様、平面形態・規模・支柱数から推して弥生時代中期のものと思われる。

第18号竪穴住居跡 (Fig. 73, PL. 22(4))

調査区の南端部、第17号竪穴住居跡の南に隣接する弥生時代後期終末の住居跡である。昭和59年度の調査で新たに検出したもので、西半部はサッカー場の造成時に削平され消失しているが、残存部分では検出面から最大18cmの壁高を測る。平面形態は円形と思われ、上面径約9m、床面積約55㎡前後の規模をもつものと推定される。床面には、周壁に沿って上面幅15～25cm、床面からの深さ3～5cmの壁溝が巡る。住居に伴う柱穴は周壁寄りに3個認められ、住居の平面規模、柱穴間隔から7本の支柱が想定される。床面は東から西にわずかに下降しており、床面標高は18.95～19.00m。

出土遺物は第9号竪穴住居跡に次いで多く弥生土器甕・壺・鉢などがあるが、図化しうるものは少ない。

出土遺物 (Fig. 74-19-22, PL. 24-19-21・PL. 27-22)

19～21は甕。19はやや古い要素をもつもので、口縁端部内面に粘土帯を貼付して肥厚させ、端部外面には2条の凹線が巡る。風化が著しく調整不明。22はほぼ丸底に近い底部をもつ鉢で、体部は内彎しながら開き、口縁部は短く外反する。口縁部内外面横ナア、底部内外面ナア仕上げで、体部は風化のため調整不明。

遺構・遺物

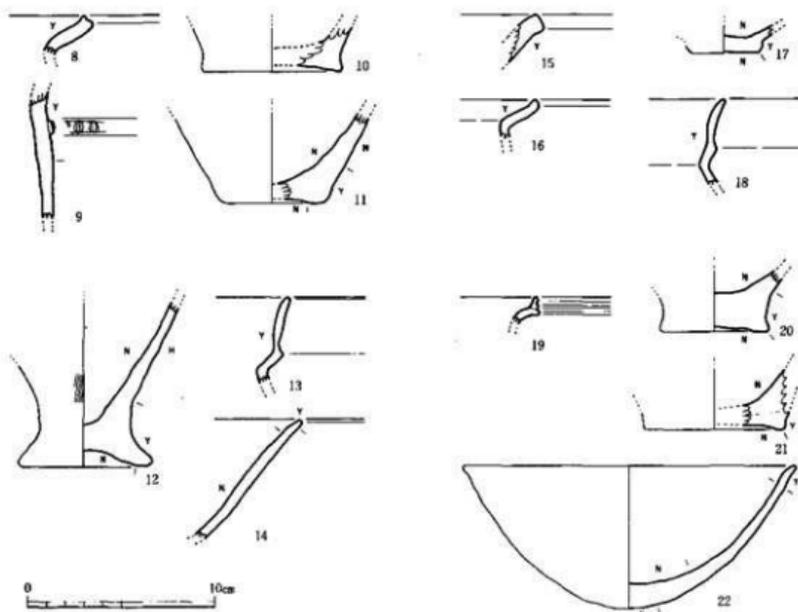


Fig. 74 第11～13・18号竪穴住居跡出土遺物実測図

土壌

弥生時代中期中葉から終末にかけてのもの19基を検出した。集中範囲は認められず、調査区全域に分布する。平面形態は不整形であるが、長楕円形状を呈するものが多い。

以下、主なものを述べる。

第30号土壌 (Fig. 75)

調査区の西端中央部に位置し、北部が第15号竪穴住居跡と切り合っているが、先後関係は明らかでない。平面形態は長方形に近いものと思われ、長軸144cm以上、短軸100cmの規模をもつ。南辺部の壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、深さは検出面から24cmである。長軸方向は北東-南西で、底面標高は約18.70m。

出土遺物は弥生土器甕・高坏等であるが、小破片が多く出土量も少ない。弥生時代後期。

出土遺物 (Fig. 77-23-25, PL. 24-23・25)

23はやや裾広がりになる窪み底の甕の底部と思われるもの。外面は接地面より上位が横

ナデ、外底面および内面ナデで、内面のナデは粗雑。24・25は坏部に脚部を挿入する高坏の脚部。24は坏部と脚部の接合部から斜下方へそのまま開く。内面ナデ仕上げ。外面風化のため調整不明。25は短い脚柱部を有するもので、内外面とも風化著しく調整不明であるが、脚部内面にわずかにシボリ痕が認められる。

第31号土壌 (Fig. 75)

調査区の西端中央部付近、第30号土壌の西に隣接する土壌である。他の遺構との切り合い関係はない。平面形態は不整長方形をなし、長軸416cm、短軸66cmの規模をもつ。北・南両壁面の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは15～20cmである。長軸方向は北西一南東で、底面標高は約18.75m。出土遺物には弥生土器甕・壺等がある。弥生時代後期。

出土遺物 (Fig. 77-26-28, PL. 24-26-28)

26・28は甕。26は直線的に開く長めの口縁部をもち、端部は強い横ナデによりやや窪む。内外面とも横ナデ仕上げ。28は窪み底の底部で接地面から側面付近にかけて横ナデ、他はナデ仕上げ。27は壺の底部で、側面付近は粗雑な横ナデ、他はナデ仕上げ。

第32号土壌 (Fig. 75)

調査区の北端部付近に位置し、第33号土壌を切っている。平面形態は長楕円形で、長軸122cm、短軸55cm、検出面からの深さ42cmの規模をもつ。長軸方向は北西一南東で、底面標高は約18.50m。出土遺物はなく、時期は明らかでないが、第33号土壌との切り合い関係から弥生時代後期のものと考えられる。

第33号土壌 (Fig. 76)

調査区の北西部に位置する大形の土壌で、第32号土壌によって切られている。南北に長い特異な平面形態で、南北長10.70m、短軸145cmの規模をもつが、南半部で不規則に屈曲しており、2基の土壌ないしは溝と土壌とが重複している可能性がある。北半部は2段にわたって掘り込まれており、検出面からの深さは約40cm、南半部では約15cmである。底面標高は北半部で約18.55m、南半部では約18.80mで、長軸方向は北一南。出土遺物は弥生土器壺・甕等比較的多いが小片で、図化するものは極めて少ない。弥生時代後期。

出土遺物 (Fig. 77-29・30, PL. 24-29・30)

29は壺の肩部で、ヘラによる沈線の区画内に有軸羽状文を施文する。内外面とも風化著しく調整不明。30は底径の小さな上げ底の甕の底部。外底面・内面ナデ、他は不明。

第35号土壌 (Fig. 75)

調査区の北半中央部、第33号土壌の東に隣接する土壌である。平面形態は不整形な楕円

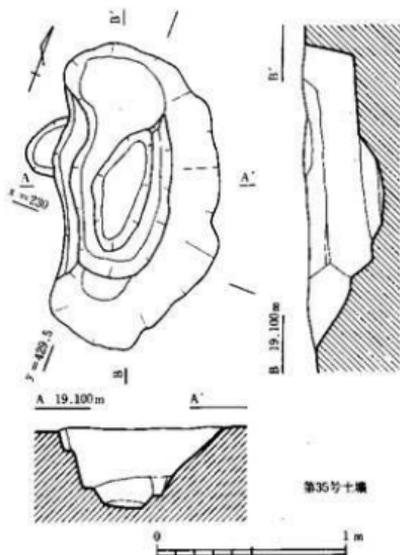
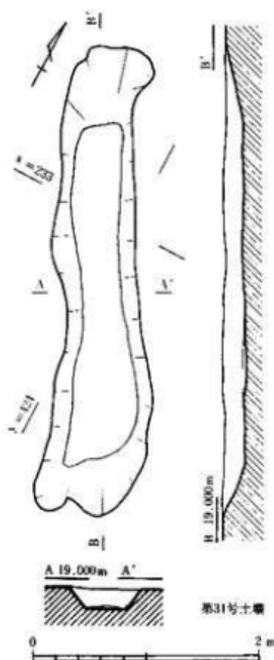
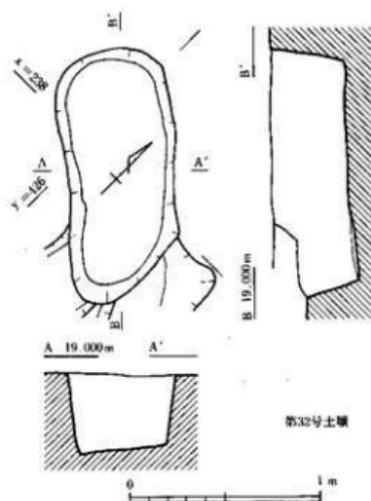
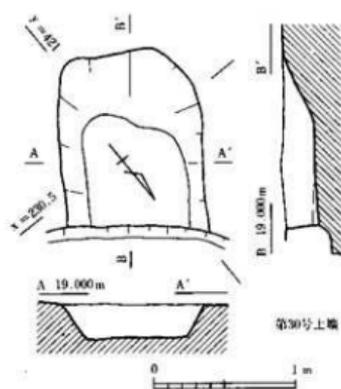


Fig. 75 第30～32・35号土壌実測図

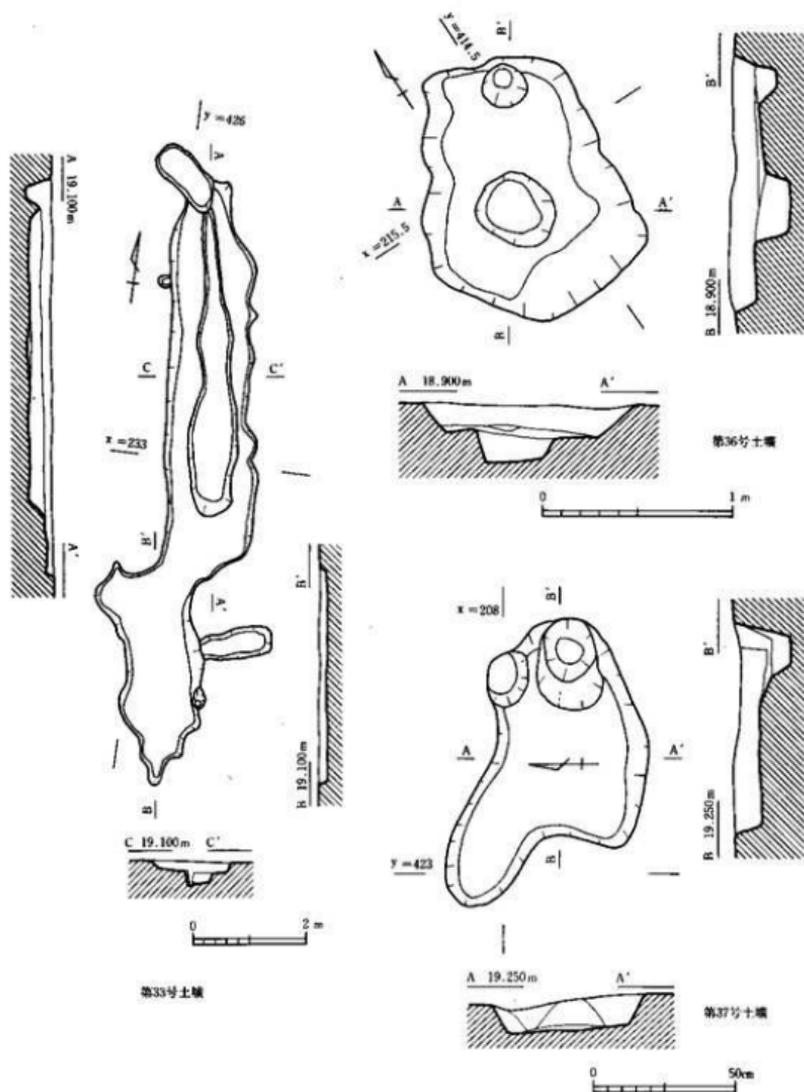


Fig. 76 第33・36・37号土坑実測図

遺構・遺物

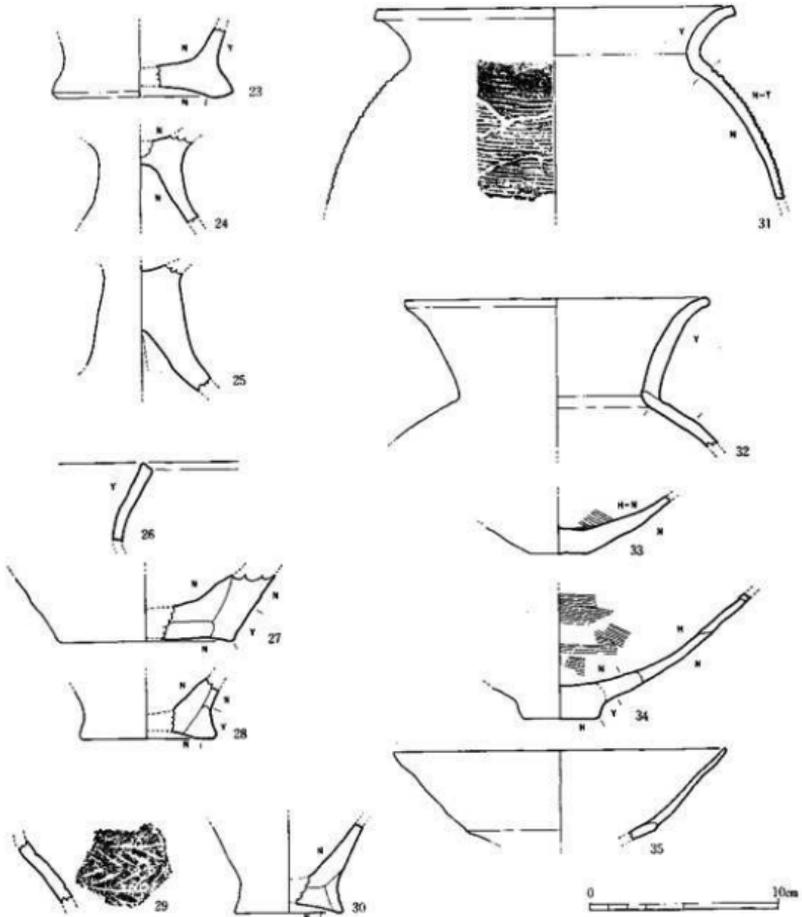


Fig. 77 第30・31・33・36・39号土壌出土遺物実測図

形状を呈し、長軸161cm、短軸87cmの規模をもつ。2～3段にわたって掘り込まれており、北半部の平坦面は南に向かって下降している。底面は狭く、長軸約60cm、短軸約20cmで、検出面からの深さは42cmである。底面標高は約19.55mで、長軸方向は北一南。

出土遺物は皆無で、他の遺構との切り合いもなく時期不明。

第36号土壌（Fig. 76）

調査区の南西部、第9号竪穴住居跡の内部で検出した小形の土壌である。出土遺物から、住居跡より時期的に新しく、弥生時代終末に比定されるが、調査時には切り合い関係はつかめなかった。平面形態は不整長方形状を呈し、長軸135cm、短軸110cm、検出面からの深さ15cmの規模をもつ。底面の中央部よりやや南には径35～40cm、底面からの深さ12～18cmの円形の掘り込みが存在するが、本土壌に伴うものかどうか明らかでない。底面標高は約18.60mで、長軸方向は北東—南西。出土遺物には庄内式併行期の甕がある。

出土遺物（Fig. 77-31, PL. 27-31）

31は甕。口縁部は内面に稜をもたず、「く」の字に外彎しながら開き、端部はさらに外反する。口縁端部外面は面をもつ。胴部外面タタキ、内面ヘラケズリ、頸部～口縁部内外面横ナデ仕上げ。外面はほぼ全面に煤の付着が認められる。

第37号土壌（Fig. 76）

調査区の南西部、第13・18号竪穴住居跡間に位置する小形の土壌である。西半部がくびれており、長軸75cm、短軸55cm、検出面からの深さ10～14cmの規模をもつ。底面標高は約19.10m。遺物は弥生土器小片若干が出土し、断面「M」字状の貼付突帯を有する壺の胴部片が含まれていることから、弥生時代中期に位置づけられよう。

第38号土壌（Fig. 78）

調査区の南西部、第9号竪穴住居跡の北に隣接する小形の土壌。平面形態は長楕円形で、長軸126cm、短軸62cm、検出面からの深さ14cmの規模をもつ。底面標高は約18.80m、長軸方向は北東—南西。出土遺物は皆無で、他の遺構との切り合いもなく、時期は不明。

第39号土壌（Fig. 78）

調査区中央部よりやや西、第9・18号竪穴住居跡間に位置する。第9号竪穴住居跡と極めて近接するが、切り合い関係にはない。平面形態は不整形な長方形状で、長軸251cm、短軸88cmの規模をもつ。西辺部には壇状の狭い平坦面がある。底面は北東から南西へ緩やかに下降しており、最深部で検出面からの深さが32cm、底面標高が約18.70mとなる。長軸方向は北東—南西。出土遺物には庄内式併行期の壺・甕・高坏等がある。弥生時代終末。

出土遺物（Fig. 77-32-35, PL. 24-33-35-27-32）

32は壺で、35と同一個体の可能性がある。口縁部は直線的に「く」の字の外反し、口縁端部はさらに外方へ内彎気味に開く。端部は丸くおさめる。精選された粘土を用い、頭部

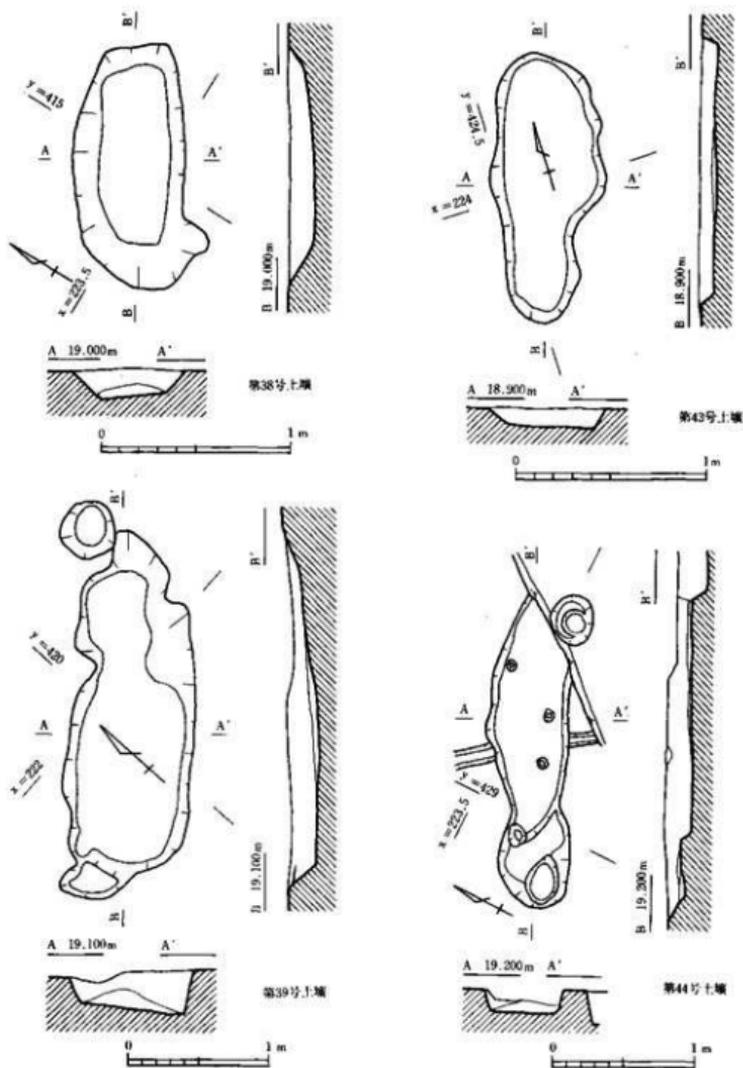


Fig. 78 第38・39・43・44号土壇実測図

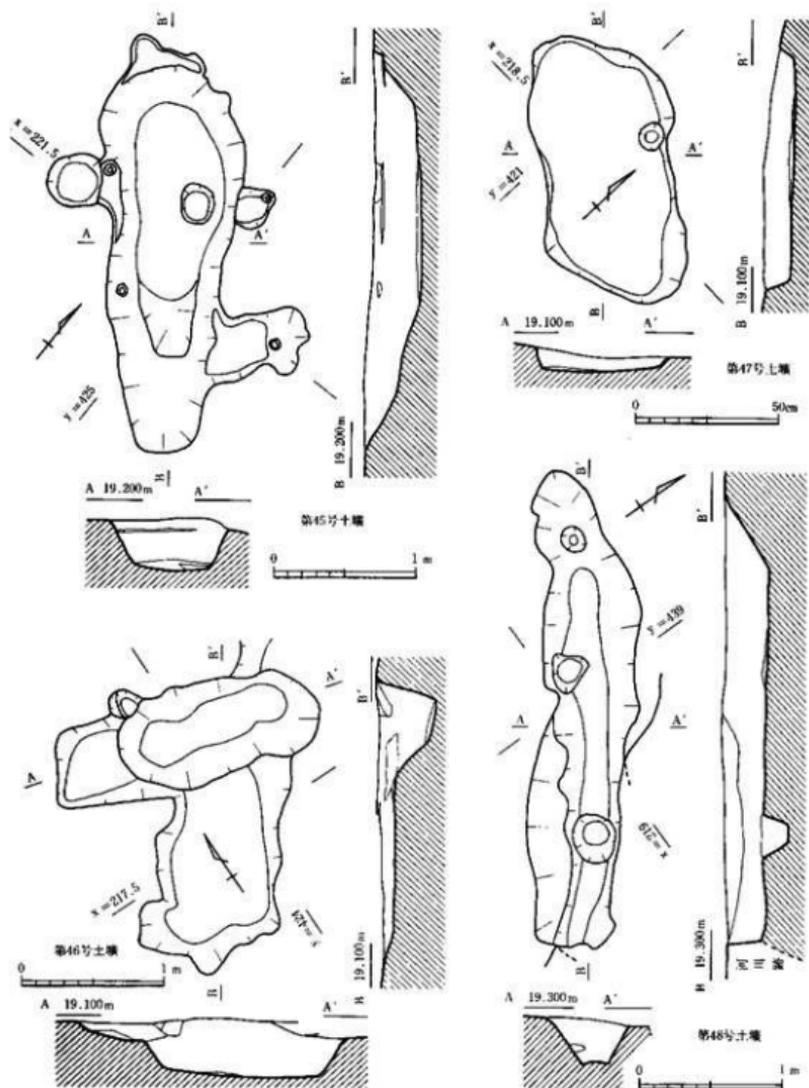


Fig. 79 第45-48号土坑平面図

外面・口縁部内外面横ナデ仕上げ。胴部外面風化のため調整不明。33は甕ないしは壺の底部で九底に近い。内面刷毛目仕上げ、外面風化のため調整不明。34は円盤状の突出した特異な底部をもつ壺。精選された粘土を用いているが、整形は粗雑で粘土帯接合痕が明瞭に残る。内面に左上がりの刷毛目が残るが、外面は風化のため調整不明。

35は高坏で、坏部上半は下半部に比べ長く伸びて直線的に開き、口縁部付近でわずかに外方へ屈曲する。口縁端部は尖る。内外面とも風化のため調整不明。

第43号土壌 (Fig. 78)

調査区の中央よりやや北西に位置する小形の土壌である。平面形態は不整形な楕円形状を呈し、長軸133cm、短軸60cmの規模をもつ。後世の削平のため残存状態は悪く、検出面からの深さは10cmを残すにすぎない。底面標高は約18.75m、長軸方向は北-南。

土壌内から出土遺物がなく、他の遺構との切り合いもないため、時期は明らかでない。

第44号土壌 (Fig. 78)

調査区の中央部、第43号土壌と第11号竪穴住居跡間に位置する。平面形態長楕円形状で、東端部は後世の削平により消失している。長軸225cm以上、短軸57cm、検出面からの深さ20cmの規模をもつ。南西端部には底面から約7cm上位に壇状の平坦面を有する。底面標高約18.90m、長軸方向は北東-南西。弥生土器甕・高坏等が出土した。弥生時代中期後半。

出土遺物 (Fig. 81-36-38, PL. 24・25-36-38)

36・37は甕。36は直線的に「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は強い横ナデにより肥厚さみになる。口縁部内外面粗雑な横ナデ、胴部内外面はナデ仕上げ。37は底部で接地面-底部側面付近は横ナデ、外底面ナデ仕上げ、他は風化のため不明。

38は高坏の脚部で端部外面には面をもつ。端部内外面横ナデ、他はナデ仕上げ。

第45号土壌 (Fig. 79)

調査区のはは中央、第44号土壌の西に隣接する土壌である。平面形態は不整形な長楕円形状を呈し、東辺の南半部には幅約40cm、長さ約65cmの突出部をもつ。また計3ヵ所に壇状の狭い平坦面が存在し、長軸283cm、短軸64cm、検出面からの深さ38cmの規模をもつ。南東辺部の底面からの立ち上がりは緩やかである。底面標高は約18.70m、長軸方向は北西-南東。出土遺物には弥生土器壺、砥石等がある。弥生時代中期。

出土遺物 (Fig. 81-39-41, PL. 25-39・40・PL. 27-41)

39は断面「M」字の扁平な貼付突帯をもつ壺の胴部。外面は突帯付近横ナデ、以下縦刷毛目、内面ナデ仕上げ。40は口縁端部内面を内上方へ突出させるいわゆる跳ね上げ口縁の

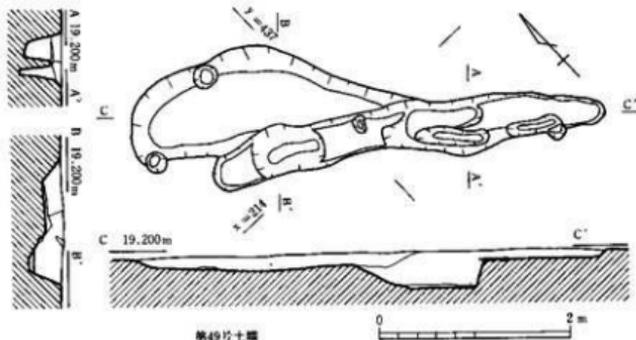


Fig. 80 第49号土坑実測図

変で、端部外面はほぼ平坦。口縁部内外面横ナデ。

41は6面全面を研砥面とする小形の砥石。各面とも基本的には長軸方向に平行する研砥が行なわれているが、正面中央部には直交する幅約2～3mm、深さ約1mmの踵状の研砥痕が2条認められる。凝灰岩製。

第46号土坑 (Fig. 79)

調査区の中央よりやや南、第13号竪穴住居跡に隣接する。2ないし3基の土坑が重複している可能性があるが、調査時には切り合いが認められなかったため一括して取り扱った。平面形態は「L」字形で、南北軸203cm、東西軸188cmの規模をもつ。検出面からの深さは西・南西半部で10～14cmであるが、北東部分は播鉢状にさらに約30cm落ち込んでいる。最深部での底面標高は約18.70m。弥生土器の甕等が出土した。弥生時代中期中葉。

出土遺物 (Fig. 81-42, PL. 25-42)

ほとんど張りのない胴部に直線的に「く」の字に外反する口縁部をもつ。端部は面をもたない。外面頸部付近に煤が付着する。胴部外面縦刷毛目、内面横刷毛目仕上げ。口縁部外面横ナデ、内面横刷毛目の後横ナデ仕上げ。

第47号土坑 (Fig. 79)

調査区の中央よりやや南西、第9・13号竪穴住居跡間に存在する小形の土坑である。平面形態は不整長方形をなし、長軸84cm、短軸46cmの規模をもつが、後世の削平により検出面からの深さは10cmを残すにすぎない。底面標高は約19.00m、長軸方向は北西-南東。

土坑内からの出土遺物はなく、他の遺構との切り合いもないことから、時期は不明。

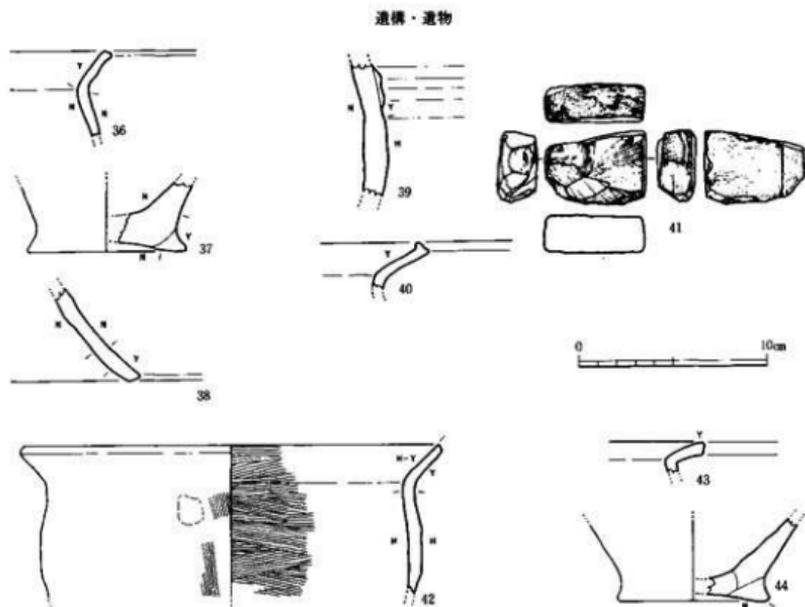


Fig. 81 第44-46・49号土坑出土遺物実測図

第48号土坑 (Fig. 79)

調査区の東端部、第11号竪穴住居跡に隣接する土坑である。平面形態は長楕円形状で、溝かもしれない。東端部付近を河川跡によって切られており、長軸237cm以上、短軸60cm、検出面からの深さ30cmの規模をもつ。底面標高約18.90m、長軸方向は北西-南東。

土坑内からの出土遺物はなく、時期は明らかでないが、第49号土坑と形態・長軸方向が類似していること、また第45号土坑とも長軸方向が近似していることから、各土坑は同時期に近いものと考えられ、弥生時代中期に比定されよう。

第49号土坑 (Fig. 79)

調査区の東端部、第48号土坑の南に隣接する。平面形態は三角形で、2基の土坑が重複している可能性が強いが、調査時には切り合いがつかめなかった。長軸500cm、短軸は南半部58cm、北半部134cmの規模をもち、検出面からの深さは中央部が最も深く38cmで、南・北両端部でそれぞれ14cm、10cmである。底面の標高は中央部で約18.80m、長軸方向は北西-南東。弥生土器壺等が出土した。弥生時代中期後半。

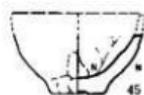


Fig. 82 第4-11-14号溝
出土遺物実測図

出土遺物（Fig. 81-43・44, PL. 25-43・44）

43は「く」の字に強く屈曲する短い口縁部をもつ甕。端部は面をもつ。頸部外面には煤が付着する。内外面とも横ナデ仕上げ。44は底部で器形は37と大差ない。外底面ナデ、他は風化のため調整不明。

溝

10条を検出した。北東-南西に走るものが半数を占め、規模は小さい。残存状態は悪く、出土遺物も極めて少ない。

以下、主なものについて述べる。

第4号溝

調査区中央付近を北東-南西に走行する溝で、第8号竪穴住居跡を切っている。溝幅は平均約23cmで、河川跡に切られる部分付近で溝幅を増し、最大幅約4.2mとなる。断面形態は逆台形状を呈し、

検出面からの深さは平均約15cm、溝幅を増す河川跡付近で最も深く25cmとなる。

出土遺物には土師器若干がある。弥生時代終末-古墳時代初頭。

出土遺物（Fig. 82-45, PL. 25-45）

口縁部を欠損する手捏ねの土師器鉢。窪み底の底部から内彎しながら開く胴部に至る。内外面ナデ仕上げで、底部側面および内面には指圧による明瞭な整形痕が残る。

第11号溝

調査区の東端部を東-西に走行する溝で、東への延長部分は削平により消失している。溝幅は約75cmで、河川跡に切られる部分で溝幅を減じ、約40cmとなる。溝底の起伏が激しく、検出面からの深さは約10-30cmである。

出土遺物には弥生土器数点がある。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 82-46, PL. 25-46）

甕の底部でわずかに上げ底。内外面とも風化のため調整不明。なお図示しなかったが、他に下垂する口縁部外面にヘラによる鋸歯文を施す壺の口縁部の破片がある。

第12号溝

調査区の南東部を南-北に走行する溝で、第11号竪穴住居跡によって切られている。溝幅は約75cm、検出面からの深さは約25cmである。2段にわたって掘削されているが、断面形は「U」字形に近い。

遺物は全く出土しておらず、時期は明らかでないが、第11号竪穴住居跡との切り合い関

係から、弥生時代中期後半を遡るものではない。

第14号溝

調査区の南端部をほぼ南-北に走行する溝で、第17号竪穴住居跡を切り、第18号竪穴住居跡に切られている。溝幅は約25cm、検出面からの深さは約4-12cmで、断面は「U」字形を呈する。

出土遺物は少なく、弥生土器若干がある。弥生時代中期後半。

出土遺物 (Fig. 82-47, PL. 25-47)

いわゆる跳ね上げ口縁をもつ甕で、内外面とも横ナデ仕上げ。

柱穴

調査のほぼ全面で多数検出された。出土遺物から、弥生時代前期-古墳時代のもので、竪穴住居跡の主柱穴となるものも含まれていると思われるが、柱穴配置による遺構の復原はできなかった。

遺物は32個の柱穴から出土したが、図化できたのは以下の12点である。

出土遺物 (Fig. 83-48~59, PL. 25-48~58・PL. 27-59)

48は甕の底部で、側面は裾広がりととなる。内底面ナデ仕上げ、他は風化のため調整不明。P 1 出土。

49は円盤状に突出する壺の底部で、精選された粘土を用いている。側面横ナデ、他はナデ仕上げ。P 2 出土。

50は直線的に外反し端部がやや肥厚する甕の口縁部。粗雑な横ナデ仕上げで端部外面は窪む。頸部外面には煤が付着する。P 3 出土。

51は断面台形の扁平な突帯を3条貼付する壺の胴部。調整不明。52は短く緩やかに外反する甕の口縁部で、端部にはヘラで刻目を施す。横ナデ仕上げ。ともにP 4 出土。

53は小形の甕。胴部は張らず頸部内面に稜をもたない。口縁部は外増きみに開き端部に面をもつ。口縁部内外面は粗雑な横ナデ、胴部外面縦刷毛目、内面横刷毛目仕上げ。54は鉢。胴部は内彎しながら開き、頸部内面は稜をもたない。口縁部はやや長めで直線的に外反し端部は丸くおさめる。調整は丁寧で、外面は縦刷毛目仕上げの後口縁部~頸部はさらに横ナデを施す。内面は口縁部~頸部が横刷毛目の後横ナデ、胴部が刷毛目後ナデ仕上げ。ともにP 5 出土。

55は壺の底部と思われるが、風化著しく調整不明。P 6 出土。

57~59はどの柱穴出土か不明のもの。57は器壁の薄い平底の壺の底部。外面は側面横ナ

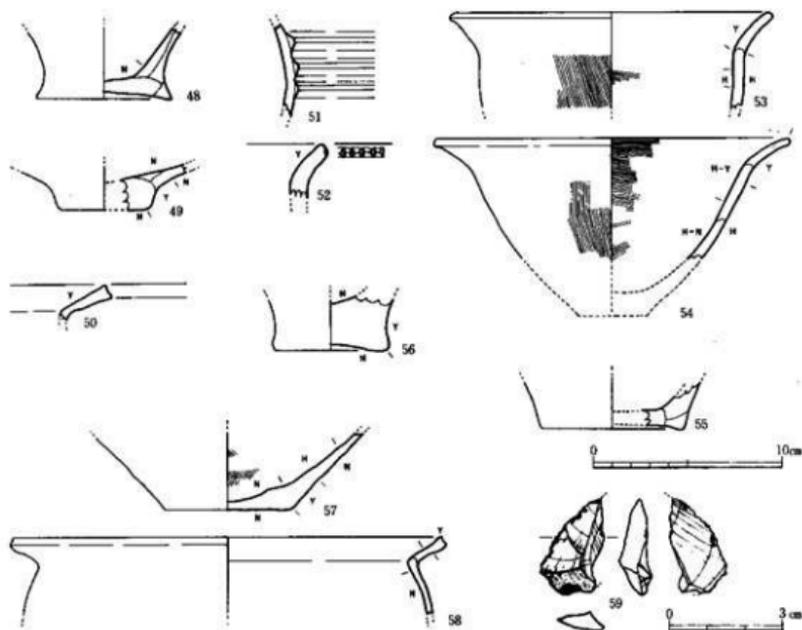


Fig. 83 柱穴出土遺物実測図

デ、他はナデ仕上げ。内面は底面ナデ、他は縦刷毛目仕上げ。58は甕で、「く」の字に屈曲する口縁部をもち、跳ね上げ口縁風に端部が肥厚して外面は窪む。口縁部内外面横ナデ、胴部内面ナデ仕上げ。59は正面右半部を欠損する剥片で、正面下端部には自然面を残す。正面左側縁には連続する細かな剥落痕が認められ、使用痕の可能性が有る。黒曜石製。

河川跡 (Fig. 84, PL. 23)

調査区の東側に位置し、南東から北西に走行する河川跡で、完掘はしていないが、トレンチによって規模・土層の堆積・遺物の出土状況等確かめた。幅約2.6~4.5m、検出面からの深さ約55~80cmの規模をもち、北端部に比べて南端部での底面の起伏が激しい。2条に重複する部分を調査当初は第1・2号河川跡としたが、検出時の平面観察、また中央よりやや南に設定したトレンチでの土層堆積状況の所見でも切り合いが認められなかったことから、同一河川の主流・支流と考える。支流は幅約1.4~2.0m、検出面からの深さ約

遺構・遺物



- 第1号河川跡
- 1 淡灰茶色土
 - 2 暗灰棕色粘質土
 - 3 暗灰色粘質土
 - 4 薄茶灰色粘質土
 - 5 暗茶褐色粘質土
 - 6 黒灰色粘質土
 - 7 淡黄灰色小礫混じり粗砂土

- 第2号河川跡
- 1 淡灰褐色土
 - 2 灰色粗砂土
 - 3 淡青灰色細砂土
 - 4 灰色小礫混じり砂土
(黒色粘土をブロック状に含む)
 - 5 薄灰色砂質土
 - 6 灰白色砂土

- 7 淡黄灰色砂質土
- 8 暗灰棕色粘質土
- 9 暗灰色粘土
- 10 暗茶色小礫混じり粗砂土
- 11 灰色砂土
- 12 黒色粘土

Fig. 84 第1・2号河川跡土層断面図

35~80cmの規模をもつ。埋土は砂質土・砂礫が主体で、洪水等による埋没を窺わせる。

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・円盤状石製品等があるが、量的には須恵器の占める割合が圧倒的に多い。また最下部から須恵器甕 (Fig. 86-77・78)、昭和61年度の調査で最上層から全形を知りうる須恵器坏身が出土しており、この河川跡が機能していたのは古墳時代後期~奈良時代と推察される。

出土遺物 (Fig. 85・86-60~80, PL. 25・26-60~79・PL. 27-69・80)

弥生土器 (60~67)

60~62は壺。60はいわゆる鑿先状口縁をもつもので、拡張部は下垂する。口縁端部の内側への張り出しは弱い。内面横ナデ、外面風化のため調整不明。61は肩部で、削り出しによる段をもつ。外面横ナデ、内面調整不明。62は頭部で、ヘラによる2条の浅い沈線が巡る。内面ナデ仕上げ、外面調整不明。

63~65は甕。63・64は短く緩やかに外反する口縁部をもつもの。64は口縁部の開きが小さく、端部にはヘラによる刻目を施す。いずれも内外面横ナデ仕上げ。65は上げ底の底部で、内面には指圧による整形痕が残る。側面横ナデ、他はナデ仕上げ。

66・67は高坏の脚部で裾部を欠損する。67は坏部に脚部を挿入する。67の外面を除いていずれもナデ仕上げ。

土師器 (68・69)

68は器壁が厚く、中位付近に屈曲部をもつと思われる小形の高坏の脚部。内面はシボリ痕を残し、ナデ仕上げ。外面調整不明。69はほぼ完形に近い高坏。内脚して立ち上がる堦

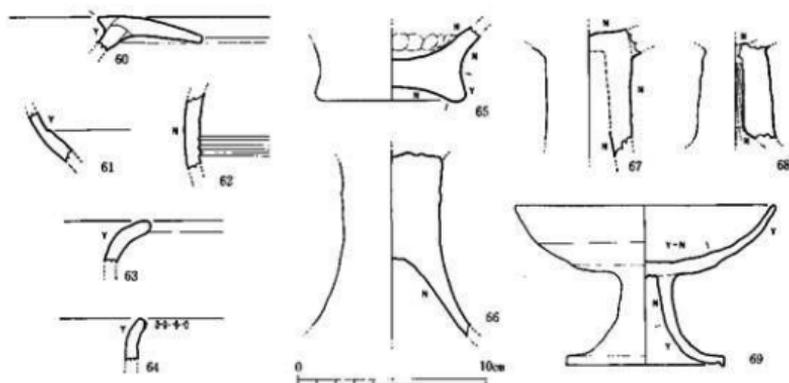


Fig. 85 第1・2号河川跡出土遺物実測図(1)

状の浅い坏部をもつ。脚部は短く、坏部との接合部付近から屈曲することなく緩やかに開く。脚端部は須恵器坏蓋の口縁部同様、鳥嘴状に屈曲する。脚部内面上半は静止ナデ、他は回転ナデを施すが、坏部内面下半はさらに静止ナデを施す。

須恵器（70～79）

70～72は坏蓋。70は丸い体部をもち、口縁部は上方へ反り上がる。口縁端部は尖り気味で、内面には面をもたない。71は直線的にのびる体部をもつ。口縁端部は垂直に屈曲し、断面形は鳥嘴状となる。いずれも内外面回転ナデ調整。72は天井部にボタン状の撮みをもつ。内外面とも回転ナデで、その後、撮み部内外面は静止ナデを施す。

73～76は坏身。73は口縁部で体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。内外面回転ナデ調整。74～76は底部で、底部と体部の境より内側に高台を貼付する。74・75はほぼ直立する高台をもつが、75は扁平で端部が窪む。76は盤状で、高台は外下方へ「ハ」の字に開く。75・76は高台内側端が接地する。74～76とも体部～高台付近の外表面と体部内表面は回転ナデ、外底面中央部および内底面は静止ナデ。

77・78は甕。77は外唇気味に開く口縁部をもち、端部は水平に近い。胴部と口縁部との接合部は、外表面に粘土帯を貼付して補強する。口縁部内外面は回転ナデ調整。胴部は内面に同心円文が残り、外表面にタタキが施されたと思われるが、カキ目により消失している。78は胴長の胴部から底部にかけてのもので、外表面には上半部と下半部で方向の異なる平行タタキを行なった後、粗いカキ目を施す。内表面には同心円文が残る。外表面には自然釉が付

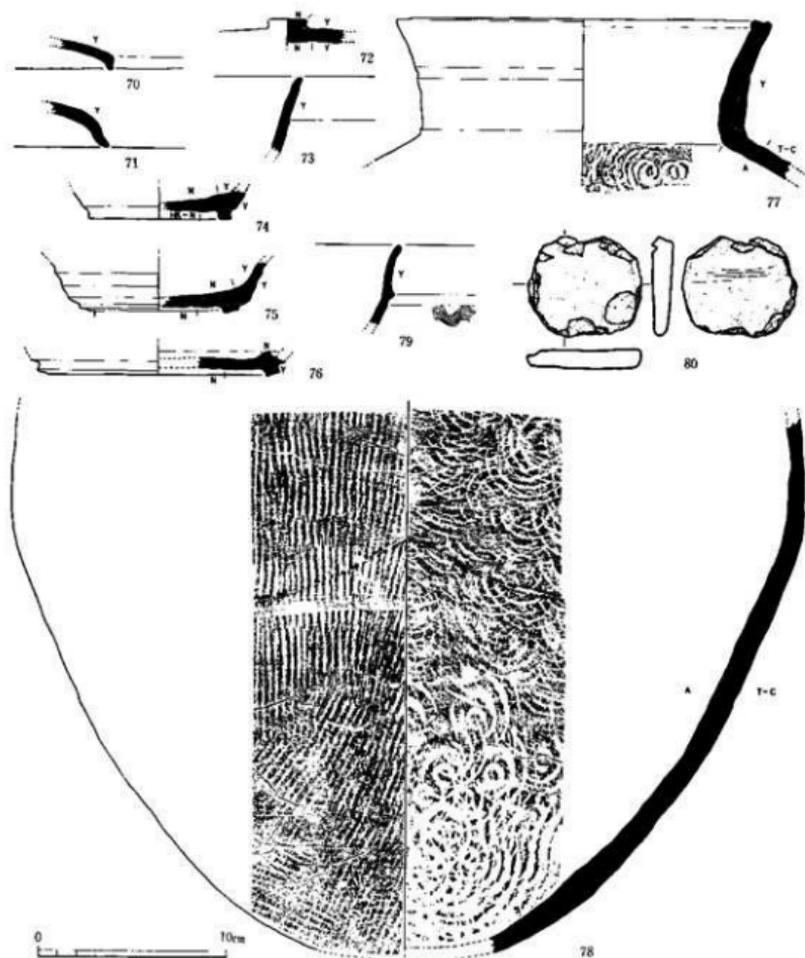


Fig. 86 第1・2号河川跡出土遺物実測図(2)

着する。

79は高坏の坏部。口縁部は外彎しながら開き、端部は尖りぎみにおさめる。口縁部と体部との境に三角突帯を貼付し、その直下に7条単位の波状文が巡る。内外面とも回転ナデ調整。

石製品 (80)

正面上端部を欠損する、いわゆる円盤状石製品である。正面右側縁の一部を除いては全周縁に正裏両面からの剥離痕が認められる。裏面上半部には左右方向の擦痕が残存する。四熊ヶ丘産の角閃石安山岩製。

遺構に伴わない遺物 (Fig. 84・89-81-125, PL. 26-81-124)

1) 攪乱出土遺物 (Fig. 87-81-91, PL. 26-81・85・88・PL. 27-90・91)

弥生土器 (81-88)

81-84は壺。81は直立ぎみに外彎しながら開く口縁部をもつ。口縁部外面ナデ、内面横刷毛目の後ナデ、胴部外面ナデ仕上げ。82-84は底部で、安定した平底 (82・83) と底径の小さい不安定な平底 (84) とがある。82・83は内外底面ナデ、側面は風化のため調整不明であるが、82は側面までナデて仕上げる。84は外面縦刷毛目仕上げで外底面はさらにナデる。内面は刷毛目仕上げ。

85-87は甕。85は頸部内面に稜をもって直線的に短く「く」の字に外反する口縁部をもつ。胴部最大径は口径を上回る。口縁部外面と胴部外面下半には煤が付着する。口縁部内外面横ナデ、胴部内外面ナデ仕上げ。86・87は底部で、胴部からそのまま底部に移行するもの (86) と底部側面が斜下方へ反るやや上げ底のもの (87) とがある。86は外底面・側面横ナデ、胴部外面縦刷毛目、内面ナデ仕上げ。87は風化のため調整不明。

88は高坏。脚柱部は中空で、直線的に下方へ開く。坏部との接合部よりやや下位の外面には赤色顔料の痕跡が認められる。脚部外面縦刷毛目、他はナデ仕上げ。

土師器 (89)

小形の高坏の脚上半部と思われ、坏部との接合部付近から緩やかに開く。3ヵ所に穿孔をもつものであろう。風化著しく調整不明。

石製品 (90・91)

河原石等の転礫を素材とした棒状の敲石で、上端部 (頭部) に敲打痕、下端部に潰痕が認められる。91は敲打・潰痕とも著しく、火熱による焼痕が右側面・裏面を中心としたほぼ全面にみられる。また正面・上面にはタール状の付着物がある。

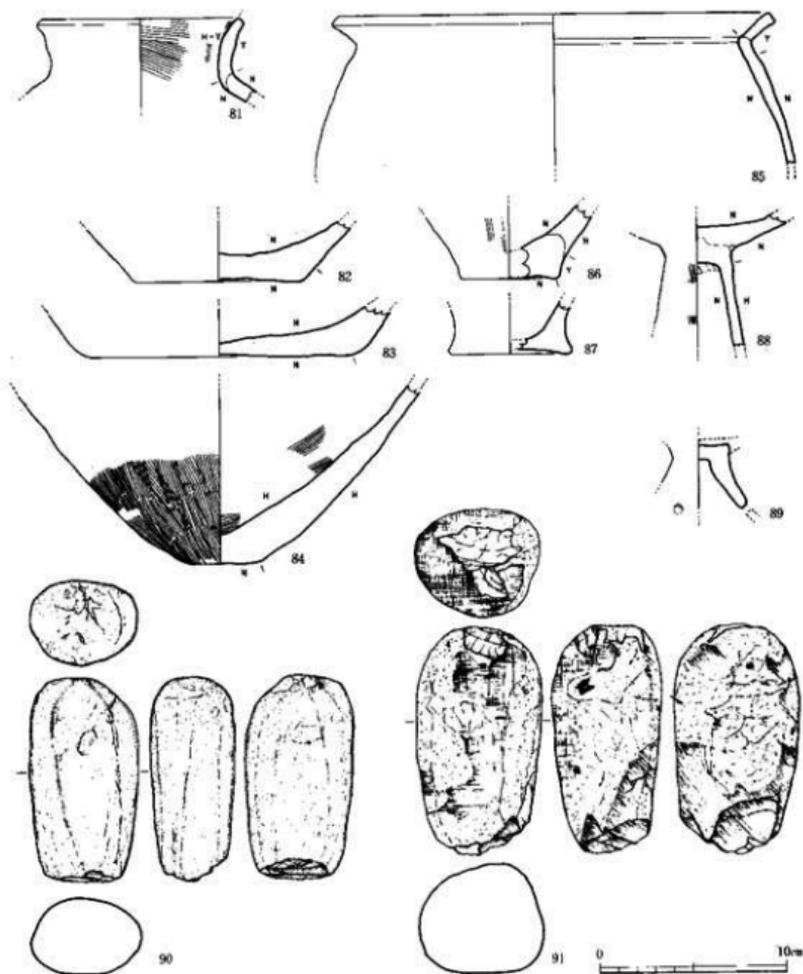


Fig. 87 樽乱填出土遺物実測図

2) トレンチ出土の遺物 (Fig. 88-92-110, PL. 26-93-96・107・PL. 27-108-110)

昭和42年、吉田遺跡調査団による範囲確認調査の際に設定したトレンチからの出土遺物であるが、包含層出土のものか遺構出土のものか判然としないため、一括して取り扱う。
弥生土器 (92-106)

92-97は壺。92は口縁部が下垂し、拡張部外面にヘラによる2条単位の鋸歯文を施す。93はいわゆる鬚先状口縁をもつもの。92・93とも内外面横ナデ仕上げ。94は台付壺の脚台部で、直線的に裾部へ開く。端部付近横ナデ、他はナデ仕上げ。

95・96は甕で、「く」の字に外反する口縁部をもち、頸部内面は強い横ナデあるいはナデのため面をなす。95は胴部最大径が口径に近く、胴部と頸部の境付近は外面の強い横ナデによって内側へ屈曲する。口縁部・頸部内外面横ナデ、胴部外面縦刷毛目、内面粗雑なナデ仕上げ。96は口縁端部が肥厚し、外面が窪む。口縁部内外面・頸部外面横ナデ、胴部外面縦刷毛目、頸部・胴部内面ナデ仕上げ。

97-106は底部。97は壺で平底に近い。側面横ナデ、外底面・内面ナデ仕上げ。98-105は甕。上げ底で底部側面が斜方へ反るものが大半であるが、垂直に近いもの(98-101)もある。103は小形の甕で台状の底部に内彎して立ち上がる胴部をもつ。調整は側面横ナデ、外底面・胴部外面・内面をナデるものが多い。106は手捏ねの鉢で、胴部外面・内面には指圧による粗雑な整形痕が認められる。外底面ナデ、側面横ナデ仕上げ。

土師器 (107)

張りの強い胴部から外彎しながら「く」の字に屈曲する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦刷毛目、内面粗雑なナデ仕上げ。

石製品 (108・109)

108は円礫素材の箴石で、約3/4を欠損する。側面中央部よりやや上位に箴打痕が認められる。デイサイト製。

109は大形の石庵丁の再加工品で、上端部に第一次製品時の穿孔が残存する。正面右側縁は欠損時の折れ面がそのまま放置されているが、他の周縁には正裏両面からの加工が施されている。特に裏面左側縁・下縁には連続する細かな剥離作業が行なわれ、刃部が造出されている。なお上縁の加工は粗雑であるが、剥離面の傾斜角度からみて、刃部としての機能は充分果たしうるものと考えられる。讃岐岩質安山岩製。

その他 (110)

横長剥片で、加工痕は認められない。正面は不定方向からの加撃による剥離面によって

遺構・遺物

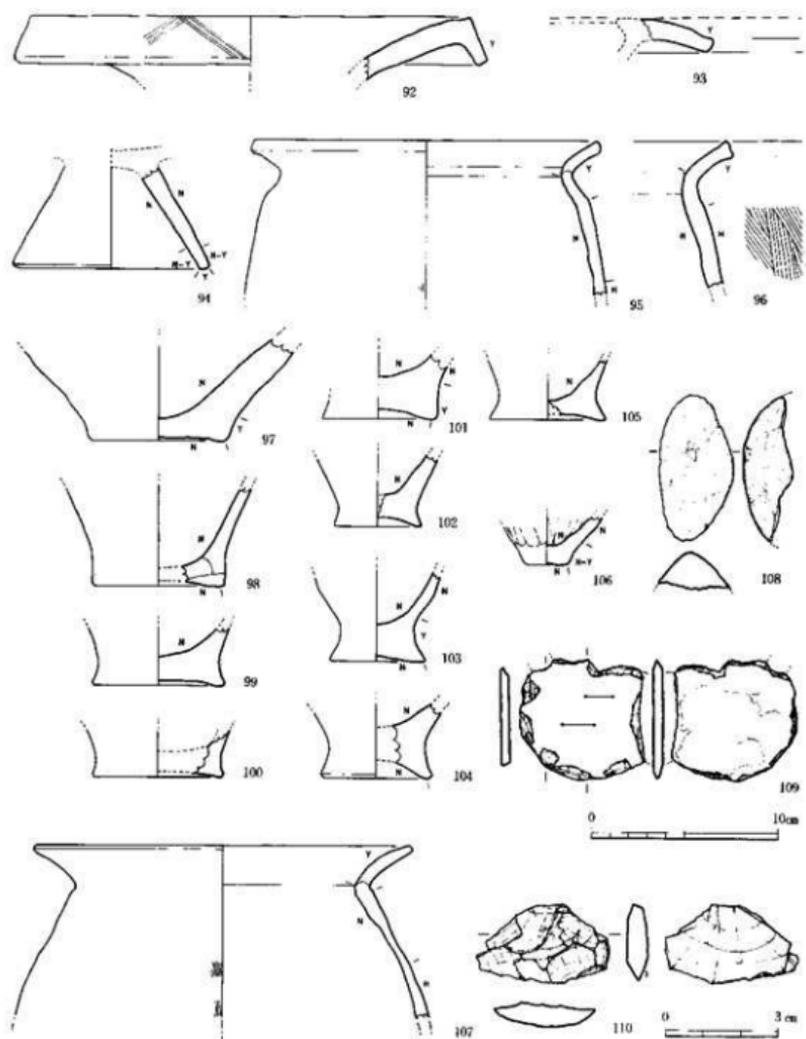


Fig. 88 トレンチ出土遺物実測図

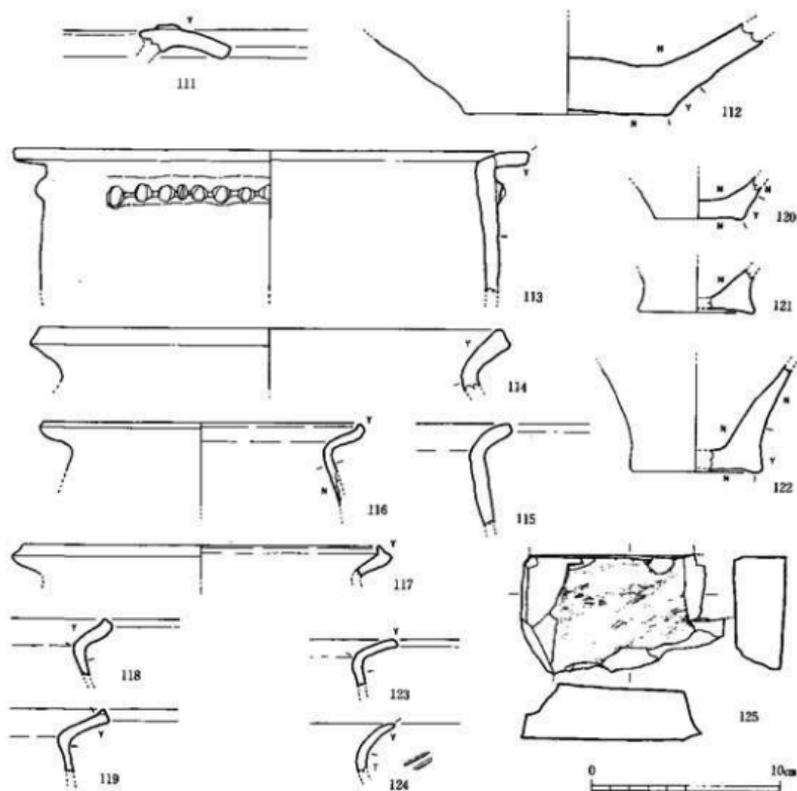


Fig. 89 出土状況不明の遺物実測図

構成され、裏面は主要剥離面である。打点は認められない。硝子質安山岩製。

3) 出土状況不明の遺物 (Fig. 89-111-125, PL. 26-111・113・124・PL. 27-125)
弥生土器 (111-122)

111・112は壺。111はいわゆる鋤先状口縁をもつもので、口縁部は彎曲しながら下垂し、内側寄りに円形浮文を貼付する。内外面横ナデ仕上げ。112は器壁の厚い大形の壺の底部で、安定した平底。側面横ナデ、外底面・内面ナデ仕上げ。

遺構・遺物

Tab. 8 出土土器観察表

法量()は復原値

番号	器種	法量 (g) ①口径 ②底径 ③器高	色 調 ①外面 ②内面	胎土	焼成	備考
SB9						
1	壺	①(36.8)	にぶい・棕色(2.5YR6/3)	やや不良	良好	口縁外面彫刻文
2	壺	②(7.4)	黒褐色(10YR3/1)	やや不良	良好	底部1/2破片
3	甕		灰褐色(5YR6/2)	不良	やや不良	口縁片
4	高坏		褐色(2.5YR6/6)	精	良好	好 胴部
5	甕		にぶい・棕色(5YR7/4)	不良	良好	好 把手
6	有翼支脚		にぶい・棕色(2.5YR6/3)	不良	良好	好 翼部
SB11						
8	甕		にぶい・棕色(5YR7/3)	良	良好	良好 口縁部外面に煤付着
9	甕		①褐色(2.5YR6/6) ②灰褐色(7.5YR5/1)	良	良好	良好 胴部~胴上半片
10	甕	⑤(7.2)	①にぶい・棕色(7.5YR6/4) ②灰褐色(5YR5/1)	不良	不良	不良 底部1/5破片
11	甕	④(4.2)	①にぶい・棕色(5YR6/3) ②灰褐色(7.5YR5/1)	やや不良	良好	良好 底部1/4破片
SB12						
12	甕	⑥(6.6)	①褐色(2.5YR7/8) ②黒褐色(7.5YR3/1)	不良	良好	良好 底部
13	甕		にぶい・棕色(5YR6/4)	良	良好	やや不良 口縁片
14	土師器高坏		①淡赤褐色(2.5YR7/4) ②暗赤褐色(5YR3/2)	不良	良好	良好 坏部片
SB13						
15	甕 or 壺		にぶい・棕色(5YR7/4)	良	良好	良好 口縁片
16	甕		にぶい・棕色(7.5YR7/4)	良	良好	良好 口縁片
17	甕	③(3.4)	黒褐色(10YR3/1)	良	良好	良好 底部
18	土師器甕		褐色(5YR7/8)	不良	不良	不良 口縁片
SB18						
19	甕		①にぶい・赤褐色(5YR5/3) ②にぶい・棕色(7.5YR6/3)	良	良好	良好 口縁端部2本の凹線
20	甕	②(5.6)	①淡赤褐色(2.5YR7/4) ②にぶい・黄褐色(10YR7/2)	不良	良好	良好 底部
21	甕	③(7.4)	①褐色(2.5YR7/6) ②淡黄褐色(10YR8/3)	不良	良好	良好 底部1/5破片
22	土師器鉢	①(17.6)③(7.5)	にぶい・棕色(5YR6/4)	不良	良好	良好 1/2破片
SK30						
23	甕	②(8.2)	褐色(5YR7/6)	良	良好	良好 底部
24	高坏		①赤褐色(10R6/6) ②灰褐色(7.5YR5/1)	精	良好	良好 好 胴部片
25	高坏		①淡黄褐色(10YR6/3) ②灰色(5N 4/0)	不良	不良	不良 好 胴部
SK31						
26	壺		①灰白色(10YR8/2) ②褐色(2.5YR7/5)	良	良好	不良 口縁片
27	壺	②(9.0)	①にぶい・棕色(5YR7/3) ②灰色(5N 6/0)	良	良好	良好 底部1/3破片
28	甕	②(7.0)	①赤褐色(10R6/6) ②にぶい・棕色(7.5YR7/3)	良	良好	やや不良 底部1/5破片

山口大学吉田構内通路保存地区の発掘調査（昭和59年度）

法量（ ）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径 ②高さ ③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
SK33						
29	壺		灰白色(7.5YR6/2)	やや不良	良	好 胴部外面に有輪羽状文
30	壺	②(5.6)	①灰白色(5.5YR6/2) ②淡褐色(5.5YR8/3)	良	好	良 好 底部1/3破片
SK36						
31	壺	①(18.8)	①明褐色(5.5YR3/1) ②にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	不	良	良 好 胴部外面叩き
SK39						
32	土師器壺	①16.0	赤褐色(10R6/8)	精	良	やや不良 口縁部
33	土師器 壺 or 壺	②3.2	①にぶい褐色(5.5YR7/3) ②明褐色(5.5YR5/1)	良	好	良 好 底部
34	土師器壺	②4.0	灰色(5.5Y5/1)	良	好	やや不良 突出する底部
35	土師器高坏	①(17.6)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	精	良	やや不良 坏部1/5破片
SK44						
36	壺		灰白色(5.5YR6/2)	やや不良	良	好 口縁片
37	壺	②(8.2)	淡赤褐色(2.5YR7/4)	不	良	やや不良 底部1/5破片
38	高坏		淡赤褐色(2.5YR7/4)	良	好	良 好 胴部片
SK45						
39	壺		①淡黄色(2.5YR6/4) ②灰色(N 5/0)	良	好	不 良 胴部片
40	壺		①にぶい褐色(2.5YR6/4) ②明褐色(5.5YR7/1)	精	良	良 好 口縁片
SK46						
42	壺	①(22.0)	赤灰色(2.5YR5/1)	良	好	良 好 胴上半部外面に縦付着
SK49						
43	壺		赤灰色(10R5/1)	不	良	良 好 胴部外面縦付着
44	壺	②(7.8)	①にぶい褐色(5.5YR6/4) ②明褐色(5.5YR7/2)	精	良	良 好 底部1/4破片
SD 4						
45	土師器 手捏土器	②(2.6)	褐色(2.5YR7/6)	良	好	やや不良 底部
SD11						
46	壺	②(5.8)	①にぶい褐色(5.5YR7/3) ②明褐色(10YR4/1)	やや不良		やや不良 底部
SD14						
47	壺		①にぶい褐色(5.5YR7/3) ②赤褐色(10R6/6)	不	良	やや不良 口縁片
P 1						
48	壺	②(7.0)	①明褐色(N 3/0) ②灰白色(2.5YR/1) (輪)明褐色(5.5YR7/2)	不	良	良 好 底部1/2破片
P 2						
49	壺	②(4.4)	①にぶい黄褐色(10YR7/2) ②明褐色(7.5YR7/1)	精	良	良 好 突出する底部
P 3						
50	壺		①明褐色(5.5YR4/1) ②灰白色(5.5YR6/1)	良	好	良 好 口縁片
P 4						
51	壺		淡褐色(5.5YR6/4)	やや不良	やや不良	胴部片
52	壺		赤色(10R5/8)	良	好	やや不良 口唇部外面磨目

遺構・遺物

法量()は復元値

番号	器種	法量(m) (①口径 ②底径 ③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考		
P5								
53	甕	①(16.6)	①灰白色(7.5YR8/2) ②灰白色(10YR8/1)	精	良	良好	口縁1/6破片	
54	鉢	①(18.6)	褐色(10YR6/1)	良	好	良	良好	口縁1/4破片
P6								
55	壺か	②(7.4)	①灰褐色(5.5YR6/2) ②褐色(7.5YR6/1)	やや	不良	良	良好	底部1/6破片
P7								
56	甕	②(5.8)	①赤褐色(10R5/8) ②灰白色(2.5Y7/1)	良	好	良	良好	底部
P小明								
57	壺	②6.6	にぶい褐色(7.5YR7/4)	良	好	やや	不足	底部
58	甕	①(22.6)	浅黄色(2.5Y7/3)	良	好	やや	不良	口縁1/4破片
河川跡								
60	壺		にぶい褐色(5.5YR7/3)	やや	不足	良	良好	口縁片
61	壺		①暗赤褐色(5.5YR3/3) ②にぶい赤褐色(2.5YR4/3)	良	好	良	良好	肩部片
62	壺		灰白色(10YR8/2)	不	良	不	良	胴部片
63	甕		①褐色(7.5YR4/3) ②にぶい黄褐色(10YR7/2)	良	好	やや	不良	口縁片
64	甕		黒褐色(7.5YR3/2)	良	好	良	良好	口唇部に割目
65	甕	②7.2	①赤褐色(10R5/8) ②暗灰色(8/3)	不	良	良	良好	底部
66	高坏		①暗褐色(7.5YR7/1) ②灰色(5.5Y6/1)	不	良	良	良好	脚部1/2破片
67	高坏		にぶい褐色(7.5YR7/3)	良	好	良	良好	脚部
68	土加器高坏		にぶい褐色(5.5YR7/3)	良	好	不	良	脚部1/2破片
69	土加器高坏	①13.8 ②8.5 ③8.4	灰白色(N 8/0)	精	良	良	良好	ほぼ完形
70	須恵器坏蓋		明褐色(10GY7/1)	良	好	良	良好	口縁片
71	須恵器坏蓋		灰白色(N 8/0)	良	好	やや	不良	口縁片
72	須恵器坏蓋		①暗青灰色(10BG4/1) ②青灰色(10B2.6/1)	やや	不良	良	良好	縁上部
73	須恵器坏身		①青灰色(5.5B5/1) ②青灰色(10BG6/1)	良	好	良	良好	口縁片
74	須恵器坏身	②(7.4)	黄褐色(2.5YR3/3)	良	好	良	良好	底部
75	須恵器坏身	②(6.8)	青灰色(10BG4/1)	良	好	良	良好	底部1/6破片
76	須恵器坏身	②(11.6)	青灰色(5.5P6/1)	やや	不良	良	良好	底部1/5破片
77	須恵器 甕	①(18.0)	明青灰色(5.5P7/1)	良	好	良	良好	口縁～胴部1/5破片
78	須恵器 甕		灰白色(7.5Y7/1)	良	好	不	良	胴下部1/5破片
79	須恵器高坏		明青灰色(5.5P3/1)	精	良	やや	不良	口縁部外面7条の流状文
複乱墳								
81	壺	①(10.4)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	精	良	良	良好	口縁1/4破片
82	壺	②(8.8)	①灰白色(10YR8/2) ②灰褐色(5.5YR4/2)	良	好	良	良好	底部1/3破片
83	壺	②(13.8)	灰白色(10YR8/2)	良	好	良	良好	底部1/3破片
84	壺or甕	②(2.8)	①灰青褐色(10YR5/2) ②黄褐色(2.5YR3/3)	良	好	良	良好	底部1/3破片
85	甕	①(22.7)	明赤褐色(2.5YR5/6)	やや	不良	堅	緻	口縁1/6破片

山口大学古田構内遺跡保存地区の発掘調査 (昭和59年度)

法量 () は復原値

番号	器種	法量 (cm) ①口径 ②底径 ③器高	色 調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備 考
86	壺 or 甕	②(5.0)	黄褐色(10YR6/6)	不	良	好 底部1/4破片
87	壺	②(6.2)	にぶい褐色(5YR7/4)	不	良	好 底部1/5破片
88	高坏		褐色(7.5YR6/1)	良	好	良 好 坏底一瓣部片、外面片産
89	高坏		にぶい褐色(2.5YR6/4)	良	好	やや不良 脚部
トレンチ						
92	壺	①(23.3)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	良	好	良 好 11線部外面2条半位の磨滅文
93	壺		にぶい褐色(5YR7/3)	良	好	良 好 口縁片
94	台付壺	②(9.4)	灰青色(2.5Y7/2)	良	好	良 好 脚部1/5破片
95	壺	①(18.2)	灰褐色(7.5YR5/2)	良	好	良 好 11線1/6破片
96	壺		灰褐色(5YR5/2)	不	良	良 好 口縁片、端部肥厚
97	壺	②(7.0)	①にぶい褐色(7.5YR7/3) ②黄灰色(2.5Y5/1)	良	好	精 良 底部1/5破片
98	壺(?)	②(6.6)	灰褐色(7.5YR6/2)	良	好	良 好 底部1/5破片
99	壺 or 壺	②(6.9)	にぶい褐色(5YR7/3)	精	良	やや不良 底部1/4破片
100	壺	②(6.8)	にぶい褐色(5YR7/4)	良	好	不 良 底部1/6破片
101	壺	②(6.0)	①褐色(2.5YR6/8) ②灰褐色(5YR5/2)	不	良	良 好 底部
102	壺	②(4.6)	①にぶい褐色(5YR6/3) ②明褐色(10GY7/1)	良	好	不 良 底部1/4破片
103	壺	②(4.8)	①にぶい褐色(2.5YR7/4) ②にぶい黄褐色(10YR7/4)	良	好	良 好 底部
104	壺	②(5.6)	①褐色(2.5YR6/8) ②灰褐色(7.5YR6/2)	良	好	良 好 底部1/7破片
105	壺	②(6.2)	①褐色(2.5YR7/8) ②暗灰色(10YR5/1)	良	好	良 好 底部1/3破片
106	手捏土器	②(2.1)	褐色(2.5YR7/6)	精	良	やや不良 底部
107	土師器 壺	①(19.8)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	不	良	不 良 11線1/5破片
出土状況不明						
111	壺		にぶい褐色(5YR7/4)	良	好	不 良 鬚先状口縁片
112	壺	②(10.6)	①にぶい褐色(5YR7/4) ②黄色(5YR6/6)	不	良	良 好 底部1/3破片
113	壺	①(27.4)	①淡黄褐色(2.5YR8/2) ②灰白色(10YR8/2)	不	良	不 良 口縁1/6~1/7破片
114	壺	①(24.4)	灰白色(2.5YR8/2)	やや不良	良	良 好 11線1/6破片
115	壺		①にぶい褐色(5YR6/3) ②灰黄褐色(10YR4/2)	不	良	良 好 口縁片
116	壺	①(16.9)	灰褐色(7.5YR4/2)	やや不良	やや不良	良 好 11線1/6~1/7破片
117	壺	①(18.8)	①にぶい黄褐色(10YR7/2) ②黄色(10YR1.7/1)	良	好	良 好 底部1/7破片
118	壺		茶褐色(2.5Y3/1)	精	良	良 好 口縁片
119	壺		浅黄色(2.5Y7/3)	良	好	良 好 口縁片
120	壺	②(4.6)	①赤色(10R5/6) ②茶褐色(2.5Y3/1)	不	良	不 良 底部1/3破片
121	壺	②(6.0)	にぶい褐色(5YR7/4)	やや不良	良	良 好 底部1/4破片
122	壺	②(6.6)	①灰白色(10YR8/2) ②暗灰色(N 3/0)	良	好	良 好 底部1/5破片
123	土師器 壺		にぶい褐色(5YR7/4)	良	好	良 好 口縁片
124	土師器 壺		暗灰色(7.5YR6/1)	やや不良	良	良 好 口縁片

遺構・遺物

Tab. 9 出土石器観察表

() は現存額

No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
SB9							
7	ナイフ形石器	(4.2)	1.9	0.7	(6.2)	メノウ	
SK45							
41	砥石	(3.9)	5.2	2.0	(66.3)	凝灰岩	
P不明							
59	削片	(2.5)	(1.7)	0.5	(1.6)	黒曜石	
河川跡							
80	円盤状石製品	(5.3)	6.0	1.1	(41.8)	角閃石安山岩(四熊ヶ所産)	
雑乱集							
90	砥石	(10.9)	5.8	4.0	(519.4)	緑色片岩	
91	砥石	(12.1)	6.7	5.7	(672.0)	花崗閃緑岩	火熱を受ける、付着物あり
トレンチ							
108	砥石	(7.7)	(2.6)	(2.0)	(65.9)	アイサイト	
109	石庵丁	(6.4)	(6.6)	0.5	(36.5)	濃緑岩質安山岩	大形石庵丁の再加工品
110	削片	2.1	3.4	0.6	3.9	硝子質安山岩	
出土状況不明							
125	砥石	(6.3)	(10.8)	3.0	(317.5)	流紋岩質溶結凝灰岩	

113~122は壺。113は胴部の張りが極めて弱く、逆「L」字状に強く屈曲する口縁部をもち、端部は面を有する。頸部直下の外面には指圧による粗雑な刻目を施した貼付突起が巡る。口縁部から突起のやや下位までの外面は横ナデ、他は風化のため調整不明。114は口縁端部が肥厚し、面をもつ。内外面横ナデ仕上げ。116~119は跳ね上げ口縁をもつもので、口縁端部が内彎するもの(116)、直線的にのびるもの(119)などがあるが、端部外面はいずれも面を有する。117は跳ね上げが顕著で、口縁端部は肥厚する。116~119とも口縁部・頸部内外面は横ナデで、116は胴部内面ナデ仕上げ。120~122は底部。底部側面が胴部からそのまま移行するもの(120)、斜下方へ反るもの(121)、垂直に下降するもの(122)がある。側面横ナデ、外底面・内面はナデるものが多い。

土師器(123・124)

2点とも壺で、123は直線的に「く」の字に屈曲する口縁部をもち、端部はさらに外反する。124は口縁部が外彎しながら開き端部は尖る。いずれも口縁部内外面横ナデで、124は頸部下外面に右上がりのタタキを施す。

石製品(125)

正面の一部を研砥面とする砥石で、上端部・裏面は節理面である。研砥は不定方向から行なわれるが、正面左上方から右上方への擦過は認められない。流紋岩質溶結凝灰岩製。

4 小結

昭和59年度の調査で検出した遺構は、上述したように竪穴住居跡10棟、土壇19基、溝10条、河川跡のほか柱穴多数である。

竪穴住居は弥生時代中期前半（第10号竪穴住居跡）、中期後半（第9・11号竪穴住居跡）、後期後半（第8号竪穴住居跡）、後期末（第18号竪穴住居跡）、古墳時代中期（第12・13号竪穴住居跡）の5時期のものが検出された。

平面形態は、中期のものはすべて円形（第9～11・14・15・17号竪穴住居跡）である。弥生時代の竪穴住居が、方形から円形へと移行する前期後半～末項を平面形態変化の第一の画期とするならば、第二の画期として捉えられる、宇部市北迫遺跡・防府市大崎遺跡等のような、円形から再び方形へと変化する中期後半段階の方形住居は検出されていない。

後期後半～終末は、円形・方形の両形態が混在（第8・18号竪穴住居跡）し、樫野川に東の趨勢と一致する。5世紀後半の住居は、方形（第13号竪穴住居跡）・隅丸長方形（第12号竪穴住居跡）の方形系統2種がみられる。

床面積は、中期後半の住居が31～48㎡の規模をもち、特に中期後半の第9号竪穴住居跡は、48㎡と同時期の住居としては県内でも有数の規模をもつ。樫野川・佐波川・阿武川流域では、中期前半以降住居規模が大形化し、床面積が20㎡前後の一群に加えて、約45㎡前後のものが出現する。この大形化は中期後半にピークに達することから、第9号住居跡も大形化した住居例と捉えることができよう。

後期後半の第8号竪穴住居跡は床面積約25.5㎡で、樫野川流域の同時期の方形住居の中でも最大の規模である。朝田墳墓群第Ⅱ地区の各住居を含めると、樫野川流域は床面積約12～25㎡のもので占められ、右田・一丁田遺跡、井上山遺跡等、佐波川流域の方形住居群とはほぼ同一規模をもつ住居群で構成されていることになり、興味深い。

また、5世紀後半の第13号竪穴住居跡は、東辺7.6m、北辺7.2mで、約54㎡の床面積をもち、県内の同時期の住居の中では傑出した規模である。平面形態は方形で、4本の支柱が平面形態と相似形をなして方形に配置される。ベッド状遺構はほぼ四周を巡るが、東辺中央部では途切れ、壁面に接して炭化物の充填した円形の掘り込みが認められた。この掘り込みの底面・側壁は熱変しており、設置場所・性格・竪穴住居の時期などから、カマ

ドが出現する前段階の施設として興味深い。

またこの住居は火災住居で、床面上には桁および梁と考えられる4本の炭化材が方形に組まれたまま焼け落ちた状態で出土した。その周囲には種木と推定される約20本の炭化材が床面中央に向かって放射状に検出されている。さらに、方形に組まれた桁・梁の内部の床面には、種木に比べひとまわり太い炭化材が認められ、規模・検出位置・桁との重複関係から、主柱の一部と考えられた。桁・種木の検出状況、住居の平面形態、主柱配置などから寄棟造屋根が想定され、竪穴住居の上屋構造を知る貴重な発見例となった。

土壌は、弥生時代中期中葉～終末のもので、平面形態は不整形のものが多い。竪穴住居に付設して営まれたものと考えられるが、相関関係は明らかでない。溝は、弥生時代中期後半～古墳時代初頭のもので、残存状態は悪く、遺物の出土量は極めて少ない。

河川跡は、調査区東端部で検出され、幅約2.6～4.5m、検出面からの深さ約55～80cmの規模をもち、南東から北西へ走行する。須恵器甕・坏身・土師器高坏などが出土しており、古墳時代後期～奈良時代にかけて機能していたものと考えられる。

出土遺物は、量的に多くはないが、注意しておきたい資料が数点出土した。

第9号竪穴住居跡から出土した一箇緑加工のナイフ形石器は、対向する打面をもつ石核から作出された縦長剥片を素材とする優品である。メノウ製で、やや内彎する刃部には使用痕と考えられる剥落痕が認められる。竪穴住居の検出面が旧石器時代の遺物包含層であり、住居掘削時に同層から遊離した可能性も考えられる。近年、毛割遺跡⁹⁾、堂道遺跡¹⁰⁾や瑠璃光寺跡遺跡¹¹⁾からの報告例があるが、山口盆地内では旧石器自身の出土量が極めて少なく、当資料が大形の部類に入るナイフ形石器であることから、時期的にやや遡る可能性が考えられ、周辺での今後の資料の増加が期待される。

また同住居内からはジョッキ形土器の把手と思われるものも出土したが、県内では周東町河池遺跡¹²⁾に出土例がみられるにすぎず、極めて貴重である。

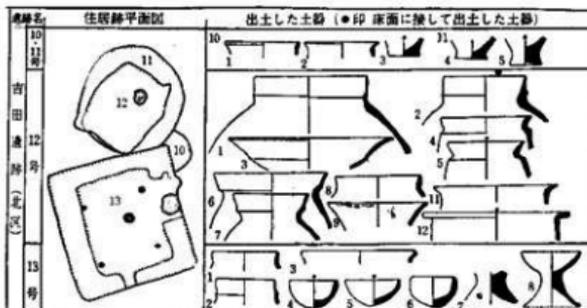
第39号土壌は庄内新段階に位置づけられる。出土遺物には口縁部が「く」の字に大きく外反する甕、坏部の中位に稜をもって開く高坏に加え、搬入品かどうかわからないが底部が円盤状に突出した外来要素の強い土師器の甕または壺があり、注目しておきたい。

以上のように、遺跡保存地区の2年次目の調査では、多数の竪穴住居跡をはじめとして、土壌・溝・河川跡等を検出した。出土遺物にも注目すべき資料が少なくない。しかし住居の構造・集落の分布範囲等は必ずしも明らかになったわけではなく、住居の同時併存・土壌との相関関係を含めて、今後に残された大きな課題といえる。

山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）

〔注〕

- 1) 河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、山口大学埋蔵文化財資料館、1986年）。
- 2) 小野忠照「北辺遺跡」（『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年）。
- 3) 山口県教育委員会・山陽都市開発株式会社「大崎遺跡」（『興正権寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第82集、1985年）。
- 4) 第10～13号竪穴住居跡の出土遺物は、当埋蔵文化財資料館に該当資料が保管されておらず、遺物の記載は下記の文献に拠った。
小野忠照・中野一人「山口」（『11世紀の考古学』下巻・三世紀の日本列島、学生社、1983年）。



- 5) 河村吉行「考察・弥生時代竪穴住居跡の各属性について」（前掲注1）文献所収）。
- 6) 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「朝田墳墓群Ⅱ」（『朝田墳墓群Ⅱ・湯ノ峰ノ号墳』、山口県埋蔵文化財調査報告第33集、1977年）。
- 7) 山口県教育委員会「石田・一丁田遺跡」（『石田・一丁田遺跡、釣場・宮の馬場遺跡、久米市遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第19集、1973年）。
- 8) 井上山遺跡発掘調査団「井上山」（1979年）。
- 9) 山口市教育委員会・道川重機株式会社「毛割遺跡」（山口市埋蔵文化財調査報告第18集、1983年）。
- 10) 山口市教育委員会・医療法人和同会「堂道遺跡」（山口市埋蔵文化財調査報告第24集、1987年）。
- 11) 小田村安「先史・原史」（『仁保の郷土史』、仁保の郷土史刊行会、1987年）。
- 12) 山陽自動車道建設に伴い、1987年に山口県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施されている。竪穴住居からの出土品で、報告書は1988年3月に刊行予定。

古墳時代における竪穴住居の各属性について

河村吉行

1 はじめに

筆者は先に弥生時代社会の構成要素を抽出するにあたり、その一つ的手段として県内における弥生時代の竪穴住居を大きく九つの水系単位に集約し、集落内において生産、消費の拠点となる個々の竪穴住居について平面形態、床面積、支柱数および支柱間床面積等の構造的属性から分析を行ない、各水系単位における住居構造の諸特徴の時期的変遷・画期について問題提起を行なった¹⁾。また、火災住居の検出例も少なく、建築学的立場からの構造力学的な分析は留保したが、平面的な視点から水系単位の竪穴住居の各属性の時期的変遷を概観した。本稿では古墳時代の竪穴住居の分析を試みるが、その前に、県内の弥生時代の竪穴住居について各属性の変化の過程・画期について簡単に触れておくことにする。

弥生時代の竪穴住居の平面形態の変化には時期的に二つの画期が認められた。第一の画期は前期末で、資料数は少ないが長門部の西部、木屋川流域に位置する坂ノ上遺跡²⁾、上原遺跡³⁾および周防部西端、樺野川流域に位置する西遺跡⁴⁾で方形から円形への形態変化が窺われる。第二の画期は固定的に採用された円形の平面形態に加え、方形のものが出現する中期後半の段階である。樺野川流域の山口大学構内遺跡（吉田遺跡）、佐波川流域の大崎遺跡⁶⁾および厚東川流域の北迫遺跡⁷⁾では隅丸方形のものが出現するが、この時期は佐波川流域の各遺跡で見られるように円形15棟に対し方形は3棟で、棟数的にはまだ円形のものが圧倒的優勢を占める傾向がある。しかし、次第に方形住居の出現頻度が増加し、後期後半の段階では両形態の住居棟数は拮抗状態となり、長門部最西端の綾羅木川流域に位置する石原・伊倉両遺跡⁸⁾⁹⁾ではすべて方形へと変化している。これに対して阿武川流域の突抜遺跡はこの段階でも円形住居が優位を占め、保守的色彩が強い。また、この段階では周防部北部阿武川流域の突抜遺跡 DW-15に見られるような方形住居の一辺が胴張りとなり、円形住居の痕跡を残すものや同遺跡 DW-11、周防部北部にあたる末武川流域の宮原遺跡第1号住居跡¹⁰⁾¹¹⁾のような上面は円形に近いが床面が方形のものなどが存在し、円形から方形への過渡的な形態をもつものが出現する。

床面積は、前期末～中期初頭の段階では約30㎡を超えるものはないが、中期前半以降は

樺野川、佐波川、阿武川流域の各遺跡で顕著に見られるように、前代の規模を踏襲した約10～25㎡のものに加え、約40～65㎡と大形化した規模をもつものが出現する。住居規模の大形化のピークは円形住居に特徴的で、各流域とも方形住居が出現する時期に相当し、樺野川、佐波川流域では中期後半頃、阿武川流域では後期前半頃、掛淵川流域では後期後半頃である。各流域とも「倭国大乱」の緊張時にあたっており、戦闘に備えて集住を余儀なくされた結果、一棟ごとの収容面積の拡大を伴い、円形住居の盛行を導いたものと考えられている¹²⁾。規模の大形化の収束後は、方形住居は約10～30㎡、円形住居は約10～25㎡のもの約30～45㎡前後のやや大形の二群に分化する。方形住居は樺野川、佐波川流域で見られるように約10～20㎡前後に規格化するものが多い。他の流域に比較していはやく後期後半の段階で綾羅木川流域では方形住居は約10～30㎡、約35㎡、約55～60㎡の三群に分化するが、30㎡前後に規格化するものが多く、同時期の阿武川流域での円形住居の規模の画一化と同一現象を示す。

主柱数は住居規模の大形化と呼応して増加し、大形化のピーク時が最多となる。各流域とも円形住居は最多時で7～9本のものがみられ2～6本のものも存在する。また、方形住居が優位を占める後期後半の段階で2～4本となる。方形住居は住居規模と無関係に2ないし4本の二種類の主柱配置がみられる。

主柱間床面積は円形の場合、約30㎡以下の床面積をもつものは各時期とも床面積の45%ないしはそれ以下が大半で、4～5本の主柱をもつ中期後半の佐波川流域の住居にとくに顕著にみられる。また、約35㎡以上の床面積をもつもののうち、床面積の50%を超えるものは殆どあるいは中央穴の周囲に2ないし4本の支柱（棟持柱）を床面に配置する傾向が窺える。方形住居は主柱間床面積の床面積に占める割合は45%以下が大半で、約30㎡以下の床面積をもつ円形住居の割合と同じ傾向を示している。したがって、方形住居の主柱は約30㎡以下の床面積をもつ円形住居の空間分割を意識して配置されたものと考えられる。

こうした、堅穴住居の諸属性は集落の構成員はもとより、集落を形成する集団の生活・社会様式の主体的力量の反映であることから、以下では、弥生時代の堅穴住居で認められる諸属性が政治的・経済的・社会的な変動の画期となる古墳時代でどのように変化し、推移していったのかを検討してみたい。なお、畿内庄内式土器の時期区分については研究者相互によって編年観が異なるが、本稿で3世紀後半の年代を与えている。また、4世紀代の堅穴住居は現在のところ、綾羅木川流域の秋根遺跡 LS 004、樺野川流域の下東遺跡 KPD-1¹⁴⁾の2棟に限られており、堅穴住居跡の諸属性を分析するには資料数が少なく、資

竪穴住居の各属性

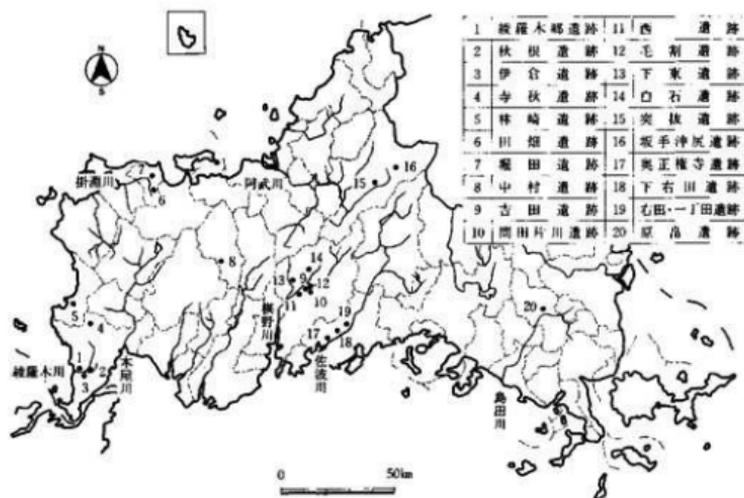


Fig. 90 県内における主な古墳時代の竪穴住居跡検出遺跡の分布

料数の増加を待って改めて言及したい。

2 竪穴住居の各属性

1) 平面形態

弥生時代終末～3世紀代においては秋根、伊谷、石原遺跡等でみられるように綾羅木川流域では円形住居は消失し、いちやく方形住居のみで構成されている。しかし、綾羅木川流域以外の六つの河川流域では、いずれも円・方形形態が混在しており、特に、阿武川流域の突抜・馬場遺跡、烏田川流域の高地性集落と呼ばれる吹越¹⁵⁾・松尾遺跡¹⁶⁾等で顕著である。なお、円形から方形への過渡的な形態をもつものが先にも述べた突抜遺跡 DW-11・15、佐佐川流域の右田・一丁田遺跡第3・20号住居跡や宮原遺跡第1号住居跡で認められることから、平面形態の変化は長門郡に比べ周防部がやや遅れる傾向にあると言える。

4世紀代の資料は、秋根遺跡 LS 004の方形住居があげられるが、5世紀以降は各河川流域ともすべて方形、隅丸方形、長方形、隅丸長方形の方形系統の住居で占められ、4世紀代、遅くとも5世紀には円形から方形の画一的な平面形態変化の両期が認められる。そこで弥生時代終末から7世紀にかけて時期別に、方形系統の各4種それぞれが全住居に占

古墳時代における竪穴住居の各属性について

河川流域	時期 遺跡名	弥生時代			庄内 併行期	古墳時代				
		前期	中期	後期		4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀
A	伊香遺跡			—			—			
	石原遺跡			—						
	秋保遺跡			—						
	横尾木塚遺跡						—		—	
B	城山遺跡		—							
	林崎遺跡							—		
B	高畑遺跡		—	—						
	堀田遺跡								—	
C	上原遺跡	—								
	坂ノ上遺跡	—								
C	中村遺跡		—	—				—		
D	北沼遺跡		—	—						
	青畑遺跡		—	—						
E	朝田遺跡Ⅱ		—	—						
	朝田遺跡Ⅲ		—	—						
	下東遺跡					—				—
	白石遺跡						—			
	古田遺跡	—	—	—						
	西遺跡	—	—	—						—
	宝遺跡			—						—
岡田-片月遺跡				—					—	
毛刺遺跡									—	
F	石原-下田遺跡		—	—						
	下石田遺跡		—	—						
	大崎遺跡		—	—						
	奥正権寺遺跡		—	—						
	井上山遺跡		—	—						
G	突抜遺跡	—	—							
	馬場遺跡	—	—							
	板手沖尻遺跡		—							—
	宮原遺跡	—								
	新阿曾山遺跡									
H	岡山遺跡		—	—						
	追道遺跡			—						
	原高遺跡									—
	吹越遺跡									—
	松尾遺跡									—

(A: 綾羅木川、B: 磐淵川、C: 厚東川、D: 本屋川、E: 新野川、F: 佐渡川、G: 阿武川、H: 島田川)

Fig. 91 県内における主な弥生～古墳時代の竪穴住居の時期

竪穴住居の各属性

時 期		弥生時代終末～3世紀				4 世 紀			5 世 紀			6 世 紀			7 世 紀		
平 面 形 態		A	B	C	D	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
河 川 流 域	横瀬木川流域	4	14	2	5		1		2			5	1	1	3		
	掛淵川流域		1										3				
	榑東川流域												1		5	5	
	横野川流域			2		1			4	6	1		3			11	
	佐波川流域	2	2						4	4							
	阿武川流域	2	1														
	末武川流域	2							1								
	烏田川流域	4															
計		14	18	4	5	1	1	0	11	10	1	5	8	1	8	16	0

時 期	隅丸方形 (%)	方形 (%)
弥生時代終末～3世紀	34.1	43.9
4世紀	55.0	45.4
5世紀	35.7	57.1
6世紀	33.3	66.6
7世紀	33.3	66.6

(A:隅丸方形 B:方形 C:隅丸長方形 D:長方形 数値は棟数)

Fig. 92 竪穴住居の平面形態変化

める割合を算出してみた。試料数は101の竪穴住居であるが、各河川流域単位での検出事例に多寡があるため、あえて時期別に一括した。また、弥生時代終末～3世紀代に一辺あるいは二辺が剛張りとなり、円形から方形への過渡形態となるものは除外した。方形住居は弥生時代終末～3世紀代では全住居の43.9%、5世紀代で45.4%で5割に満たず出現比率はほぼ同じである。しかし、6世紀以降は次第に出現頻度を増し、6世紀代で全住居の57.1%、7世紀代で66.6%と全住居の7割弱を占めるようになる。また、隅丸方形のものは弥生時代終末～3世紀代で全住居の34.1%であるが、5世紀代には出現頻度が急増し、55.0%を占めるようになる。その後、6世紀代では全住居の35.7%、7世紀代で33.3%と

安定した出現率を示すようになる。すなわち、弥生時代終末～3世紀代には方形住居が優位を占めていたが、5世紀代には両者の出現頻度が逆転する。それとともに、長方形、隅丸長方形の検出例は少なくなる。しかし、6世紀以降は隅丸方形が逆に減少し、安定した出現率を示すのとは対照的に方形住居が次第に集落内で棟数を増し、7世紀代では全住居の7割弱を示すようになる。したがって、古墳時代の方形系統の住居の平面形態の画期は弥生時代ほどの大きな変化はないが、5～6世紀代に求めることができ、6世紀以降は住居の平面形態が方形という画一化した形態をとる傾向が指摘できる。

2) 床面積

次に、各時期の床面積の推移をみてみることにする。

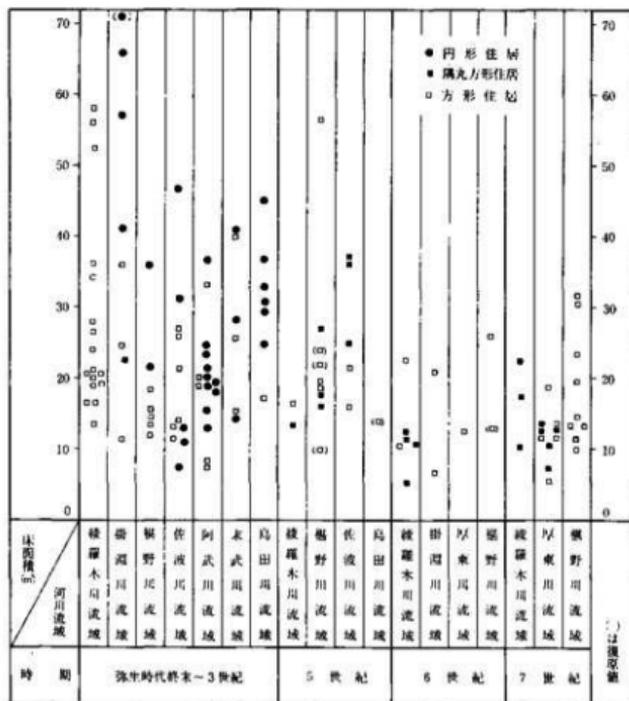


Fig. 93 壑穴住居の床面積

弥生時代終末～3世紀代における方形住居の床面積は大きく約10～30㎡、約30㎡、約50～60㎡の三群に区分されると考えられる。綾羅木川流域の秋根、伊倉、石原遺跡等ではとくに顕著に認められるが、各流域とも約10～30㎡前後に集中している。この傾向は5世紀代まで存続するが、6世紀代ではいっそう顕著となり、5世紀代でみられた右田・一丁田遺跡第2・19号住居跡や山口大学構内遺跡（吉田遺跡）の遺跡保存地区第13号竪穴住居跡等の35㎡以上の床面積をもつ住居は姿を消し、床面積はすべて約10～30㎡前後に縮小化してしまう。この縮小化した住居はさらに約10～15㎡前後のもの、約20～30㎡前後のもの二群に分化している。とくに、7世紀代では厚東川流域の中村遺跡¹⁹⁾、樺野川流域の毛割遺跡²⁰⁾にみられるように約10～15㎡前後の極めて画一化した床面積をもつ一群が出現している。

古墳時代における床面積変化の両期は以上のように住居規模の小形化・画一化として捉えられ、先に述べた平面形態が隅丸方形から方形に変化し、画一化する時期と同じく6世紀代に認められる。すなわち、平面形態の方形への規格化と床面積規模の小形化・画一化が連動しており、注意しておきたい。

3) 主柱数

床面積が約10～25㎡前後のもので比較すると、円形住居は弥生時代中期後半では、佐渡川流域の奥正権寺、下右田、右田・一丁田、井上山各遺跡で2～6本とバラエティーに富むが、各流域で方形住居が定着した後期後半～3世紀代では0、2、4本の三種に限定される。この傾向は6世紀代まで引き継がれる。しかし、5世紀代までは4本柱と他の主柱数をもつ住居はほぼ同数に近いが6世紀代では2本柱が激減し、4本柱をもつものが他の主柱数をもつものに比べて約2倍近い出現率を示している。主柱数の変化においても、6世紀代がひとつの両期であることが推察される。また、7世紀代では1、3本の主柱をもつものが出現し、0～4本の五種の主柱をもつ住居が営まれている。

Tab. 10 竪穴住居の主柱数

時 期	主柱数				
	0	1	2	3	4
弥生時代終末～4世紀	1	0	9	0	10
	5.0		45.0		50.0
5世紀	3	0	7	0	8
	16.7		38.9		44.4
6世紀	3	0	1	0	8
	25.0		8.3		66.7
7世紀	4	2	2	2	13
	17.4	8.7	8.7	8.7	56.5

上段数値は住居数、下段数値は同時期の全住居に占める割合(%)

4) 主柱間床面積

方形住居で主柱間床面積が床面積に占める割合は、変化の画期が5、7世紀に認められる。弥生時代終末～4世紀代ではほぼ17～41%の範囲内に分散していたが、5世紀代では山口大学構内遺跡（古田遺跡）の遺跡保存地区第13号竪穴住居跡、西遺跡第4・12号住居跡、下右田遺跡 DW-2、右田・一丁田遺跡10号住居跡で22～26%、6世紀代では秋根遺跡3～6号住居跡、中村遺跡 DW-20、下東遺跡 KPD-7で21～31%である。5世紀代では前代にみられた分散傾向が収束し、ほぼ一定の占有率をもつようになり、住居内の空

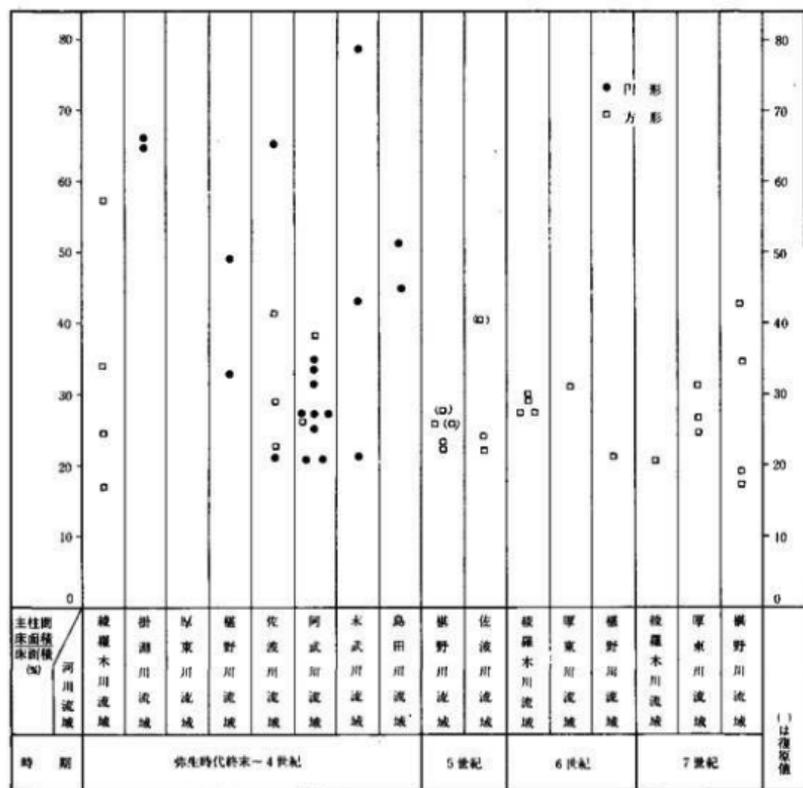


Fig. 94 床面積に占める主柱間床面積(1)

間分割意識が固定化したものと考えられ、6世紀代へも継続して営まれるようになる。しかし7世紀代では、秋根遺跡LS 014、中村遺跡DW-17・23・30、毛割遺跡第8-10号住居跡で、17-42%の占有率をもつようになる。住居規模の拡大と主柱間床面積の拡大は必ずしも比例しておらず、各住居単位すなわち集落の構成単位で、独自に床面積に占める主柱間床面積の選択が行なわれたものと理解できる。

3 各属性の画期について

これまで述べてきたように、古墳時代における平面形態、床面積、主体数、主柱間床面積の各変化の画期は以下のように要約することができる。

平面形態は方形、隅丸方形、長方形、隅丸長方形の四種に大別されるが、時期

別にみると方形系統の全住居中に占める各形態の出現比率が異なっている。方形の平面形態をもつものは、弥生時代終末～5世紀代までは全住居棟数の5割に満たず、しかも安定した出現率を示している。逆に、隅丸方形のものは5世紀代に全住居棟数に占める割合がピークに達し、方形住居の棟数をしのぐようになる。しかし、隅丸方形の住居は6世紀以降7世紀まで全住居数の約3割強までに激減し、安定した出現率を示すようになる。この傾向と反比例するかのように6世紀以降は方形住居が次第に棟数を増し、隅丸方形の住居を棟数的にしのぐようになるとともに、7世紀には全住居数の7割を占めるようになり、各集落内で6世紀以降、住居の平面形態が方形に規格化される。

床面積は5世紀代までは約35㎡以上のやや大形の住居が存在するが、6世紀代にはすべて約10-30㎡前後の規模に縮小し、画一化する。とくに、7世紀代では数遺跡で約10-15㎡前後の極めて規格化した住居規模をもつ一群が出現し、住居規模の小形化、画一化が

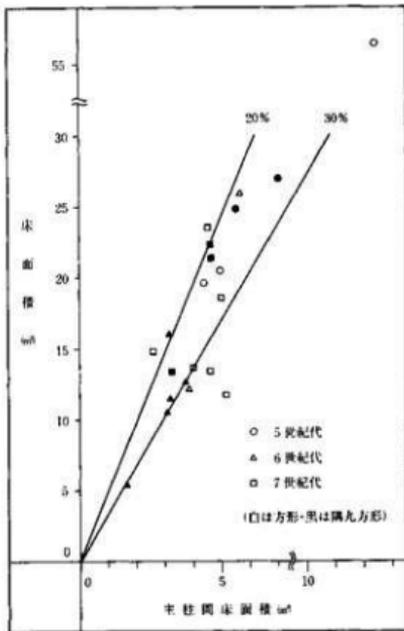


Fig. 95 床面積に占める主柱間床面積(2)

進んでいる。

主柱数の変化もまた6世紀代にひとつの画期が想定される。5世紀代までは4本柱と他の主柱数をもつものはほぼ同数に近いが、6世紀代では4本柱のものが圧倒的に優勢で約2倍近い採用率を示す。

すなわち、古墳時代における住居の平面形態、床面積、主柱数の変化は画一化・規格化現象として把握することができ、その画期は6世紀代に認められることが明らかとなった。この画期をもたらす社会的要因のひとつに、時期を同じくして県内各地で造営された群集墳盛行の背後にある被葬者の質的变化があげられよう。弥生時代中期における平面形態の円形から方形への変化が、いわゆる「倭国乱」に代表される政治的緊張が契機となって、床面積の確保とそれに伴う収容人員の拡大となって具現したものと考えられており、政治的・社会的要請に規制された結果、引き起こされた現象であることもその傍証となる。群集墳は「いくつかの家族が、家長の死を契機としてそれぞれ一世代一墳ずつ何世代かにわたって古墳を築造した結果累積したものと²⁴⁾考えられ、家族墓的色彩が強いものとされている。いくつかの家族とは住居数棟で一つのまとまりをもつ集団で「世帯共同体」と理解することができよう。規模、構造は多様であり、横穴墓もその範疇で捉えることができる。被葬対象は「地域あるいは集団によっては、家族体の中枢部分のすべて、あるいは家族体の成員のほとんどすべてが、横穴式石室または横穴に葬られることがあった」と²⁵⁾想定されている。また、福岡県行橋市竹並遺跡では埋葬された人骨数、年齢、性別などから、横穴墓の被葬者の性格が5世紀段階では特定の人々に限定されていたが、6世紀段階になると「一横穴墓への埋葬は傍系を含む夫婦単位を基調とした小家族で、それがいくつか集まった単位が家父長制的な世帯共同体をつくっている」とされ、それ以降は「一横穴墓への埋葬は直系の小家族のみとなり、細分されてくる」と²⁶⁾指摘している。6世紀代に認められる竪穴住居の各属性の画一化・規格化現象は、このような細分化した小家族に対応するもので、自立化しつつある家長を紐帯とした、小家族単位の新しい世帯共同体原理の反映と考えられよう。

なお、小論は昭和61年度文部省科学研究補助金（一般研究C）「防長における律令国家成立以前の集落構造の変遷と推移に関する研究」の研究成果の一部を含んでいる。

〔注〕

- 1) 河村吉行「考察—弥生時代穴住居跡の各属性について—」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』, 山口大学埋蔵文化財資料館, 1986年)。
- 2) 山口県教育委員会「坂ノ上遺跡」(山口県埋蔵文化財調査報告第29集, 1974年)。
- 3) 富士整男「上原遺跡」(菊川町教育委員会, 1976年)。
- 4) 山口市教育委員会「西遺跡」(山口市埋蔵文化財調査報告第21集, 1986年)。
- 5) 河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』, 山口大学埋蔵文化財資料館, 1986年)。
- 6) 山口県教育委員会・山陽都市開発株式会社「大崎遺跡」(『奥正権寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』, 山口県埋蔵文化財調査報告第82集, 1985年)。
- 7) 小野忠照「北迫遺跡」(『宇部の遺跡』, 宇部市教育委員会, 1968年)。
- 8) 山口県教育委員会「石原遺跡」(『坂本古墳・伏根遺跡・石原遺跡』, 山口県埋蔵文化財調査報告第17集, 1973年)。
- 9) 山口県教育委員会「伊倉遺跡」(山口県埋蔵文化財調査報告第16集, 1973年)。
- 10) 山口県教育委員会「突抜・馬場遺跡」(山口県埋蔵文化財調査報告第87集, 1985年)。
- 11) 山口県教育委員会「宮原遺跡」(『宮原遺跡・上広石遺跡』, 山口県埋蔵文化財調査報告第20集, 1973年)。
- 12) 都出比呂志「弥生時代の東と西」(『日本語・日本文化研究論集』, 大阪大学文学部, 1984年)。
- 13) 下関市教育委員会「伏根遺跡」(1977年)。
- 14) 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「下東遺跡」(『下東遺跡・伏根遺跡』, 山口県埋蔵文化財調査報告第30集, 1975年)。
- 15) a 小野忠照他「吹越遺跡予備調査概報」(平生町教育委員会, 1970年)。
b 小野忠照他「吹越遺跡第二次調査概報」(平生町教育委員会・山口県教育委員会, 1972年)。
- 16) 山口大学人文学部考古学研究室「平生町松尾遺跡の発掘調査」(『西部瀬戸内における弥生文化の研究』, 山口大学人文学部考古学研究室研究報告第3集, 1984年)。
- 17) 山口県教育委員会「右田・一丁田遺跡」(『右田・一丁田遺跡, 的場・宮の馬場遺跡, 久米市遺跡』, 山口県埋蔵文化財調査報告第19集, 1973年)。
- 18) 河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VII』, 山口大学埋蔵文化財資料館, 1987年)。
- 19) 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会「中村遺跡」(山口県埋蔵文化財調査報告第100集, 1987年)。
- 20) 山口市教育委員会・道川重機株式会社「毛割遺跡」(山口市埋蔵文化財調査報告第18集, 1983年)。
- 21) 山口県教育委員会・山陽工業株式会社「熱正権寺遺跡Ⅰ」(山口県埋蔵文化財調査報告第77集, 1984年)。
- 22) a 山口県教育委員会編「下右田遺跡第1・2次調査概報」(山口県埋蔵文化財調査報告第43集, 1978年)。
b 山口県教育委員会編「下右田遺跡第3次調査概報」(山口県埋蔵文化財調査報告第46集, 1979年)。
- 23) 井上山遺跡発掘調査団「井上山遺跡」(1979年)。
- 24) 白石太一郎「日本古墳文化論」(講座日本歴史1, 東京大学出版会, 1984年)。
- 25) 近藤義郎「弥生文化論」(『前方後円墳の時代』, 岩波書店, 1983年)。
- 26) 竹並遺跡調査会編「竹並遺跡」(早稲社, 1979年)。

古墳時代における壙穴住居の各属性について

〔文献〕

Tab. 11 市内の主な古墳時代の壙穴住居一覧表は以下の文献によって作成した。

- 1) 下関市教育委員会『綾羅木郷遺跡発掘調査報告第1集』(1981年)。
- 2) 山口県教育委員会『秋根遺跡』(『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第17集、1973年)。
- 3) 下関市教育委員会『秋根遺跡』(1977年)。
- 4) 山口県教育委員会『伊倉遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第16集、1973年)。
- 5) 山口県教育委員会『寺秋遺跡』(『寺秋遺跡・湯免遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第47集、1979年)。
- 6) 豊浦町教育委員会・山本晶美『林崎遺跡』(1987年)。
- 7) 御山口県教育財団・山口県教育委員会『たかはた』(山口県埋蔵文化財調査報告第94集、1986年)。
- 8) 前田熊『原史・古代の日置』(『日置町史』、日置町史編纂委員会、日置町、1983年)。
- 9) 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会『中村遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第100集、1987年)。
- 10) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内第1地区発掘調査概報』(山口大学、1971年)。
- 11) 本書付録1参照。
- 12) 山口市教育委員会・株式会社林業商會『間田片川遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第20集、1985年)。
- 13) 山口市教育委員会『西遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第21集、1986年)。
- 14) 山口市教育委員会・通川産機株式会社『毛割遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第18集、1983年)。
- 15) 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会『下東遺跡』(『下東遺跡・萩崎遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第30集、1975年)。
- 16) 森田孝一『教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査』(山口大学構内遺跡調査研究年報目録、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年)。
- 17) 山口県教育委員会『突抜・馬場遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第87集、1985年)。
- 18) 山口県教育委員会『坂手沖尻遺跡・惣の尻遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第42集、1978年)。
- 19) 山口県教育委員会・山陽工業株式会社『美正権寺遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第77集、1984年)。
- 20) 山口県教育委員会編『下右田遺跡第3次調査概報』(山口県埋蔵文化財調査報告第46集、1979年)。
- 21) 山口県教育委員会『石田・一丁田遺跡、的場・宮の馬場遺跡、久米市遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第19集、1973年)。
- 22) 山口県教育委員会『原島遺跡』(『白田・原島・新畑遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第21集、1973年)。

Tab. 11 市内の主な古墳時代の墓穴住居一覽表 (1988年3月現在まで)

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模		柱位置	柱数	壁跡	竪位置	墓		備考	文献		
				長軸	短軸					位置	方向				
徳島水堀遺跡	住居跡 1号	5世紀後半	隅丸方	410	380	25	13.2	0	○	×	北壁中央	×	北壁中央	北壁中央部には壁溝を し、南壁側面出組、其間出組。	
	住居跡 2号	古墳時代	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?		
	住居跡 3号	7世紀前半	隅丸方	600	410	15	17.8	0	×	×	×	北壁中央	×		
	住居跡 4号	7世紀後半	隅丸方	360	330	30	10.5	0	×	×	×	北壁中央	×		
秋根遺跡	1号住居跡	6世紀後半	方	340	310	5	10.2	?	×	×	×	北壁中央	×	南中軸張り。	
	2号住居跡	6世紀後半	隅丸方	250	290	10	7.4+*	3(4)	○	×	×	北壁中央	×	上壁 遺材は粘土。	
	3号住居跡	6世紀後半	隅丸方	275	345	8	10.5	3.2	30.48	○	×	北壁中央	×	北-西二辺に壁溝。	
	4号住居跡	6世紀後半	隅丸方	406	389	28	11.5	3.2	27.83	4	○	×	北壁中央	×	遺材は粘土、南壁のコーナー には壁溝を。
	5号住居跡	6世紀後半	隅丸方	335	285	15	5.6	1.5	26.79	4	○	×	?	北壁の壁溝	
	6号住居跡	6世紀後半	隅丸方	415	400+*	20	12.7	3.7	25.13	4	○	×	北壁中央	×	
	7号住居跡	6世紀後半	?	?	?	?	?	?	?	×	×	北壁中央	×		
伊奈遺跡	LS001	6世紀	方	330	290+*	24	7.5+*	4.1	4	○	×	?	?	北壁中央に住居跡への張り出し。	
	LS002	6世紀	方	620	190+*	11		?	○	×	?	?	?		
	LS004	4世紀末-5世紀前半	方	450	430	18	16.1	2	○	×	×	北壁中央	×		
	LS011	6世紀	隅丸方	420	340	15	13.2	2	○	中央	×	×	×	壁溝は西壁のみ。北壁側に土 溝。今は中央穴の位置性あり。	
伊奈遺跡	LS014	7世紀後半	隅丸方	580	540	20	22.4	4.7	20.98	4	○	中央	×	×	方山中央穴の可能性あり。
伊奈遺跡	DS 1号住居跡	5世紀後半	隅丸方	610	500+*	30	(35)	2(4)	○	×	×	×	×		

古墳時代における竪穴住居の各属性について

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	面積 (㎡)		床面積 (㎡)	土柱間隔 (間)	柱穴数	礎石	方位	備考	文獻		
				長軸	短軸									
寺秋遺跡	1号住居跡	古墳時代	隅丸長方	230	180	10		1	×	?	住居中央部から東側に出土した石の各コーナーに柱石。	5		
林崎遺跡	S B 1	6世紀中葉～後半	隅丸方	453	395	10		3 (4)	○	?	千間お土器。	6		
	S B 2	6世紀中葉～後半	隅丸方	380	344	16	29.13	4	○	?	埴り土。土器中央部位置に埴り土。埴り土の層の可能性。			
高畑遺跡	2号住居跡	3～4世紀	隅四角形	(1060)	(930)	15	(71)	6 (7)	○	×	長軸中央に壁。中央穴挿入で2柱穴。ガラス片、瓦。	7		
野田遺跡	1号住居跡	(6世紀末)	方	306				?	○	?		8		
	2号住居跡	6世紀末	方	322	262	(10)	6.9	0	○	?	住居外へ広がる溝。			
	3号住居跡	(6世紀末)	方	310	310	20	21.5	0	○	?	礎石は埴り。赤・西面埋込層を欠く。			
中村遺跡	DW - 16	7世紀後半	方	390	354	19	11.9	4	×	×	敷土出土。	9		
	DW - 17	7世紀後半	方	464	446	14	18.7	5.0	26.74	4	×		敷土出土。	
	DW - 18	7世紀後半	隅丸方	312	274	21	7.6	1	×	×	敷土出土。			
	DW - 19	6～7世紀	隅丸方	486	440	19	19.6	?	×	×				
	DW - 20	6世紀	方	397	356	12	12.5	3.9	31.20	4	×		石壁	
	DW - 21	7世紀	隅丸方	394	332	22	10.6	2	×	×	×		敷土出土。	
	DW - 22	7世紀後半	隅丸方	392	376	22	12.6	3 (4)	×	×	×		礎石に付く土器2柱穴。土器の層を伴った。隅丸石。隅丸遺跡。	
	DW - 23	7世紀後半	隅丸方	392	386	25	13.4	3.2	23.88	4	×		×	礎石に土器。埴り土。隅丸石。土器遺跡出土。
	DW - 24	7世紀後半	方	390	332	11	11.9	4	×	×	×		手掘り土器。覆り出土。	
	DW - 25	7世紀後半	方	360	246	16	5.7	?	×	×	×		埴り土。土器遺跡出土。	
DW - 26	5～7世紀後半	方	636	348	20	12.6	4	×	×	×	隅丸石。隅丸遺跡出土。			
DW - 27	7世紀	隅丸方	386	382	15	12.7	?	×	×	×	敷土出土。			

各属性の面期について

遺跡名	出発番号	時期	平面形態	長さ	幅 (m)	体積 (立方)	土柱断面面積 (cm ²)	柱穴数	壁跡	位置	属性	備考	又編		
中村遺跡	DW - 28	6~7世紀	隅丸方	316	20	7.7		?	X	北壁	X	欄干に粘土塊			
	DW - 29	5世紀後半~6世紀	方	364	13	10.5		?	X	西壁中央	石壁	欄干に粘土塊、手取なし、陶器出土。			
	DW - 30	7世紀後半	方	384	18	13.8	4.0	28.99	X	西壁中央	X		9		
	DW - 31	6~7世紀	隅丸方	316	12	10.7		?	X	西壁中央	X				
山口人子 横内遺跡	第1号住居跡	古墳時代前期	方	344	4	(14)		3	○	?	?	欄干は内側、北壁断面に、北壁中央部高き断面に粘土塊出土。			
	第2号住居跡	古墳時代前期	方	418	38	14.5		3(4)	○	X	X	東壁中央部			
	第3号住居跡	古墳時代前期	隅丸方	500	512	25	(30)	3(4)	○	?	X	東壁中央部			
	第4号住居跡	古墳時代前期	長方	564	372	25	(20)	2	○	X	?	火気住居、陶器出土。	10		
	第5号住居跡	古墳時代前期	(方)	436+*	136+*	12		?	?	?	?				
	第6号住居跡	古墳時代前期	(長方)	660	250+*	19		?	X	X	北壁中央部	X	欄干に土塊		
遺跡保存地区	第12号住居跡	5世紀後半	隅丸長方	515	410	15	18.2	0	X	中央	X	台所への張り出し、南面に壁跡の寸断跡。			
	第13号住居跡	5世紀後半	方	764	720	4	56.5	21.93	4	○	中央東壁	X	火気住居、ベッド状遺構。	11	
原田片川遺跡	第10号住居跡	6世紀後半~7世紀前半	(長方)	520+*	380+*	12		3(4)	X	X	北壁	X		12	
	第11号住居跡	(6世紀後半~7世紀前半)	方	300	140+*	19		?	X	X	?	?			
西遺跡	第1号住居跡	不明	(隅丸方)						X	?	?	?			
	第2号住居跡	不明	隅丸方	378				1(2)	○	?	?	?			
	第3号住居跡	5世紀上~6世紀中	方	300	290	12	8.5	1	○	X	?	?			
	第4号住居跡	5世紀末	隅丸方	580	524	16	27.0	7.0	25.93	4	○	X	X	北壁に壁跡なし、南内面の下に壁跡の寸断跡。	13
	第5号住居跡	3世紀後半	隅丸方	494	426	5	(20)	2	X	?	?	?	北壁ありの断面に粘土塊出土。		

古墳時代における整穴住居の各属性について

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	規模		床面積(㎡)	注記(内容)	注記(位置)	柱の数	壁溝	位置	土質	備考	文献	
				長	幅										
西瀬	第6号住居跡	7世紀前半	方	380	310	8	10.0		?	X	X	?	?	東部中央部付近に墓の可能性。	
	第7号住居跡	不明	隅丸方	562		10			2(4)	○	?	?	?	壁溝は整壁コーナーのみ。	
	第8号住居跡	不明	方	228	224	6	(5)		0	X	X	X	X		
	第9号住居跡	5世紀後半	隅丸方	400	338	7	16.0		0	X	X	X	X	X	北壁は崩壊し、平石を跡留す
	第10号住居跡	5世紀前半	方	493	400+*	4	(24)	6.2	4	X	X	?	?	?	平石築造遺品。
	第11号住居跡	6世紀前半	方	374	340	6	(13)		0	X	X	X	X		
	第12号住居跡	5世紀後半-6世紀	方	516	460	24	19.7	4.4	4	○	X	X	X	X	多量の滑石製遺品。
	第13号住居跡	5世紀中葉以降	方	350	275+*	25	(10)		2	○	中央	X	X	X	
	第15号住居跡	不明	隅丸方	496	624	8	(22)		4	X	X	X	X	X	
	第18号住居跡	不明	隅丸方	480	386	8	(18)		2	○	X	X	X	X	
	第19号住居跡	5世紀後半以降	方	586	500+*	4	(35)	9.7	4	○	X	X	X	X	壁溝は内側の一部を欠く。
	第20号住居跡	5世紀後半	隅丸方	464	436	14	18.0		2	X	X	X	X	X	南側コーナーに整壁の高まり。
	第21号住居跡	不明	隅丸方	304	284	5	(8)		4	X	X	X	X	X	北壁中央に礎石。
毛瀬	第1号住居跡	7世紀前半	方	409	115+*	16			2	X	X	X	X	X	西壁は整壁に平石を礎石、巻の基礎は土。
	第2号住居跡	7世紀前半	方	375	180+*	20			0	X	X	X	X	X	張り床。巻は穴口周囲に整壁、巻の基礎は土。
	第3号住居跡	7世紀前半	方	400	391	10	13.5		3	○	X	X	X	X	北壁中央、西壁中央、東壁は西序のみ。
	第4号住居跡	7世紀前半	方	376	170+*	16			1	○	X	X	X	X	張り床。
	第5号住居跡	7世紀前半	方	550	450+*	28			4	○	X	X	X	X	西壁中央、東壁中央。
	第6号住居跡	7世紀前半	方	528	270+*	29			2(4)	X	X	X	X	X	張り床。

各属性の画期について

遺跡名	任務番号	時期	平面形態	面積		体積(㎡)	柱間距離(m)	柱間幅(m)	柱間高(m)	柱数	壁法	土層	土質		備考	文獻
				長	幅								位置	支脚		
毛瀨遺跡	第7号住居跡	7世紀前半	方	518	280±	24				(4)	X	X	北東中央	石製	滑石製漆器品出土。	
	第8号住居跡	7世紀前半	方	403	300	7	13.4	4.6	34.33	4	X	X	北東中央	X	平面形態は台形に近い。張り床。四壁の切りこみがない。	
	第9号住居跡	7世紀前半	方	443	334	20	14.8	2.6	17.57	4	○	X	北東中央	石製	壁法は北東西手壁。壁は当壁に板石積立。山土で覆覆。	
	第10号住居跡	7世紀前半	方	520	438	18	23.5	4.5	19.15	4	X	X	北東中央	石製	第9号住居跡と二辺を共有。耳堀出土。	
	第11号住居跡	7世紀前半	方	618	516	16	31.7			2-3	X	X	北東中央	石製	壁は当壁に板石積立。山土で覆覆。板石出土。	
	第12号住居跡	7世紀前半	方	646	494	16	30.8			0	○	X	西壁南側	X	平面形態は台形状。壁溝は北東・南東北手壁。耳堀出土。	
	第13号住居跡	7世紀前半	方	504	260±	17		5.3		4	X	X	北東中央	石製	ベッド状遺構。板石出土。	14
	第14号住居跡	7世紀前半	方	400	340±	28				3	○	X	北東南側	X	壁溝は西壁・北東西手壁のみ。板石出土。耳堀出土。	
	第15号住居跡	7世紀前半	方	388	250±	20				?	X	X	北東中央	X	耳堀出土。	
	第16号住居跡	7世紀前半	方	340±	230±	14		4.3		4	X	X	北東中央	X		
	第17号住居跡	(7世紀前半)	方	460	100±	24				0	X	X	?	?		
	第18号住居跡	(7世紀前半)	方	448	170±	28		6.1		4	X	X	?	?	西壁中央部に壁の可視性。	
	第19号住居跡	(7世紀前半)	方	490	408	4	19.7			?	X	X	X	X	平面形態は台形に近い。	
	第20号住居跡	7世紀前半	方	394	340	10	11.9	5.1	42.36	4	X	X	X	X	床面に土壁形を認めず。北西コーナーに土壁。	
	下草遺跡	KPD - 1	4世紀前半	隅丸方	375	335±	0	10.1±		?	○	X	X	X	X	
	KPD - 2	5世紀後半以降	方	510	440	?	(22)		2	○	X	X	X	X		
	KPD - 3	6世紀後半	方	520±	480	15	25±		0	X	?	?	?	?		15
	KPD - 4	5世紀末	方	(480)	440±	8	16±		?	○	?	?	?	?	張り床。	
	KPD - 5	?	方	435	374	5	(15.3)		2	○	X	X	X	X	出土遺物なし。	

古墳時代における壱穴住居の各属性について

遺跡名	住居番号	時期	平面形態	面積 (㎡)		床面積 (㎡)	柱間距離 (㎡)	柱間距離 (m)	柱数	傾斜	印位置		備考	文庫
				長	短						位置	支脚		
下東遺跡	KFD - 6	?	(方)	324+*	228+*	14			?	○	?	?	出土遺物なし。	
	KFD - 7	6世紀前半	方	575	555	26.0	5.5	21.15	4	○	X	X	条り状。	15
	KFD - 8	8世紀前半	(隅丸方)	360	384+*	20	8.3+*		?	X	X	?	未完壁。	
白石遺跡	壱穴住居跡	4世紀末~5世紀前半	方	(400)		20			?	X	?	北壁	未完壁。	16
安法遺跡	DW - 25	古墳時代前期	方	300	290	30	7.0	27.14	4	X	X	X		17
榎手谷遺跡	3号住居跡	6世紀後半~7世紀前半	方	350	310	10	11.0		2	X	X	X	遺壁中央部に残して後面に土壁。	
	4号住居跡	6世紀後半~7世紀前半	方	365	310	12	12.0		2	X	X	X	南側中央部に残して後面に土壁。	18
新庄遺跡	第4号壱穴住居跡	5世紀中葉	隅丸方	510	480	31	(21)	8.5	4	X	X	X	厨内土壁。	
	第5号壱穴住居跡	5世紀中葉	(方)			25			?	X	X	X		
	第6号壱穴住居跡	5世紀中葉	方	620	610	36	(35)		?	X	X	X		19
	第7号壱穴住居跡	古墳時代	隅丸方	320	270	16	8.5		0	X	X	X		
	第8号壱穴住居跡	古墳時代	隅丸方	460	430	13	19		?	X	X	X		
下石田遺跡	DW - 2	5世紀後半	方	530	460	20	20.6	24.27	4	X	X	X	北壁中央	20
	DW - 3	5世紀後半	方	430	390	10	16		2	X	X	X	東壁西壁	
石田一丁目遺跡(第一回調査)	2号住居跡	5世紀後半	隅丸方	600		12	36.0		?	X	X	X	勾玉出土。	
	3号住居跡	5世紀後半	方	520		10	(27.0)		2	○	X	X	埴輪は北壁のみ。	21
	10号住居跡	5世紀後半	隅丸方	500	490	10	25.0	22.00	4	X	X	X		
	19号住居跡	5世紀中葉	隅丸方	690		22	37.0		2	X	X	X		
野島遺跡	壱穴住居跡	5世紀	隅丸方	(360)	(340)	40	(14)		(4)	X	?	?	任務の明確な壱穴。	22

先土器時代の山口地方

—遺跡の分布と立地—

木村元浩

1 はじめに

遺跡とは過去の人間・人間集団の生活空間（遺物・遺構を含む）を指すと言える。現在我々が住んでいるこの場所もいつしか遺跡として認定されるものであろう。そしてこの時、遺跡の分布状態がいつの時代においても微・巨視的両立場で過・疎あるいは無という偏りがあることに気付くはずである。

今なぜここに我々が住んでいるのかを考える時、見晴らしあるいは日当たりが良いとか、また通勤に便利であるとかの、自然的・社会的諸条件が重なりあっていることを見出す。生活を営む上で最良のこの土地を選んでいるのであって、狩猟・採集生活下と考えられる先土器時代においても、この土地というものが限られた条件の中にあっても選びぬかれた

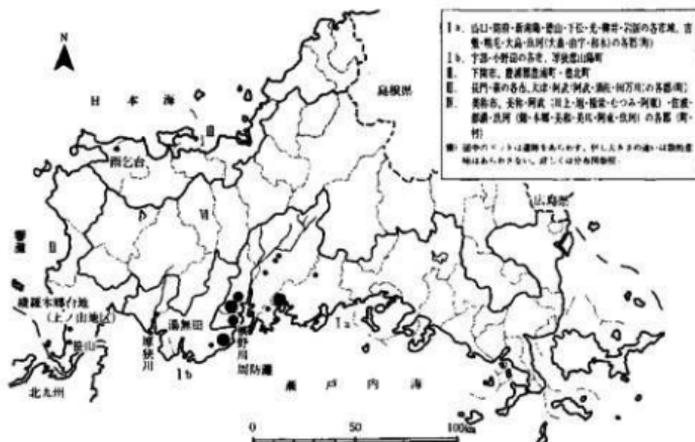


Fig. 96 山口地方地域別遺跡分布

ものであることを、強く再認識しておきたい。

2 研究史とこの稿での視角

ここでいう山口地方とは本州西端部を指し、行政区画では山口県域を示す。

山口地方の先土器時代研究は、1982年の山口県旧石器文化研究会の設立に伴い、精力的・総括的な調査・研究が、現在研究会を中心に行なわれている。

もともと山口地方における当期の遺跡は、良好な厚い火山灰層に遺物を含むということが少なく、時期を逸えた石器が混在している状況である。このような中、何とか手掛かりを得たいとする当期の研究活動の中で、特に石器形態学の視角により、遺物の資料化に主眼を置いた活動がなされている。これは必然的とも捉え得るものではあるが、現在までこの基礎データの公表が積極的になされ、集成されつつある。また、層位との連関での石器群の検出を目的とした発掘調査も行なわれており、当期研究を大きく推進している。

研究会設立以前には長沢考古学研究グループ、また防府考古学会が、宇部台地を中心として広く表採活動、そしてその資料をもとにした分析・考察を行なっており、現在知られる遺跡のほとんどが彼らの手になるものであると言っても過言ではない。

そして現在山口県旧石器文化研究会は、在野のグループを含む形で構成されているが、一般市民の自由な参加等、とかく狭く堅苦しくなりがちな考古学・歴史学の中において、地域住民への幅広い環元を実践している側面から、大いに評価されるべきものであろう。

発掘例が少なく、多くの表採遺物を見るこの地方において、それに基づく遺跡の立地・規模・時期あるいは個々の遺物の形態学的研究は、先学に多くの功績を見ることができるといえる。この稿もそれらと同一の手順を踏むものではあるが、加えて分析データの提示を行ないたい。そして最終の目的は、現時点における山口地方先土器時代遺跡の分布を集成・把握しておくことにある。

3 遺跡内容とその分布

山口地方においては、現在公表されているもので61ヶ所以上の先土器時代の遺跡が確認されており、^(注1)細石核・細石刃を出土する細石器文化期のもの23ヶ所、ナイフ形石器を出土するナイフ形石器文化期のもの53ヶ所、そしてそれ以前と考えられる文化期の、大きく3時期に分けられそうである。ここで今から約3万年前からの遺跡をまとめるにあたり、仮に山口地方をⅠ・瀬戸内海沿岸、Ⅱ・響灘沿岸、Ⅲ・日本海沿岸、Ⅳ・Ⅰ～Ⅲに含まれな

遺跡内容とその分布

Tab. 12 地域別石器内容・一覧表

地区 (遺跡名)	器種	細石核	細石刃	ナイフ形石器	スクレイパー	剥片尖頭器	舟底形石器	尖頭器	二次加工の剥片	使用痕をもつ剥片	彫器	台形石器	楔形石器	石核	打面調整剥片	剥片	石斧	両面加工石器	周辺加工石器	打器	石鏃	計	
		a (38)	b (20)	計 (58)	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0
I	a (38)	5	11	33	8	0	1	2	1	2	0	1	0	2	2	19	0	0	0	0	0	87	
	b (20)	7	8	18	9	3	9	4	0	0	1	5	3	4	3	8	1	1	3	1	1		89
	計 (58)	12	19	51	17	3	10	6	1	2	1	6	3	6	5	27	1	1	3	1	1		
II (2)		1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
III (1)		0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	
計(61)		13	20	53	17	3	10	7	1	2	1	6	3	6	5	28	1	1	3	1	1	182	

い内陸部という四区分に分けて見ると、遺跡の分布はI地区を除き他は皆無な状況となる。そしてI地区は防府・山口市域を中心とするもの(1a地区)、宇部市周辺のもの(1b地区)に分けられそうである。これから先、若干の分析を行なうが、あくまで現時点のものであり、やはり踏査の精度が問題にされることを断っておきたい。

山口地方各遺跡で普遍的に出土する石器にはナイフ形石器があり、他には剥片を除けば細石核・細石刃・スクレイパーが挙げられる。ナイフ形石器については、61遺跡中約9割の53遺跡で見られ、他の3器種については、I地区において約1/3の遺跡で見られる。1a・1b区分という観点からは、ナイフ形石器は各々9割、そして3器種については1b地区の方がより高い割合を示す。また1b地区では舟底形石器が多く見られることに注目しておきたい。他の少量の器種も考えあわせると、1b地区、中でも宇部台地西岐波区地区においては器種が豊富であると言えよう。なお、1a地区の遺跡では2器種、1b地区の遺跡では4器種、計算上平均3器種をもつという勘定になろうか。

山口市嘉川・江崎地区は1点のみ石器(ナイフ形石器)が見られるところであり、防府市大道・右田地区でも同様である。吉敷郡秋徳町においてもこの傾向はあるが、若干他の器種が入る。このように1a地区では、ナイフ形石器の在り方が極めて特徴的である。またナイフ形石器と細石核・細石刃の両者を見る遺跡が10遺跡(約1/4)あり、これらの分布も、数地区にまとまる傾向にある(山口市錦銭司、防府市台道、吉敷郡阿知須町付近)。なおナイフ形石器と細石核・細石刃の数は、遺跡によってかなりの偏りがある。

Ib 地区については、まず器種が豊富であることを先に述べたが、具体的には台形石器・剥片尖頭器・楔形石器そして舟底形石器等である。これらはIb地区全遺跡に共通するものではなく、各遺跡によって大きな差をもつ。10器種近くをもつ5遺跡によって、Ib地区の「器種が豊富」ということが目立つのであり、他の遺跡に関しては3器種程度で、1器種のところも少なくない。ナイフ形石器と細石核・細石刃の両者が見られる遺跡は全体として豊富な器種をもっており、3器種程度の遺跡においてはほとんどみられない。それは常盤池周辺、西岐波区地区に限定される。また個々の遺跡を例にとると、ナイフ形石器と細石核・細石刃の出土数は数量的に比例関係にあり、またその逆も言えることがわかる。

使用石材に関してはどうであろうか。I地区では、黒曜石・安山岩の占める割合が高い。各々約半数の遺跡で選択的に用いていることがわかる。次いで水晶の割合が高いが、これは約1/4になる。他にチャート・メノウ・玻璃質安山岩等がある。

黒曜石を用いる遺跡は、山口市鏡銭司 (Ia)、吉敷郡秋穂町 (Ia)、宇部市西岐波区地区 (Ib) に集中して分布する傾向にある。安山岩は山口市嘉川・江崎・陶 (Ia)、吉敷郡秋穂町 (Ia)、宇部市西岐波区地区 (Ib) に集中することがわかる。これらから、黒曜石と安山岩はほぼ同じ分布域 (但し、安山岩においては山口市嘉川・江崎・陶地区に1つの集中部を形成しているようである) を示すと言えよう。なお、チャート・メノウは宇部市西岐波区地区に、玻璃質安山岩は吉敷郡秋穂町を中心として見られる。

このように、黒曜石と安山岩を主体として、他の石材が若干混じるという石材利用の在り方から、黒曜石と安山岩との共伴石材を見ると、黒曜石 (あるいは安山岩) が出土する遺跡では、安山岩 (あるいは黒曜石) が共伴する場合と、単独に近い形で見られる場合とに分かれる。宇部市西岐波区地区では黒曜石・安山岩を核として他に多くの石材が混じり、吉敷郡秋穂町を中心とする地区では安山岩に玻璃質安山岩が多く共伴することがわかる。また、単独に近い形で見られるものとして、安山岩が前述の山口市嘉川・江崎・陶地区、そして黒曜石では吉敷郡秋穂町・阿知須町付近が挙げられよう。

黒曜石・安山岩を主体とする石材利用の在り方は大きく捉えたものであり、やはり個々の遺跡ごとに大きな偏りがある。前述の器種を考え合わせて見ていきたい。

ここで個別の遺跡を若干見ていくことにしたい。

Ia地区の幸崎遺跡では安山岩製のナイフ形石器が顕著であり、細石核・細石刃では黒曜石製のものが多く見られる。遺跡自体は安山岩の使用率が絶対的優位を占めるという。藤尾遺跡では玻璃質安山岩・黒曜石が多く用いられ、ナイフ形石器においては玻璃質安山岩、

遺跡内容とその分布

Tab. 13 地域別使用石材一覧表

地区 遺跡名	石材	那良産黒曜石	黒曜石	琉球質安山岩	安山岩 （スカイト を含し）	チャート	珪質頁岩	頁岩	水品	流紋岩	メノウ	結晶片岩	玉子	シルト岩	計
I	a (38)	1	20	8	20	2	1	3	8	1	1	1	1	0	67
	b (20)	0	12	3	12	7	0	4	7	1	6	1	3	4	60
	計 (58)	1	30	9	31	9	1	7	15	2	7	2	4	4	(123)
II (2)		0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
III (1)		0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計 (61)		1	34	11	33	9	1	7	15	2	7	2	4	4	130

遺跡名	石材 器種	黒曜石	琉球質 安山岩	器種 合計
		ナイフ 形石器	13%	40%
細石刀核		95%	3以上	
細石刀	50%	30%	20以上	
石材合計	40以上	30以上	100以上	

遺跡名	石材 器種	安山岩	黒曜石	琉球質 安山岩	器種 合計
		ナイフ 形石器	33%	23%	23%
細石刀核		90%	5%	10以上	
細石刀	2%	95%	1%	155以上	
石材合計	25以上	160以上	15以上	230以上	

Tab. 14 各遺跡における
器種別使用石材

遺跡名	石材 器種	水品	器種 合計
		ナイフ 形石器	100%
石材合計	45以上	60以上	

上ノ原	石材 器種	頁岩	琉球質 安山岩	黒曜石	器種 合計
		ナイフ 形石器		25%	25%
細石刀				95%	10以上
石材合計	2以上	3以上	10以上	24以上	

幸崎	石材 器種	黒曜石	安山岩	器種 合計
		ナイフ 形石器	20%	40%
細石刀	70%	5%	35以上	
石材合計	70以上	60以上	200以上	

細石核・細石刀では黒曜石製のものの割合が大きくなるとされる。他に特徴的なものとして宮ノ前遺跡があり、これは実見した限り、ナイフ形石器はすべて水晶製である。そして細石核・細石刀の出土は確認されていない。

Ib 地区ではまず、長辨遺跡において黒曜石製の石器が目立つ。しかし重量の面からは、

実質多く用いられたのは安山岩とされ、ナイフ形石器にはその安山岩が、細石核・細石刃には黒曜石が、それぞれ多用されるという。黒曜石製の細石刃の多さはこれを如実に物語っている。そして南方遺跡では、安山岩・黒曜石・玻璃質安山岩・水晶等多様の石材が見られる。重量の面からは、これらの使用頻度はほぼ同じであると言われる。ナイフ形石器には黒曜石・玻璃質安山岩が多く、細石核・細石刃になると黒曜石製のものが顕著となる。そしてその占める割合は、他の石材に比較してぐっと高くなるとされる。また上ノ原遺跡における細石刃は、全て黒曜石製のものである。なおナイフ形石器には、玻璃質安山岩・黒曜石製のものが見られる。白土遺跡においても細石核・細石刃は黒曜石製であり、現在のところナイフ形石器の検出はない。

以上のことから、1a地区では時期が新しくなるにつれ、黒曜石の使用頻度が高くなることが窺えよう。また1b地区においても、長樹遺跡に代表されるように、黒曜石の使用度が次第に高くなることを推測できる。個々の遺跡によって、例えば水晶の使用度が時期により違ってくるといった傾向はあるが、使用石材とナイフ形石器文化あるいは細石器文化といった文化期との関連において、I地区では安山岩製に代表されるナイフ形石器文化から、黒曜石を多用する細石器文化への変遷が読み取れよう。しかしながらこのことは、全く石材が入れ替わるという性格のものではない。またナイフ形石器のみを出土する遺跡の集中地区について、山口市嘉川・江崎地区(1a)では安山岩製を主とするが、防府市大道・右田地区(1a)ではそれが黒曜石製であることに注目しておきたい。最後に石材産地に関して、山口市仁保でも水晶が採れることを最近知った。付け加えておきたい。

4 先土器時代の環境

先土器時代の気候は一般に現在よりも寒冷であったといわれる。気候の変化自体が直接人々の生活に影響することは稀であっても、それに伴う植生・動物相・地形等の変化が人類の生活手段に大きく関わったことは間違いない。ここで、先土器時代の山口地方はいかなる環境であったのか、一度戻る形になるが、自然環境を中心に見ていきたい。

当期の山口地方は第四紀研究の分野において、最終氷期後半と呼ばれる時期に当たる。この中で最寒冷の時期(極寒期)を約1.8万～2万年前、あるいは約3万～3.5万年前とする説があり、気温は現在よりも年平均にして約6℃ほど低かったといわれる。このように、人類はあらゆる自然環境の変化に順応しつつ、対応を繰り返した。以下、約1.8万～2万年前の最寒冷期を中心に見ていきたいが、いわゆる氷河期というものをこれで代表し

ておきたいということと、比較的研究が進んでいること、またナイフ形石器文化の盛隆時に当たるとする理由による。

まず寒冷な気候は海水準の低下をもたらした。山口地方においては瀬戸内海が陸続きになることで現高知県沖まで海岸線が下り、日本海側も大きく張り出していた。西部の響灘沿岸においては朝鮮半島との陸続きも考えられている。海水準の低下は土地の拡張(注3)をもたらし、行動範囲の拡大を促した。現在の九州や四国とも陸続きであるということに、容易な行動(交易)が想定できる。領地の拡大つまり他集団・他文化との積極的な接触という図式が考えられよう。

人々が生活を行なう上での必要不可欠な条件とは、食料の確保にある。狩猟・採集経済下と考えられる先土器時代にあって、大きな割合を示すものは採集ではなかったか。それは確実性ということからも類推できることである。つまり、植生・植物相というものが実際には彼らの生活空間を強く規制していたのではないか。動物相を全く無視していたとは考えられないが、しかしそれは付随的なものではなかったか。採集のみで生活し得るほどの土地基盤が必要であった。という前提に立てば、同一場所に長く居ることはできない。食べ尽くす前に、つまり自然の破壊の前に移動する必要がある。³¹これは、先土器時代の頻繁な移動の一面を表す大きな要因になり得る。

この時期の山口地方は、カエデ・クリ・ブナ等を含む冷温帯落葉樹林(冷温帯針広混雑林)に属しており、瀬戸内海沿岸・響灘沿岸ではブナを伴わず、日本海沿岸では若干のブナを伴うという植生に分かれる。この植生を提示するに重要なことは、ここに可食植物を見出せることであろう。ここではクリ・ブナをはじめハシバミ・クルミ・トチノキ等が見られる。当寒冷期にはこのような可食植物が多く見られることに注目する必要がある。

この寒冷期を過ぎると気候は次第に温暖化に向かう訳だが、これに伴い温暖帯落葉広葉樹林、照葉樹林が広く分布するようになる。この植生からの可食植物という視点ではシイ・カシ類が挙げられるが、寒冷期に比べるとそれはかなり少なくなると言われている。寒冷下の時期において豊富な食物に恵まれていたことを記しておきたい。

動物相について考えるとき、陸橋の問題が大きく関わってこよう。つまり、海水準低下により外来種と呼ばれる新しい動物群が日本列島に入ることである。これらは主として北方より樺太・北海道を経由してきたもので、研究によれば最終氷期後半の最寒冷期よりは前ではなかったかと言われている。現存種と外来種の混合が考えられ、言葉をかえれば最終氷期後半での(哺乳)動物相は北方系要素をもったものと温暖系要素のものとの混合であ

ると言える。具体的には、いわゆるマンモス動物群と黄土動物群であり、マンモス・ヘラジカ・ヒグマ・ナウマンゾウ・ヤベオオツノジカ・ハタネズミ・ノウサギ等である。山口地方においてもオオツノジカ・ナウマンゾウ・ヒグマといった化石が見つかっている。

動物相の研究は植物相のそれと比べると困難な面が多く、よって化石の発見例を待つという状況にあらう。山口地方に焦点を絞って考えることも今のところ不可能に近い。我々にとって最も重要なのは、山口地方の先土器時代人が、何の動物を狩猟対象としたのか、狩猟対象となり得る動物とは、をはっきり特定することであり、考古学資料からのアプローチを絶えず行なう必要がある。

5 遺跡の立地

ここでは、遺跡の一集中地区 Ib を中心に見ていきたい。この中でも遺跡の集中がいわゆる宇部台地に認められることは先に述べた。宇部台地とは行政区画では宇部市を中心に西は小野田市、東は阿知須町・小郡町・秋徳町・防府市にわたる広大な洪積台地の総称であり、瀬戸内海側は海岸段丘が非常に発達したところである。

宇部地域の洪積層は吉南層群と呼ばれ、その層序は下部から黒崎礫層・黒崎粘土層・宇部砂礫互層・宇部火山灰層・宇部砂質粘土層から成る。当地は陸上で確認されているもので、三段の海岸段丘が見られ、段丘面は上から標準的に王子面・古殿面・丸尾原面と呼ばれている。さらにその下に沈水段丘としての宇部沖面が確認されている。

アルプス地方の四大別氷期と対比すれば、王子面形成期はミンデル・リス間氷期に、古殿面形成期はリス・ウルム間氷期に、丸尾原面はウルム氷期に比定され、さらにウルム氷期末に宇部沖面が形成されたとされる。

そして台地は、小河川によって開析谷が存在し、多くの浅谷が随所に見られる。よって独立丘陵状の地形ができあがっている。遺跡が集中する宇部市西岐波区においては特に顕著である。西岐波区に集中する遺跡群は、沢波川と浜田川によって挟まれる台地上に位置する。南方裏遺跡を除くと、沢波川の左岸に本郷・長嶺第1地点・長嶺第2地点・神楽田・南方の各遺跡が、そして浜田川の右岸に上ノ原・白土・西吉沢・宮ノ後遺跡が両河川に沿う形で見られる。吉田遺跡も吉田川の左岸に、岡ノ辻遺跡も小河川の右岸に位置する。もう少し詳細に見ると、各遺跡は南北方向の片側に河川を望む急斜度な地形をもち、周囲に浅い谷を見るという独立丘陵上に位置している。しかもその縁辺（先端）部に立地するという共通点が窺える。現水田面との比高差も、最低5m前後あり、多くは10mになる。こ

のように特徴的な遺跡立地をここでは沢波川・浜田川といった視点を含めたい。浅谷に重点を置いた何らかの要因を考えておきたい。静岡県磐田原台地・宮城県江合川流域の遺跡立地要因等も充分考えられるが^{(14), (27)}、この件に関しては時期を改めたい。

なお、各遺跡の立地する場所は、地形斜 $3^{\circ}\sim 8^{\circ}$ におさまることを付け加えておく。

次に、資料紹介という形で、先土器時代研究の基礎データを提示したい。

山陽町発見の新資料

ここに発表する資料は、河野豊彦氏の長年にわたる踏査により採集されたものである。氏は宇部市を中心とする他の遺跡の立地を基に、小野田市・山陽町を中心に、現在も精力的に踏査を続けておられるが、昭和59年を最初に現在まで採集されたものが今回の資料である。遺物は厚狭郡山陽町大字郡字湯無田2974番地に所在する湯無田溜池（これより湯無田遺跡と称する）からのもので、山陽町内における先土器遺跡の発見はこれが初めてである。

以下先土器時代の遺物を中心に構成するが、まず未発表資料の公表について快諾頂いた河野豊彦氏に感謝の意を述べたい。

1 遺跡の立地と環境

湯無田遺跡のある山陽町は、厚狭郡に属する周防灘沿岸の地域であり、国道2号線が東西へ走る。農業が基幹産業であり、稲作を中心に野菜の栽培も盛んである。農業の面では戦後まもなく入植者による干拓農業が行なわれた。ここでは現在ブドウの生産・養鶏が主として見られており、ブドウについては町の代表的な産物になっている。

山陽町内の地形は大きく山地、丘陵、低地の三つに分かれる。丘陵は低い方から代表して厚狭丘陵、山陽丘陵と呼ばれ、各々瀬戸内下位面、瀬戸内上位面に比定されている。低地には厚狭、後潟⁽¹⁵⁾、墳生の各低地があり、特に、後潟低地は大部分が干拓地で構成される。東部には長門山地に源を発する厚狭川が南流しており、河口付近は干拓が進んでいる。山陽町内においては開作地へのかんがい用の溜池が無数にあり、湯無田溜池もその一つである。後潟低地に水を供給する湯無田溜池は、後潟低地から山地地形に向かってみられる二段の段丘のうちの上方の段丘面にあり、ここはいわゆる宇部台地の古殿面に比定できそうである。山陽町内における遺跡の分布は、現在のところ厚狭地区を中心にして厚狭川の右岸に集中する傾向が窺える。これまで、厚狭川河口付近の左岸には遺跡の存在はほとんど

先土器時代の山口地方

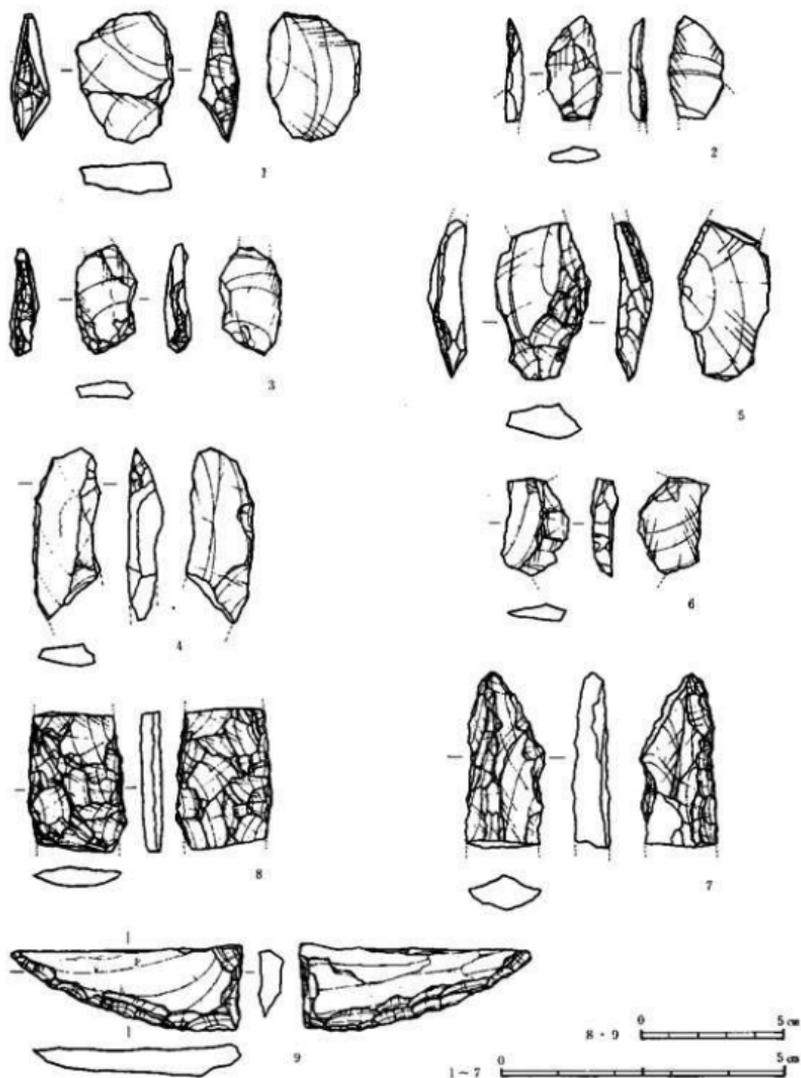


Fig. 97 湯無田遺跡の石器群

ど知られていなかったが、湯無田遺跡をはじめ、隣接する大谷溜池からも石鏃・剥片・石核等が河野氏によって採集されており、ここに新しくとも縄文時代からの人々の生活の舞台が明らかになってきた。

2 湯無田遺跡の石器群

1は素材の打面部と末端部にブランティングを施す二側縁加工のもので、やや横長の剥片を素材とする。素材の打面部は完全に除去され、加工が大きく行なわれたことがわかる。腹面側縁の3枚の剥離(落)痕については使用による可能性もある。加工は全て腹面からである。凝灰岩製。最大長1.7cm、最大幅2.3cm、最大厚0.6cm、重量2.3g。

2は小形の縦長剥片を素材とし、側縁の上半部・下半部にブランティングを見るものでこれにより素材剥片先端部は変形されている。基部は欠損。水晶製。最大長1.8cm、最大幅0.9cm、最大厚0.3cm、重量0.5g。

3は小形の縦長剥片を素材とする。打面・打点を残す。一側縁と片側縁上部にブランティングを施す。一側縁側は背面・腹面の両方向からの加工であり、緻密さに欠ける感じを受ける。片側縁上半部のもは、腹面からのものであるが、これも大まかである。打面部には素材剥片剥取前の打面調整痕が見られる。末端部を欠損する。水晶製。最大長1.9cm、最大幅1.1cm、最大厚0.3cm、重量0.8g。

4は横長の剥片を素材とするもので、腹面側からの3枚の剥離が見られる。おそらく一側縁全体に続くものではなかったか。それは加工途中のものかは定かでないが、大きな剥離によって切られており、その後欠損したものと考える。剥離の位置と素材の打面部の位置を考えたとき、ここには大きく急斜度な加工を想定しなければならない。少し疑問は残るが、この剥離痕はブランティングと見て良いのではないか。一応ナイフ形石器として捉えておく。また背面には節理面が見られる。メノウ製。最大長1.2cm、最大幅3.1cm、最大厚0.4cm、重量2.0g。

5は横長の剥片を素材とし、その打面部と末端部に二次加工を施すものである。打点、それに打面の半分を残す。先端部加工の一部はノッチ状を呈する。打面部の加工は背面側より先端部の加工は腹面側より施される。また片側縁は欠損している。器種認定に関してはナイフ形石器として捉えておく。(ノッチド)スクレイパーとも見れようか。黒曜石製。最大長1.6cm、最大幅2.8cm、最大厚0.6cm、重量2.4g。

6は縦長の剥片である。片側縁は欠損である。打面・打点を有する。背面の観察により、

数方向からの剥離が存在したことがわかる。非常に小形の剥片であるが、当遺跡でのナイフ形石器の素材としても充分成り立つものであろう。水晶製。最大長1.7cm、最大幅1.2cm、最大厚0.3cm、重量0.6g。

7は横断面三角形形状を呈するもので、端部は欠損する。両側縁は大まかな剥離であり、稜上加工等は施されていない。一部稜面を残している。器種認定に関しては、大きく捉えてポイントとしておきたい。先端部はそれほど鋭くはない。時期の帰属は不用。讃岐岩質安山岩製。最大長3.1cm、最大幅1.8cm、最大厚0.6cm、重量2.7g。

8は上部・下部あるいは両端を欠損する“両面加工の石器”である。欠損部を想定して厚みとの関連を考えると、非常に平らなものになる。加工に関しては両端部において精密な剥離が施されており、例えば刃部としてここを強く意識しているかのようでもある。器種認定に際して、大きくポイントとして捉えることにも疑問が残る。時期の帰属も不明。玻璃質安山岩製。最大長5.0cm、最大幅3.4cm、最大厚0.7cm、重量16.1g。

9は横長の素材を用いるもので、末端部を刃部とし、緻密な刃部を作出する。側縁部の加工に注意しておきたい。器種は不明であるが、大きく捉えればスクレイパーである。時期の帰属も不明。凝灰岩製。最大長3.1cm、最大幅8.1cm、最大厚1.1cm、重量24.1g。

湯無田遺跡においては今回発表以外の採集遺物に、剥片約200点、縄文期の石鏃約50点がある。使用石材には黒曜石（姫島産を含む）・安山岩・水晶・チャート・メノウがあり、石鏃においては黒曜石・安山岩のみを用いる。水晶については縄文期以前の代表的石材と考える。最後になったが、ナイフ形石器については、水晶製のものは小形の縦長剥片を素材とし二側縁加工という非常に特徴的なものである。他の石材のナイフ形石器も主として二側縁加工であるが、横長の剥片を素材にするという点に相違がある。

3 おわりに

山口地方における最高学府としての使命と責任を持つ大学の果たす役割を考えると、特に地域住民との交流、そして学問の還元の意味からも、当資料館の役割は大きいと考える。考古学というのは一般市民にとって最も身近な学問であるにもかかわらず、嫌厭されている傾向にある。それは一言でいえば難しすぎるということで、考古学者の怠慢に他ならない。我々はこの点を再認識した上で、地域住民を中心に広く考古学の還元を行なう必要があり、特に当資料館の存在価値がこのことに立脚することは忘れてはならない。

この稿をまとめるに当たり、分布図・地名表の作成では三浦文夫氏、石材に関しては松

本樞夫氏・富樫孝志氏、地質・地形の面からは松里英男氏の御教示を頂いた。また特に河野豊彦氏には諸方々への御紹介を頂き終始暖かく見守って下さった。河村吉行・杉原和恵両氏をはじめ、他に多くの方々にお世話になっている。このノートが各方面で活用されることを願い、ここに改めて御援助頂いた方々に感謝の意を表したい。

〔注〕

- 1) ここではたとえ1点のみの表探地点でも1遺跡として把握した。今回新たに発表できた遺跡に関しては三浦文夫氏の御教示を得た。昭和62年度内も表探・発掘調査により新たな資料の増加が見られ、宇部市山口大学医学部構内でもナイフ形石器・スクレイパー・縦石核・縦長の割片等が検出されている(当年報冒に掲載予定)。
- 2) 石材に関しては全てを究明していない。基本的には参考文献より抽出した。また富樫孝志氏の御教示を得た。
- 3) 現在疑問視する説が有力である。〔第四紀研究〕第20巻第3号(1981年)他。
- 4) 当地域の地下湧水は14-15mでも見られることを地元の方にお教え頂いた。

〔引用・参考文献〕

- 1) 山口県旧石器文化研究会「長門遺跡発掘調査概報」(1985年)。
- 2) 山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(1)-(6)」〔『古代文化』第35-39巻、1983-1987年〕。
- 3) 黒田寿寿・片山一造・市川光雄「人類の起源と進化」(有斐閣、1987年)。
- 4) 山口地理学会編「山口の地質をめぐって」(築地書館、1982年)。
- 5) 小野忠熙編著「日本の古代遺跡 山口」(保育社、1986年)。
- 6) 鈴木忠司編「先土器時代の知識」(東京美術、1984年)。
- 7) 辻誠一郎「後期更新世の自然環境」、長谷川善和「動物相」〔『季刊考古学』第4号、藤山園、1983年〕。
- 8) 宮本公通「宇部市域の先土器文化」〔『宇部地方史研究』第3号、1974年〕。
- 9) 高橋慎二「小郡周辺における先土器時代遺跡の実態とその考察」〔『山口県先史時代表探遺物集成ならびに編年研究』、周陽考古学研究所報1、1978年〕。
- 10) 鈴木善治「最終氷期の植物相と植生」、亀井節夫・広田清治「最終氷期の動物相」、中川久夫「最終氷期一日本における研究の現状から」〔『月刊地球』第5巻第1号、1983年〕。
- 11) 亀井節夫・ウラム氷期以降の生物地理総研グループ「最終氷期における日本列島の動・植物相」、中川久夫「最終氷期における日本の気候と地形」〔『第四紀研究』第20巻第3号、1981年〕。
- 12) 宇部市教育委員会「宇部の遺跡」(1968年)。
- 13) 宇部市史編集委員会「宇部市史」(1963年)。
- 14) 鈴木忠司編「寺谷遺跡」(1980年)。
- 15) 山陽町史編集委員会「山陽町史」(1984年)。
- 16) 河村吉行「堂道遺跡出土の旧石器-縄文時代の石器」〔『堂道遺跡』、山口市埋蔵文化財調査報告第24集、山口市教育委員会、1987年〕。
- 17) 森原莊介編「日本の考古学 先土器時代」(河出書房新社、1977年)。
- 18) 杉野次史「旧石器時代の遺物」〔『毛郡遺跡』(山口市教育委員会、1983年)〕。
- 19) 高橋英太郎・河野通弘・長尾忠・大浜通郎「宇部地域の洪積層」〔『山口大学教育学部研究論叢』第7巻第2部、1957年〕。
- 20) 河野通弘・高橋英太郎・小野忠熙「本州西端部の洪積層とその問題」〔『山口大学教育学部研究論叢』第14巻第2部、1964年〕。
- 21) 山口県「土地分類調査 宇部東部」(1972年)。
- 22) 那須孝伸「先土器時代の環境」〔『日本考古学 2 人間と環境』、岩波書店、1985年〕。
- 23) 小野忠熙編「山口県の考古学」(吉川弘文館、1985年)。
- 24) 朝山山口県教育財団・山口県教育委員会「綾羅木郷台地遺跡(上ノ山地区)」(山口県埋蔵文化財調査報告第91集、1986年)。
- 25) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大会館埋蔵整備に伴う試掘調査」〔『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1986年〕。
- 26) 山口大学埋蔵文化財資料館「宇部(小串構内)医学部体育館新営に伴う試掘調査」〔『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年〕。
- 27) 東北歴史資料館「江合川流域の旧石器」(1985年)。
- 28) 宝川昭男「下関市武久町の洪積層出土尖頭器」〔『考古学ジャーナル』71号、1972年〕。

先土器時代の山口地方



Fig. 98 先土器時代遺跡分布図(1)



Fig. 99 先土器時代遺跡分布圖(2)

先土器時代の山口地方



Fig. 100 先土器時代遺跡分布図(3)

Tab. 15 山口地方先王器時代遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	埋藏高 (m)	石器組成	使用石材	埋藏石之 の形状	安山岩之 の形状	地区	文 献
1	河成	山口市錦織川河原	20	礮石片、ナイフ形石器	埋藏石、埋藏質安山岩	埋藏質安山岩		1)	2), 9)
2	長沢	山口市錦織川今所	20	礮石片、ナイフ形石器、スクレイパー 石片、銅片	埋藏石、石片	石片		*	2), 9)
3	箱西	山口市錦織川和原	20	ナイフ形石器、銅片	埋藏石、安山岩、埋藏質安山岩	安山岩 埋藏質安山岩		*	2)
4	仁元寺	山口市秋徳一馬子・光寺	5-10	ナイフ形石器、銅片	埋藏石、安山岩	安山岩		*	2)
5	殿の鼻	山口市秋徳一馬大基	5-10	ナイフ形石器、銅片	安山岩	なし		*	2)
6	美濃寺	山口市二馬美濃寺原	15-25	ナイフ形石器、スクレイパー 石片、銅片	埋藏石、安山岩 水晶、透状石、玉石	水晶、透状石 玉石、		*	2), 9)
7	長沢	山口市二馬長沢	10	礮石片、礮石片、銅片	埋藏石、安山岩	安山岩		*	2), 9)
8	早崎	山口市二馬早崎	10-20	礮石片、ナイフ形石器、スクレイパー 矢頭器、石形(礮石)器、銅片	埋藏石、安山岩	安山岩		*	2), 9)
9	藤尾	山口市佐田宮橋	10-20	ナイフ形石器、矢頭器	埋藏石、埋藏質安山岩	埋藏質安山岩		*	2), 9)
10	ノ見ヶ丘	山口市佐田車在田	20	ナイフ形石器	安山岩	なし		*	2)
11	河原	山口市佐田浦長河川	10	スクレイパー	埋藏石、安山岩	安山岩		*	2)
12	早野	山口市佐田中野下中	10-20	ナイフ形石器	安山岩、水晶	水晶		*	2)
13	長尾	山口市佐田長尾	20	ナイフ形石器、銅片	埋藏石、安山岩	安山岩		*	2)
14	高村	山口市江崎高村新村	5	ナイフ形石器	安山岩	なし		*	2)
15	早野	山口市江崎早野	20-25	ナイフ形石器、銅片	埋藏石、安山岩 水晶、メノウ	安山岩、水晶 メノウ		*	2), 9)

先土器時代の山口地方

地 名	所在地	標高 (m)	石器組成	使用石材	黒曜石上の の条件	安山岩との 条件	地区	文 献
16 正 通 寺	山口市南郷下	5	剥片	安山岩		なし	1a, 2)	
17 山 田	山口市西高	10-20	スクレイパー	安山岩		なし	* 2)	
18 堂 庭	山口市大字瀬川字大庭	20	燧石片、ナイフ形石器、使用痕剥片 打面内生剥片、剥片	燧岩(都路)、水晶			* 16)	高年層遺 提議子定
19 山 田 (山口大学構内)	山口市大字山田1677-1	19	燧石刃、ナイフ形石器	燧岩石、チャート	チャート		*	
20 毛 淵	山口市大字下小瀬字瀬々屋	53-55	ナイフ形石器、使用痕剥片 打面内生剥片、剥片	燧岩質安山岩 頁岩、水晶			*	18)
21 小 淵	吉敷郡秋徳町大瀬小淵	5-10	燧石刃、ナイフ形石器	燧岩石、燧岩質安山岩 安山岩	安山岩 燧岩質安山岩	燧岩石 燧岩質安山岩	*	2)
22 谷 立	吉敷郡秋徳町秋徳東谷立	10	ナイフ形石器、燧岩形石器、剥片	燧岩石、燧岩質安山岩 安山岩	安山岩 燧岩質安山岩	燧岩石 燧岩質安山岩	*	2)
23 谷 倉	吉敷郡秋徳町秋徳東谷倉	10-20	ナイフ形石器、剥片	安山岩		なし	*	2)
24 中 庭	吉敷郡秋徳町秋徳東中庭	5-10	ナイフ形石器、二次加工剥片	燧岩質安山岩 安山岩、チャート		燧岩質安山岩 チャート	*	2)
25 谷 前 I 地 点	吉敷郡秋徳町秋徳西字谷ノ口	5-10	ナイフ形石器	燧岩石		なし	*	三浦文氏 柳政示
26 谷 ノ 丘	吉敷郡秋徳町秋徳西字ノ丘	5-10	ナイフ形石器、スクレイパー、剥片	燧岩石		なし	*	三浦文氏 柳政示
27 笑 山	吉敷郡秋徳町秋徳西字大田	5-10	燧石刃	燧岩石		なし	*	三浦文氏 柳政示
28 岩 上	吉敷郡阿知須町岩倉	5-15	燧石片、燧石刃、ナイフ形石器 スクレイパー、剥片	燧岩石、水晶		水晶	*	2)、9)
29 丸 塚	吉敷郡阿知須町丸塚山	5-15	燧石片、燧石刃、ナイフ形石器				*	2)、9)
30 月 ノ 山	吉敷郡阿知須町小丸塚	10	ナイフ形石器	燧岩石 燧岩質安山岩	燧岩質安山岩		*	2)
31 宮 ノ 崎	防府市大通入屋	15	燧石片、燧石刃、ナイフ形石器 スクレイパー、剥片	安山岩、燧岩 燧岩質安山岩		燧岩石、燧岩 燧岩質安山岩	*	2)、9)

No.	遺跡名	所在地	埋蔵量 (m)	石器組成	使用石材	埋蔵石との 関係	地区	支 展
32	上 里	防府市大道上里	5~15	ナイフ形石器	黒曜石	なし	1a	(2), (9)
33	菜 山	防府市大畑直	5~15	細石片、ナイフ形石器、剥片			*	(2), (9)
34	木 庄	防府市大畑下津分小庄	5~10	ナイフ形石器	黒曜石	なし	*	(2)
35	野 山	防府市右四字大畑日ノ本	10	ナイフ形石器	黒曜石	なし	*	(2), (9)
36	和 山	防府市大字上石田字野	40~50	ナイフ形石器	黒曜石	なし	*	二道文氏武 御供示
37	湯 山	防府市大字中野字山崎湯ノ峠	5	ナイフ形石器、剥片	地質質安山岩		*	二道文氏武 御供示
38	丸 山	防府市向島丸山	10~20	ナイフ形石器	安山岩	なし(?)	*	二道文氏武 御供示
39	河内 池	小幡田市栗原田子堀	20	ナイフ形石器、スクレイパー、舟形形石器	安山岩、メノウ	メノウ	1b	(2), (9)
40	菅 原	宇部市西峡流区山村	30~35	磨石、細石片、ナイフ形石器、スクレイパー、舟形形石器、彩雲形石器、磨石、削片、突頭器	黒曜石、安山岩、 チャート、頁岩、水晶	黒曜石、チャート 頁岩、水晶	*	(1), (2) (9)
41	本 郷	宇部市西峡流区本郷	10~15	磨石、磨石片、ナイフ形石器、スクレイパー、突頭器、磨石、打面片、剥片	黒曜石	なし	*	(1), (2) (9)
42	河 内	宇部市西峡流区大沢	10	ナイフ形石器、剥片			*	(1), (2) (9)
43	長 崎 第 1 地 点	宇部市西峡流区山村長崎	19	磨石、磨石片、ナイフ形石器、スクレイパー、舟形形石器、台形磨石、磨石、打面片、剥片	黒曜石、地質質安山岩、安山岩、 チャート、黒メノウ、シタ石	黒曜石、地質質安山 岩、シタ石	*	(1)
44	長 崎 第 2 地 点	宇部市西峡流区山村長崎	19~20	磨石、磨石片、ナイフ形石器、スクレイパー、舟形形石器、台形磨石、磨石、打面片、剥片	黒曜石、安山岩、チャート、頁岩、 水晶、メノウ、シタ石、玉石	黒曜石、チャート 頁岩、メノウ、 シタ石、玉石	*	(1)
45	田 畑	宇部市西峡流区田畑	5	磨石片、磨石、削片、打面片、剥片	黒曜石、安山岩、メノウ	安山岩、メノウ	*	(1), (2)
46	神 楽 田	宇部市西峡流区上田 神楽田 神楽田 神楽田	10~15	磨石、ナイフ形石器、スクレイパー、舟形形石器、舟形形石器、彩雲形石器、打面片、剥片	安山岩	なし	*	(1), (2)
47	神 楽 田	宇部市西峡流区上田 神楽田 神楽田 神楽田	10~15	磨石、ナイフ形石器、スクレイパー、舟形形石器、舟形形石器、彩雲形石器、打面片、剥片	黒曜石、安山岩、 水晶、メノウ、玉石	黒曜石、チャート 頁岩、メノウ、 玉石	*	(1), (2)

先土器時代の山口地方

No.	遺跡名	所在地	高さ (m)	石器組成	使用石材	甲冑石との共存	安山岩との共存	地区	文献	
47	上ノ尾	宇部市西峡湾区上ノ尾西谷	15-20	黒石、ナイフ形石器、スクレイパー、角底形石器、片形石器、石鏃、角底加工器、打石	黒石、黒燐安山岩、安山岩、片岩、赤松石、シメト石、山梨石		安山岩との共存	1b	1)、2)	
48	前方	宇部市西峡湾区上ノ尾2426	30	ナイフ形石器	メノウ					1)、2)
49	宮ノ麓	宇部市西峡湾区上ノ尾清水	30	ナイフ形石器、尖頭器、角底形石器、角底加工器	黒曜石、安山岩、チャート、水晶	角底加工器	黒曜石、チャート		1)、2)	
50	西谷	宇部市西峡湾区上ノ尾西谷沢	30	黒石刀、ナイフ形石器、角底形石器	黒曜石、安山岩	安山岩	黒曜石		1)、2)	
51	前田(北)	宇部市東峡湾区前田	10-20	ナイフ形石器、刺片、石鏃	水晶、玉すい				1)、2)	
52	平瀬	宇部市東峡湾区大田平塚	10	角底形石器	黒曜石		なし		1)、2)	
53	本山	宇部市東峡湾区本山718-1	25-30	ナイフ形石器	安山岩		なし		1)、2)	
54	川津	宇部市上宇部中村川津	10	ナイフ形石器	チャート				1)、2)	
55	姥瀬	宇部市川上志田姥瀬池	30	刺片	玉すい				1)、2)	
56	山ノ大平	宇部市大字小串1444	1.5	黒石鏃、ナイフ形石器、スクレイパー、刺片	黒曜石、黒燐安山岩、チャート			20)	55年調査結果見録付元	
57	赤瀬	宇部市常盤池	20	黒石刀、ナイフ形石器、スクレイパー、刺片、刺片尖頭器	黒曜石、安山岩、赤松石、水晶、黒燐片岩	安山岩、水晶、黒燐片岩	黒曜石、水晶、黒燐片岩		1)、2)	
58	島田	萩県山田町大字郡宇部原田常盤池574	30-40	ナイフ形石器、刺片	水晶、チャート、炭酸岩				西野香赤氏調査報告	
59	新木部(上ノ山地区)	下関市大字新木部地区のA地	8-10	黒石鏃、黒石刀、ナイフ形石器	黒曜石	なし	なし	B	24)	
60	笹山	下関市武久町1丁目笹山	30	尖頭器	黒曜石	なし	なし		28)	
61	前田	大津郡日野町前田	340	ナイフ形石器、刺片	黒曜石	なし	なし	B	23)	

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則

(設置)

第1条 山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

(資料館の業務)

第2条 資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行なう。

- 一 山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示および調査研究
- 二 山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行
- 三 その他埋蔵文化財に関する必要な業務

(運営委員会)

第3条 資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

- 2 委員会に関する規則は、別に定める。

(館長)

第4条 資料館に館長を置く。館長は委員会の議を経て学長が委嘱する。

- 2 館長の任期は2年とし、再任を妨げない。
- 3 館長は、資料館の業務を掌理する。

(調査員)

第5条 資料館には調査員若干名を置く。

- 2 調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。
- 3 調査員は、資料館の業務を処理する。

(特別調査員)

第6条 埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行なうため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

- 2 特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

(雑則)

第7条 この規則に定めるもののほか、資料館に必要な事項は別に定める。

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館規則（以下「資料館規則」という。）第3条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 委員会は次の事項を審議する。

- 一 山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと。
- 二 資料館の管理運営に関すること。
- 三 資料館の整備充実に関すること。
- 四 資料館の運営に要する経費に関すること。
- 五 その他必要な事項

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 資料館規則第4条第1項の館長
- 二 各学部および教養部の教官各1名
- 三 事務局長

2 前項第2号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

(任期)

第4条 前条第1項第2号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

2 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

(幹事)

第6条 委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

(委員以外の出席)

第7条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

(事務)

第8条 委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

(雑則)

第9条 この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

Tab. 16 山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員

(昭和61年度)

部局名	氏名	官職	任期	備考
医学部	黄 基 雄	教 授	60. 4. 1~62. 3.31	委口長
人文学部	近 藤 喬 一	教 授	59. 4. 2~62. 4. 1	館 長
教育学部	中 村 友 博	助 教 授	60. 5.29~62. 5.28	
教育学部	三 浦 肇	教 授	60. 4. 1~62. 3.31	
経済学部	及 川 順	教 授	60. 4. 1~62. 3.31	
理学部	岩 田 允 夫	教 授	60. 4. 1~62. 3.31	
工学部	島 敏 史	教 授	60. 4. 1~62. 3.31	
農学部	西 野 武 藏	教 授	60. 4. 1~62. 3.31	
教養部	木 村 忠 夫	教 授	60. 4. 1~62. 3.31	
事務局	大 谷 巖	事務局長	60.12. 1~	

(昭和62年度)

部局名	氏名	官職	任期	備考
医学部	黄 基 雄	教 授	62. 4. 1~64. 3.31	委員長・館長
人文学部	中 村 友 博	助 教 授	62. 5.29~64. 5.28	
教育学部	三 浦 肇	教 授	62. 4. 1~64. 3.31	
経済学部	及 川 順	教 授	62. 4. 1~64. 3.31	
理学部	村 上 清 文	助 手	62. 4. 1~64. 3.31	
工学部	島 敏 史	教 授	62. 4. 1~64. 3.31	
農学部	藤 田 剛 之	教 授	62. 4. 1~64. 3.31	
教養部	木 村 忠 夫	教 授	62. 4. 1~64. 3.31	
事務局	大 谷 巖	事務局長	60.12. 1~	

Tab. 17 山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員

学部等	氏名	官職	専攻科目等	備考
人文学部	中 村 友 博	助 教 授	日 本 考 古 学	昭和61・62年度
教育学部	三 浦 肇	教 授	地 理 学	昭和61・62年度
理学部	松 本 行 夫	教 授	岩 石 学	昭和61・62年度
農学部	勝 本 謙	助 教 授	植 物 分 類 学	昭和61・62年度
工業短期大学部	池 谷 元 何	教 授	年 代 測 定	昭和61年度 ・昭和62年5月20日まで

山口大学構内の主な調査

- 旧調査区名は吉田遺跡調査団使用のもの
- 41年から57年までの調査は全て吉田地区
- 地点は吉田構内 Fig. 101、小串構内 Fig. 102、常盤構内 Fig. 103、亀山構内幼稚園・小学校部分 Fig. 104、亀山構内中学校部分 Fig. 105、光構内 Fig. 106を参照

Tab. 18 山口大学構内の主な調査一覧表

調査年度	旧調査地区名又は調査区名	学内地区別	地点	担当者	調査区分	面積 (㎡)	遺 構	遺 物	備 考
昭和41年	第Ⅰ地区 A・B区	L・M・N-15	1	小野忠照	事前	30?	弥生期穴住居・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	吉田第1次発掘調査
	第Ⅱ地区 家畜病院新舎	S・T-19区 R・S-20区	2	＊	事後	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	吉田第2次発掘調査
	第Ⅱ地区	P・Q-19-20区	3	＊	試掘			弥生土器、土師器	吉田第3次発掘調査
	第Ⅳ地区 牛舎新舎	S-10区	4	＊	事後	300	弥生溝・土塼、古墳型穴住居、中世住居跡・溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	吉田第4次発掘調査
	第Ⅴ地区	S・T-9-13区	5	＊	試掘				吉田第5次発掘調査
昭和42年	第Ⅲ地区 杭列区	E-20区	6	＊	事後	1,100	杭列	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢形木炭	吉田第6次発掘調査
	第Ⅲ地区 南区	G・H-22-23区	7	＊	事後		河川跡、柱穴	弥生土器、土師器、木炭、石器	吉田第7次発掘調査
	第Ⅲ地区 北区	I・J-20-21区	8	＊	事後	1,400	壱穴住居、溝、土塼、柱穴		吉田第8次発掘調査
	第Ⅲ地区 東南区	H-23区 I・J・K-24区	9	＊	事後		弥生期穴住居	弥生土器	吉田第9次発掘調査
	第Ⅲ地区 野球場	I-22-23区 J-21-22-23区 K-22-23区	10	＊	試掘		中世柱穴	瓦質土器	吉田第10次発掘調査
	第Ⅴ地区 学生食堂	I・J-19-20区	11	＊	事後		弥生溝、古墳土塼	弥生土器、土師器	吉田第11次発掘調査
	第Ⅴ地区	H・I・J・K・L・M・N-18-19-20区	12	山口大学吉田遺跡調査団	試掘		河川跡、柱穴、土塼	弥生土器、土師器	吉田第12次発掘調査
	第Ⅰ地区 C区 大学本部新舎	K・L-14区	13	＊	事前	600	壱穴住居、溝、土塼	土師器、須恵器、瓦質土器	吉田第13次発掘調査
昭和44年	第Ⅴ地区 教育学部			＊	試掘		河川跡	弥生土器、土師器、須恵器	吉田第14次発掘調査
昭和46年	第Ⅰ地区 D区第1地点	K-13区	14	＊	試掘		溝	弥生土器、木炭屑	吉田第15次発掘調査
	第Ⅰ地区 D区第2地点	L-13区	15	＊	＊			弥生土器、土師器、瓦質土器	吉田第16次発掘調査
	第Ⅰ地区 D区第3地点	L・M-13区	16	＊	＊		壱穴住居、土塼、柱穴	土師器	吉田第17次発掘調査
	第Ⅰ地区 D区第4地点	M・N-13区	17	＊	＊		弥生期穴住居、溝、土塼	弥生土器、土師器、石器、瓦質土器	吉田第18次発掘調査
	第Ⅰ地区 D区第5地点	L-13区	18	＊	＊		弥生溝	弥生土器	吉田第19次発掘調査
	第Ⅰ地区 D区第6地点	M-13区	19	＊	＊		古墳型穴住居、弥生溝	弥生土器、土師器、石器	吉田第20次発掘調査
	第Ⅰ地区 D区第7地点	＊	20	＊	＊		溝	弥生土器	吉田第21次発掘調査
	第Ⅰ地区 E区 第2学生食堂新舎	N・O-15区	21	＊	事後	900	弥生-古墳型穴住居、土塼、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄製品	吉田第22次発掘調査

調査年度	旧調査地区名 又は調査名	学内地区別	地点	担当者	調査区分	面積 (㎡)	遺構	遺物	備考
昭和50年	第Ⅱ地区			山口大学 吉田建設 調査団	試掘			弥生土器	吉田第23次発掘調査
昭和51年	第Ⅲ地区			〃	〃		竪穴住居	弥生土器、土師器、 須恵器	吉田第24次発掘調査
昭和53年	人文学部校舎新営	M・N-21区	22	近藤新一	試掘	180			吉田第25次発掘調査
	教育学部財 源調査校新営	A・B・C・D- 20-24区	23	山口大学 理蔵文化 財資料館 山口県教育 委員会	〃		溝、土壇	縄文土器 弥生土器	吉田第26次発掘調査
昭和54年	理学部校舎新営	O-18・19区	24	山口大学 理蔵文化 財資料館	〃	250			吉田第27次発掘調査
	農学部動物舎新営	P-18-19区	25	〃	〃	380			吉田第28次発掘調査
	本部管理棟新営	L-14区	26	〃	事前	740	溝、土壇、柱穴、 中世井戸、土壇 墓、住居跡	弥生土器、土師器、 石製品	吉田第29次発掘調査
昭和55年	経済学部校舎新営	K・L-21区	27	〃	〃				吉田第30次発掘調査
	農学部農業映画 実験施設新営	Q-15区	28	〃	〃	50	溝、土壇		吉田第31次発掘調査
	本 部	E・F-15-16区 F-20-21区 G・H-12-19区	29	〃	立会				工事終了 吉田第1次立会調査
	農 学 部	L・M-12-13区 N・O・P-10- 12区 F・Q-17-18区	30	〃	〃				吉田第2次立会調査
昭和56年	教育学部校舎新営	H-19区	31	〃	事前	400	弥生竪穴住居、 土壇、溝、柱穴	弥生土器、石製品	吉田第32次発掘調査
	教育学部音楽棟新営	H-16区	32	〃	〃	100	溝		吉田第33次発掘調査
	教育学部芸術科・技 術科実験室棟新営	J-19-20区	33	〃	〃	130	田河川、溝、 柱穴	縄文土器、弥生土 器、須恵器、土師器	吉田第34次発掘調査
	正門橋脚新営	H-11区	34	〃	立会				工事終了 吉田第3次立会調査
	時計塔埋設	I-14区	35	〃	〃				工事終了 吉田第4次立会調査
	本部構内擁壁	K-14区	36	〃	〃				工事終了 吉田第5次立会調査
	教養部構内擁壁	I-16-17区	37	〃	〃				工法等変更6次立会 調査
	構内擁壁道路舗装	J・K・L・M -15区 M・N-16区	38	〃	〃				工事終了 7次立会 調査
	農学部中庭整備	O-17区	39	〃	〃				工事終了 8次立会 調査
	暖房施設改修	O-16区	40	〃	〃				工法等変更9次立会 調査
	学生部文化会車庫新営	L-8区	41	〃	〃				工法等変更10次立会 調査
	学生部馬場整備	M・N-8-9区	42	〃	〃				工事終了 11次立会 調査
昭和57年	附属図書館増築	M-16区	43	〃	事前	600	弥生一古墳溝、 土壇、柱穴、杭列	弥生土器、土師器、 須恵器、石器	吉田第35次発掘調査
	大学会館新営	M-14・15区	44	〃	試掘	130	弥生竪穴住居、 溝	弥生土器	新営予定地変更 吉田第36次発掘調査
	教育学部財源調査 学校プ-4新営	B-22区	45	〃	立会				吉田第12次立会調査
	放射性同位元素総合 実験室棟本館新営	O-18区	46	〃	〃				吉田第13次立会調査
	教養部自転車乗降場 降口新営	K・L-17区	47	〃	〃				吉田第14次立会調査
	教養部中庭 環境整備	J・K-16区	48	〃	〃				吉田第15次立会調査
昭和58年	大学会館新営	M・N-13区	49	〃	事前	2,000	古墳井戸、土壇、 柱穴、中世井戸、 竪立柱建物	弥生土器、土師器、 須恵器、輸入陶器、 石製品、瓦、土師 土器、丸器、埴輪 器、木器、石器	吉田第37次発掘調査

調査年度	旧調査地区名又は調査名	学内地区別	地点	担当者	調査区分	面積(m ²)	遺構	遺物	備考	
昭和56年	ラグビー場 防球ネット新宮	G・H-19区	50	山口大学 埋蔵文化 調査有期	事前	120	弥生遺、弥生一 古墳型穴住居、 土層	弥生土器、土師器 石製品	弥生住居は「法史史 」より埋蔵後 古田第33次発掘調査	
	教育学部附属光小 学校自転車道新宮		1	試掘			近世一近代石垣	陶磁器、瓦質土器、 瓦	光第1次発掘調査	
	工学部校舎新宮		1	*	*	70		須志器	遺構、遺物包含層なし 常盤第1次発掘調査	
	工学部図書館増築		2	*	*	70			遺構、遺物包含層なし 常盤第2次発掘調査	
	医学部体育館新宮		1	*	*	260		土師器、瓦質土器、 石器	小中第1次発掘調査	
	教育学部附属山口小 幼稚園運動場整備		1	*	*	60	古墳型穴住居、 溝状遺構	土師器、須志器、 瓦質土器、瓦、石 製品、木製品	龜山第1次発掘調査	
	理学部大学院校舎新宮	M・N-20区 O-19-20区	51	*	立会	410			工事続行 吉田第16次立会調査	
	正門・南門二輪車道場 および止門花壇新宮	H-1-23区 I-12-13区 J-13区	52	*	*	180			工事続行 吉田第17次立会調査	
	学生部アーチェリー 場の白・電柱設置	M-8区	53	*	*	30			工事続行 吉田第18次立会調査	
	学生部観音祭備	L-7区	54	*	*	2			工事続行 吉田第19次立会調査	
	学生部野球場 敷水栓取設	J-21区 K-22区	55	*	*				工事続行 吉田第20次立会調査	
	教養部環境整備	I-16-17区 J-K-17区 K-L-17-18区	56	*	*	80			工事続行 吉田第21次立会調査	
	学生部テニスコート 改修	C-18区 D-17区 E-16区	57	*	*	12			工事続行 吉田第22次立会調査	
	工学部図書館増築		2	*	*				小中第1次立会調査	
	医学部体育館新宮		3	*	*				工事続行 小中第2次立会調査	
	昭和59年	医学部浄化槽新宮		4	*	事前		近世溝	土師器、瓦質土器、 磁器	記録保存 小中第2次発掘調査
		医学部体育館新宮		5	*	*	65		土師器、瓦質土器、 磁器	小中第3次発掘調査
大会会館ケーブル布設		N-12-14区	58	*	*	160	弥生土層、 柱穴	弥生土器	吉田第39次発掘調査	
大会会館排水管布設		K・L-13区	59	*	*	180	弥生一中世遺物 包含層、古墳土層、 古代一中世土層、 溝、柱穴	弥生土器、土師器、 須志器、青磁、白 磁、瓦質土器	記録保存 吉田第40次発掘調査	
医学部基幹診療 科(特高受変電設備)			6	*	試掘	28		動物遺体(鳥獣)	小中第4次発掘調査	
医学部臨床義棟・ 病理解剖棟新宮			7	*	*	38			小中第5次発掘調査	
学生部テニスコート フェンス改修		B-17-18区 C-16-17-18 19区 D-15-16-17区 E-15-16区	60	*	*	25	古墳以降の遺物 包含層	土師器	工事現場内埋蔵文化 財支障なし 吉田第41次発掘調査	
経済学部樹木移植		K-19-20-21区	61	*	立会	8			工事現場内埋蔵文化 財支障なし 吉田第23次立会調査	
工学部尾山積倉 排水管布設				*	*	20			常盤第1次立会調査	
教育学部附属光小・ 中学校校庭球場新宮			2	*	*				光第1次立会調査	
学生部ボート艇庫 合宿研修所整備				*	*	0.5			宇部市小野瀬	

調査年度	調査地区名 又は調査名	学内地区別	地点	担当者	調査区分	面積 (㎡)	遺 構	遺 物	備 考
昭和59年	学生部ヨット艇庫 台石部修繕所整備			山口大学 埋蔵文化 財資料館	立会				吉敷部秋穂町
昭和60年	医学部外来診療棟新設		8	*	試掘	409		土師質土器、瓦質土器、陶磁器	小字第6次発掘調査
	大学会館環境整備 (L-14区 L・M・N-15区)	62	*	*	592	弥生-中世遺物 込舎層、弥生集 穴住居、貯蔵穴、 土壇、古代-住 居土壇、溝、柱 穴	縄文土器、弥生土 器、土師器、須志 器、瓦質土器、輪 穴磁器、国産陶磁 器、土製品、石斧、 礫石、鉄器、空鍬	吉田第42次発掘調査	
	医学部基礎研究棟新設		9	*	*	11		近世陶器	小字第7次発掘調査
	医学部看護婦宿舎改修		10	*	*	25		近世陶磁器	小字第8次発掘調査
	経済学部環境整備 (樹木移植)	K-21区 L-20区	63	*	立会	5			吉田第24次立会調査
	農学部附属農場飼料 用排水溝修復整備	R-16-19区	64	*	*	30	古代末-中世河 川跡	須志器、土師器、 陶人陶磁器、陶土 石器、鉄器	吉田第25次立会調査
	農学部附属農場農道 改修	V-15-16区	65	*	*	325			吉田第26次立会調査
	教育学部附属環境整備 (樹木移植)	I・J-19-20区	66	*	*	430			吉田第27次立会調査
	中央ボイラー棟中止 設	O・P-16区	67	*	*	2.5		須志器	吉田第28次立会調査
	学生会館環境整備 (樹木移植)	L・M-15区	68	*	*	9		弥生土器、土師器、 須志器、石鏃、砥 石、鉄器	吉田第29次立会調査
	交通標識設置	J-20、N-14区 O-18区	69	*	*	3			吉田第30次立会調査
	農学部附属実習用温室等 施設整備工事(樹木移植)	P・Q-17-18区	70	*	*	16			吉田第31次立会調査
	理学部環境整備 (舗装舗設)	N-20-21区	71	*	*	4			吉田第32次立会調査
	農学部附属畜産病院 新設	S・T-19区	72	*	*	270			吉田第33次立会調査
	医学部看護婦宿舎改修		11	*	*	20			小字第3次立会調査
	医学部環境整備 (樹木移植)		12	*	*	40			小字第4次立会調査
	工学部尾山宿舎調整 取			*	*	65			常盤第2次立会調査
	工学部受水槽改修		3	*	*	1.5			常盤第3次立会調査
	教育学部附属山口小 学校放水栓改修		2	*	*	1			龜山第1次立会調査
	教育学部附属山口中 学校球技コート整備		1	*	*	2			龜山第2次立会調査
教育学部附属幼稚園 環境整備(樹木移植)		3	*	*	1			龜山第3次立会調査	
教育学部附属光中 学校外打改修		3	*	*	1		土師器	光第2次立会調査	
鹿野荘給湯機器取設			*	*	7			山口市鹿野町	
昭和61年	教育学部山口附属学 校内水研水害ふせ	幼稚園・小学校 部分 中学校部分	4 2	山口大学 埋蔵文化 財資料館	試掘	57 20	中世土壇か 河川跡か 坑列	縄文土器、弥生土 器、土師器、須志 器、瓦質土器、土 師質土器、陶磁器 不明鉄製品、石鏃、 刺片、播物遺体	龜山第2次発掘調査
	国際交流会館新設	N-22-23区	73	*	*	70	弥生-古墳河川 跡 中世-近世溝	弥生土器、土師器、 須志器、瓦質土器、 陶磁器、鉄錐子、加工 鉄および刺片	吉田第43次発掘調査
	山口銀行現金自動支 払機設置 (電線路埋設)	I・J-19-20区	74	*	立会	11	込舎層(河川跡 か)	弥生土器	吉田第34次立会調査

調査年度	旧調査地区名 又は調査名	学内地区別	地点	担当者	調査区分	面積 (㎡)	遺構	遺物	備考
昭和51年	農学部附属農場遺構 調査	S-20区 U-19区	75	山口大学 埋蔵文化 財資料館	立会	165	中世溝、柱穴	土師器、瓦質土器	上法等重要 吉田第35次立会調査
	農学部附属農場遺構 調査 (論議室・土設置)	L-10区 Q-15・16区	76	*	*	2			吉田第36次立会調査
	正門横(水田内)境 壁設置	I-10区	77	*	*	0.25	包含層か		吉田第37次立会調査
	経済学部環境整備 衛生福祉(記念碑建立)	M-20区	78	*	*	3			吉田第38次立会調査
	古田橋内交差 点工事	H-23区、J-9 区、P-22区、S -20区、W-16 区	79	*	*	3		須志器	吉田第39次立会調査
	市道神郷1号線および 開田神郷線の送水 管埋		80	山口市教 育委員会 山口大学 埋蔵文化 財資料館	*	2,100	古墳・古代溝、古 代河川跡、枕、赤 牛包含層	弥生土器、土師器、 須志器(陶器のあ るもの含む)瓦質 土器、煎土器、 石片、板石	山口市教育委員会の 補助 吉田第40次立会調査
	農学部自動機整備 施設設置および 観覧高移動	K・L-18区	81	山口大学 埋蔵文化 財資料館	*	3.5			吉田第41次立会調査
	農学部身体障害者用 スロープ取設	L-15・16区	82	*	*	3			吉田第42次立会調査
	経済学部放水採取設 置	L・M-20区	83	*	*	4			吉田第43次立会調査
	古田橋内水泳プール 改修工事	E・F-16区 II-15区	84	*	*	26.5	包含層		吉田第44次立会調査
	農学部附属農場水 道改修工事	S-12区	85	*	*	3			吉田第45次立会調査
	古田橋内汚水排水 管改修工事	M-18区 O-15・16区	86	*	*	15.5		土師質土器	吉田第46次立会調査
	本館身体障害者用 スロープ取設	L-14区	87	*	*	12			吉田第47次立会調査
	経済学部身体障害者 用スロープ取設	K-20区 L-18・20区	88	*	*	88	弥生-古墳柱穴		上法等重要 吉田第48次立会調査
	附属図書館寄物運 搬用スロープ取設	L-16区	89	*	*	8		弥生土器	吉田第49次立会調査
	農学部37番教室改修 工事	K-16区	90	*	*	1			吉田第50次立会調査
	農学部附属病院外 科診療棟新築工事		13	*	*	5			小中第5次立会調査
	農学部附属病院外 科診療棟近隣環境 整備工事(排水処理 設備)		14	*	*	18			小中第6次立会調査
	工学部尾山宿舍排水 管改修工事		*	*	*	6			常盤第4次立会調査
	工学部身体障害者用 スロープ取設		4	*	*	29			常盤第5次立会調査
情報処理センター (常盤7号館) 空調機取設		5	*	*	30			常盤第6次立会調査	
教育学部附属山口小 学校電柱移設		5	*	*	0.5			龜山第4次立会調査	
教育学部附属光小学 校創立記念会堂 (プロンス館建立)		4	*	*	2.5		須志器、土師器	光第3次立会調査	
湯田宿舎給水改修 工事		*	*	*	35	杭		山口市湯田温泉	
経済学部宿舍下水 管改修工事	6号宿舎 2号宿舎	*	*	*	1 7		土師質土器 瓦	山口市旭通り 山口市水の上町	

※ 昭和41年以降、古田橋内においては工事に際し、随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の古田遺跡調査団の調査分については調査名をすべて削除しているわけではなく、注意された。

Summary

This report accounts the results of archaeological researches in thirty excavated areas located on campus in 1986.

As Appendix, it carries another report of excavation at "the Preserved Site" on the Yoshida campus in 1984, and also carries two papers. Each attribute of the dwelling pits in the Kofun period, Yamaguchi Prefecture in the Japanese Paleolithic age.

Yamaguchi University Archaeological Museum was established as part of the crossfaculties public facilities of the University in 1978. We refer to a plan from the conference of the Managemment Committee first and gain appooval. We then carried out the reseach in relation to the construction work on campus. That's why our reserches are helpful to reconstruct the past society, environment and so on.

The current year we carried out researches as follow :

1. Researches on the Yoshida campus

(1) Soundings in relation to the construction of the International Hall

We found a ditch and a river. The one dates from the Medieval age to the Modern. The other from the early Yayoi to the late Kofun period, was confirmed at least 19 meters wide. This is perhaps the same river that we excavated at the area of the Faculty of Economics in 1980.

Under construction of this hall, we need to examine at the basin of this river.

(2) Examinations under construction

As for the repair of the swimming pool and setting up a cash service machine by Yamaguchi Bank, we found each layer containing objects dating from the Yayoi to the Kofun period.

Besides, we discovered many pit holes and a ditch at two other areas, too : when we adjusted the road for University Farm, we discovered a ditch and many pit holes in the Muromachi period. Fixing the slope for physically handicapped persons at the doorway of the Faculty of Economics' buildings, we discovered a pit holes dating from the Yayoi to the Kofun period. These two constructions were practiced in order not to destroy the said ruins.

We also helped the Board of Education of Yamaguchi City with the examination at the road around the south of campus. As a result, we found a river dating from the Nara to the Heian period in front of the Veterinary Hospital, and two ditches were found in front of the handball court and the south gate. We found two layers containing many objects between the baseball ground and the south gate, too. The upper contains Sue wares, but doesn't many relics. The lower contains many relics dating from the early to the late Yayoi period. In addition, we guess the existence of some unknown underground cultural properties between the south gate and the rugby ground.

2 . Researches on the Kogushi campus

Though we didn't find any object, we confirmed a layer guessing to contain some objects around the University Hospital.

3 . Researches on the Tokiwa campus

We examined at the places where we fixed the slope for physically handicapped persons and an air-conditioner for the Information Processing Center. But didn't get any obvious object of study.

Around Oyama Dormitory, the result was about same.

4 . Researches on the Kameyama campus

(1) Soundings in relation to the laying drain pipes under ground at Yamaguchi Junior High School, Elementary School and Kindergarten

In the Kindergarten, we discovered some underground cultural properties at two points. At one point, there were layers containing many pieces of Yayoi earthenware. At the other, we found some pits in the Muromachi period.

In the Elementary School, we found some relics at five points. At the point No.9 among them, we could find a lot of early Haji wares (the late Furu type) in some layers. Putting some examinations till now together, we knew here were at least two kinds of pottery, that is, the late Syonai and the late Furu type.

In the Junior High School, we found some layers containing relics at two points. At the point No.3, we discovered many Haji wares in the Medieval age, mostly. We found some Haji wares of Ouchi B-type among them. This kind of Haji ware had been discovered only in the Ouchi Residence Site. At the point No.5, we found relics dating the late Jomon period and the Syonai period.

Around these points, we must make excavations with care from now.

(2) Examinations under construction

Fixing two telegraph posts in the Elementary School's ground, we examined but didn't get any obvious object of study.

5 . Researches on the Hikari campus

We found a few Sue and Haji wares, but they were brought by the wave. But we picked up many objects dating from the late Kofun to the Edo period on the beach of Mitarai Bay.

6 . Researches on the Yuda and the Faculty of Economic's dormitories

At the Yuda Dormitory, we didn't get any obvious object of study.

Around the Faculty of Economics' Dormitory, we first discovered much remains in the Muromachi period. We guess there are some unknown ruins around here.

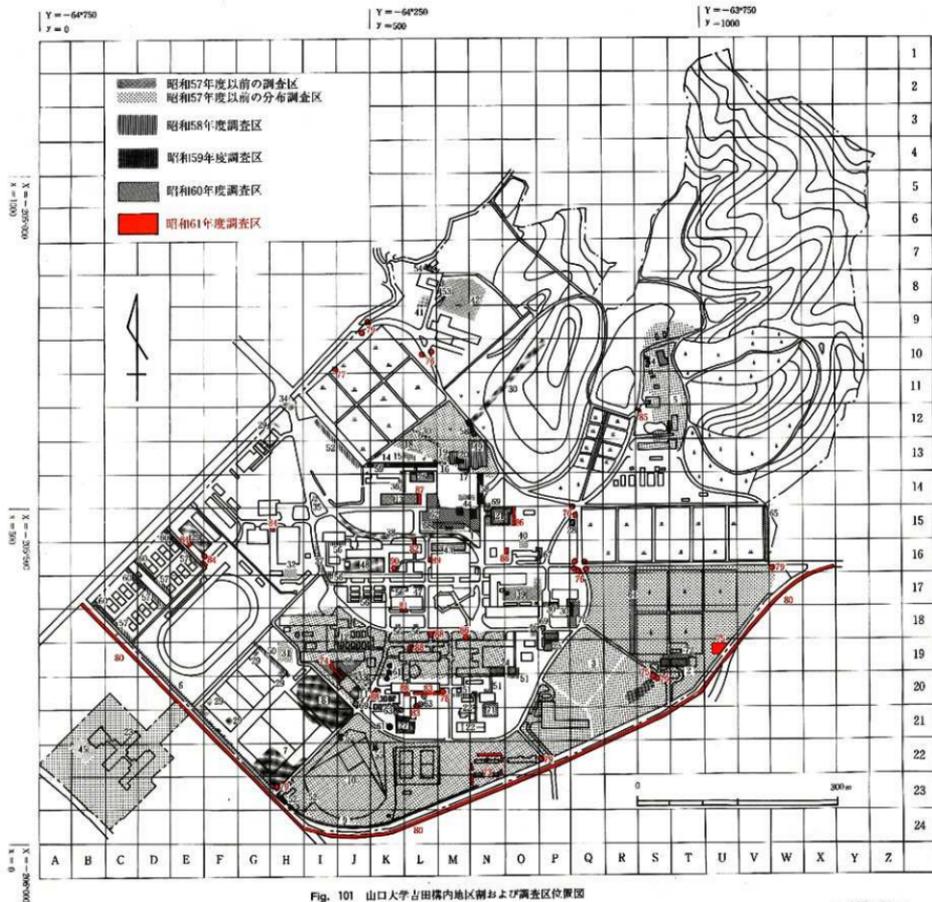


Fig. 101 山口大学古田橋内地区南および調査区位置図

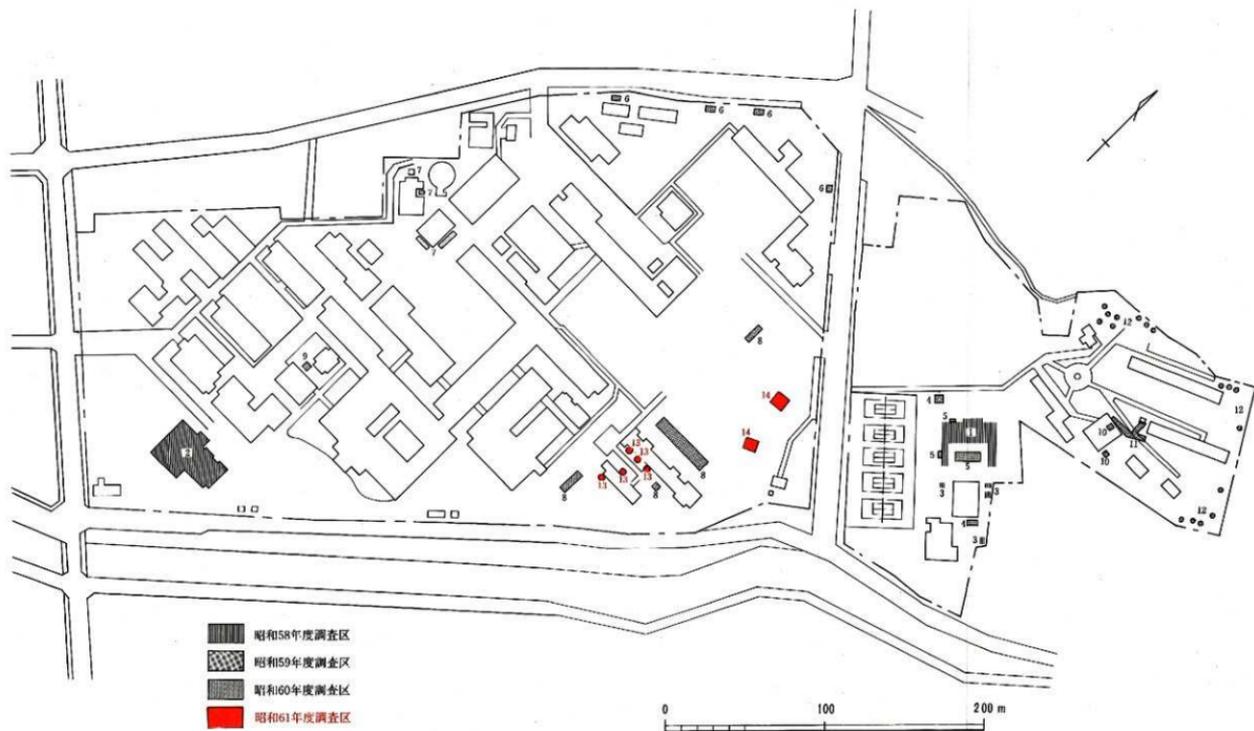


Fig. 102 山口大学小中学校内調査区位置図

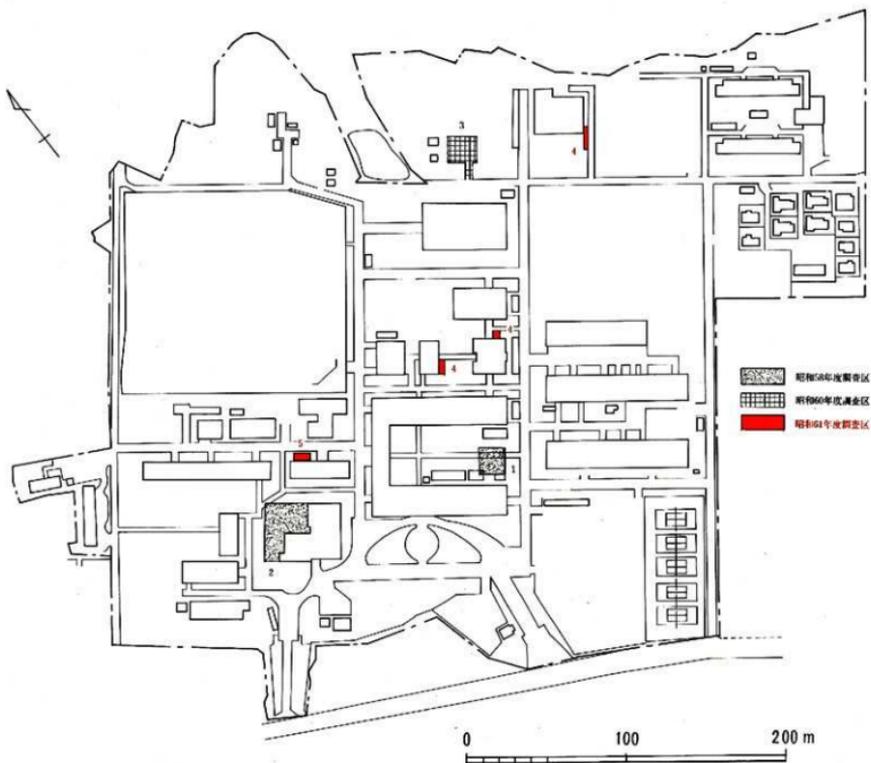


Fig. 103 山口大学帝整構内調査区位置図

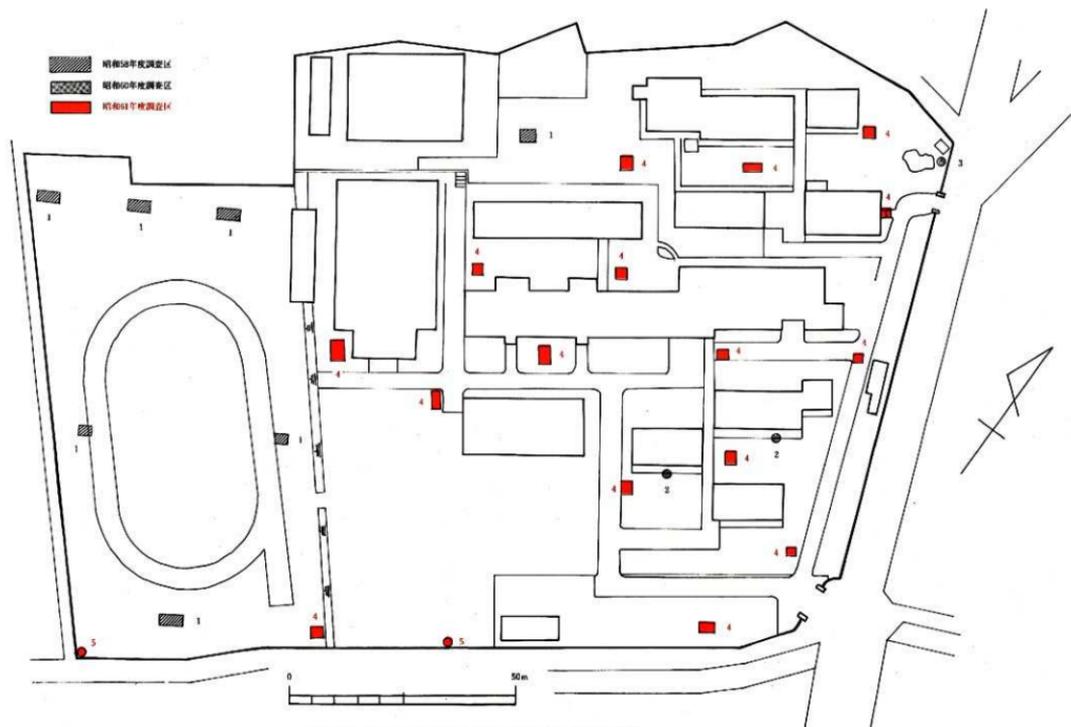


Fig. 104 山梨大学亀山構内(幼稚園・小学校部分)調査区位置図

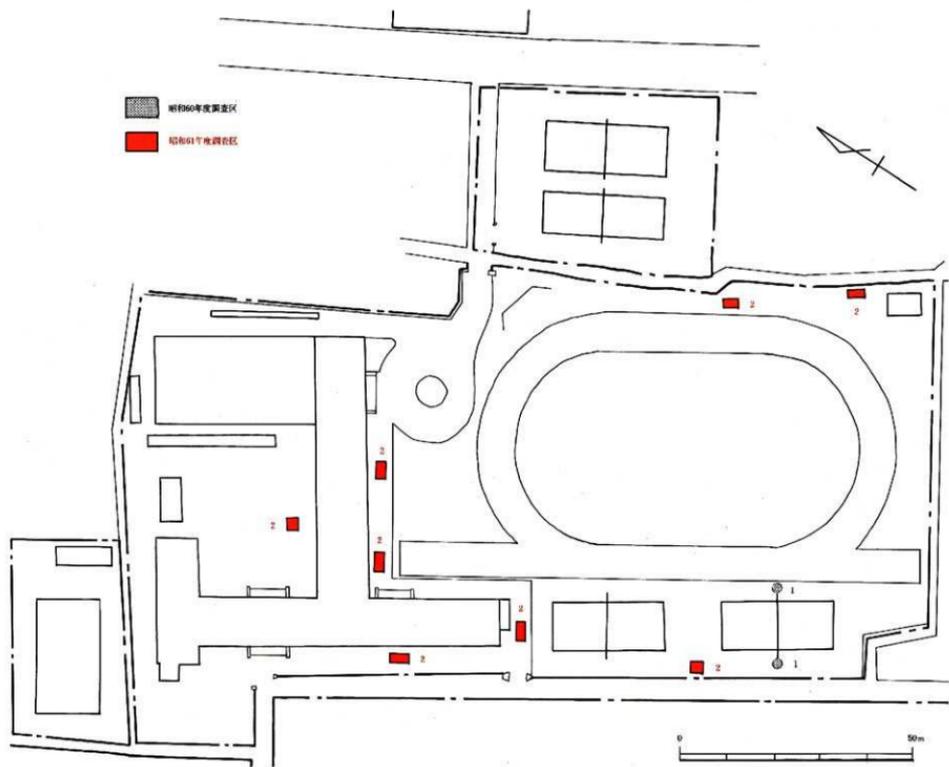


Fig. 105 山口大学龜山構内（中学校部分）調査区位置図

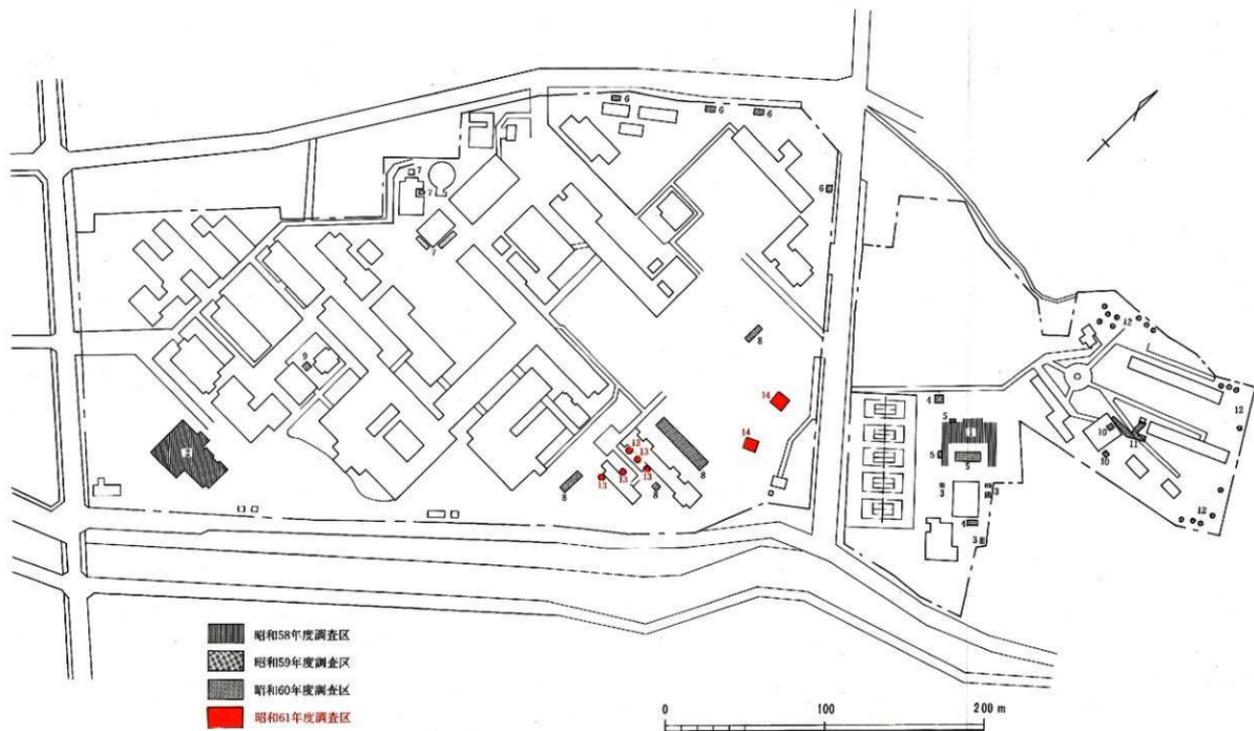


Fig. 102 山口大学小中学校内調査区位置図

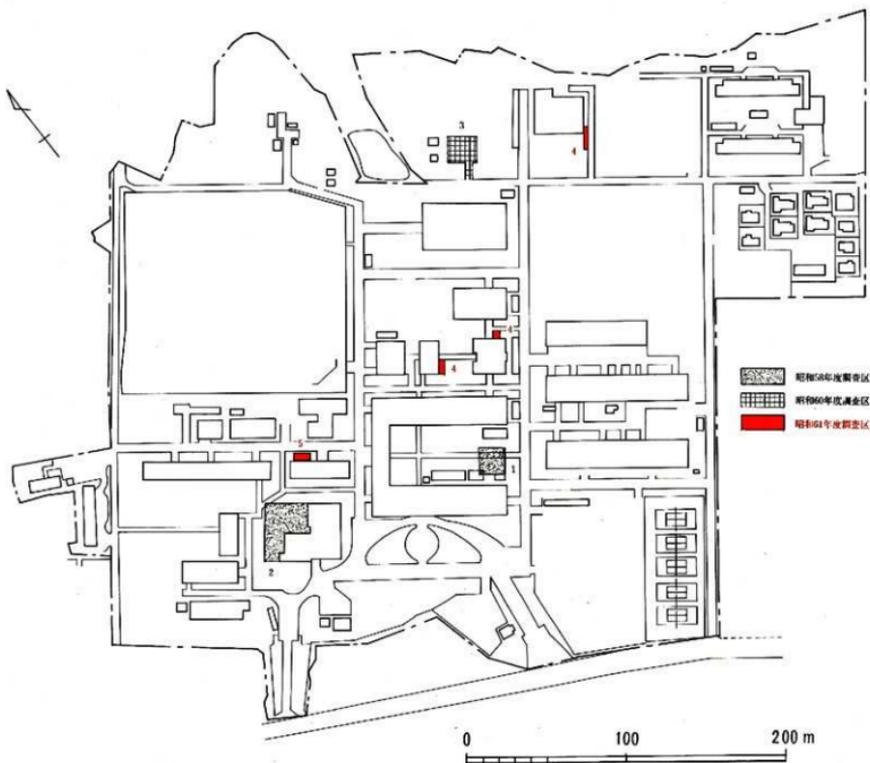


Fig. 103 山口大学帝整構内調査区位置図

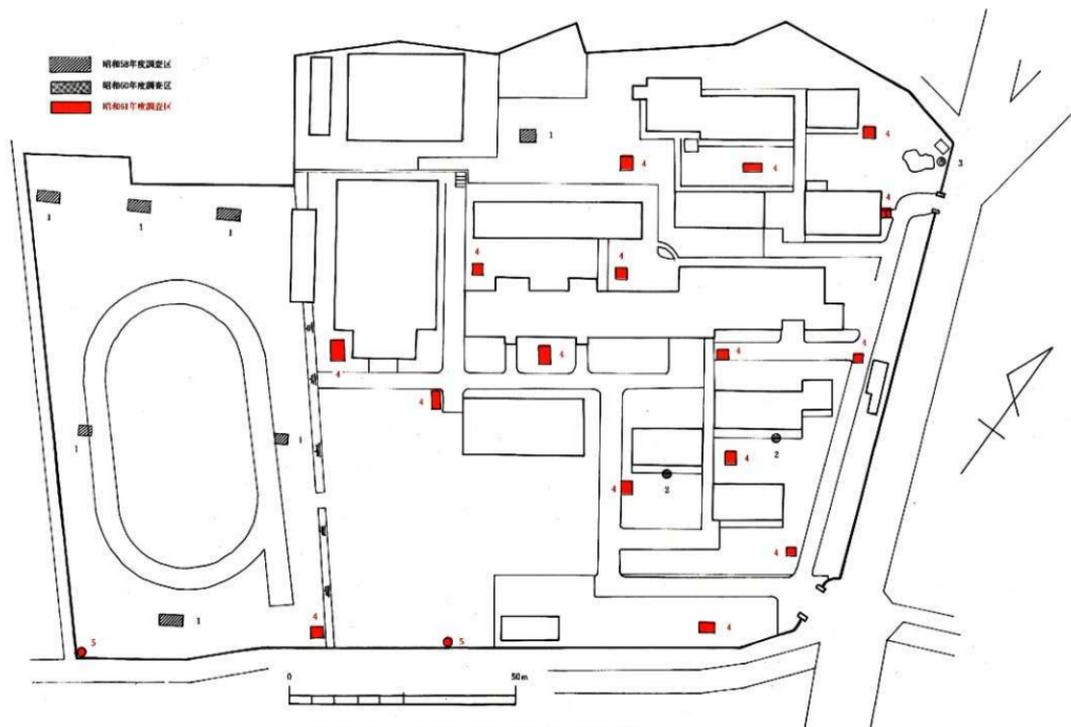


Fig. 104 山口大学亀山境内(幼稚園・小学校部分)調査区位置図

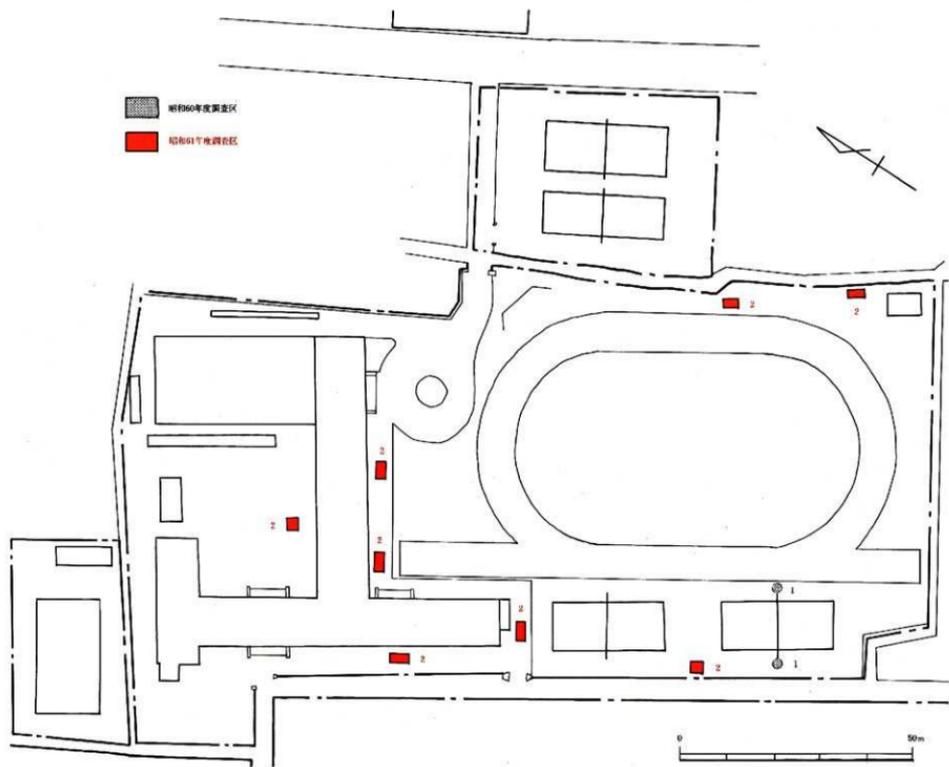
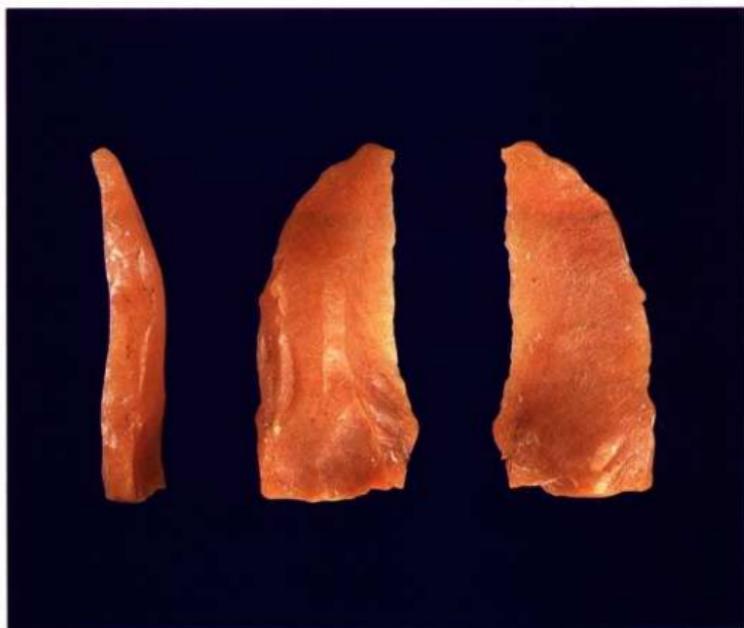
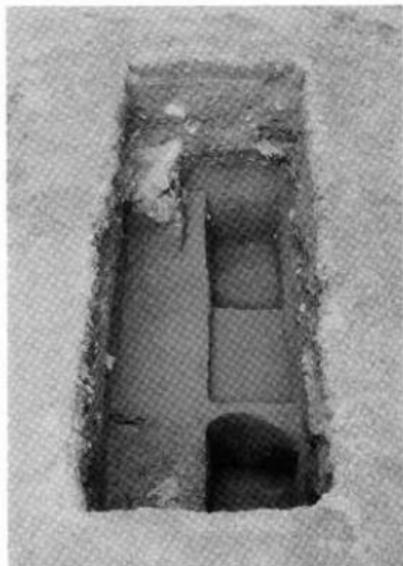


Fig. 105 山口大学龜山構内（中学校部分）調査区位置図

PLATES



ナイフ形石器 (Fig. 68-7)



(1) 第1トレンチ全景(西から)



(2) 第1トレンチ東壁土層断面(西から)

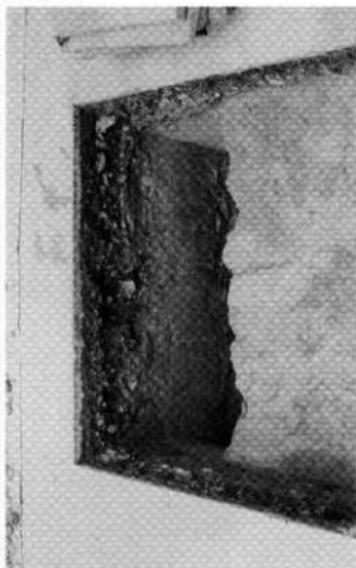


(3) 第3トレンチ全景(南から)

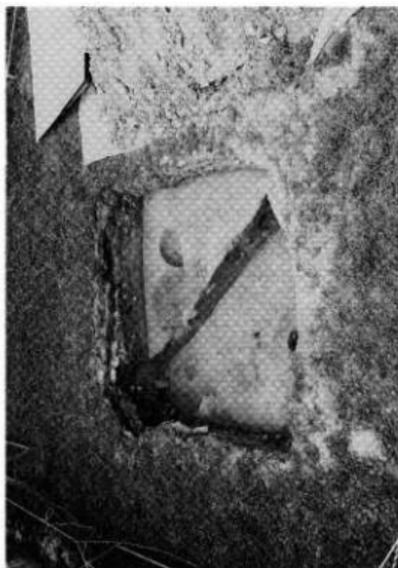


(4) 第4トレンチ全景(西から)

亀山構内教育学部山口附属学校污水管布設に伴う試掘調査(2)(小学校)



(1) 溝7と11の交差点(北から)



(2) 溝6と11の交差点(南から)



(3) 溝7と11の交差点(西から)



(4) 溝9と11の交差点(東から)



(1) 第10トレンチ全景(北から)



(2) 第11トレンチ全景(南から)



(3) 第12トレンチ全景(南から)



(4) 第13トレンチ全景(北から)

亀山構内教育学部山口附属小学校汚水排水管布設に伴う試掘調査(4) (小学校)



(1) 第13トレンチ南壁土壁断面(北から)



(2) 第14トレンチ全景(北から)



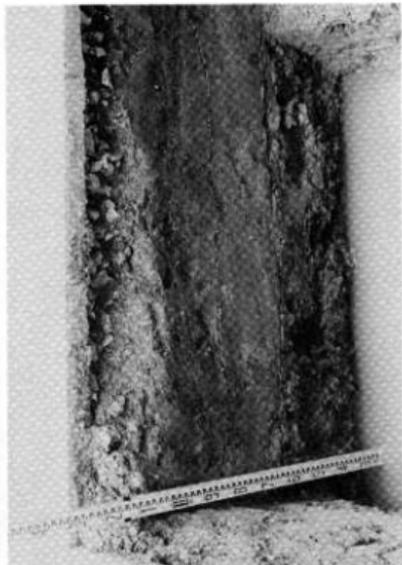
(3) 第15トレンチ全景(北から)



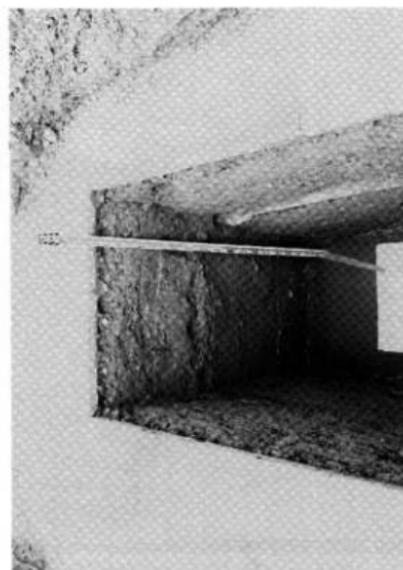
(4) 第16トレンチ全景(南から)



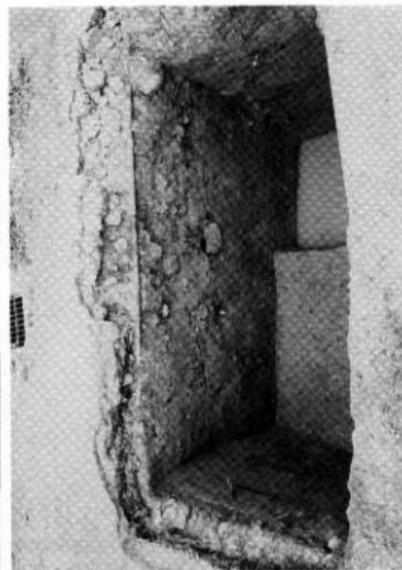
(1) 第1トレンチ南壁土層断面(北から)



(2) 第2トレンチ南壁土層断面(北から)



(3) 第3トレンチ西壁土層断面(東から)



(4) 第4トレンチ西壁土層断面(東から)

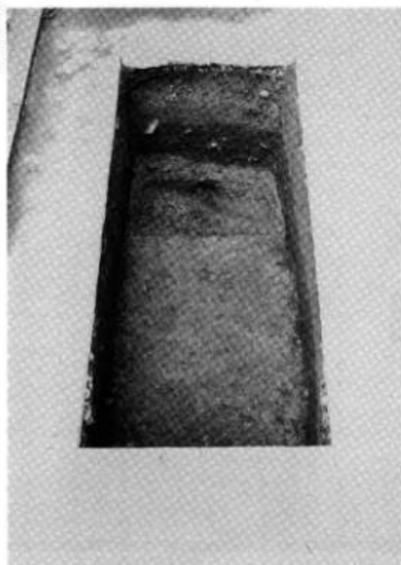
亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査(6) (中学校)



(1) 第5トレンチ第4～6層遺物出土状況 (南から)



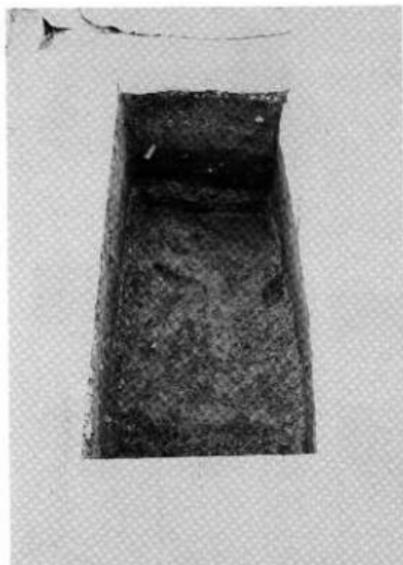
(2) 第5トレンチ第4～6層遺物出土状況 (東から)



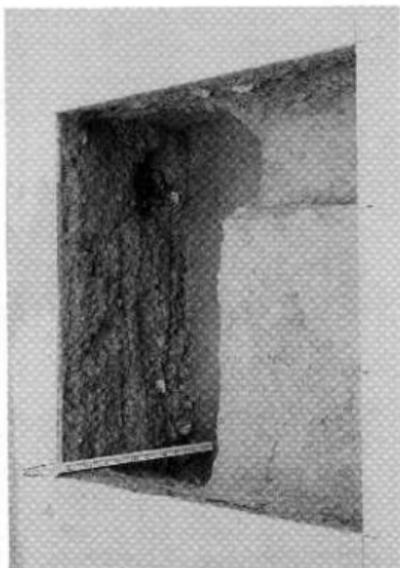
(3) 第5トレンチ第4～6層完掘状況(南から)



(4) 第5トレンチ北壁土留断面(南から)



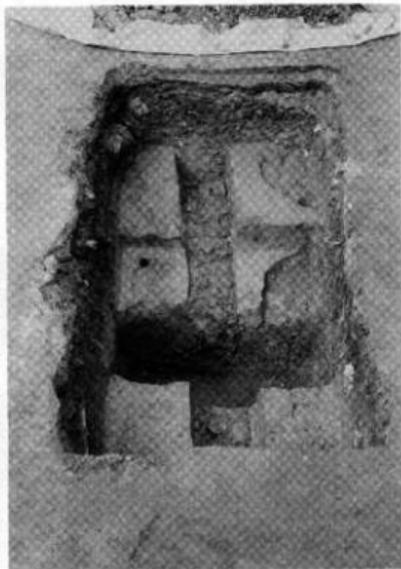
(1) 第5トレンチ完掘状況(南から)



(2) 第6トレンチ全景(東から)

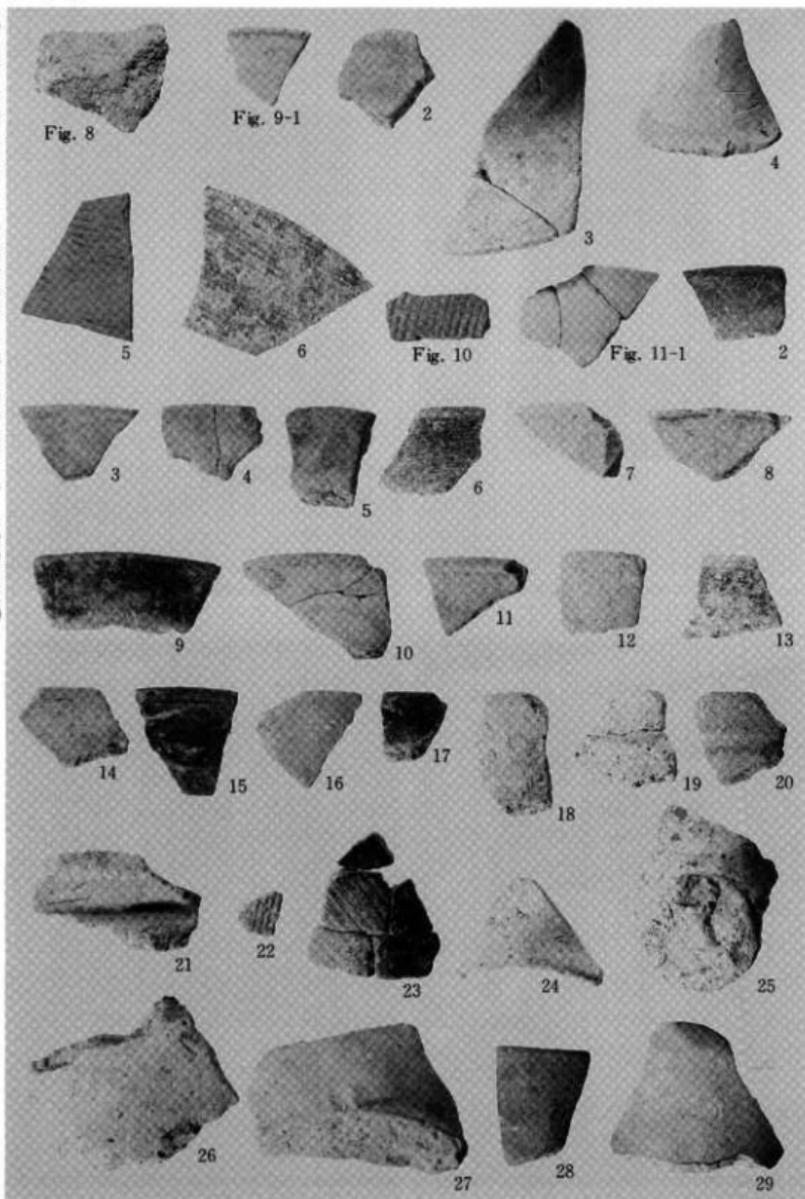


(3) 第7トレンチ全景(北から)

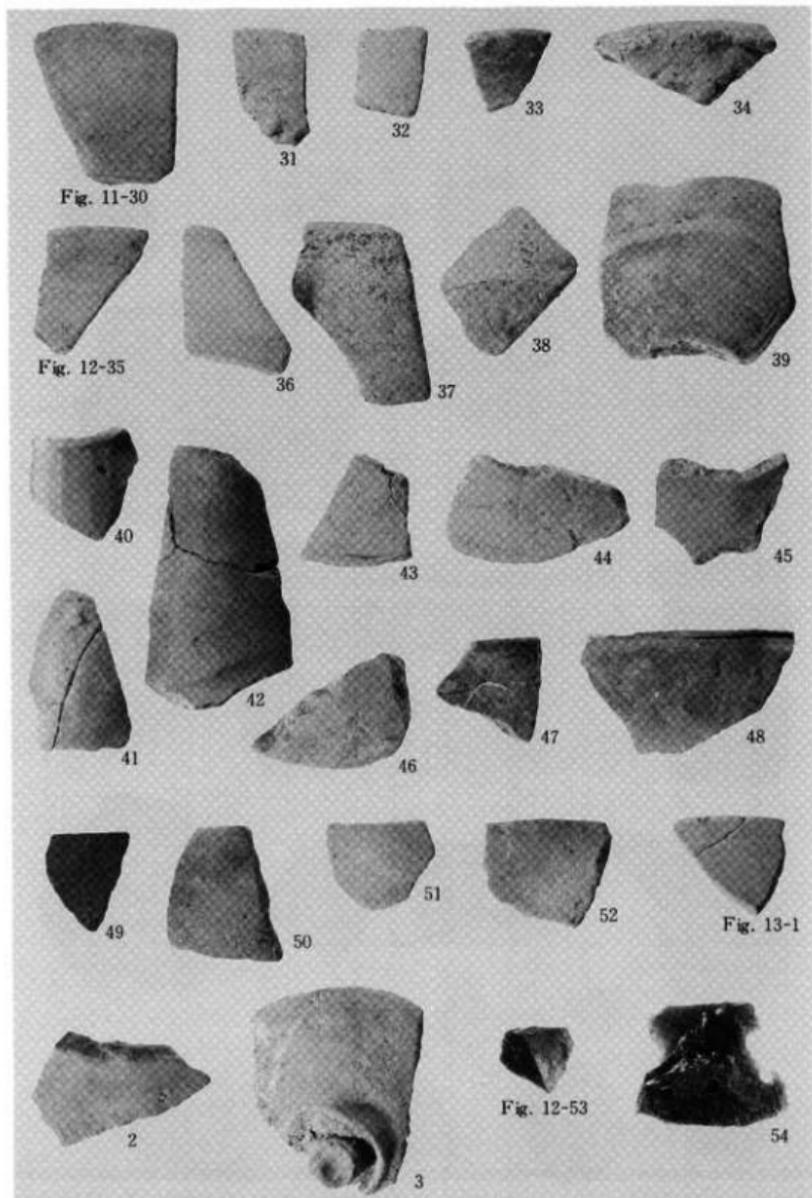


(4) 第8トレンチ全景(南から)

亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査(8)

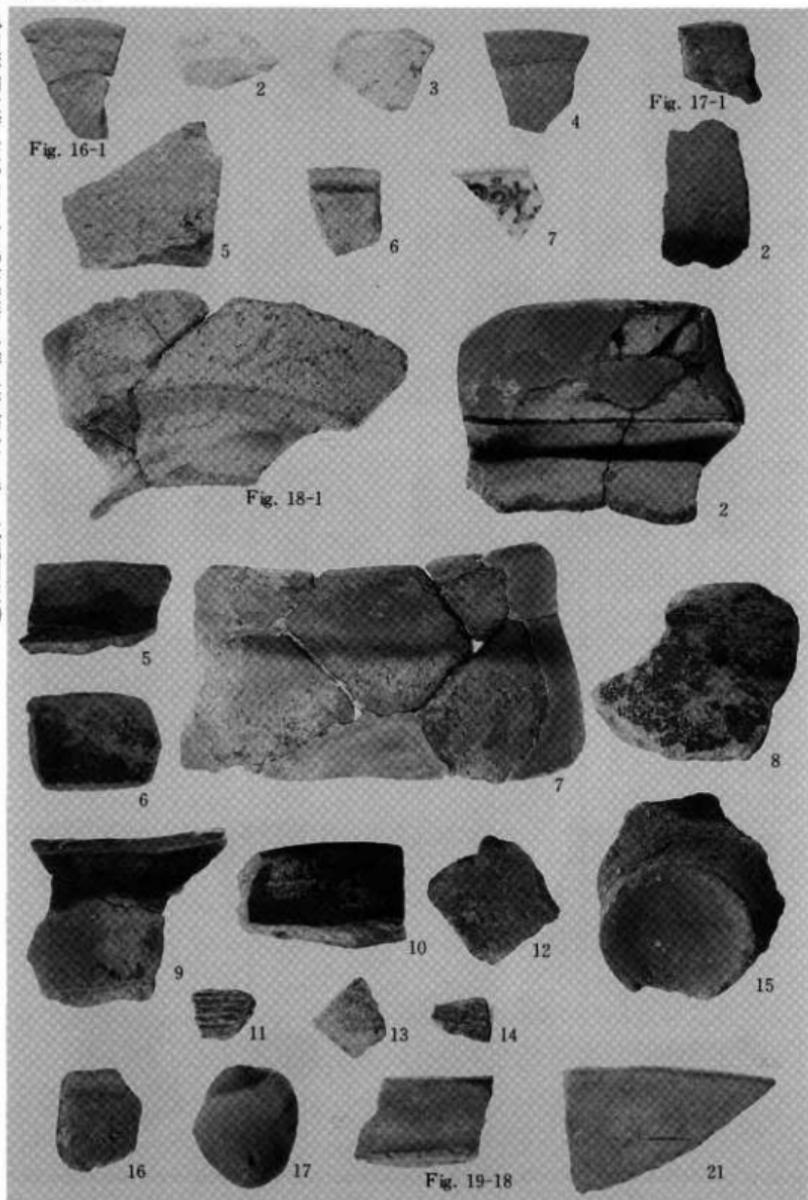


出土遺物 (1) (幼稚園・小学校)

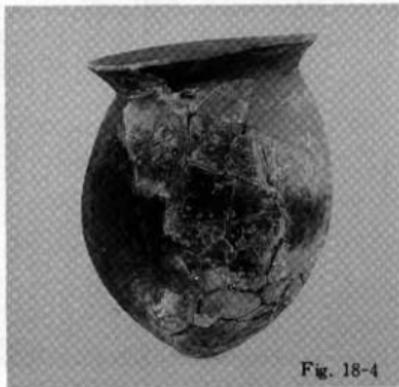
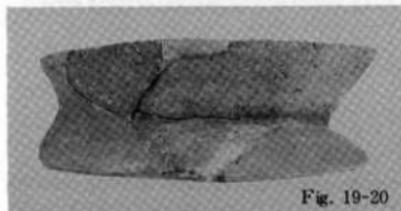
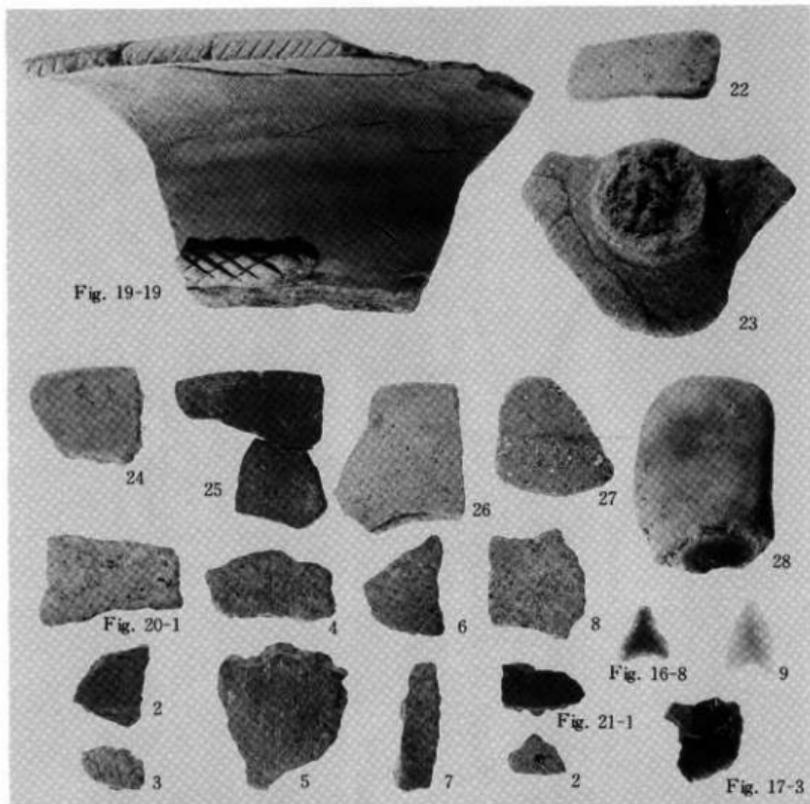


PL. 10

亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査00

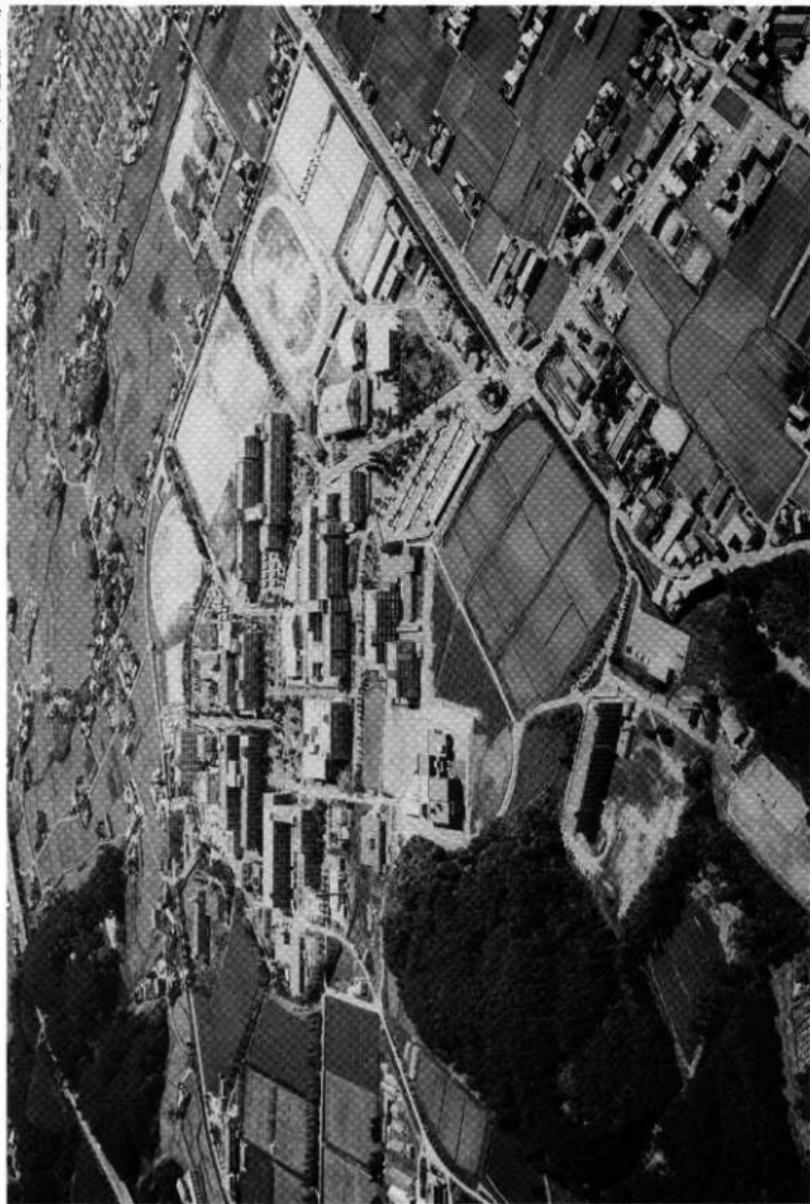


出土遺物 (3) (中学校)



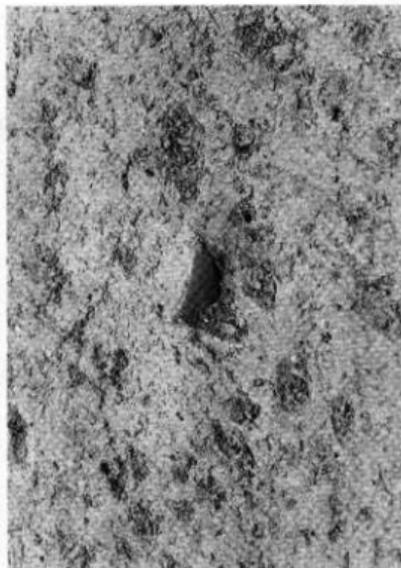
出土遺物 (4) (中学校)

吉田構内全景(北西から)





(1) Aトレンチ全景(北から)



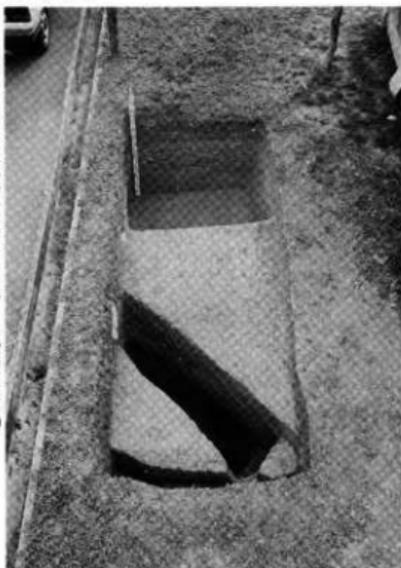
(2) Aトレンチ遺物出土状況(東から)



(3) Bトレンチ全景(北から)



(4) Bトレンチ南壁土層断面(北から)



(1) Cトレンチ全景(北から)



(2) Dトレンチ全景(北から)



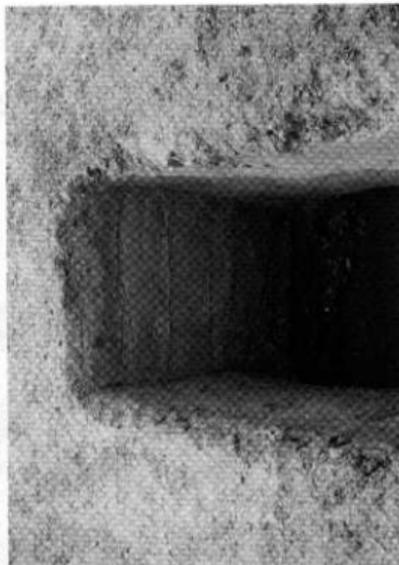
(3) Eトレンチ全景(東から)



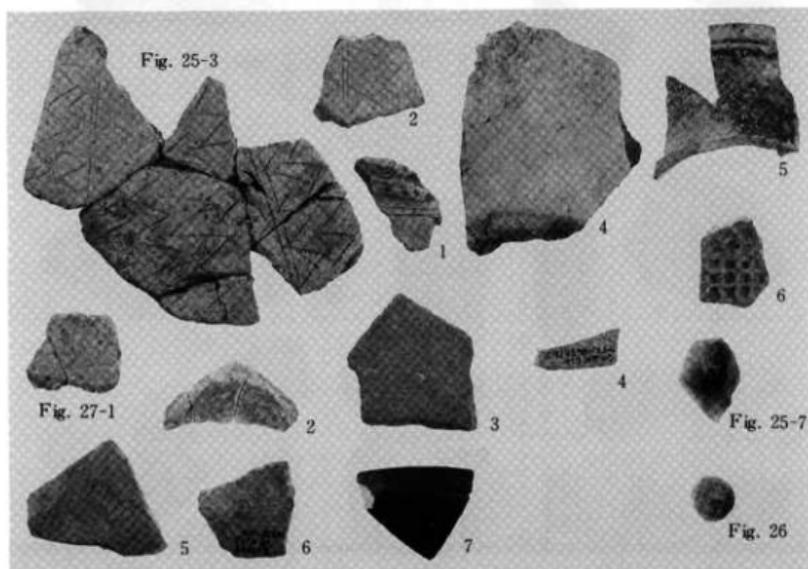
(4) Fトレンチ全景(北から)



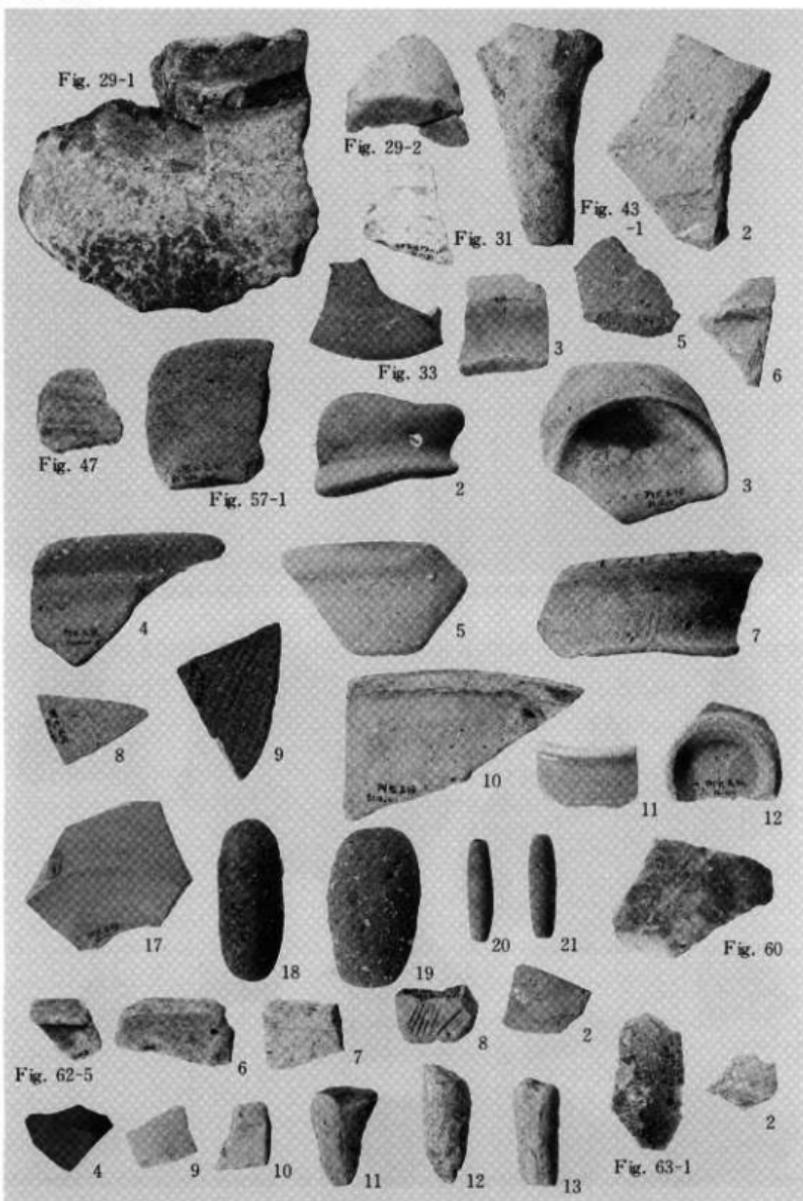
(1) Fトレンチ地山落ち込み状況(西から)

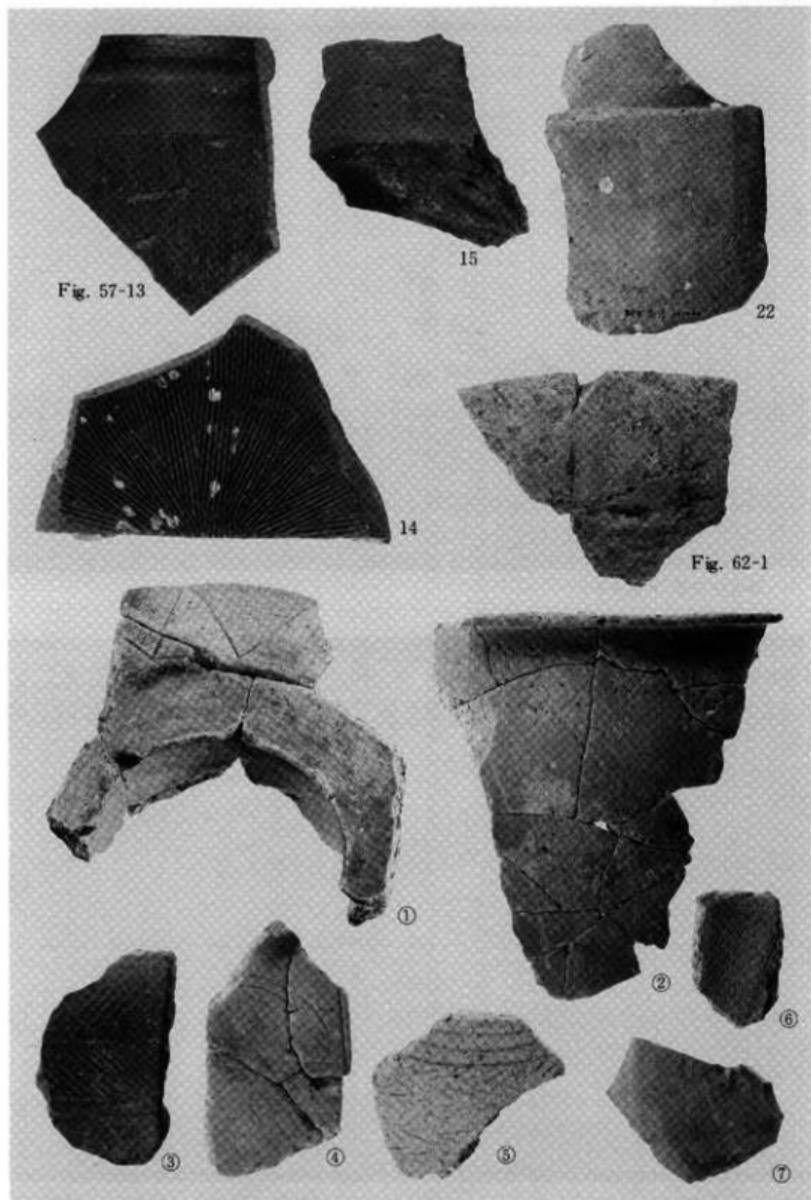


(2) Fトレンチ南壁土層断面(北から)



(3) 出土遺物





出土遺物(2)



(1) 調査区全景(北東から)



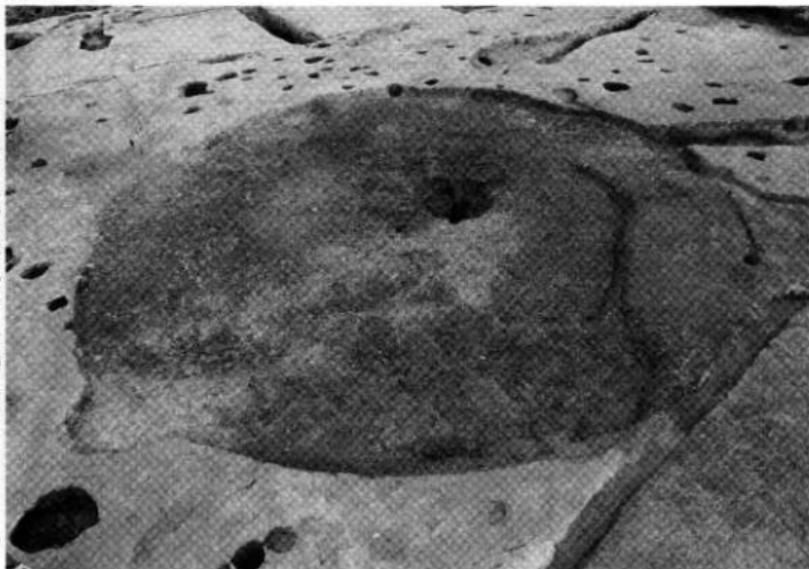
(2) 調査区全景(南西から)



(1) 第9号竪穴住居跡(東から)



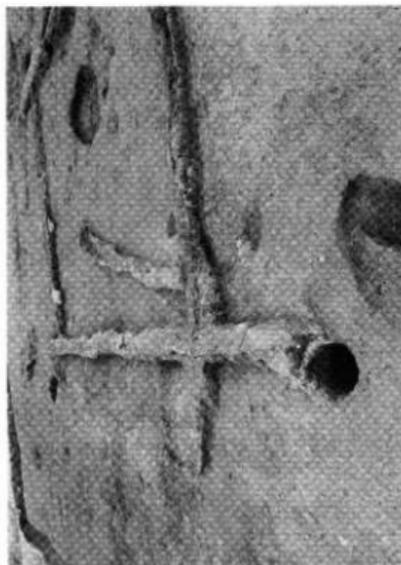
(2) 第10～13号竪穴住居跡(南東から)



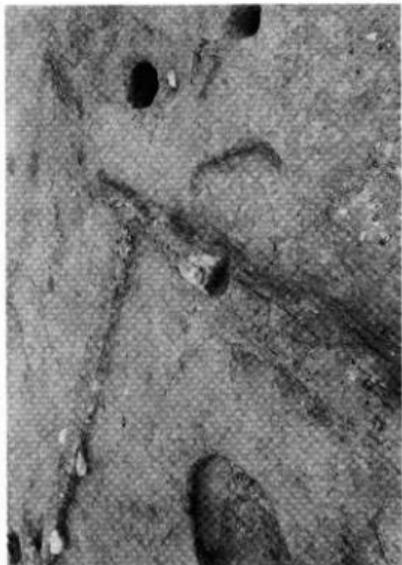
(1) 第11・12号竪穴住居跡(西から)



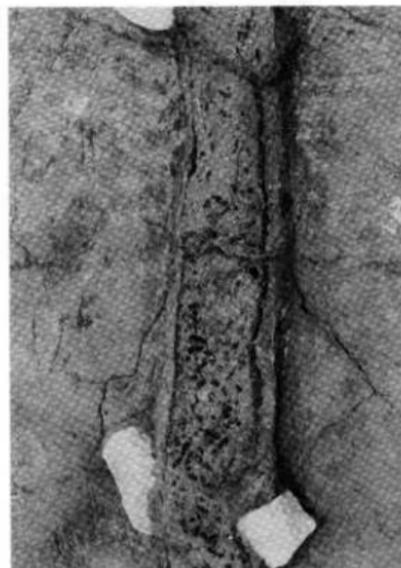
(2) 第13号竪穴住居跡(北西から)



(1) 第13号竈穴住居西側の竹・梁材発出状況
(南西から)



(2) 第13号竈穴住居東側の竹・梁材発出状況
(南から)



(3) 第13号竈穴住居跡の竹材縦断面(南東から)

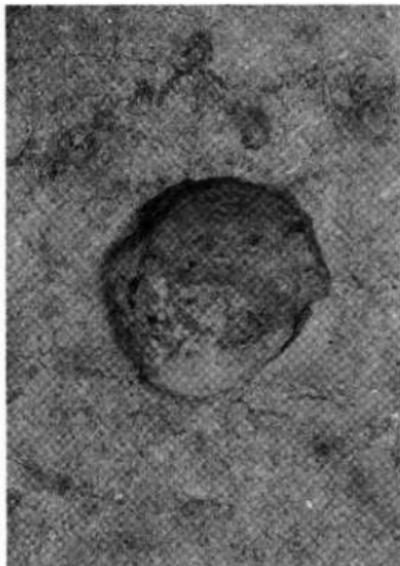


(4) 第13号竈穴住居跡の竹材横断面(北東から)

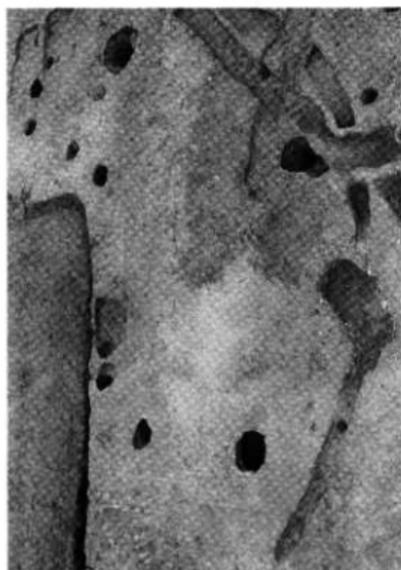
山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)(5)



(1) 第13号竪穴住居跡(北西から)



(2) 第13号竪穴住居跡(北東から)



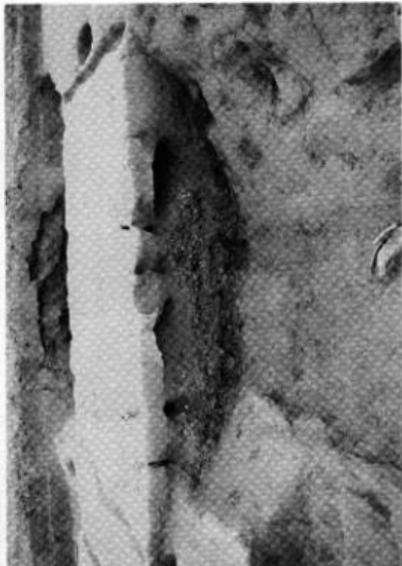
(3) 第17号竪穴住居跡(北東から)



(4) 第18号竪穴住居跡(南西から)



(1) 河川跡(南東から)



(2) 河川跡土層断面(南東から)

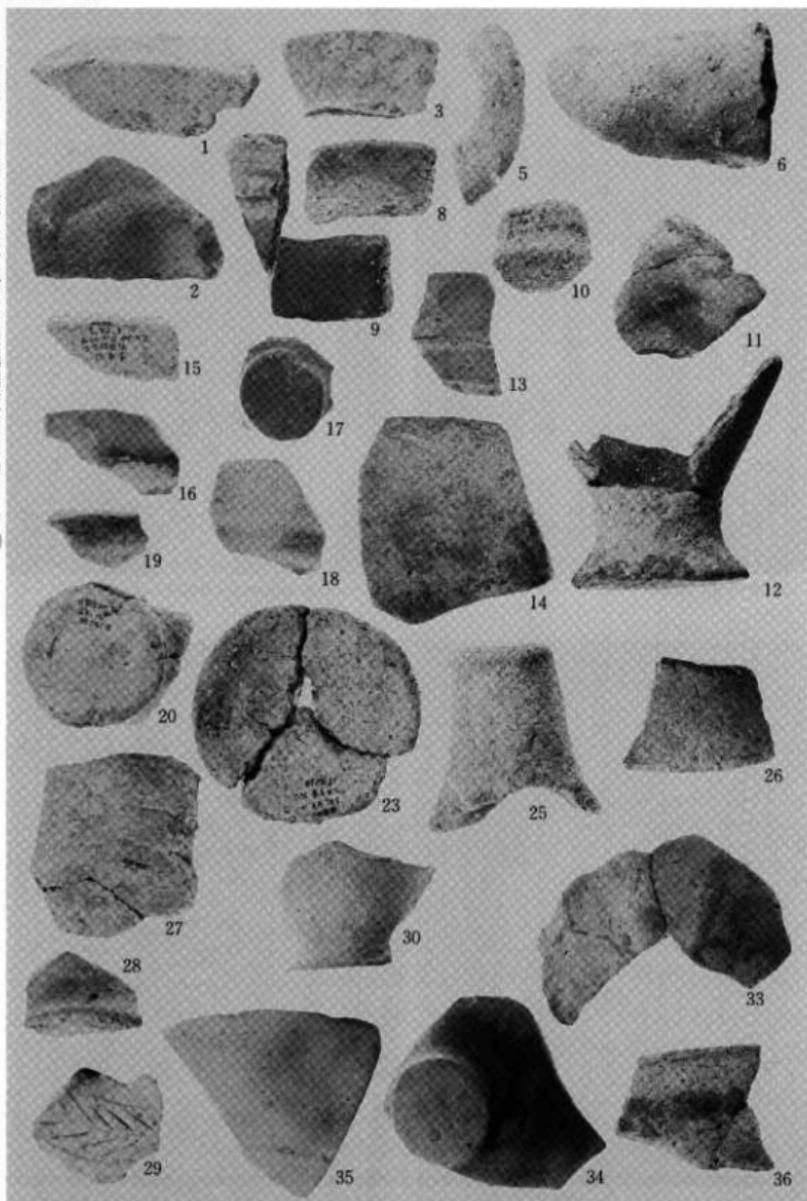


(3) 河川跡遺物出土状況(北東から)

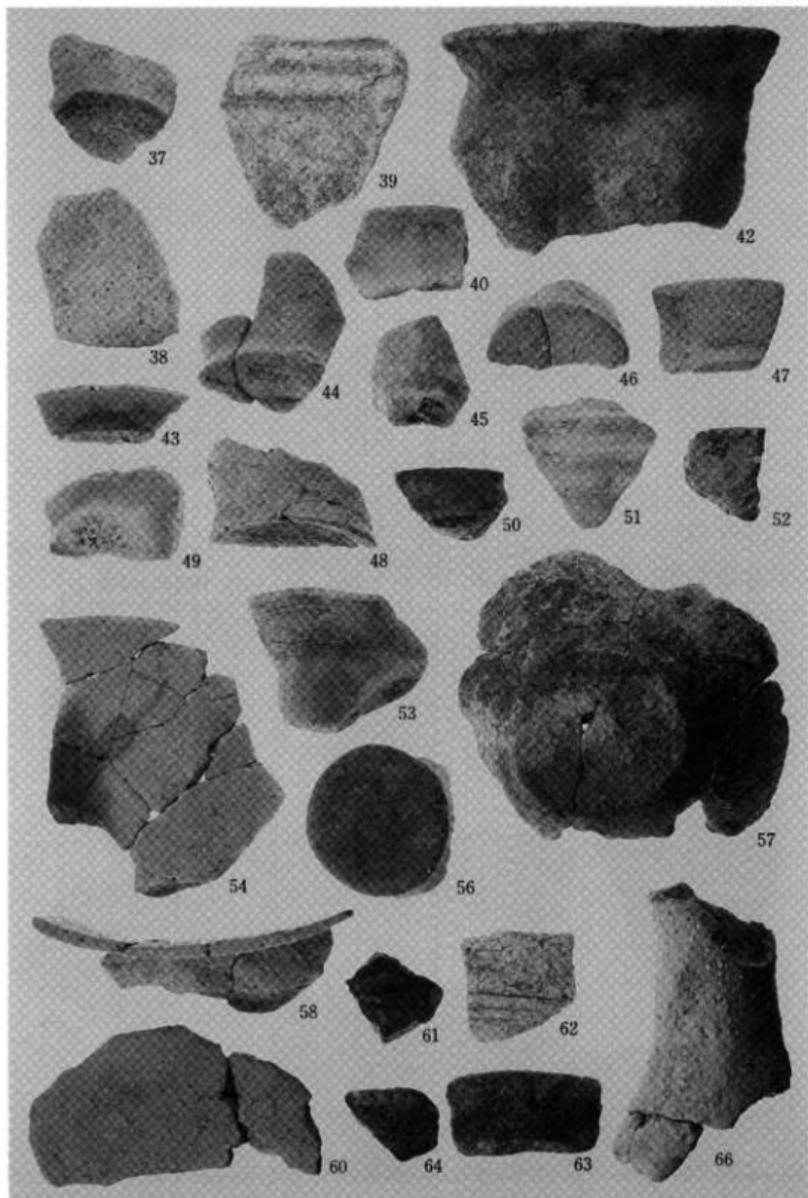


(4) 現地説明会風景

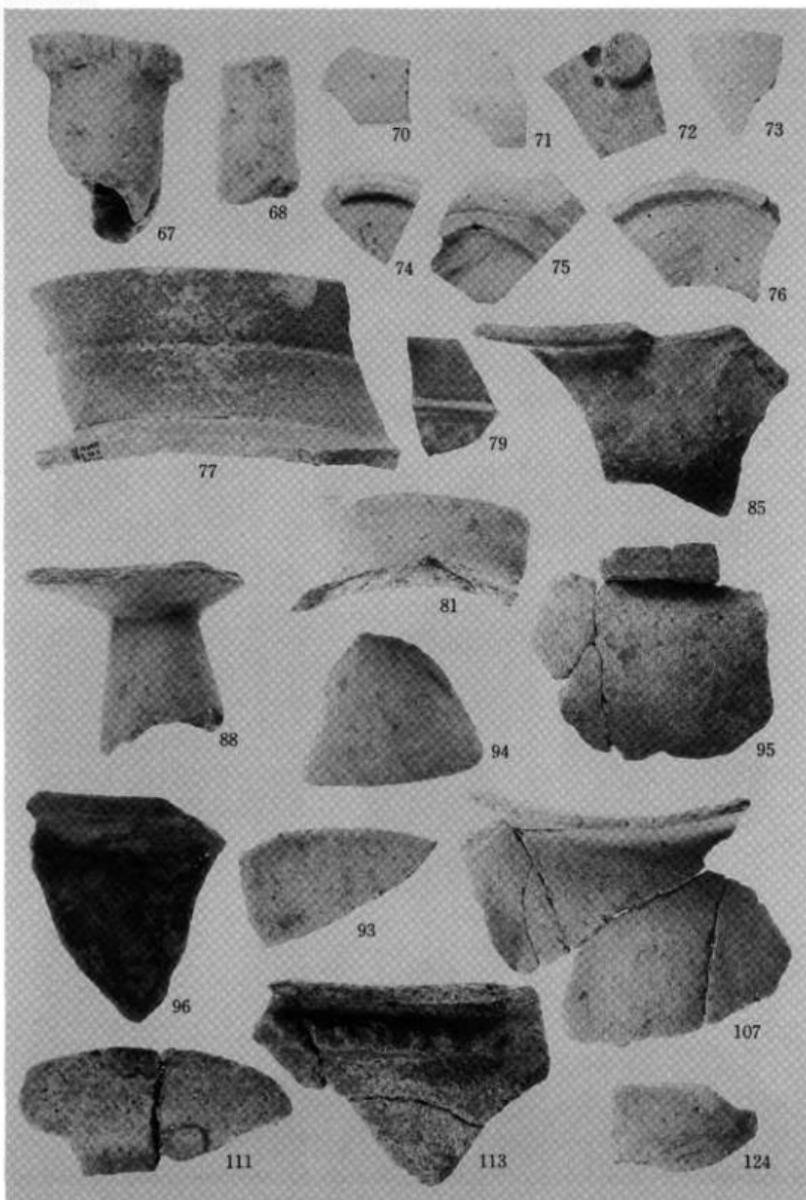
山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)
(7)



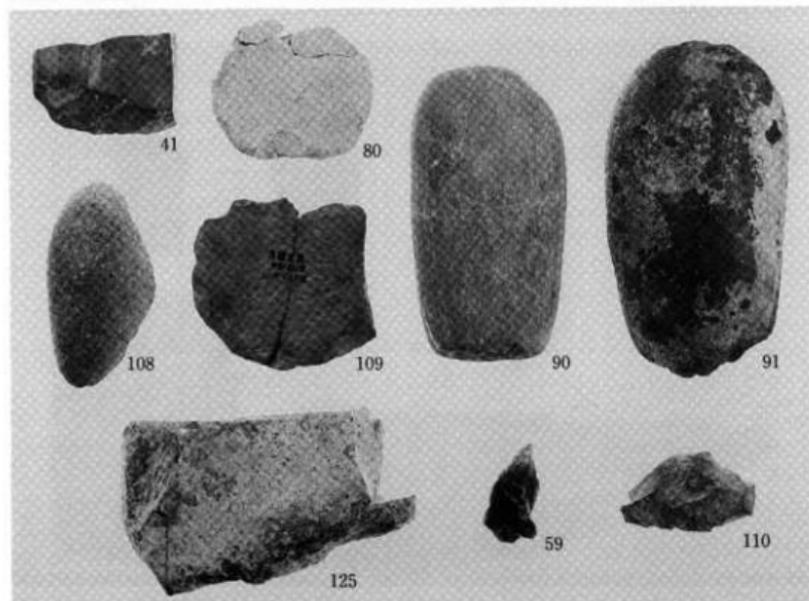
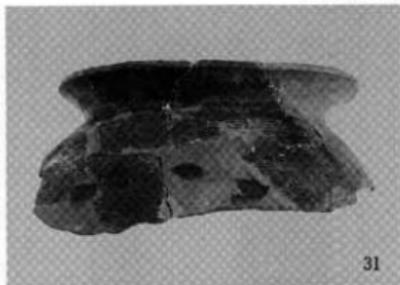
出土遺物(1)



山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度) (9)

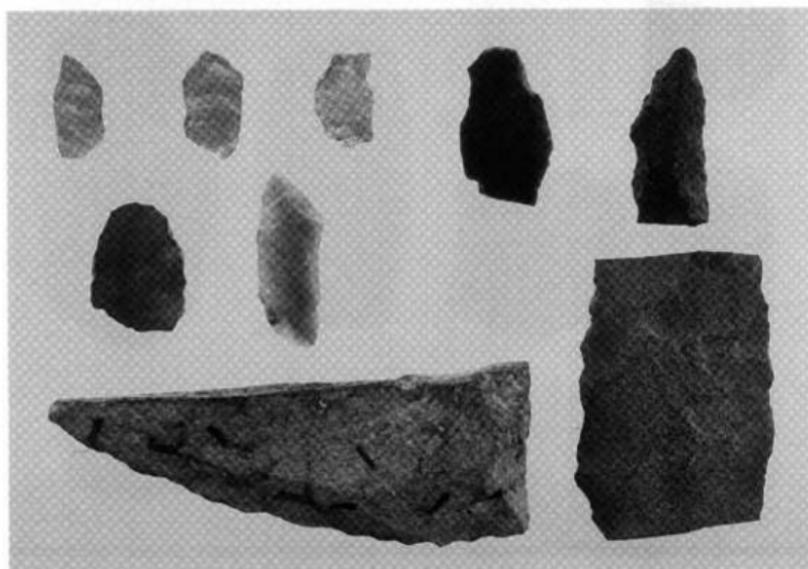


出土遺物 (3)





(1) 湯無田遺跡採集の石器群(表)



(2) 湯無田遺跡採集の石器群(裏)

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ

昭和63年3月

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753山口市大字吉田1677-1

印刷 桜プリント(企)

〒753山口市旭通り1-1-6

ARCHAEOLOGICAL RESEARCHES AND STUDIES
AT YAMAGUCHI UNIVERSITY Vol. VI

CONTENTS

Chapter

- I General outline of the project on Yamaguchi University campus in 1986 1
- II Soundings in relation to the laying drain pipes under ground at Yamaguchi Junior High School, Elementary School and Kindergarten on the Kameyama campus 8
- III Soundings in relation to the construction of the International Hall on the Yoshida campus39
- IV Examination under construction performed on Yamaguchi University campus ...49

Appendix I

- The report of the Excavation at "the Preserved Site" on the Yoshida campus in 198485

Appendix II

- Each attribute of the dwelling pits in the Kofun period 129

Appendix III

- Yamaguchi Prefecture in the Japanese Paleolithic age 147
- The gist of researches and studies at Yamaguchi University 167
- Regulations of Yamaguchi University Archaeological Museum 167
- Regulations of Yamaguchi University Archaeological Museum Management Committee 168
- Lists of Researches in Yamaguchi University 170
- Summary 175

Published by

Yamaguchi University Archaeological Museum

Yamaguchi, 1987